

『竹風和歌抄』注釈稿（五）

中川 博夫

例言

一、鎌倉幕府第六代將軍宗尊親王の家集の一つ『竹風和歌抄』（一〇二〇首）の注解を試みる。
一、1番歌から始めて順番どおりに注釈を付して、数次の分載とする。今回は、本紀要第48号の巻第一（1～288）、第49号の巻第二（289～491）、第50号の巻第三（492～595）、第51号の巻第四（596～761）に引き続き、巻第五（762～1020）を取り上げる。

一、次の各項からなる。

- ① 整定本文。② 本文を改めたり注記が必要な場合は、当該箇所*印を付して、別に本文の項目を立てる。③ 通釈。④ 本歌・本説・本文（前項の「本文」とは別、基にした漢詩文の意）、参考（宗尊が踏まえた歌ならびに解釈上に必要な歌）、類歌（表現・趣向が類似した歌）、享受（宗尊歌を本歌取りした歌）、影響（宗尊歌を踏まえた歌）。⑤ 出典。⑥ 他出。⑦ 語釈。⑧ 補説。②と④⑧は、無い場合には省略。

一、底本は、本集の現在知られる唯一の伝本、愛知教育大学付属図書館蔵本（九一・二四八・T一・C）

一、本文は、次の方針に従う。

1. 底本の翻印は、通行の字体により、歴史的仮名遣いに改め、意味や読み易さを考慮して、適宜ひら仮名を漢字に、漢字をひら仮名や別の漢字に改める。送り仮名を付す。清濁・読点を施す。なお、原則としてひら仮名の反復記号は用いない。「詞」「哥」は「歌」に統一する。
 2. 本文を改めた場合、底本の原状は右傍に記す（送り仮名を付した場合は傍点）。私にふり仮名を付す場合は（ ）に入れて区別する。その他、問題点や注意点は、適宜特記する。
 3. 他資料の本文との異同は、漢字・仮名の別や仮名遣いの違いや送り仮名の有無など、表記上の違いは原則として取らない（解釈の分かれる可能性のある表記上の違いである場合は参考までに注記する）。
 4. 底本の本行の原状（見消し等の補訂は本行に復元）に対して他資料の本文との異同を示す。
 5. 歌頭に通し番号を付した（新編国歌大観番号と同じ）。
- 一、引用の和歌は、特記しない限り新編国歌大観本に拠る。万葉集は、原則として西本願寺本の訓と旧番号に従う。なお、表記は私に改める。歌集名は、原則として「和歌」を省く。その他の引用は、日本歌学大系本他の流布刊本に拠る他、特殊な本文の場合には特記する。

付記 ご所蔵本の閲覧と調査ならびに翻印をご許可下さいました愛知教育大学附属図書館に対し、厚く御礼申し上げます。

注 釈

竹風和歌抄卷第五

文永六年八月百首歌

春

762

佐保姫さほの神の手たむ向けむの木綿ゆふ鬢かづら海山かけて春は来にけり

〔通釈〕文永六年八月百首歌

春

佐保姫の神に手向ける供え物である木綿鬢を掛けたので、海も山も全体にかけて、春はやって来たのであった。
な。

〔参考〕ちはやぶる神の手向むけの木綿ゆふだすきかけてや人の人を恋こふらん（続古今集・恋四・一二三二・貫之。万代集・

恋二・一九三八）

竜田山神の手向むけもいかばかり秋は紅葉の色にあくらん（新撰六帖・第四・一三二二・為家）

住の江の松に夜深く置く霜は神のかけたる木綿鬢かも（源氏物語・若菜下・四八七・紫上）

有明の月の出潮の天つ風海山かけて吹き始むなる（新撰六帖・第一・ざふのかぜ・三七九・信実）

豊かなれ七つの道の貢たまぎ物海山かけて定め置きてき（新撰六帖・第二・みち・六一七・為家。万代集・賀・

おしなべて霞かかれる海山をみな我が国と春は来ぬらむ（建長八年百首歌合・春・一・基家）

〔類歌〕

おしなべて波も霞ものどけきは海山かけて春や立ちぬる（伏見院御集・早春・一七六七）

〔出典〕

文永六年八月百首歌。以下 829 まで同じ出典。

〔語釈〕

○文永六年八月百首歌―宗尊二十八歳の文永六年（一二六九）八月の百首。本抄には、春二二首、夏七首、

秋一〇首、冬七首、雑三二首の計六八首が残る。本来は、春秋各二〇首、夏冬各一〇首、雑四〇首の構成か。同年にはこの前に、本抄巻四に収める、四月二十八日の「柿本影前にて講じ侍りし百首歌」（595〜693）と五月の「百首歌」（694〜761）を詠んでいる。○佐保姫―大和国の歌枕「佐保山」の女神。「佐保山」は平城京の北東方を限り、五行説で東は春に当たるので、春をもたらす女神となる。従って、結句の「春は来にけり」と照応する。「神山に花の白木綿かけてけりこやさほ姫の手向けなるらん」（別雷社歌合・花・八五・静賢）。○手向け―供え物。○木綿鬘―楮の皮の繊維から作る糸状の「木綿」で作った頭髮等にかける飾り。神事の際に用いる。「契りありて今日みや河の木綿鬘長き世までもかけて頼まん」（新古今集・神祇・一八七二・定家）。ここまでは、「木綿鬘」の縁語「かけて」を起こす序詞のように働くが、春の女神の「佐保姫」があるので有意である。○かけて―鬘を引っ掛けての意の「掛けて」に、全体に渡っての意の「掛けて」が掛かる。

〔補説〕

類歌として挙げた伏見院詠は、該歌から影響された可能性も見ておきたい。

〔通釈〕

根を断ち切るようにして、霞に余つてその上に覗く遠山の松の梢は、春の浮草なのか。

〔本歌〕

わびぬれば身を浮草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ（古今集・雑下・九三八・小町）

〔参考〕

明け渡る沖つ波間に根を絶えて霞に宿る浮島の松（雲葉集・春上・土御門内大臣家歌合に、遠島朝霞・六四・長明。拾遺風体集・春・七。夫木抄・春二・霞・四七五。三百六十番歌合・春・二三、初句「今朝

見れば」。三百六十首和歌・正月下旬・二七、二句「沖つ波間の」五句「浮島の月」

いかばかり花咲きぬらむ吉野山霞にあまる峰の白雲（新勅撰集・春上・五九・寂蓮。玄玉集・草樹上・五二一）

〔影響〕

朝ぼらけ千里の波の浮草や霧に浮かべる梢なるらむ（正徹千首・秋・霧・四二四。草根集・秋・霧・三五九九）

〔語釈〕

○根を絶えて―「余る」にかかる。一面に立ちこめる「霞」を水に、その上に見える「木末」を「浮草」に見立てて、このように言う。

〔補説〕

「霞」を水に、その霞から上に顔を覗かせるように見える「松の木末」を「春の浮草」に見立てる、珍しい趣向を構えた一首である。類似した趣向の正徹詠は、該歌の影響下にあると見たが、さらに両者の関係を追尋する中で、改めて定位する必要がある。

宗尊は、かつて『宗尊親王三百首』で、同じ『古今集』小町歌を本歌に「帰る雁霞の空にねを絶えて誘ふ嵐の花を見じとや」（春・五〇）と詠んでいる。

764 葦火あし焚たく煙とをも遠とをし難波かた潟かた入江へた隔へたつる春かすみの霞かすみに

〔通釈〕

葦火を焚く煙もはるかに遠く見えるよ。難波潟の入江を遮り隔てている春の霞によつて。

〔参考〕

難波人葦火たくやはすすたれどおのがつまこそとこめづらなれ（拾遺集・恋四・八八七・人麿。異伝万葉集・卷十一・寄物陳思・二六五一・作者未詳、二句「葦火たくやの」五句「とこめづらしき」）

葦火たく難波の浦の夕煙浪路隔てて霞む頃かな（土御門院御集・詠五十首和歌貞応二年二月十日・春・江霞隔

浦人煙遠・二〇九）

難波潟入江に見えし霽標春は霞の立ちにけるかな（為家集・春・文永元・二二七）

かの見ゆる遠路の里の夕けぶりそれかあらぬか山の霞か（新撰六帖・第二・さと・七八〇・真観）

〔類歌〕

春霞立ち隔つればしるかりしけぶりも見えず遠の山里（風情集・僧都児十首歌読むに・霞遠村をこむ・三四一）

葦火焚くけぶりは見えず難波潟入江の波を焼く螢かな（龜山殿七百首・夏・江螢・二〇九・後宇多院）

〔語釈〕

○葦火―「難波潟」の景物である「葦」を燃やす火。○難波潟―摂津国の歌枕。淀川河口付近の浅い海で干潮時に洲もできる所で、古くは葦の生える湿原地帯であつたらしい。

765 あはれなり高木たかまに遷うつる鶯はも果はてはもの憂うき音をぞ鳴なくなる

〔通釈〕

しみじみと哀れである。あの喬木に遷るといふ鶯も、最後には物憂い声を上げて鳴く声が聞こえるよ。栄進した人も最後には物憂い声を上げて泣くようだね。

〔本歌〕

鳴きとむる花しなれば鶯も果ては物憂くなりぬべらなり（古今集・春下・一二八・貫之）

〔参考〕

鶯も期もなきものや思ふらん水無月果てぬ音をぞ鳴くなる（蜻蛉日記・一五二・道綱母）

〔語釈〕

○高木に遷る鶯―「鶯遷」の故事を踏まえる。鶯が幽谷から出て喬木に遷ることを言い、人が進士の考試に合格すること、また人が昇任するのに喩える。「伐_レ木丁丁、鳥鳴嚶嚶、出_レ自_二幽谷_一、遷_三于喬木_一、嚶其鳴矣、求_三其友_一声」（毛詩・小雅・伐木。漢文大系に拠る）とあり、「今謂_二進士登第_一為_二遷鶯_一者久矣、蓋自_二伐木詩_一、伐_レ木丁丁、鳥鳴嚶嚶、出_レ自_二幽谷_一、遷_三于喬木_一、又曰、嚶其鳴矣、求_三其友_一声、並無_二鶯字_一、頃歲省試、早鶯求_レ友詩、又鶯出_レ谷詩、別書固無_二証拠_一、豈非_レ誤歟」（尚書故実。四庫全書に拠る）などである。和歌では、『貫之集』の「こち風に氷とけなば鶯の高木に遷る声と告げなん」（同じ「式部のせうみむねの」もとなつがもとより、八七二）が早い例。『久安百首』で崇徳院は「春ごとに高木に遷る鶯や位の山の有巢なるらん」（春・八）と詠む。その後俊成が、治承二年（一一七八）の「右大臣家百首」の「鶯」題で「いつしかと高木に遷れ春日山谷の古巢を出づる鶯」（長秋詠藻・四九一）、文治六年（一一九〇）の『女御入内和歌』で「谷を出でて高木に遷る鶯は花咲く宿の有巢なりけり」（鶯人家花中に鶯ある所・四〇）と詠んでいる。多くは栄進を言祝ぐかそれを期待する歌だが、「右大臣家百首」の同題で経家は「春ごとに高木に遷る鶯のなにを恨みてこらなくらん」（経家集・六）と詠じている。該歌には、さらに諸観を伴った憂愁の趣がある。○鳴く―「あはれ」「物憂き」の縁で、人が「泣く」が掛かる。

〔補説〕 人の立身出世を言う「鶯遷」の故事を踏まえ、宗尊自身がかつて鎌倉幕府の將軍に就きながら、今はその職を追われて京都に戻って閑居していることを詠歎しつつ、さらには人の世の道理に歎息するかのような趣がある。

766 いかにもせん短みづかき夢におどろきてよを思ひ知る春の曙明けほの

〔通釈〕

どうしようか。短い夢にはっと目が覚めて、春の夜の短さを思い知るように、はかないこの世を悟る、春の曙よ。

〔参考〕

春の夜の短き夢と聞きしかど長き思ひの覚むる間もなし（続古今集・哀傷・〔故後鳥羽院を〕大原にをさめたてまつるよし聞こえければ・一四〇八・順徳院）

明け方の寢覚めの床は現にて憂き世を夢と思ひ知りぬる（守覚法親王集・暁、はかなき事ども思ひつづけ
て・一三二）

とにかくに憂き世を春の夢ぞとも水のあはれに思ひ知れとや（拾玉集・詠百首和歌・無常・幻世春來夢、浮
生水上泡・一九九九）

鐘の音に來む世の夢もおどろきて思ひ知らるる明け方の空（道助法親王家五十首・雑・曉述懷・九七四・家
衡）

〔語釈〕

○よー「世」に「夢」「おどろき」「曙」の縁で「夜」が掛かる。

〔補説〕「世」を「思ひ知る」の類型は、いずれも宗尊が学んでも不思議はない参考の後ろ三首などに見るよう

に、鎌倉時代前期頃から詠まれ始めたのであろう。該歌もその流れの中にある。

ところで、宗尊の異母妹月華門院綜子（母は大宮院姞子）が、この「八月百首」を詠んだ文永六年（一二二九）三月一日に二十一歳で没している（皇代曆、女院小伝等）。この死について『増鏡』（あすか川）は、次のように記している。「又の年（文永六年）三月の一日、月花門院、にはかに隠れさせ給ひぬ。法皇も女院も、限りなく思ひ聞えさせ給へるに、いとあさましき。さるはまことにやあらん、又、人たがへにや、とかく聞こゆる御事どもぞ、いと口惜しき。四辻の彦仁の親王、忍びて参り給けるを、基頭の中将、かの御まねをして、又参り加はりけるほどに、あさましき御事さへありて、それゆゑ隠れさせ給へるなど、ささめく人も侍りけり。なほさまではあらじとぞ思ひ給ふれど、いかがありけん。」（日本古典文学大系本）。「あさましき御事さへありて」の真偽は不明ながら、後嵯峨院鍾愛の皇女が噂の中で死んだことは間違いないのであろうし、その噂は宗尊の耳にも入っていたのかもしれない。たとえそうでなくとも、「よを思ひ知る春の曙」は、この妹綜子の早世を念頭に置いた表現であつたのではないだろうか。

767 契ちぎれかし南いそに急いそぐ人もあらば北わかに別わかるる春はるの雁かりがね

〔通釈〕

（帰ることを）約束してくれよ。南へ急ぎ行く人がもしあるのならば、北へ別れて行く春の雁もあるだろうから（その人も雁も）。

〔本文〕 万里人南去（ばんりにひとみなみにさる） 三春雁北飛（さんしゆんにかりきたにとぶ） 不知何歲月（しら

ずいづれのせいぐゑつにか） 得与汝同帰（なんぢとおなじくかへることをえむ）（和漢朗詠集・秋・雁付帰

雁・三一七・文選〔誤り。実は韋承慶の「南中詠雁」〕

〔参考〕

南翔北嚮（みなみにかけりきたにむかふ） 難付寒温於秋鴻（かんうんをあきのかりにつけがたし） 東出西

流（ひむがしにいでにしにながる） 只寄瞻望於曉月（ただせんばうをあかつきのつきによす）（和漢朗詠集・

恋・呉越王書・七八四・大江朝綱。本朝文粹・卷七・為清慎公報呉越王書）

秋風にあひみんことは命とも契らで帰る春の雁がね（現存六帖・かり・七七二・隆祐。隆祐集・百番歌合・

十三番・春歌中、右、光俊朝臣古今詞百首・八六。続拾遺集・雜春・四八五）

〔補説〕

やや詞足らずの感がある一首である。それは、第三句の「人もあらば」の仮定条件を何が承けているかが分

かりにくいことに起因しているようか。通釈に示したように、「人もあらば」を「別るる」が承ける、あるいは歌末

に「もあらむ」の類が省略されていると見た。それに伴って、初句の「契れかし」は、南行の「人」にも北行の

「雁がね」にも呼び掛けてっていると解した。その「契れかし」は、「本文」の三・四句目を踏まえていようが、同時に

参考の隆祐詠のような歌の存在を意識していようか。その隆祐詠の前提には当然、「春霞立つを見捨てて行く雁は

花なき里に住みやならへる」（古今集・春上・三一・伊勢）を踏まえた「折しもあれいかに契りて雁がねの花の盛

りに帰り初めけむ」（後拾遺集・春上・七二・弁乳母）や、それに類した、例えば『正治初度百首』の「帰る春な

ほ秋風と契りてやたのむの雁のまだき鳴くらん」（秋・五四二・通親）や「秋風の稲葉の音を契り置きてたのむの

雁も立ち帰るなり」（秋・一九一四・二条院讀岐）等々の歌の類型とそれがもたらす通念があつたであらう。

768 尋ねてもいかなる人に言問はん主なき花の峰の白雲たづねてもいかなるひとにことひ、主なきはなのみねのしらうろく

〔通釈〕

尋ねて来て、いったいどのような人に問い尋ねたらよいのか。主人がいらない桜の花が咲いていて、白雲がかかっていると見えるこの峰で（いずれが桜の花でいずれが白雲なのかを）。

〔本歌〕 名にしおはばいざ言問はむ都鳥我が思ふ人はありやなしやと（古今集・羈旅・四一一・業平。伊勢物語・九

段・一三・男）

〔参考〕

君がいにし方やいづれぞ白雲の主なき宿と見るが悲しさ（後撰集・哀傷・一四一六・清正）
浅茅原主なき宿の桜花心やすくや風に散るらん（拾遺集・春・六二・惠慶）

尋ねばや峰の白雲晴れやらでそれとも見えぬ山桜かな（新勅撰集・春下・一〇三・中宮但馬）

よそにては花とも見えじ尋ね来て分かばぞ分かむ峰の白雲（統後撰集・春中・九二・忠良）

〔補説〕

前歌同様に詞足らず、「言問はん」とする対照が明確ではないので、分かりにくい歌である。他に例の見えない歌詞「主なき花」が趣向で、「峰」にかかる「白雲」と見える「花」は主人などいないから、そこを尋ねて質問しても、桜の「花」なのか「白雲」なのかを答えてくれるどのような人がいるのか、といった趣旨を詠もうとした、と解しておく。とすると、あるいは俊成の「面影に花の姿を先立てて幾重越え来ぬ峰の白雲」（新勅撰集・春上・五七。長秋詠藻・二〇七）を意識したように見られなくもない。

769 なべて世の人にいかでか知らせまし花あれば入る宿の情けはなべてよこのひとにいかでか知らせましはなあればいれるしゆくのなさけは

『竹風和歌抄』注釈稿（五）

〔通釈〕

おしなべて世の中の人に、どのように知らせたらよいのか。桜の花があるので、どうであっても訪れ入る家の、何とも言えない風情は。

〔本文〕

遙見人家花便入（はるかにじんかをみてはなあればすなはちいる） 不論貴賤与親疎（くゐせんとしんそとをろんぜず）（和漢朗詠集・春・花付落花・一一五・白居易）

〔参考〕

桜咲く梢を宿の主にて花あれば入る春の山里（秋風集・雑上・一〇六九・光頼。桂大納言入道殿御集・勸修寺にて、花山家・二。和漢兼作集・春中・山家花・二五七、三句「主とて」）

花あれば疎きも分かず尋ね入る心の色を人などがめそ（宝治百首・春・見花・五三三・忠定）

〔補説〕

本文の白詩句を原拠にした、「花あれば入る」「宿」の類は、参考に挙げた院政期の光頼詠が早く、鎌倉時代の忠定詠や該歌等が続く。室町時代には、正徹の「暮れぬととどむる人の声せねど花あれば入る道の辺の宿」

（正徹千首・春・八二。草根集・春・寄花旅宿・一四九四）や雅親の「契り置きて思ひこそたて花あれば入りし山路の去年の宿りに」（亜槐集・夏日同詠百首応製和歌・春・尋花・一三）、あるいは実隆の「花あれば夜も入り来て戸ざしせぬ世をひかりなる春の家家」（雪玉集・春・文龜三十御月次・春居所・六三二）等というように派生している。さらに江戸時代には、望月長孝の「花あれば荒れにし宿の垣根にも稀なる駒の数ぞならべる」（広沢輯藻・春・勝円寺月次に、花時鞍馬多・一七九）や飛鳥井雅章の「花あれば高き卑しきなぞへなく連ぬる袖の匂ふ春風」（新明題集・春・花為佳会媒・八〇五）、あるいは武者小路実陰の「花あればとばかり言ひし宿毎の隔てぬ道に春も来にけり」（芳雲集・春・貴賤迎春・二五）等というように展開していて、細いながらも一つの系譜を形成している。

770 花をのみうつろふものと世の人の心こころも知らしらで思ひけるかな

〔通釈〕

桜の花だけを移ろい変わるものと、同じように移ろい変わる世間の人の心も知らないで、思ってきたことであるな。

〔本歌〕

世の中の人の心は花染めのうつろひやすき色にぞありける（古今集・恋五・七九五・読人不知）
色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける（古今集・恋五・七九七・小町）

〔参考〕

桜花とく散りぬとも思ほえず人の心ぞ風も吹きあへぬ（古今集・春下・八三・貫之）
花の色は昔ながらに見し人の心のみこそうつろひにけれ（後撰集・春下・一〇二・元良）

〔補説〕

花と人の心の移ろいやすさを比べる、類型的な一首だが、少年時に鎌倉幕府に將軍として送り込まれ、それなりの地歩を築いたであろう時に職を追われて、京都に戻った宗尊の実感の表出のようにも捉えられる。春の歌と
いうよりは、述懐の歌と言える。

771 紅葉もみぢ葉に人の命いのちは知られにきさのみや花を風にかかせて

〔通釈〕

（もうすでに）紅葉の葉で、人の命（のはかなさ）は自ずから分かってしまっていたのだったよ。しかし、それ

ばかりなのか、そうではなく、(今日の前の) 花を風にまかせみても(それは分かるのだ)。

〔本歌〕 紅葉葉を風にまかせて見るよりもはかなきものは命なりけり(古今集・哀傷・八五九・千里)

〔参考〕 散る花を風にまかせて見る時ぞ世は憂きものと思ひ知らるる(散木奇歌集・春・一四三)

〔類歌〕 春風に花をまかせて見るよりもうつろひやすき人心かな(菊葉集・恋二・寄花恋を・一一八一・三善直衡)

〔語釈〕 ○さのみや―「さのみ」は、そのようにばかり、の意。「や」は反語。

〔補説〕 前歌と同様に述懐の歌である。一応眼前に風に散る桜の花を見ての感懐の体なのであろう。

772 留^とまらぬ春の色こそ悲^{かな}しけれ風^ちに散^ちる花雲^{・より}に入る鳥

〔本文〕 ○風に散る―底本「風。ちる」(「風」の下に補入符を打ち右傍に「に」とあり。

〔通釈〕

どうしても留まることのない春の色こそが、悲しいのであった。風のままに散る花よ、雲の中に隠れ入る鳥よ。

〔本文〕 留春不用関城固(はるをとどむるにはもちあらずわんせいのかためを) 花落随風鳥入雲(はなはおちてか

ぜにしたがひとりはくもにいろ)(和漢朗詠集・春・三月尽・五五・尊敬)

〔語釈〕 ○春の色―漢語「秋色」の訓読「秋の色」とともに漢語「春色」の訓読から生まれた語か。春の風情、春ら

しい情趣を言う。

〔補説〕 『和漢朗詠集』の句の内容を直截に和歌に詠んだような一首で、宗尊の単純な詠作方法の一面を示す。

773 おくれじと言ひてや行かんもろこしの吉野の山に春の帰らば

〔通釈〕

後れまいと言つて続いて行こうか。もし唐土の吉野の山に、春が帰るのならば。

〔本歌〕

もろこしの吉野の山に籠もるともおくれむと思ふ我ならなくに（古今集・雑体・誹諧歌・一〇四九・時平）

〔語釈〕

○もろこしの吉野の山―本歌では、中国にある訳もない（大和国の歌枕である）吉野山を言うのが誹諧。該歌はそれを取りながら、五行説では東から西へ行く春が、たとえ遙かな中国の（あるはずもない）吉野山にもしも帰るのならば、それに後れないで追いかけて行こうかという趣旨で、春を強く惜しむ心情を表出する。

〔補説〕

右の『古今集』歌の「もろこしの吉野の山」を取り込んだ歌の先行例は、重家の「それにのみ月だにすまばもろこしの吉野の山も遠からなくに」（重家集・大殿より月御歌三十五首下し給ひて、此定によりて奉れと仰せられしかば・九一）や定家の「もろこしの吉野の山の夢にだにまだ見ぬ恋にまどひぬるかな」（拾遺愚草・初学百首養和元年四月・恋・六四）が、比較的早い。家隆には、「古今一句をこめて、歌よみ侍りしとき」の歌に「敷島や山とは聞かぬもろこしの吉野の山に籠もるばかりに」（壬二集・雑・三二二三）があり、定家男為家（新撰六帖・二四二二）や家隆男隆祐（隆祐集・六二二）も詠んでいる。関東歌壇では、『宗尊親王百五十番歌合』で能清が「み吉野の花にはしかじもろこしに同じ名高き山はありとも」（春・三五）と詠み、宗尊自身も該歌に先立ち、「身にはぬ憂き世なりせばもろこしの吉野の山も尋ね見てまし」（柳葉集・巻四・（文永元年六月十七日庚申百番自歌合）・山・五四二）と詠んでいる。なお、南朝の宗良親王には、同じ『古今集』歌を本歌にした「もろこしの吉野の山の遅桜あやなく春におくれぬるかな」（宗良親王千首・夏・余花・二〇四）がある。

夏

774 時鳥ほどきすなほ立ち待たまたん片岡の松の木陰かげは露しげくとも

〔通釈〕 夏

時鳥を、このままさらに立つて待とう。片岡に生える松の木陰は、露が隙間無くびつしりと置いているとして

〔本歌〕 時鳥声待つほどは片岡の杜の雫に立ちや濡れまし（新古今集・夏・一九一・紫式部）

〔参考〕 大伴の三津の松原かき掃きて我立ち待たむはや帰りませ（万葉集・巻五・雑歌・八九五・憶良。五代集歌枕・おほとものみつ・一六六六、三句「かきのきて」）

片岡の杜の木陰に立ち濡れて待つとも知らぬ時鳥かな（後鳥羽院御集・同〔元久〕二年三月日吉卅首御会・夏・一三二五）

今宵寝て摘みて帰らむすみれ草小野のしばふは露しげくとも（千載集・春下・一〇八・国信。堀河百首・春・葦菜・二四三）

〔語釈〕 ○立ち待たん―「立ち待つ」は、心に懸けながら立つたままで待つことを言う。参考の憶良詠等、万葉以来の語だが、「時鳥」について言うことは伝統的ではない。為相には、「月」について言い、「時鳥」も詠み併せた「過ぎやうらで鳴け時鳥立待の月も今宵のあかぬながめに」（藤谷集・夏・百首歌奉りしに、時鳥・六七）があるが、

該歌と直接の関連はないか。後代の實際に「なが鳴くや五月はまだし時鳥などしひてしも立ち待たるらん」（歌合 文明十六年十二月・夏・四四）がある。○片岡―一方が急で一方がなだらかな岡、あるいは岡の片側を言うが、歌語としては岡とほぼ同義に見てよい場合が多い。ただしこは、本歌の「片岡の杜」を承けるので、山城国の歌枕で、現京都市北区上賀茂（別雷）神社の第一摂社である片岡社の東側の小山を言ったと見られる。○松―「立ち待たん」の縁で「待つ」が響くか。

〔補説〕 本歌の紫式部詠は、「あしひきの山の雫に妹待つと我立ち濡れぬ山の雫に」（万葉集・卷二・相聞・一〇七・大津皇子）を踏まえる。

775 昔にはよも鳴き替へじ時鳥聞く我からや悲しかるらん

〔通釈〕

昔の声とはまさか鳴き替えているまい、時鳥は、それを聞く私自身のせいで悲しいのであろうか。

〔参考〕 いそのかみ古き都の郭公声ばかりこそ昔なりけれ（古今集・夏・一四四・素性）

我がごとく物や悲しき郭公時ぞともなく夜ただなくらむ（古今集・恋二・五七八・敏行）

虫の音も海人の刈る藻にあらなくに我から悲し秋の夕暮（大納言為家集・秋・秋夕同〔文永〕五年三月十三夜続

五十首・五五四）

〔語釈〕

○聞く我から―後出の例に「いとせめて夕暮」ことに悲しきは聞く我からの庭の松風」（藤川五百首・薄暮松風・五〇四・為定）が見える程度の新奇な措辞。

〔補説〕「時鳥」の鳴き声そのものを「悲し」とするのは、伝統的通念ではない。『万葉集』の「吾耳 聞婆不怱毛

霍公鳥 丹生之山辺尔 伊去鳴尔毛（現行訓「吾のみ聞けばさぶしも時鳥丹生の山辺にい行き鳴かにも」）（卷十九・四一七八・家持）の西本願寺本の訓は、「ひとりのみ聞けばさびしも時鳥丹生の山辺にい行き鳴くにも」だが、第二句は、西本願寺本左訓の他、元暦校本・類聚古集・細井本・廣瀬本等の訓が「きけばかなしも」である。しかしそれにしても、「ひとりのみ聞けば悲しも」であって、時鳥の声そのものを「悲し」と言っている訳ではない。参考歌として挙げた『古今集』の敏行詠は、「鳴く」と「泣く」の掛詞から、「我がごとく物や悲しき」と言うのであって、時鳥の声を悲しいと言っているのではない。『蜻蛉日記』の「音にのみ聞けば悲しな時鳥ことかたらはんと思ふ心あり」（一・兼家）も、「音にのみ聞けば」と条件付けて、相手（道綱母）を「時鳥」によそえて「悲しな」と言っているにすぎない。また、『続詞花集』の「悲しさのはてと聞きてや郭公限りの声をここにしも鳴く」（哀傷・三九五・平実重）は、詞書に「みな月の頃ほひ、東山に人の四十九日のわざしける所にまかれりけるに、郭公いたく鳴きければ」とある哀傷歌で、黄泉と往還する鳥という印象を背景とした一首であり、歌の内容も「悲しさの果てと聞きてや」の主語が「郭公」なのであって、時鳥の声が「悲しさの果て」と言っているのではないのである。古歌には、何らかの条件下に「時鳥」に関わらせて「悲し」ということはあっても、その声を「悲し」とする歌は見出せないのである。平安時代最末期に惟宗広言撰の『言葉集』の「時鳥なれも昔や偲ぶらん語らひくればものぞ悲しき」（雑上・郭公催懷旧と云ふ事・二六三・建春門院少納言）は、該歌に詞遣いが似る点もあるが、「ものぞ悲しき」からして、右の敏行詠に連なる一首と見てよい。同様に敏行詠に連なる、『仙洞影供歌合建仁二年五月』の「うちつけに物がなしきは時鳥雲路に迷ふ暁の声」（暁聞郭公・二・越前）はしかし、「雲路に迷ふ暁の」という条件はありながらも、「時鳥」の「声」を「物がなしき」と言っている点で、新しさがある。実朝の「夕闇

のたづたづしきに時鳥声うらがなし道やまどへる」（金槐集定家所伝本・夏・夕時鳥・一三〇）は、これに通う。また、同じく実朝の「五月闇神奈備山の時鳥つまごひすらし鳴く音悲しも」（同上・深夜郭公・一四五。万代集・夏・六一三。雲葉集・夏・三一一）も、「つまごひすらし」を条件（原因）としながらも、「声うらがなし」と言っているのは、やはり一つの新しさと言えるであろう。「時鳥ただ一声の忍び音は待つよりもげに物ぞ悲しき」（閑谷集・ある人の許より、時鳥の一声を聞きて待つよりもなかなか物思ふことになりぬ、と申したりければ・四二）も同様であろうか。弘長元年七月七日『宗尊親王百五十番歌合』の「郭公悲しき物ぞ今よりは夕べは我に声な聞かせそ」（夏・八二・藤原時盛）は、そういった中世の新しさの延長上にある一首と見なすことができようし、宗尊がこれ以前の「弘長元年五月百首歌」（夏）で右の『閑谷集』歌と同工異曲の「待ちわびし時こそあらめ郭公聞くにも物の悲しかるらん」（柳葉集・卷一・一八。瓊玉集・夏・一一五）と詠じたのも、その流れの中に位置付けられよう。該歌は、それらを踏まえながら、伝統的通念では悲しいはずのない「時鳥」の鳴き声が「悲し」いのは自分故と再転換した、と捉えられる。とすれば該歌は、前掲の家持の「ひとりのみ」の歌に通じるものがある。あるいはまた、右の「弘長元年五月百首歌」の「郭公聞くにも物の悲しかるらん」を思い起こしていたとすれば、その当時の「悲し」も「我から」であったかと捉え直しているということになる。

776 荒れぬとはえやは見えける伏見山かよ通ひし人の早苗比とる頃

〔通釈〕

（古歌は菅原の伏見の里が荒れたと言うけれども）荒れてしまっているとは、どうして見えたか（いや見えな

ったのだ。(菅原の伏見ならぬこの山城の)伏見山では、そこに通った人が早苗を取って植えていた頃は。

〔本歌〕 菅原や伏見の里の荒れしより通ひし人の跡も絶えにき(後撰集・恋六・一〇二四・読人不知)

〔参考〕 いざここに我が世は経なむ菅原や伏見の里の荒れまくも惜し(古今集・雑・九八一・読人不知)

菅原や伏見の暮に見渡せば霞にまがふ小初瀬の山(後撰集・雑三・一二四二・読人不知)

伏見山松の陰より見渡せばあくる田の面に秋風ぞ吹く(新古今集・秋上・二九一・俊成)

早苗とる伏見の里に雨過ぎて向かひの山に雲ぞかかれる(続後撰集・夏・早苗を・一九五・土御門院。土御門院百首・夏・早苗・二六。秋風集・夏・一六九)

〔語釈〕 ○伏見山―山城国の歌枕。現京都市伏見区。伏見は、北は稻荷山麓、南は巨椋池、西は賀茂川を隔てて鳥羽に接する。その東の山地が伏見山で、木幡山、桃山とも呼ばれる。

〔補説〕 本歌の「菅原や伏見」は菅原氏の本貫地の菅原伏見で、大和国生駒郡菅原、現在の奈良市菅原町より広い地域という。宗尊は、それを知っていて敢えて山城国の「伏見山」にずらしたか、両者を混同していたのであるうか。参考歌の『新古今集』『伏見山』詠は、同じく参考歌に挙げた『後撰集』『菅原や』の歌を「深く心に染めならひにければ」(中宮亮重家朝臣家歌合・五番判詞)とまで言った俊成の作であれば、「見渡せば」の一致から見て、「菅原や」の歌を意識しつつ、かつ『新古今集』の諸注が指摘するごとく「山城の鳥羽田の面を見渡せばほのかに今朝ぞ秋風は吹く」(詞花集・秋・八二・好忠)を踏まえながら、敢えて大和の「菅原」を山城のそれにずらした所為かと考えられる。宗尊もこれと同様に、意識的な歌枕の置換を行ったものと見たいと思う。

777 五月雨は晴れぬと見ゆる雲間より山の色濃き夕暮の空

〔本文〕 歌頭に「玉」（玉葉集）の集付けあり。

〔通釈〕

五月雨はやつと晴れたと見える雲の間から、山の色を濃く見せている、夕暮の空よ。

〔参考〕 雲間より出でぬ日影のほの見えてさても晴れぬ五月雨の空（明日香井集・鳥羽百首・五月雨・三五）

〔他出〕 夫木抄・夏二・五月雨・百首御歌中に・三〇〇一・中務卿のみこ。玉葉集・夏・百首歌の中に・三五四・中

務卿宗尊親王。

〔補説〕 「京極派の先蹤をなす、動きのある清新な叙景歌」（岩佐美代子『玉葉和歌集全注釈 上巻』平八・三、笠間書院）という。そのとおりであろう。「色濃き」の措辞も、『玉葉集』『風雅集』に数多く集中する京極派好みの措辞である。「かきくらし雲間も見えぬ五月雨は絶えずもの思ふ我が身なりけり」（後拾遺集・恋四・八二九・長能）や「いかばかり田子の裳裾もそほつらむ雲間も見えぬ頃の五月雨」（新古今・夏・二二七・伊勢大輔）のような歌が、「五月雨」の「雲間」の古い詠みようである。参考歌に挙げた雅経詠のような新古今時代の新しい詠みぶりだが、『新古今集』には採録されないままに、鎌倉中期の関東縁故歌人に受け継がれて、京極派の勅撰集で掬い取られた一例と言える。ちなみに、本抄676所収の宗尊の類詠「見渡せば雲間の日影うつろひてむらむら変はる山の色かな」は、『風雅集』（雑歌・一六四八）に採録されている。

778 繁しげからし我が人言ひとことは昔むかしにて露のみ深かき宿の夏草

〔通釈〕

類りに絶え間なかったであろう私に関する噂は、もう昔のことであつて、今はみつしりと隙間ない露ばかりが、我が家の深く生い茂つた夏草に、こんなにも多く置いてあるよ。

〔本歌〕

人言は夏野の草の繁くとも君と我としたづさはりなば（拾遺集・恋三・八二七・人磨。原歌万葉集・卷十・夏相聞・寄草・一九八三・作者未詳）

〔参考〕

友鶴の群れぬしことは昔にてみしま隠れに音をのみぞなく（続古今集・雑中・一六三九・成実。宝治百首・雑・鳥鶴・三四一六。秋風抄・雑・鳥鶴・三〇三。現存六帖・つる・七五一。秋風集・雑中・一一五九）

古里の萩の下葉も色づきぬ露のみ深き秋の恨みに（続後撰集・秋上・二八九・忠信。万代集・秋上・八四六。遠島御歌合・萩露・五五・沙弥道珍Ⅱ忠信）

今ははや道踏み絶えて来ぬ人のつらさあらはす宿の夏草（宝治百首・夏・夏草・一〇二八・行家。現存六帖・なつのくさ・一一一）

〔類歌〕

尋ねても問はれしことは昔にて露のみ深き蓬生の宿（南朝三百番歌合建徳二年・絶恋・六三・教頼。新葉集・恋五・九九〇）

〔語釈〕

○繁からし―形容詞「繁し」の連体形の「繁かる」に、推量の助動詞「らし」が付き、「る」が省略された形だと解する。「繁からし」は、採らない。「露」「夏草」の縁で、露がみつしり隙間ない意、草が密生している意が掛かる。○昔にて―①昔のとおりであつて、昔のままでの意と、②昔のこととなつての意と、二通りの意味があるが、ここは後者。○露のみ深き宿の夏草―「露のみ深き」（露だけが多い）から「深き」を掛詞に「深き（宿の）夏草」（多く茂る夏の草）に鎖る。「露」に涙が暗喩されているとみることもできるか。

〔補説〕「繁からし我が人言」は、文永三年（一二六六）七月に將軍職を廢されて帰洛する以前の三月に、妻宰子と

良基との不義を宗尊が知り父帝後嵯峨院に指示を求めたということから、この密通に関する風聞を念頭に置いたのかも知れない。860番歌「ひまのなき庭の夏草いにしへの我が人言の形見にぞ見る」は該歌と同工異曲。

類歌に挙げた南朝歌人詠は、「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答へよ」（古今集・雑下・九六二・行平）を本歌にした定家の「わくらばに問はれし人も昔にてそれより庭の跡は絶えにき」（新古今集・雑中・一六八六・定家）を踏まえていようか。

779 絶え絶えに螢の影の乱るるは外面の竹に風や吹くらん

〔通釈〕

絶え絶えに螢の光が乱れているのは、家の外の竹に風が吹いているからだろうか。

〔参考〕 呉竹の夜半に螢の乱るるは梢涼しき風や吹くらん（江帥集・風渡れば、竹の間に、螢の影乱る・三八二）

山川の岩間の水の絶え絶えに光も見えて飛ぶ螢かな（宝治百首・夏・水辺螢・一一〇一・顯氏）

暮れぬるか浅沢水の絶え絶えに光見えても行く螢かな（宝治百首・夏・水辺螢・一一〇八・行家）

山もとの外面の竹に風さえて乱るる露に宿る月影（建仁元年十首和歌・月前竹風・一一九・景頼）

山里の外面の竹を吹く風に夕日涼しきひぐらしの声（紫禁草・同〔建保四年三月十五日〕比、二百首和歌・

七四四・万代集・夏・七五八）

〔類歌〕

秋にまがふ竹の夜風に寢覚むれば窓の螢の影ぞ乱るる（歌合後光嚴院文和之比・一九・徽安門院一条）

飛ぶ螢影も乱れて群竹の青葉の簾夕風ぞ吹く（参議濟繼集・螢火透簾・五二一）

吹く風も涼しくなりて呉竹の夜深き窓に螢乱るる（新明題集・夏・深夜螢・一四七〇・資冬）

呉竹の露の光も数見えて螢乱るる窓の涼しさ（新明題集・夏・窓螢・一四九七・冬基）

〔語釈〕

○螢の影の乱るるは―参考に挙げた匡房の歌を初めとして、和歌でも常套だが、「螢火乱飛秋已近（けいくわみだれとんであきすでにちかし）辰星早没夜初長（しんせいはやくぼつしてよはじめてながし）」（和漢朗詠集・

夏・螢・一八六・元稹）が下敷きになる。○外面の竹―家の外に生えている竹。保延元年（一一三五）頃という

『為忠家後度百首』の「白雪に外面の竹も埋もれて下枝のみこそ緑なりけれ」（冬・竹園雪・四六七・為業）が早い

例となる。新古今時代には、慈円の「霰降るみ山の里に小夜更けて外面の竹に風すさむなり」（拾玉集・一日百首・

竹・九六六）や『正治初度百首』の師光詠「鶯は外面の竹に降る雪を花のねぐらに思ひたがふな」（正治初度百首・

春・一七〇九）や参考の「山もとの外面の竹」の一首等が散見する。その後、参考の順徳院詠や該歌を経て、伏見

院に「年暮れし外面の竹の上にもまたこの頃の春は見えけり」（伏見院御集・春植物・六〇八）や「春浅き外面

の竹の音さえて窓吹く風は雪払ふなり」（同・春竹・六三四）、永福門院の「朝風は外面の竹に吹き荒れて山の霞も

春寒き頃」（永福門院百番御自歌合・二）の作例が見える。勅撰集は、『風雅集』に、この永福門院詠（春上・

三九）と俊兼の「朝日影うつる木ず糸は露落ちて外面の竹に残る薄霧」（秋下・六五九）が採録されているのみで

ある。新古今歌人から宗尊を経て京極派歌人へと用例の系譜を繋ぎ得る例の一つである。なおまた、「螢」と「外

面」の詠み合わせの例は希少で、該歌の他には、南朝の長慶天皇の「山里の外面の小田に夏暮れてゆきあひの早稲

の螢飛ぶなり」（長慶天皇千首・雑・田家虫・一六九）が見える程度で、これも宗尊と南朝歌人とが共有する詠み

方ということになる。

〔補説〕

類歌に後期京極派の徽安門院一条詠を挙げたように、京極派の歌境の先蹤と言えるような一首である。該歌の三、四ヶ月程前の「文永六年四月廿八日、柿本影前にて講じ侍りし百首歌」でも「絶え絶えに飛ぶや螢の影見え窓閑かなる夜半ぞ涼しき」(本抄・卷四・六二三)という類詠をものしている。宗尊はこれら以前に、文応元年(一二六〇)一〇月六日以前の成立という『宗尊親王三百首』で「夏草の茂みが下の忘れ水絶え絶え見えて行く螢かな」(夏・九六)と類歌を詠じてもいる。これについて為家の評詞は、「慥雖_{トモ}不_レ覺悟_セ候_ト、上下句、近年多_ク見候心地仕_リ候」と言う。『宝治百首』の参考に挙げた両首や「草深みありとも見えぬ忘水すだく螢の光にぞ知る」(夏・水辺螢・一〇九〇・実雄)等を念頭に置いた発言であるうし、宗尊もこれらを見習っていたのではないだろうか。ちなみに、これら「忘れ水」詠は、『新古今集』の「東路の道の冬草茂りあひて跡だに見えぬ忘れ水かな」(冬・六二八・康資王母)を踏まえていよう。この水辺の「螢」の光が「絶え絶え」に見える景趣は、勅撰集では『玉葉集』の「山陰や暗き岩間の忘れ水絶え絶え見えて飛ぶ螢かな」(玉葉集・夏・四〇五・為理)に現れ、『新葉集』にも「蘆間行く野沢の螢絶え絶えに光見え益す夕闇の空」(夏・二二二・読人不知)が収められている。これも、宗尊親王から京極派を経て南朝に繋がる一例と見ておきたい。

780 憂_ウき身には今日_{けふ}の御祓_ひもよしやただ、心_{こゝろ}の秋_{あき}の夏_{なつ}を知ら_らねば

〔通釈〕

憂く辛いこの身には、今日の夏越しの祓えもままよどうでもよい、まさしく自分の心は既に秋の愁いになっていて、そもそも夏を知らないのだから。

〔参考〕 憂き身には人よりもけに馴れぬべし花見るほかの春を知らねば（現存六帖・はな・四一五・伊忠）

〔語釈〕 ○今日の御被―「夏越しの被へ」（六月被へ）とも）の被えを言う。陰曆六月三十日に宮中や諸神社で行われた、半年間の穢れを払う厄除けの行事の被え。○心の秋―『古今集』の「初雁のなきこそ渡れ世の中の人の心の秋し憂ければ」（恋五・八〇四・貫之）や「時雨れつつ紅葉づるよりも言の葉の心の秋にあふぞわびしき」（恋五・八二〇・読人不知）が原拠で、多く恋歌に「飽き」を掛けて用いられる。ここはそれと異なる。例えば慈円の「物思ふ心の秋になりぬればいかでか袖も紅葉ぢさるべき」（拾玉集・「建久二年五月頃隆寛阿闍梨十首詠への返歌」・五〇三〇）や通具の「干る間なき袖をば露の宿りにて心の秋よいつか尽くべき」（千五百番歌合・秋四・一五九五）の「心の秋」のように、心に忍び寄る秋思つまり憂愁を言ったと思しい。あるいは、「物色自堪傷客意（もののいろはおのづからかくのころをいたましましむるにたへたり） 宜將愁字作秋心（うべなりうれへのじをもてあきのころにつくれること）」（和漢朗詠集・秋興・二二四・篁）や、これを踏まえた「ことごと悲しかりけりむべしこそ秋の心を愁へと言ひけれ」（千載集・秋下・三五一・季通）等を意識したのかもしれない。○夏を知らねば―他に例を見ないが、「春を知らねば」を交換させたのであろう。「春を知らねば」の原拠は、『後撰集』の「萌え出づる木の芽を見ても音をぞ泣くかれにし枝の春を知らねば」（春上・一四・兼覽王女）に求められる。

〔補説〕 帰洛後三年目となる。この間の宗尊の歌には、心の平穏や諦観を窺わせるような作も散見する。しかし該歌には、投げやりな虚しさも感じられる。文永三年（一二六六）の六月下旬から七月上旬にかけての時期に、時宗らが謀議し、妻幸子と密通の風聞あつた僧良基が逐電、宗尊は妻や子女と引き離されて帰洛の途につく。その記憶を呼び起こさせる同時期の夏越しの被えを忌避したということであろうか。

781 露けさの我がたくひなる袖もなし人を分きてや秋の来ぬらん

〔通釈〕 秋

露つぼさが私に匹敵する他の誰の袖もないよ。(全てのの人に來るはずだが) 人を區別して、(私だけに) 秋が來て
いるのだらうか。

〔参考〕

露けさは秋の草葉をたくひとて干す間も知らぬ我が袂かな (新撰六帖・第六・あきの草・一九二七・為家)
人を分く心とは見じ大空の星のきらめきことよけれども (新撰六帖・第一・ほし・三四四・信実)

〔類歌〕

人よりも分きて露けき袂かな我がために來る秋にはあらねど (玉葉集・秋上・四六〇・道玄)
人を分く秋の形見となりにけり物思ふ身の袖の白露 (浄弁集・暮秋・三三三)

〔語釈〕

〇我がたくひなる―私と並ぶようである、私と類同である、という意味。先行の類例は少なく、慈円が好ん
だと思しく、次の例がある。①「憂き世思ふ我がたくひかな時鳥五月待つ間の卯の花の声」(拾玉集・一日百首・

郭公・九〇二)、②「吉野山花を尋ぬる人は皆我がたくひとや我を見るらん」(同・花月百首・花・一二九八)、③

「雲騒ぐ夕べの空を君はよも我がたくひとはながめざるらむ」(同・当座百首・恋・寄雲恋・一四四六。慈鎮和尚自

歌合・小比叡十五番・五一)、④「我がたくひ今はなぎさに行く舟のまた別るるにしほたれにけり」(同・文集百

首・無常十首・親愛日零落、存者仍別離・一九八一)。鎌倉殿御家人歌人笠間時朝に「思ひあれど煙も声もたてず

して燃ゆる螢や我がたくひなる」(時朝集・未入集歌・恋・寄螢忍恋・二二七)の作があり、これは該歌に先行し

ていよう。また、後出では、関東祇候の廷臣飛鳥井雅有に「下燃えの我がたくひこそなかりけれしのぶの浦もけぶ

り立つなり」(隣女集・卷第二百文永二年至同六年・恋・忍恋・六一五。飛鳥井雅有集・恋・三四七)がある。新古今歌人の珍しい措辞を関東歌人が用いている例である。○袖もなし―意外に用例の少ない句。「遠方や行きかふ人の袖もなし霞や深き武蔵野の原」(内裏百番歌合承久元年・野径霞・一三・伊平)が先行例となる。後出では、『南朝五百番歌合』の「吹き過ぎて我をば招く袖もなし風や尾花の心なるらん」(秋三・三五八・源資氏)が目につく。○人を分きて―人を区別して、ということ。源有房の「人を分く人の心は辛からで身の程知らぬ身をぞ恨むる」(有房中将集・恋・三〇三)が早く、慈円の「我が宿は人を分きてぞ跡を惜しむしばしも雪に厭ひけるこそ」(秋篠月清集・冬・一二九八)や師光の「郭公人を分けてもかたらはば聞かぬためしになりやはてまし」(石清水若宮歌合正治二年・郭公・八四)が続く。伏見院の「人を分く初音ならじを時鳥我にはなどかなほもつれなき」(新後撰集・夏・一六九)が勅撰集の初出で、鎌倉後期以降に用例が増えている。宗尊は、より直接には参考の信実の歌に学ぶか。

〔補説〕 大枠では、「大方の秋来るからに我が身こそかなしき物と思ひ知りぬれ」(古今集・秋上・一八五・読人不_知)や、類歌の道玄詠の本歌でもある「月見ればちぢに物こそ悲しけれ我が身一つの秋にはあらねど」(同・秋上・一九三・千里)が示す、全てのの人に来るはずの秋の孤愁といった通念と類型の中にある一首と言ってよい。宗尊の念頭には、「大方も秋はわびしき時なれど露けかるらん袖をしぞ思ふ」(後撰集・秋中・二七八・醍醐天皇)や「大方に秋の寢覚めの露けくはまた誰が袖に有明の月」(新古今集・秋上・四三五・二条院讚岐)があつたかもしれない。

類歌に挙げた両首については、直接に宗尊からの影響があるか否かは措いて、京極派勅撰集入集歌や二条家為世門の四天王の歌に共通する詠みぶりの先蹤に宗尊の歌があることになる。

782 同じくは憂き世の夢をおどろかせ枕に通ふ萩の上風

〔通釈〕

同じことなら、(秋が来たことを気付かせるだけでなく)この憂く辛い世の夢を覚め気付かせてくれ。枕に吹き通う萩の上風よ。

〔参考〕

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる(古今集・秋上・一六九・敏行)
秋ごとになほ絶えずこそおどろかせ心長きは萩の上風(久安百首・秋・六三五・親隆)

うたた寝に心尽くしの秋来ぬとおどろかすなり萩の上風(千五百番歌合・秋一・一〇五七・越前)
なもあみだ仏と今は契りても憂き世の夢をおどろかすらむ(新和歌集・哀傷・四六一・長時)

〔類歌〕

山深き杉の庵の村時雨憂き世の夢をおどろかせとや(東撰六帖抜粹本・冬・時雨・三七〇・泰時)
うたた寝の夢は覚めぬる手枕になほおどろかす萩の上風(延文百首・秋・萩・九三八・賢俊)
おどろかせ憂き世の夢も覚むべくは恨みもはてじ萩の上風(草山集〔元政〕・萩風・九四)

〔語釈〕

○憂き世の夢―『源氏物語』に「むつごとを語りあはせむ人もがな憂き世の夢もなかば覚むやと」(明石・二二九・光源氏)がある。定家は、この源氏歌の影響もあつてか、この詞を好んだようである(宮河歌合・七三三・拾遺愚草・一六八九、同・二九八五)。勅撰集では、『新古今集』の慈円の歌「年の明けて憂き世の夢の覚むべくは暮るとも今日はいとはざらまし」(冬・六九九)が初出である。○萩の上風―萩の上を吹き過ぎる風。「秋はなほ夕まぐれこそただならね萩の上風萩の下露」(和漢朗詠集・秋・秋興・二二九・義孝)が思い起こされる。

〔補説〕 宗尊は、「吹けばとて思ひおどろく人もなし夢の憂き世の秋の初風」（中書王御詠・五十首歌合に、秋歌・八三）とも詠んでいて、これを展開させたような趣がある。

783 馴れ難きたとへも今ぞ思ひ知る野辺の牡鹿の声のはるけさ

〔通釈〕

馴れ難い、（寂しさを）鹿の音によぞえる譬えも、今こそ思い知ることよ。野辺に鳴く鹿の声の遠く聞こえる遙けさよ（その寂しさよ）。

〔参考〕

寂しさを何にたとへん牡鹿鳴くみ山の里の明け方の空（千載集・秋下・三三三・惟宗広言）

秋萩の散りのまがひに呼び立てて鳴くなる鹿の声のはるけさ（万葉集・卷八・秋雑歌・一五五〇・湯原王）

淡路島吹き越す秋の波風にたぐふ牡鹿の声のはるけさ（壬二集・百首文治三年十一月・秋・九四二）

阿含経の鹿の声、鹿野苑とぞ聞こゆる、諦縁乗の萩の葉に、偏真無漏の露ぞ置く（梁塵秘抄・卷二・注文 歌・阿含経二首）

〔類歌〕

花の色にくらべて今ぞ思ひ知る桜にまさるにほひありとは（弁内侍日記・五六・作者）

いつも見るあはれは今ぞ思ひ知るおほろの月は霞なりけり（他阿上人集・又合点の外により詠み給ふ歌の

中・春・一〇二一）

〔補説〕

一応『千載集』の広言の歌を踏まえて解釈したが、なお「み山の里」と「野辺」との懸隔があるので、不審が残る。例えば釈教歌であったならば、参考の『梁塵秘抄』にも見える仏陀の初転法輪の地という「鹿野苑」の地

名は、婆羅捺国王が群鹿千頭を網羅すると、鹿王が膝を屈して哀れを求めたので、国王は群鹿を放ち、鹿は山に還り安んじたことに由来するという（出曜経第十四道品、大唐西域記第七。望月『仏教大辞典』に拠る）から、このような話を踏まえたかとも疑われるが、これも釈然としない。なお追究したい。

784 掛けて来る誰が玉章の情けとて秋を忘れず雁の鳴くらん

〔通釈〕

雁がその脚に掛けてやって来る、いったい誰の手紙のためにする思いやりということで、（今年も）秋を忘れずに雁が鳴いているのだろうか。

〔本歌〕

秋風に初雁が音ぞ聞こゆる誰が玉章を掛けて来つらむ（古今集・秋上・二〇七・友則）

〔参考〕

玉章をいかなる里に伝ふらん秋を忘れぬ初雁の声（正治初度百首・秋・一九四七・二条院讃岐）

誰がために秋来し雁の情けとて惜しむによらぬ春の別れぞ（弘長百首・春・帰雁・七三・家良）

〔語釈〕

○掛けて来る―匈奴に囚われた前漢の蘇武が北から書信を雁の脚に結び付けて漢王に送ったという雁信の故事（漢書・蘇武伝）がもたらした通念による。○玉章―文、書信。

785 よも知らじ何ゆゑもろき泪とも心のうちの秋の夕暮

〔通釈〕

『竹風和歌抄』注釈稿（五）

〔人〕 まさか知るまい。どうしてもろく散る私の涙であるのかとも。我が心の中に広がるのは秋の夕暮なのだ。
 ながむればずるに落つる涙かないかなる空ぞ秋の夕暮（宝治百首・秋夕・一三六二・実氏）

七夕の心のうちやいかならむ待ちこし今日の夕暮の空（千載集・秋上・二三五・兼実）

秋風は萩の葉にこそ吹けば吹け心のうちの涼しきやなぞ（万代集・秋上・八九三・相模。相模集・七月・四五五）

思ひいる心のうちの篠薄秋の盛りをいつと待たまし（洞院撰政家百首・恋・忍恋・一〇五三・信実）

〔類歌〕 かばかりは何ゆゑ落つる涙ぞと我もあやしき物をこそ思へ（玉葉集・恋三・一五四二・章義門院）

〔語釈〕 ○何ゆゑもろき―珍しい句。「かき曇る心厭ふな夜半の月何ゆゑ落つる秋の涙ぞ」（続古今集・秋上・

四一三・良経。秋篠月清集・花月百首・月・八八）の「何ゆゑ落つる」と、「木の葉散る時雨やまがふ我が袖にもろき涙の色と見るまで」（新古今集・冬・五六〇・通具）等の「もろき涙」とを結び付けたような措辞である。

〔補説〕 宗尊はこれ以前に「文永元年十月百首歌」で、「袖の上にとすればかかる涙かなあな言ひ知らず秋の夕暮」（瓊玉集・秋上・二〇四。柳葉集・卷四・五八四。続古今集・秋上・三六五）という、参考に挙げた実氏詠に負ったような類歌を詠じている。類歌に挙げた一首は、詞遣いは異なるが、意味するところはほぼ同様であろう。

該歌は、下句が特徴的である。参考に挙げた歌のような、「心のうち」を推し量る「夕暮の空」の情景や、「心のうち」に比喻で秋景を見る歌などが下敷きになって詠出されたのであろうか。なお、江戸時代の戸田茂睡撰『鳥の迹』に「風を聞き露を詠むる色よりも心の内の秋の夕暮」（秋・三七七・山名玉山）という、下句が一致する歌が見える。

786 秋かけて別れし庭の浅茅原昔を偲ぶ月やすむらん

〔通釈〕

秋にかけて別れた、あの庭の浅茅原よ。今は昔の偲ぶ月のみが澄みながら住んでいるのだろうか。

〔参考〕

頼め置きし浅茅が露に秋かけて木葉降りしく宿の通ひ路（新古今集・恋二・一一二八・忠良。千五百番歌

合・恋一・二二二一。新時代不同歌合・六）

浅茅原主なき宿の庭の面にあはれいく世の月かすみけむ（金槐集定家所伝本・荒れたる宿の月といふ心を・

五六〇。新勅撰集・雑一・二〇七六・実朝）

思ひ出でて昔を偲ぶ袖の上にもありしにもあらぬ月ぞ宿れる（金槐集定家所伝本・雑・月をよめる・五六一。

新勅撰集・雑一・二〇七七・実朝）

〔語釈〕

○秋かけて―「秋かけて言ひしながらもあらなくに木の葉ふりしく江にこそありけれ」（伊勢物語・九十六

段・一七一・女）が原拠で、参考の忠良詠もこれを本歌にする。秋という時期に及んで、秋になって、というこ

と。○別れし庭―先行例には、万寿四年（一〇二七）九月十四日に亡くなった皇太后妍子を追慕して、「十六日の

月明きに」詠んだ内侍典侍の「君が見し月ぞと思へど慰まず別れし庭を憂しと思へば」（栄花物語・卷二十九・た

まのかざり・三二八）がある。この歌の直前には、「昨日の講師、天竺の釈尊の涅槃の所の悲しみの涙の、今にそ

のあたりの砂子にしみて紅の色なる心を説きければ、命婦の乳母（禎子内親王の乳母）の、里より」として「君恋

ふる涙の色はそのかみの別れの庭もかくやありけん」（三二六）があり、弁の乳母（同上）が「いにしへの別れの

庭の涙にも身にしむことはなほぞまされる」（三二七）と返している。この「別れの庭」は、勅撰集では「山階寺

の涅槃会に詣でてよみ侍りける」という「いにしへの別れの庭にあへりとも今日の涙ぞ涙ならまし」(後拾遺集・釈教・一一七九・光源法師)と同様に、釈迦が末羅国鳩尸那城の沙羅双樹の下で入滅したその場を言っている。内侍典侍の「別れし庭」は、これを踏まえて釈尊と別れた場に、皇太后と別れた場を重ねていようか。一方で『源氏物語』には、紫上の一周忌直前の七月七日に光源氏が七夕の星合いの別れによそえて死別の紫上を追慕した「たなばたの逢ふ瀬は雲のよそに見て別れの庭に露ぞ置き添ふ」(幻・五七九)がある。ここには、釈尊との別れの場の意味は希薄であろう。該歌の場合もこれと同様に、その意味は読み取り難い。ただしまた、別れた対象が「庭」で言わば故郷の家に在った昔を偲ぶ主意なのか、別れた対象が人でその人と住んでいた昔を偲ぶ主意なのか、不明である。宗尊詠の傾向として、述懐の秋歌であると見て、前者に解しておく。○すむ―「澄む」に「別れし」。「庭」の縁で「住む」が掛かると解する。

787 いかにせん思おもひ出いでじと忍しのべども昔かの影かげの月に残れる

〔通釈〕

どうしようか。思い出すまいと、堪え忍ぶけれども、思い出させる昔の面影が、月の光の中に残っているよ。

〔本歌〕 今更に思ひ出でじと忍ぶるを恋しきにこそ忘れわびぬれ(後撰集・恋三・七八八・実頼)

〔参考〕 うつりけむ昔の影や残るとて見るに思ひのます鏡かな(新古今集・哀傷・俊頼朝臣身まかりて後、つねにみ

ける鏡を仏につくらせ侍るとてよめる・八二五・新少将)

故郷は浅茅が末になりはてて月に残れる人の面影(新古今集・雑中・一六八一・良経。秋篠月清集・十題百

首・居処十首・二二五。後京極殿御自歌合・一八四。三十六番相撲立詩歌・四四。定家八代抄・一七二〇)

〔類歌〕

憂しとだに思ひ出でじと忍べどもなほ天の戸をあけがたの月(物語二百番歌合・後百番歌合・御津浜松・二六〇・大将姫君。風葉集異本歌〔五島美術館蔵桂切〕・一四一四・浜松の左大将の女)

〔語釈〕

○影―人の面影、あるいは人の姿の意に解される。「月」の縁で月光の意が掛かる。

788 世の中に住みわぶる身のはれ知れ雲の隙行く秋の夜の月

〔通釈〕

この世の中に住みわづらうこの身の哀れを知ってくれ。雲の間を渡って行く、秋の夜の澄みかねている月よ。

〔参考〕

浮雲は立ち隠せども隙洩りて空行く月の見えもするかな(新古今集・雑上・一五〇二・伊勢大輔)

〔類歌〕

住みわぶる我こそつねに急がるれ月はなにゆゑ山に入るらん(風雅集・雑下・一八二五・実衡女)

〔語釈〕

○住みわぶる―「雲の隙」「月」の縁で「澄みわぶる」が掛かる。○雲の隙―古く公任の「ふたたびや人よ

り待たむ月影の雲の隙より出でぬかぎりは」(大納言公任集・曇れる夜、月を待つ心・七六)があるが、作例は多
くない。後出歌に、実兼の『嘉元百首』詠「いとどしく見る程ぞなき村雨の雲の隙行く短夜の月」(夏・夏月・
三三三)がある。

〔補説〕

参考に挙げた伊勢大輔の歌は、詞書に「参議正光、朧月夜に忍びて人のもとにまかれりけるを、見あらはし
てつかはしける」とあり、「月」に女の所に通う男(正光)を寓意し、からかいかけた一首であり、該歌とは趣を

異にする。

789 舟とめて遠^{をちかた}方人のやすらふは霧のあなたや紅葉^{もみぢ}しぬらん

〔通釈〕

舟を泊めて遙か遠くの人が留まっているのは、もしや霧のあちらは紅葉しているのだろうか。

〔本歌〕

霧立ちて雁ぞ鳴くなる片岡の朝の原は紅葉しぬらむ（古今集・秋下・二五二・読人不知）

〔参考〕

春の日の長柄の浜に舟とめていづれか橋と問へど答へぬ（新古今集・雑中・一五九五・恵慶。恵慶集・一八九、二句「長柄の浦に」）

夏の日の野中の杜の青葉陰遠方人の袖ぞやすらふ（壬二集・大僧正四季百首・杜・一二〇七）

明けぬとて朝立つ人の声すなり霧のあなたやとまりなるらん（紫禁草・同〔建保五年六月〕廿五日、当座・

行路霧・一〇〇一）

勝間田の池のあなたの紅葉故昔の人や舟とめけん（源三位頼政集・紅葉隔池・二七三）

〔語釈〕

○やすらふ―ぐずぐずと滞留するという意味。

790 見る^みままに袂^{まか}に紛^{まか}ふ木末^こかな秋の日数^{かす}や涙^{なみだ}なるらむ

〔通釈〕

見ているうちに、(落とす紅涙に染まる) 袂に見紛う(染まりゆく紅葉の) 梢であることだな。秋の過ぎ行く日数は、流す涙の数なのであろうか。

〔参考〕 変はりにし袂の色もいかならん時雨れはてぬる四方の梢に(拾遺愚草・老耄籠居の後、秋のころ、母の思ひなる人に・二八七九)

竜田山まだ色浅き梢にもなほ頼まれず秋の日数は(正治後度百首・秋・紅葉・四三七・隆実)

落ちつもる涙の数はさ夜衣さえても袖に見えけるものを(若宮撰歌合建仁二年九月・冬恋・九・宮内卿。水無瀬桜宮十五番歌合建仁二年九月・九)

〔補説〕 詞足らずの感がある一首である。それは、「袂に紛ふ木末かな」と「秋の日数や涙なるらむ」の分かりにくさに起因していよう。紅涙に染まる「袂」と紅葉の「木末」、「秋の日数」と積もる「涙」の数、それぞれに類同を見る趣向と解しておく。

冬

791 山の端に心はかかるうき雲のなほや都みやこの空そらに時雨しぐれん

〔通釈〕 冬

山の端に相對して心はこのように憂く辛くあつて、その山の端にかかる浮雲がさらに都の空に時雨を降らせるように、都の空の下で私も涙の時雨を降らせているのだろうか。

〔参考〕 憂きこともまだしら雲の山の端にかかるやつらき心なるらん(後拾遺集・雑二・九六九・藤原元真)

〔語釈〕 ○山の端に心はかかるうき雲の―「かかる」と「うき」は各々掛詞で、「山の端に心は斯かる憂き」と「山の端に」「掛かる浮雲」の二重の文脈となっている。○時雨れん―涙を断続して流すことを暗喩する。

792 影映す氷の上の夜半の霜月にも老いの姿ありける

〔通釈〕

月が光を映す氷の上に置く夜中の霜よ。月にも、霜が混じる老いの姿があったのだな。

〔参考〕 冬深き入江の蘆を見渡せば氷の上も霜枯れにけり（壬二集・初心百首・冬・六一）

冬来れば霜をいただくうばめの木老いの姿やいとど見ゆらん（夫木抄・卷二十九・木・うばめの木・貞応三年百首、木甘首・一四〇七八・為家）

氷りゐてみな白妙のます鏡老いの姿の池とこそ見れ（宝治百首・冬・池氷・二二二八・成茂）

〔補説〕 「霜」や「雪」等で老いの白髪を比喩することは、早くから漢詩に見える。特に「霜」について見ると、『和

漢朗詠集』からでも、「霜逢老鬢三分白（さうほうのらうびんはさんぶんしろし）」（秋・菊・二六六・白居易）、
 「恐悪衰翁首似霜（おそらくはすいをうのかうべのしもににたるをにくまむことを）」（秋・女郎花・二七九・順）、
 「送老高僧首剃霜（おいをおくるかうそうはかうべしもをそる）」（僧・六〇九・順）、
 「僧老眉垂八字霜（そうおいてはまゆはちじのしもをたる）」（僧・六〇九・為憲）といった例がある。該歌は、そういった通念の上に詠まれた和歌を基盤にしながらも、人間ではなく「霜」が置いた景物である「氷の上」の「影」（月光）を擬人化して、それを「老いの姿」に見立てている。直接には、参考の為家詠に触発されたか。その為家詠は、ぶな科の常緑低木

「姥芽の木」に「乳母女」あるいは「姥女」を掛けて、その木に「霜」が置いたので、白髪の老女に見立てて「老いの姿やいとど見ゆらん」と言つたものであろう。

793 あはれにも賀茂の河原に鳴く千鳥ちどりけふ今日も暮れぬと誰たれか聞くらん

〔通釈〕

しみじみと哀れにも、賀茂の河原に鳴く千鳥よ。今日もまた暮れてしまふ、といたい誰が聞いているのだろうか。

〔本歌〕

明けぬなり賀茂の川瀬に千鳥鳴く今日もはかなく暮れむとすらん（後拾遺集・雑三・中関白の忌に法興院に籠りて、あか月がたに千鳥の鳴き侍りければ・一〇一四・円昭法師。五代集歌枕・一一六七。古来風体抄・四八三。発心集・二二二他）

山寺の入相の鐘の声ごとに今日も暮れぬと聞くぞ悲しき（拾遺集・哀傷・一三二九・読人不知。和漢朗詠集・山寺・五八五）

〔参考〕

あはれにも老いの寢覚めの友千鳥我がよ吹けぬる月に鳴くなり（新後撰集・雑上・中務卿宗尊親王家の歌合、千鳥・一三三三・公朝）

〔語釈〕

○賀茂の河原―山城国の歌枕。賀茂川の河原。賀茂川は、山城・丹波の境の棧敷が岳南麓に発し、上賀茂社の西を降り、下鴨社の南で高野川と合流、さらに平安京の東側を南下し桂川に合流する。賀茂社との縁が深く、その祭の禊の場でもあった。

〔補説〕 『後拾遺集』歌人円昭の歌を本歌に見ることについては、『瓊玉和歌集注釈稿（三）』（本紀要四七、平一二・三）126、128補説参照。なお、この円昭詠は、「今日暮れて明日香の川の河千鳥日に幾瀬をか鳴き渡るらん」（躬恒集・雑の歌・五八。玉葉集・冬・九一四・躬恒）に負うか。

参考歌の作者僧正公朝は、宗尊親王將軍幕下の歌壇の主要歌人であり、年次未詳ながら宗尊主催の歌合の作であるので、宗尊は当然に見知っていたであろう。

794 今朝見れば遠山しん白し都まで風の送きらぬ夜半よの初雪はつ

〔本文〕 歌頭に「玉」（玉葉集）の集付あり。

〔通釈〕

今朝見ると、遠山は白い。そこからこの都までは風が送ってはこない（だからここに雪はないけれど）、（あの山に）夜中に降った初雪よ。

〔本歌〕 都まで音にふり来る白山はゆきつきがたき所なりけり（後撰集・羈旅・一三五三・読人不知）

〔参考〕 朝見れば小野山白しむべぞこの過ぎぬる夜半の床はさえける（頼政集・雪・二九八）

今朝までも雲の名残に散り来ずは霜とや見まし夜半の初雪（宝治百首・冬・浅雪・二二一三三・資季）

〔類歌〕 里近き尾上の松は緑にて遠山白し雪の朝明け（続門葉集・冬・朝雪といふ事をよめる・四三三三・定耀）

〔影響〕 この里は霰乱れてあしびきの遠山白く降れる初雪（隣女集・卷四自文永九年至建治三年・冬・山雪・二二三二六）

〔他出〕 玉葉集・冬・冬歌の中に・九五〇。夫木抄・冬三・冬御歌中に・七一二。

〔補説〕 下句の発想はあるいは、「言の葉は蔦の紅葉にかき付けつ都に送れ宇津の山風」(洞院撰政治家百首・雜・旅・家隆)に負うか。また、「袖の上は風の送らぬ匂ひにて花はながめに近き梅が枝」(他阿上人集・同じき年(文保元年か二年)、又為相卿合点歌、春)の「風の送らぬ」は、該歌からの影響の可能性があるか。

795 大井川洲崎すさきの蘆あしは埋うもれて浪なみに浮うきたる雪の一むら

〔本文〕 歌頭に「同(玉)」(玉葉集)の集付あり。

〔通釈〕

大堰川の洲崎の蘆は降る雪に埋もれて、それは、川の波から浮き上がって見える、蘆ならぬ雪の一群だ。

〔類歌〕 大井川洲崎の蘆の冬枯れに朝明の霜のさえぬ日はなし(夫木抄・雑十・蘆・亀山殿十首歌、朝寒蘆・

一三四一三・資平)

難波江に潮満ち入れば舟に似て浪に浮きたる蘆の本つ葉(他阿上人集・同(嘉元)三年三月のころより読み

給ひける・冬・五二)

満つ潮に入江の蘆は沖になりて浪に浮きたる雪の一むら(続門葉集・冬・江上雪望といへる心をよみ侍りける・四四六・報恩院永寿磨)

〔語釈〕

○大井川―「大堰川」とも。山城国の歌枕。鞍馬山の北に源流し、丹波国に入り保津川となり、嵯峨・松尾辺(京都市右京区)で大井川と呼ばれ、桂一帯を南流して桂川となり、賀茂川と合流して淀川に入る。○洲崎の蘆

―「満つ潮に洲崎の蘆も水隠れて月寄せ返る三島江の浪」(土御門院御集・詠五十首和歌貞応二年二月十日・秋・蘆洲

月色随潮満・二二七)に拠るか。「洲崎」は、川の洲が岬のように形成された場所。○浪に浮きたる―「波に浮く」は常套だが、「…に浮きたる」の形につけば、「風に浮きたる」(金槐集定家所伝本・四〇四)、「水に浮きたる」(万代集・三三三二・伊勢、新撰六帖・一八九〇・真観)、「空に浮きたる」(百首歌合建長八年・九四・鷹司院帥、続古今集・四九二・淑景舎女御原子)等、宗尊が見習ってもおかしくない、歌人や歌集の歌の類似表現に刺激された可能性があろうか。○一むら―一群。ひとかたまり。「蘆」の縁語で蘆が群がり生えている一団の意が響く。

〔他出〕 玉葉集・冬・題不知・九七一。

〔補説〕 類歌に挙げた後者は、下句が一致し、歌境も類想である。偶合か宗尊からの影響か、後者とすればどのようなして宗尊詠に接し得たか、問題が残る。つまり、醍醐寺報恩院の児である吠若磨・嘉宝磨の撰で、嘉元三年(一二三〇五)成立の『続門葉集』所収歌の作者の報恩院永寿磨なる者が、宗尊の詠作に倣い得た結果だとすれば、宗尊晩年の歌を収める『竹風抄』あるいは「文永六年八月百首歌」の受容圏を示すものとして注意されてよい。

796 奥山おくの木の葉はの雪ゆきの消えやらで憂うれけくもつらき世よにもあるあるかか

〔本文〕 ○うけくも―底本「うけけくも」を、本歌の詞との関係、一首の意味内容から、「憂けくも」に改める。

〔通釈〕

(あの古歌が言う)奥山の木の葉の雪が消えきるように、世の中から消え去ることもなくて、憂く辛いことも、恨めしく堪え難い、この世間であることだな。

〔本歌〕 世の中の憂けくに飽きぬ奥山の木の葉に降れる雪や消なまし(古今集・雑下・九五四・読人不知)

〔参考〕 奥山の木の葉に降れる白雪の消えぬとだにも知る人もがな（壬二集・恋部・恋歌あまたよみ侍りしとき・二七一七）

山陰に降る白雪の消えやらで残る憂き身の末ぞ悲しき（土御門院御集・冬・二九五）

〔語釈〕 ○憂けくも―「憂し」を名詞とするク語法。

〔補説〕 宗尊が見習ったと思しい家隆の、該歌と同じく『古今集』歌を本歌にした詠作を参考歌に挙げた。

797 惜しめども返らぬ年の類とて一方かたに行くゆ四方よもの川水

〔通釈〕

惜しんでも戻らない年と同類といって、ただ一方に流れて行くあちこちの川の水よ。

〔参考〕 惜しめどもはかなく暮れて行く年の偲ぶ昔に返らましかば（千載集・冬・四七三・光行）

四方の川は淀の流れに落ち合ひて一つ渡りになりけるかな（拾玉集・宇治山百首・雑・河・一〇七九）

桜咲く四方の白雲一方に葦毛の駒も跡も定めず（江帥集・鳥羽院にて、山の桜を尋ぬ題を・二六。和歌一字

抄・処処・処処尋花・五四八、四句「葦毛の駒の」）

〔語釈〕 ○惜しめども―底本は「惜とも」なので、「惜しむとも」にも解される。宗尊の『柳葉集』（時雨亭文庫本）

には、「風吹けばまづ歎かれぬ惜しめどもとまらぬ花のあな憂世の中」（文永元年六月十七日庚申百番自歌合）・

花・四六五）と「惜しむとも暮れざらめやとなぐさめてつれなく春に別れぬるかな」（文永二年潤四月三百六十首

歌・春・六七八）という、両方の用例がある。参考に挙げた『千載集』歌の他にも、例えば「春」とに今日の別れ

は惜しめども年の中には返らざりけり」(重之集・暮の春・六八)といった例があるので、一応「惜しめども」に解しておく。○類として493にも用いている。そこにも参考歌としてあげた土御門院の「冬の夜の長き思ひの類とて下にも消たぬ埋み火の影」(土御門院御集・詠百首和歌承久三年・冬・炬火・七九)が、第三句に置く早い例となる。他に、『新撰六帖』の為家の「恋ひわぶる涙を雨の類とて我が思ふことは世にふりにけり」(第五・人にしらる・一三八七)や「露けさは秋の草葉を類とて干す間も知らぬ我が袂かな」(第六・あきの草・一九二七)が、宗尊が見習った可能性がある先行歌であろう。

雑

798 帰るさの袖にぞ似たる旅衣たび旅あさ露はらふしののめの道

〔本文〕 ○たび衣―底本「たひ旅」を、誤写と見て、歌の内容から「旅衣」に改める。

〔通釈〕 雑

(後朝の) 帰り道の(涙の) 袖に似ているよ。旅衣に置いた朝露を払って行く明け方の道(の袖)は。

〔参考〕 帰るさの袖に涙の余るより月をぞしをるしののめの道(光経集・暁恋・四八三)

帰るさのあかぬ涙を置き添へて我としをるるしののめの道(寂身集・百首中 無題 承久元年・恋・九一)

逢はでこし道の露にもまさりけり衣衣なるしののめの袖(俊成五杜百首・日吉杜・恋・後朝恋・四七五)

長秋草・一四)

有明の空にぞ似たる山の端に入りかかりぬる月の面影(続古今集・秋上・欲入月・四三二・後嵯峨院。歌合

文永二年八月十五夜・一二九

〔類歌〕

旅衣袖も涙にそほちつついくしののめの露払ふらん（中書王御詠・雑・旅歌とて・二三三。本抄・卷一・文永三年十月五百首歌・曙・四一、結句「払ひけん」）

〔語釈〕

○露―「帰るさ」「袖」の縁で、涙が暗喩される。○しののめの道―空が白む早朝に行く道。ここは、後朝の「帰るさ」（帰り道）と対照させた、朝起きての旅の道行き。この句は、『源氏物語』（夕顔）の「いにしへもかくやは人のまどひけん我がまだ知らぬしののめの道」（三三・光源氏）に遡る。定家はこれを、「折しもあれ雲のいづくに入る月の空さへ惜しきしののめの途」（拾遺愚草・韻歌 百廿八首和歌建久七年九月十八日内大臣家他人不詠）と用い、『正治初度百首』でも「冬はまだ浅葉の野らに置く霜の雪より深きしののめの道」（冬・一三六二）と詠みつつ、後に源氏歌を『物語二百番歌合』にも採録する。恐らくはその影響下に、家隆（洞院撰政治家百首東北大学本拾遺・二四八、二五二）・雅経（和歌所影供歌合建仁元年八月・四）・後鳥羽院（後鳥羽院御集・九五七）・俊成卿女（洞院撰政治家百首・一二七三）達新古今歌人の作があり、『内裏百番歌合建保四年』には兵衛内侍（一九五）、『洞院撰政治家百首』には上記の他に実氏（一一九八）の作もある。参考に挙げた真観叔父光経や関東縁故の寂身などの歌も併せて、宗尊の歌は、これら鎌倉前中期の詠作の傾向に沿っていることになる。

799

目に思おもひ心に遊あそぶ海山のけしきぞ旅の情けなりける

〔通釈〕

目に浮かべて思い、心の中で楽しみ遊ぶ、その海や山の景色こそが、本当の旅の情趣なのであったな。

〔参考〕

いかにかく心に昔日に涙うかまぬときもなき身なるらん（新撰六帖・第四・ふるきを思ふ・一二八〇・真観）

海山の霞むけしきにしるきかな風しづかなるみ代の春とは（東撰六帖・春・霞・一四・教定。同抜粹本・

一一）

〔語釈〕

○旅の情け―先行例を見ない措辞。「旅情」の訓読とも見られるが、「旅の心」の変形とも言える。「旅の心」は、古く「故郷を思ひやりつつ行く雁の旅の心は空にぞあるらし」（躬恒集・三七。万代集・九〇九・躬恒・秋上、二・三句「思ひおきつつ来る雁の」。続千載集・秋上・四二六、二・三句同上）や「春の野に旅の心は慰めつ待つらん妹が宿をしぞ思ふ」（高遠集・〔道長女入内屏風和歌〕・春、旅行く人・三九）と詠まれている。新古今時代には良経の「とこよ出でし旅の心や初雁の翼にかかる峰の白雲」（秋篠月清集・院初度百首・秋・七四二。教家本秋篠月清集・七四三では二句「旅の衣や」で、正治初度百首・四四五も同じ）や良平の「雁がねにいざ言問はん越路より都にむかふ旅の心を」（千五百番歌合・秋三・一四〇四）の作例が目につく。

〔補説〕

旅情を正面から観念として詠じていて珍しい。その観念性や初二句の双貫句法の点で、京極派に通じる趣があるが、京極派和歌にも見当たらない詠みぶりである。親王の身分境遇からは本来行つて見ることのなかつたはずの、京都鎌倉往還途次や鎌倉の山海の景色に、宗尊ははからずも親しんだ訳である。今、將軍職を追われて京都に閑居して、それを思い起こしているのであろうか。

〔通釈〕

しみじみと悲しいことだな。憂く辛いことを忘れない習性ということで、面影として目に浮かぶ、あの東路の山よ。

〔本歌〕

散ることの憂きも忘れてあはれてふことを桜に宿しつるかな（後撰集・春下・敦実の親王の花見侍ける所にて・一三三・仲宣）

〔参考〕

あはれなり誰が袖の香の慣らひとて花橋に夢残すらむ（大納言為家集・詠百首和歌当座〔藤川題百首〕・夏・盧橋驚夢・二〇二六）

秋の月佐夜の中山さやかに故郷人ぞ面影に立つ（壬二集・大僧正四季百首・旅・一二二八）

〔語釈〕

○あはれなり―本歌の「あはれ」は、ああすばらしい、という意味だが、ここはそれを反転して、ああ何とももの悲しいことだな、といった意味。

〔補説〕

参考に挙げた家隆の「秋の月」詠は、「故郷」（都）と「佐夜の中山」（東路）の対比が該歌と対照的である。宗尊は、「文永八年七月、千五百番歌合あるべしとて、内裏よりおほせられし百首歌」の「雑」でも「春秋の霞も

霧も分け越えて面影に立つ佐夜の中山」（竹風抄・卷五・九一九）と詠じている。家隆の歌を認識していた可能性は高いであろう。

801 さのみまた松又にな吹きそ草枕夢の道守みらもるとこの山風やまかぜ

〔通釈〕

『竹風和歌抄』注釈稿（五）

そんなにもまた、松にばかり吹くな（「待つ」人を思い起こさせ、悲しいではないか）。旅寝の草枕の床に結ぶ夢路を守るように吹く、鳥籠の山風よ。

〔参考〕 こりずまにさのみな吹きそ今来んと言ひてむなしき庭の松風（宝治百首・恋・寄風恋・二五四〇・為氏）

さらぬだに秋の旅寝は悲しきに松に吹くなりとの山風（新古今集・羈旅・九六七・秀能）

〔語釈〕 ○さのみまた―『影供歌合建長三年九月』の「さのみまた月にも袖のしほるるは人を恨みのあまりなりけり」

（寄月恨恋・四〇七・為繼）や『百首歌合建長八年』の「さのみまた雁の涙と言ひなさば菽には秋の露やならむ」（秋・二五六・忠定）等が早く、この頃以降に用例が多くなる。本抄には他に、909と978に用いられている。○草枕―ここは枕詞ではなく、旅寝の枕を言う。○夢の道守る―新奇な措辞。「夢の道」は、ここでは「夢路」という程の意味か。歌語の先行例としては僅かに、『忠岑集』（西本願寺本三十六人集）の「夢の道とこ惑ひなるよを經つつ歎くながめによよをふるごと」（二〇二）が見える程度である。これは、時雨亭文庫承空本（六二）では三句「よをそらに」五句「よよをふるごと」、時雨亭文庫枳形本（五六）では二・三句「まどひけるよをこころから」五句「よよをふるかな」の形である。また、「道守る」の先行例は見えないが、「道守」は古く「：たをや女が 吾が身にしあれば 道守の 問はむ答へを 言ひやらむ すべを知らずと：」（万葉集・卷四・相聞・五四三・金村）と詠まれ、「道路や駅を管理し、通行人を見張る者」（角川古語大辞典）という。「道守る」の形は、近世に契沖の「村雲の塵もすゑじと月の行く道守るものは風なりけり」（漫吟集・秋中・月・一三七〇）が見える。○松―「床」の縁で「待つ」が掛かる。○とこの山風―近江国の歌枕「鳥籠の山」（彦根市の正法寺山という）に、「草枕」「夢」の縁で「床」が掛かる。

〔通釈〕

舟を停泊する入江に照る月の光は澄んで、笛の音が寂しく聞こえる夜中の浦風よ。

〔参考〕

舟泊むる秋の入江の月影に光たまらず散るかつらかな（新撰六帖・第六・かつら・二四四七・為家。現存六帖・かつら・六九八）

暁はうき寝もさびし舟泊むる入江の荻に渡る秋風（大納言為家集・詠百首和歌当座〔藤川題百首〕・秋・江辺曉萩・二〇三四）

笛の音や琴のたえまもさびしきに名残を残す峰の松風（正治後度百首・あそび・八八六・宮内卿）
笛の音のほの吹きすさぶ秋風に遠ぢさびしき里の一むら（土御門院御集・詠五十首和歌貞応二年二月十日・雑・蕭索村風吹笛処・二四〇）

〔類歌〕

舟泊むる入江の楓霜さえて夜深き鐘を月に聞くかな（閑放集・古集に・夜半鐘声到客船・七七）
夫木抄・雑五・江・百首御歌中・一〇六三三。

〔補説〕

「舟泊むる」「入江」の景趣（視覚）と「笛の音」の情趣（聴覚）を、「月」と「風」で結ぶ。前者は、参考の為家の詠作に学んだかと思われ、該歌との先後が不明なので類歌に挙げた真観の作との関係も注意される。後者を「風」と詠み併せて「さびし」とするのは、参考の宮内卿や土御門院の歌が宗尊に身近な先行例となろう。ただし、「笛の音」と「月」や「風」との詠み併せは早く、「月影に笛の音いたく澄みにけりまだ寝ぬ秋の夜や更けぬらん」（恵慶集・また、ある所の御屏風の歌・月夜に、笛吹きてゆく男侍り・二一。麗花集・秋上・五二、三句「す

ぎぬなり」下句「まだきにあきのよやふけぬ□む」や「松風に夜やふけぬらん笛の音の秋の空にも聞こゆるかな」(大江嘉言集・一四五)等の作があり、さらには、「月」「風」を併用した「秋風に吹きあはすれば笛の音も月の光もさやけかりけり」(経信卿集・一六九・女房。大納言経信集・二二八)といった例もある。

803 春の蘿秋の桂の山路にはいかにさびしき月が澄むらん

〔通釈〕

春には蘿が、秋には桂が覆う山路には、どれ程寂しい月が光を澄ましているのだろうか。

〔参考〕 秋桂遣_レ風 春蘿罷_レ月 (文選・卷第四十三・北山移文・孔稚珪〈德璋〉。「遣」は「遣」にも作る)

繩床欲穿 (じようじやううけなむとす) 月老春蘿之洞 (つきしゆんらのほらにいたり) 納衣易破 (のう

えやぶれやすし) 風疎秋桂之峰 (かぜしうけいのみねにおろそかなり) (新撰朗詠集・雑・山寺・五四二・

齊名)

袖さえて寝なくに明けぬ冬の夜をいかにさびしく月も澄むらん (河合社歌合寛元元年十一月・冬月・正親町院

左京大夫)

聞くままに風もいまは音澄みて秋の桂の嶺ぞさびしき (白河殿七百首・雑・嶺桂・六六四・行家)

〔類歌〕 これよりもなほ山ふかくすむ人のいかにさびしく月をみるらん (長景集・深山見月・六四)

〔語釈〕 ○春の蘿秋の桂―『文選』の句に拠ると見る。ただし、『文選』の「北山移文」は、隠逸の尚志を折り、官

に就くために北山(鐘山)をよぎろうとする周顒を批難する内容である。「秋桂遣_レ風 春蘿罷_レ月」(秋桂は風を

遣り、春蘿は月を罷ひ」は、遊子（周）が鐘山を欺いて去ることを歎き、誰一人赴いて慰める者の無いことを悲しんでいる、として、「故其林慙無_レ盡、澗愧不_レ歇」（故に其の林は慙ぢて盡くる無く、澗は愧ぢて歇さず）に続く部分であるので、「秋桂」や「春蘿」までが風情を醸すはずの「風」や「月」を追い払っていることを叙したものである。漢詩文の思想性を捨象して詞を受容する和歌の方法は、珍しくない。「蘿」は、ヒカゲカヅラ（日蔭蔓）か。「ひかげのかずら科の常緑多年草。陰地に自生し、紐状の個体が集り絨緞状の群落を作る。莖は分枝しながら地上をはい、長さは二メートルにも達する。葉は針状で、主軸ではまばらに分枝では密生する。分枝から垂直に柄を出し、先端に円柱状の穂を付け、胞子を生ずる」（角川古語大辞典）という。「桂」は、「かつら科の落葉高木。山地に自生し、早春、紅色の花を開く。樹皮は灰色。葉は心臟形で対生。高さは三〇メートルに及ぶ。材は建築や家具用に用いる」（同上）という。○月が澄むらん―「が」を主格にしたこの句形は先行例がない。底本「月かすむらん」で、『新編国歌大観』のように「月霞むらん」にも解し得る。しかし、「月霞むらん」では「秋の桂」と整合せず、参考に掲げた歌の「いかにさびしく月も澄むらん」や「音澄みて秋の桂の嶺ぞさびしき」の例にも照らして、「月が澄むらん」に解しておく。

804 定まれる主無しと聞く山をだになほ憂き身にはえやは占めける

〔通釈〕

決まった持ち主など無いと聞いている山をさえ、やはりこの憂苦の身には、どうしてそこを住み処として持てよ
うか、いやできやしなかつたな。

〔本文〕

勝地本来無定主（ししょうちはもとよりさだまれるしゆなし） 大都山属愛山人（おほよそやまはやまをあいするひとにしよくす）（和漢朗詠集・山・四九三・白居易）

〔語釈〕

○無しと聞く―「みるめ刈る方ぞあふみに無しと聞く玉もをさへや海人はかづかぬ」（後撰集・恋三・七七二・読人不知）が原拠。○なほ憂き身には―先行例を見ない句。南朝の尊良親王に「面影のなほ憂き身には残るかな思ひ絶えぬる契りなりとも」（一宮百首・恋・絶恋・八一）の作例がある。

805

思ひ立つ我が山里の夕暮を松の嵐に契り置くべく

〔通釈〕

（出家を）決意する、我が住まいの山里の夕暮を、松の嵐に、（この先も吹き訪れてくれることを）約束し置くことが出来るように。

〔参考〕

思ひ立つ鳥は古巢も頼むらん馴れぬる花の跡の夕暮（新古今集・春下・一五四・寂蓮）
有明の月よりほかに誰をかは山路の友と契り置くべき（新古今集・雑上・一五四三・寂超）

世の憂きにくらぶる時ぞ山里の松の嵐も住みよかりける（土御門院御集・詠百首和歌承久三・雑・山家・一〇四）

〔語釈〕

○思ひ立つ―初句切れにも解されるが、「夕暮を」にかかると見ておく。「思ひ立つ」内容は、出家が想定される。○契り置くべく―「べく」で結ぶ形は珍しい。また、「契り置く」相手が「松の嵐」だとして、何を「契り置く」のかは不分明である。一応、「松の嵐」が、せめても「山里の夕暮」を吹き訪れてくれることを約束し置く、

と解しておく。

〔補説〕「山里」の「松の嵐」を詠じるのは、俊成の「山里は堪へてもいかが過ぐすべき松の嵐に鹿も鳴くなり」（五社百首・山家・日吉社・一一〇）が早い例となる。その後、「心から何山里に旅寝して松の嵐に袖しぼるらん」（御室五十首・旅・三四七・季経）や「あはれにも住みなれにけり山里を松の嵐に夢覚めぬまで」（千五百番歌合・雑二・二八五八・公継）等が続き、参考の土御門院詠も生まれる。宗尊により身近な『宝治百首』では雑に「山家嵐」が設題され、「いかにせんすまば住むべき山里の松の嵐をよそになしつる」（三六八〇・実氏）や「山里は松の嵐のほかにもまた言問ふ人の音づれもなし」（三六八六・公相）と詠まれている。該歌もこのような傾向の詠みぶりに沿ったものであろう。宗尊は、將軍在職中には「山里は松の嵐の音こそあれ都には似ずしづかなりけり」や「住みなれぬ心なりせば山里の松の嵐やさびしからまし」（瓊玉集・雑上・山家松・四五〇～一）あるいは「思ひやれまだ住みなれぬ山里の松の嵐に濡るる袂は」（柳葉集・卷四・〔文永元年六月十七日庚申百番自歌合〕・山家・五四九）や「山里をとふ人あらば滝の音松の嵐にわぶとこたへよ」（同・卷五・文永二年潤四月三百六十首歌・雑・八〇六）と詠じていて、鎌倉を「山里」と認識し、そこには「松の嵐」がつきものであると捉えていたことが窺われる。該歌の場合は、京都の閑居を「山里」と言いなしたのであろう。なお、宗尊はこれらよりも早く『宗尊親王三百首』で「聞きなれぬ松の嵐もかねてより思ひしままのみ山べの里」（雑・二九〇）と詠んでいるが、これに対して為家は、「み山べの里、吹く嵐かな、不_レ可_レ詠之由、亡父慥申候き、随分加_二制止_一候」と評していたのであった。

806 立ち騒_はぐ入江の鳴_をの跡の浪すみ侘_わびぬるは我が身なりけり

〔通釈〕

入江で鴨の騒ぎ立つ跡の波、それが澄みにくいように、（この世に）住み侘びてしまっているのは、この我が身なのであつた。

〔本歌〕

蘆鴨の騒ぐ入江の水の江の世にすみ難き我が身なりけり（新古今集・雑下・一七〇七・人麿。人丸集・つのに・二四〇。定家八代抄・雑下・一六七〇。定家十体・幽玄様・二二二・人丸、三句「白波の」）

〔語釈〕

〇すみ侘びぬる―上句を序詞として、「澄み侘びぬる」から掛詞で「住み侘びぬる」を起こす。

〔補説〕

宗尊はこれ以前、「文永六年四月廿八日、柿本影前にて講じ侍りし百首歌」で同じ人麿歌を本歌に「大かたの世ぞすみがたき蘆鴨の騒がぬ江にも浪は立つなり」（本抄・卷四・650）と詠んでいる。

807

世よの中は風立かぜたつ沖おきの海士小舟あや危あやふしと見ぬ浪なみの間まもなし

〔通釈〕

世の中は、風が吹き立つ沖にある海人の小舟、それを危ういと見ない波間がないように、危ういと思わない少しの間もないよ。

〔参考〕

沖つ舟おろす碇の綱弱み危ふからぬもなほぞ危ふき（新撰六帖・第三・いかり・一一二四・信実）
 沖つ島波の間もなくあらうとや干せど翼のかわかざるらむ（新撰六帖・第三・う・九四八・知家）
 わが恋は荒磯の海の風をいたみしきりに寄する波の間もなし（新古今集・恋一・一〇六四・伊勢）

〔類歌〕

波風の危ふき浦の海人を舟世渡る人のたくひとぞ見る（伏見院御集・冬・舟・二三九九）

〔語釈〕 ○風立つく浪の間もなし―二句以下全体が「危ふ」い「世の中」を言う比喩。「風立つ沖の海士小舟」を「危ふしと見ぬ浪の間もなし」を起こす序、あるいは「浪の」までを「間もなし」を起こす序と見て、「世の中は」「危ふしと見ぬ」「間もなし」と連なる文脈として捉えることもできる。

〔補説〕 「波」に浮かぶ「海人小舟」の「危ふ」さを、「世」(「世の中」や「世渡る人」)の比喩として見る点で同工異曲である類歌に挙げた伏見院の歌は、あるいは該歌に触発されたのかもしれない。なおまた、その比喩を取り去って「海人小舟」の「危ふ」さを直叙する、後伏見院の羈旅詠「海原や風にたゆたふ海人小舟行へ危ふき浪の上かな」(新千載集・羈旅・海路の歌としてよませ給うける・七六四)は、それでも伏見院の歌の影響下にあるうか。

808 昨日の木今日けふの雁かりがねいかにまた思おもひ果はつべき憂うき世よなるらん

〔本文〕 ○木―底本「木」とあり。

〔通釈〕

不材故に天寿を全うする昨日の木、不材故に天寿を全うできない今日の雁、(いづれにせよ不材の我が身は) いったいどのようにしてまた、あきらめることができるこの憂き世であるのだろうか。

〔本説〕 莊子行_二於山中_一、見_二大木枝葉盛茂_一。伐_レ木者、止_二其旁_一而不_レ取也。問_二其故_一、曰、「無_レ所_レ可_レ用」。莊子曰、「此木以_二不材_一得_レ終_二其天年_一」。莊子出_二於山_一、舍_二於故人家_一。故人喜、命_二豎子_一、殺_レ雁而烹_レ之。豎子請曰、「其一能鳴、其一不能鳴、請奚殺」。主人曰、「殺_二不能鳴者_一」。明日、弟子問_二於莊子_一曰、「昨日山中_一之木、以_二不材_一得_レ終_二其天年_一。今主人之雁、以_二不材_一死。先生將_二何処_一」。莊子笑曰、「周將_レ処_下夫材与_二不材_一」

之間^上。材与^二不材^一之間、似^レ之而非也。故未^レ免^二乎累^一。若夫乘^二道德^一而浮游、則不^レ然。無^レ譽無^レ訾。一龍一蛇、与^レ時俱化、而無^二青專為^一、一上一下、以^レ和為^レ量。浮^二乎万物之祖^一、物^レ物而不^レ物^二於物^一、則胡可^二得而累^一邪。此神農・黃帝之法則也。若夫万物之情、人倫之伝、則不^レ然。合則離、成則毀。廉則挫、尊則議、有^レ為則虧、賢則謀、不肖則欺。胡可^二得而必^一乎哉。悲夫。弟子志^レ之。其唯道德之郷乎。(莊子・山木第二十。新釈漢文大系本に拠り、表記は改める)

(右の大意)

莊子は山中に入り、生い茂った大木を見つけた。樵達は、その木を切り倒そうとはしない。樵にその理由を尋ねると、「あの木は役に立たない」という。莊子は「この木は無用の故に、天寿を全うすることができなのだ。」と言う。その後、莊子達は、山を下りて旧友の家に泊まった。旧友は喜び、童僕に命じて雁を殺して料理させようとした。童僕は「よく鳴く雁、鳴かない雁の、どちらを殺しましょうか。」と言い、主人は「鳴かないほうを殺せ」と言った。翌日、弟子が莊子に問うて「無用の木は天寿を全うしたのに、この主人の雁は鳴かないから殺された。先生はどちらの処り所に立たれるのか。」と聞いた。莊子は笑って言った。「私は、役に立つものと(材)、役に立たないもの(不材)の中間にしよう。しかし、材と不材の中間は、道に似ながら真実の道ではないので、世の中の煩わしさから逃れられない。材と不材を超えて、俗世から抜け出し無為自然でなければならぬ。龍のように蛇のように、時の流れに乗って、ひとつ事に執着しない。上に下に動きながら、一つ所に囚われず、融和を以って自らの度量とする。万物の根源に逍遙して、物を物として使いながら、物に支配されないようになれば、世の中の煩わしさから逃れられる。これが太古の神農・黃帝の法則である。しかし、世の万物のありさまや、人の常の様子は、それとは違う。相合えば離別し、成功すれば毀損し、清廉ならば挫折し、高位ならば批判され、事を為せば妨げら

れ、賢明であれば謀略にあい、暗愚であれば詐欺にあう。いずれにしても、どうしようもない。悲しむべきことだ。弟子たちよ、記しておく。ただ扱ふべきは、自然の道徳の郷のみだと。」

〔語釈〕 ○昨日の木―役に立たないこと、役に立たないが故に天寿を全うすることを言う。右に記した『莊子』(山木)の「昨日山中の木、以「不材」得「終」其天年。」が直接の典故。『和漢朗詠集』にもこれを、「昨日山中の木(きのふのさんちうのき) 才取於己(さいおのれにとり) 今日庭前之花(けふのていせんのはな) 詞慙於人(ことばひとにはづ)」(文詞付遺文・四七四・篤茂)と踏まえた句が収められている。和歌に「昨日の木」として用いるのは該歌以降に例が散見する。他には、「年月はよそにみてのみ過ぎしかど昨日の木こそ身のたぐひなれ」(龜山殿七百首・雑・寄木述懐・六六五・隆長)等。○今日の雁がね―鳴くことなく今日殺される雁、即ち役に立たずに天寿を全うできないことを言う。右に記した本説の『莊子』(山木)中の「故人喜、命「豎子」、殺「雁而烹」之。豎子請曰、「其一能鳴、其一不能鳴、請奚殺」。主人曰、「殺「不能鳴者」。」」が直接の典故。

809 哀れにも人に従ふ慣らひかな我が心をば無きものにして

〔通釈〕

哀れなことに、人に従う習性であることだな。自分の心は、無いものとして。

〔参考〕 忘るるかいざさは我も忘れなむ人に従ふ心とならば(拾遺集・恋五・九九三・読人不知)

〔語釈〕 ○人に従ふ―参考歌の他に、「普賢十願」の「恒順衆生」(我常隨順諸衆生、尽於未來一切劫、恒修普賢大
門、円満無上大菩提)を詠じた選子『発心和歌集』(二四)の「うれしきもつらきもことにわかれぬは人に従ふ心

なりけり」があり、これは『統後撰集』（釈教・恒順衆生・六二五）にも採られているので、宗尊は目にしたに違いないが、この歌は、「諸衆生」に「随順」することによって真の悟りを得ようとする慈悲心を言っていて、該歌とは趣を異にする。○我が心をば無きものにして―「落花不語空辞樹（らくくわものいはずしてむなしくきをじす）流水無心自入池（りうすいこころなうしておのづからいけにいる）」（和漢朗詠集・春・落花・一二六・白居易）等の「無心」が想起されるが、ここでは、否定的な虚無の心情といった趣があるうか。

810 あはれまた苦しかりける此の世かないかさまにして心休めん

〔通釈〕

ああ、やはり苦しかったこの世であることだな。どのようにして、心を休めようか。

〔本歌〕 常にかく恋ふれば苦ししばらくも心休めむ事計りせよ（万葉集・卷十二・正述心緒・二九〇八・作者未詳）

〔参考〕 忘れなむと思ふもものの悲しきをいかさまにしていかさまにせむ（源氏物語・藤袴・四〇五・左兵衛督）

忘るれどかく忘るれど忘れずいかさまにしていかさまにせん（藤原義孝集・一九）

〔補説〕 参考に挙げた『源氏』歌は、髭黒大将の北方の兄（紫上の兄弟）である左兵衛督が、玉鬘に懸想して贈った歌である。同じく参考に挙げた義孝の歌が踏まえられていよう。

811 とにかくにあり経る世こそ苦しけれ厭はぬ程の心迷ひは

〔通釈〕

あれこれのようにしても、生きて過ぐす世の中こそが苦しいのであった。この世を厭い出るまでにならない程の、心の迷い（がある身）というのは。

〔本歌〕

あり経るも苦しかりけり長らへぬ人の心を命ともがな（詞花集・恋下・程なく絶えにける男のもとへ言ひ遣はしける・二五五・相模）

〔参考〕

とにかくにあればありける世にしあればなしとてもなき世をも経るかも（金槐集定家所伝本・雑・わび人の世に立ち廻るを見てよめる・六一一）

世の中を厭はぬ程もあらはれてみ山を出づる秋の夜の月（顕氏集・中務会弘長元年八月廿六日・山月・一二〇）
思ひやる方も知られず苦しきは心まどひの常にやあるらむ（後撰集・雑四・一二八六・読人不知）

〔語釈〕

○厭はぬ程の心迷ひは―「世」を厭わない、即ち出家することのない程度の心の迷妄（煩惱）というのは、という趣意。「程」は、時の間の意にも解される。「心迷ひ」は、「心惑ひ」と同様だが、「心惑ひ」は万葉以来の措辞。「まどひ」と「まよひ」の本文の交替が想定されるのはつきりとは言えないが、「心迷ひ」は鎌倉時代以降に現れているようである。「ながむらん心迷ひもよしなしと桜をよそに過ぐる白雲」（雲葉集・春中・一〇八・後鳥羽院）や「寝覚めてなほぞ涙をこぼしつる暁闇の心迷ひに」（新撰六帖・第一・あかつきやみ・三四〇・真観）や「知らせばやそこはかとなきうき雲の空に乱るる心迷ひを」（続古今集・恋一・九八八・行家）等々が、宗尊に身近な先行例であったか。

〔補説〕

『後拾遺集』初出歌人相模の歌を本歌と見ることについては、『瓊玉和歌集』注釈稿（三二）（本紀要四七、平二二・三）126、128補説参照。

「世」を「厭はぬ程」の参考歌として挙げた顕氏詠は、宗尊將軍在職時の鎌倉で、弘長元年（一二六一）八月二十六日に大江重教が催した歌会の一首である。

812 心から背かれぬ世の苦しさを誰にかこちてなほ恨むらん

〔通釈〕

自身の心故に背いて出ることのできないこの世の苦しさを、いったい誰にかこつけて、なおさらに恨んでいるのだろうか。

〔参考〕

しかりとて背かれなくに事しあればまづ歎かれぬあな憂世の中（古今集・雑下・九三六・篁）

えこそなほ憂き世と思へど背かれぬおのが心のうしろめたさに（和泉式部集・観身岸額離根草、論命江頭不

繫舟・二九八。同・三八一）

さ牡鹿の立ち野の小萩露かけて消えなん後を誰にかこたん（土御門院御集・恋二十五首・寄萩・四二九）

〔語釈〕

○背かれぬ世―出家することのできないこの俗世。この句形は珍しい。用例としては、『続古今集』初出歌人で六波羅評定衆の大江頼重に、「なにとまた背かれぬ世の憂き度にまづ歎かるる心なるらん」（続拾遺集・雑中・

一二三〇）がある。該歌との先後は不明である。関東祇候の飛鳥井雅有には、「朝夕は我と我が身をいさめても背

かれぬ世の果てぞ悲しき」（隣女集・卷二自文永二年至同六年・雑・述懐・八八八。無名の記・一四）と「しかりとて

背かれぬ世の憂きにこそ一方ならぬ涙落ちけれ」（雅有集・思ふ事侍りし秋のころ、清水寺にこもりて、南無千手

千眼大慈大悲観世音菩薩之字を歌の首におきてよみ侍りし・六七）がある。前者は、該歌に先んじる可能性もある

が、後者は後出である。宗尊、頼重、雅有という鎌倉中期の関東縁故歌人間に詠み始められた句形のようにも見えるのである。

〔補説〕 宗尊は在鎌倉時に既に、「歎きてもおのが心と朽ちぬ世を誰におほせてなほ恨むらん」（瓊玉集・雑下・述懐廿首御歌に・四七二）という、該歌と同工異曲を詠じている。

813 背かんと言ひしばかりに年は経ぬ我が偽りも憂き世なりけり

〔通釈〕

この俗世から背いて出ようと、言っただけで、ただ年は過ぎてしまった。その私の嘘偽りもまた、憂く辛いこの世であったのだ。

〔本歌〕 今来む言ひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな（古今集・恋四・六九一・素性）

〔参考〕 さりとて背きも果てず人ごとにただ偽りの憂き世なりけり（続古今集・雑下・一八二二・実経）

憂き身をば忘れ果つとも契り置きし我が偽りや思ひ出づらん（続古今集・恋五・一三六八・鷹司院按察）

〔語釈〕 ○背かんと―出家して俗世を出ようと、という趣意。

814 世の中は憂きものとのみ見果てにき何の情けにとまる心ぞ

〔通釈〕

『竹風和歌抄』注釈稿（五）

この世の中は、憂く辛いものと見切ってしまったのだ。(それなのに) いったいどんな趣に、執着する私の心なのか。

〔参考〕 何事にとまる心のありければさらにしもまた世の厭はしき(新古今集・雑下・一八三一・西行)

かばかりと思ひ果てにし世の中に何ゆゑとまる心なるらむ(新勅撰集・雑二・一一四一・行尊)

〔語釈〕 ○何の情け―「情け」は、①対象に寄せる心の動き、②対象に見出だす趣、いずれにも解される。①の場合

は、(憂き世に対する) どのような情故に、の意になり、②の場合は、(憂き世の) どのような情趣に対して、の意となる。参考の西行歌を踏まえたを見て、②に解しておく。この措辞の先行例は、「歎きのみ我が身につけて行く春の何の情けにかくは惜しきぞ」(閑谷集・同じ「うち続き歎くこと」) 思ひしける頃、三月尽の心を・一〇五) や「今はすべて何の情けもあはれをも見もせじ聞きもせじとこそ思へ」(建礼門院右京大夫集・二二二〇) が目に付く程度である。後出例には、永福門院内侍の「問へやなほ命の堪へずなる上は何の情けもよしやと思へど」(五種歌合正安元年・恋命・六六) や伏見院の「今宵わきてなにの情けは添はねども霞める月に梅かをる宿」(伏見院御集・春夜・二二二〇) があって、宗尊の用詞と京極派歌人のそれとの共通性を覗かせている。

〔補説〕 宗尊は、該歌の前年に「かからずはとまる心もありなまし憂きぞこの世の情けなりける」(本抄・卷二・文永五年十月三百首歌・述懐・四八〇。玉葉集・雑五・二五二〇) と詠んでいる。

815 ひたすらに思ひも果てぬこの世こそ心弱さの辛さなりけり

〔通釈〕

ひたむきに思い切り（遁れ）もしないこの俗世（に在ること）こそが、自分の心弱さ故の恨めしさなのであったな。

〔参考〕 辛しとも思ひも果てぬ心こそなほ恋ひしさの余りなりけれ（続古今集・恋四・中務卿親王家歌合に・一三

〇四・小督）

〔補説〕 宗尊は『中書王御詠』で「いかにせん思ひ知らぬになしかねて辛さあらはす心弱さを」（中書王御詠・怨恋・

一八六）と詠じている。「心弱さ」が「辛さ」と密接に関わるとの認識が窺われる。

816 さてもなほ猶げに憂うきものと世の中を思おもはねばこそ厭いとはざるらん

〔通釈〕

それにしてもやはり、本当に憂く辛いものとこの世の中を思わないからこそ、厭い出て出家しないのだろうか。

〔参考〕 世の中の憂きは今こそうれしけれ思ひ知らずは厭はましやは（千載集・雑中・一一四六・寂蓮。月詣集・雑

下・八五一。別雷社歌合・述懐・一五六、結句「厭はざらまし」

〔類歌〕 侘びつつもなお捨てやらぬ心かなげに憂き世とや思はざるらん（新拾遺集・雑中・述懐歌に・一八四一・源

光正）

〔語釈〕 ○げに憂きものと―「思はねばこそ」にかかる。「げに憂きものと」（格段に憂く辛いものと）でも通意だ

が、切実さの観点から、「げに」に解される。「げに憂きもの」の用例は少ない。同時代では、後嵯峨院大納言典侍（為家女為子）の「悲しさも慰め難き夕暮をげに憂きものと鹿も鳴くなり」（秋夢集・九）があり、これは該歌に先

行するか。後出では、南朝の宗良親王の「おほえずして過ごし侍りける月日を数へても、今さら身の憂きふしのみ積もりければ／我が身さてかからんとてぞせめぎけんげに憂きものは月日なりけり」（李花集・雑・七六二）が目につく。○思はねばこそ厭はざるらん―「こそ」の係り結びで末尾は「らめ」とあるべき。「免」の「め」を「无」の「ん」に誤写した可能性があるか。「思はねばこそ」の句は、「苦しとも思はねばこそ春駒ののれと心はなほはやるらめ」（続詞花集・戯味・九七一・公保）や「皆人の惜しむ心をうれしとも思はねばこそ花は散るらめ」（百首歌合建長八年・春・五一三・基家）が先行例。

〔補説〕 宗尊は、「文永元年六月十七日庚申百番自歌合」（仮称）の段階では、「たまきはる命も知らぬ世の中をいつまでとてか厭はざるらん」（柳葉集・卷四・述懐・五五五）と詠じていた。

類歌に挙げた歌は、対照的趣向の同工異曲である。該歌からの影響の可能性は残る。

817 誰が為の我が身なりとてあぢきなく厭ふ心に任せざるらむ

〔通釈〕

いったい誰の為にあるこの我が身であるといつて、どうにもしようがなく、世を厭い出たい自分の心に従つて出家しないのだろうか。

〔参考〕 誰が為の錦なればか秋霧の佐保の山辺を立ち隠すらむ（古今集・秋下・二六五・友則）

憂しとてもこは誰が為にともすれば我が身を厭ふ心なるらん（広田社歌合承安二年・述懐・一六七・懐能）

あぢきなく言はで心を尽くすかなつむ人目も人の為かは（千載集・恋三・八三一・光行）

心にも任せざりける命もて頼めもおかじ常ならぬ世を（新古今集・恋五・二四二三・敦忠）

いかにして今まで世には有明の尽きせぬものを厭ふ心は（新古今集・雑下・一七八三・慈円）

〔補説〕

参考に挙げた歌歌を、宗尊が直接に意識していたとは言えないまでも、『古今集』などの古歌や新古今時代前後の歌の用詞に、宗尊が馴致していたらしいことは認めてよいであろう。

818

厭いとはんと思ひ定さだむる心にぞ世の憂うれきことは遠とほざかりける

〔通釈〕

世を厭いとつて出家しようと決心する心にこそ、世の中の憂うれき辛いことは遠とほざかるのであったな。

〔本歌〕

いかならむ巖の中に住まばかは世の憂うれき事の聞こえ来きざらむ（古今集・雑下・九五二・読人不知）

〔参考〕

一すぢに思ひ定さだむる心だにあらば憂うれき世を歎なげかざらまし（続後撰集・雑中・一一五九・成実。万代集・雑

六・三六二四）

819

かかかる世を慕したふべしとは思ひきや我が心こころにぞ果はて憂うれかりけれ

〔通釈〕

このような世の中に、（いつまでも必ず）つき従したがうつもりだとは、思ったか（いや思わなかったよ）。私の心のせいで、最後は憂うれき辛いのだった。

〔参考〕 我ぞ先づ出づべき道に先立てて慕ふべしとは思はざりしを（源三位頼政集・小侍從尼なりにけりと聞きて

つかはしける・六二五。玉葉集・雜五・二四六八）

山よりも深きところを尋ね見ば我が心にぞ人は入るべき（千載集・恋五・九二二・斉信。統詞花集・恋下・六六三、三句「尋ぬれば」）

忘れぬ我が心こそ厭はるれ果て憂かりける人の契りに（新拾遺集・恋四・二二七五・今出河院近衛）

〔語釈〕

○我が心にぞ―参考の斉信詠の他に、『続古今集』にも「よもすがら仏の道を求むれば我が心にぞ尋ね入りぬる」（釈教・是心是仏の心を・七五四・源信）があり、共に宗尊は目にしていたであろう。これら両首の「に」は場所・対象の意味だが、該歌の「に」は原因・理由の意味か。ただし、歌末の「けれ」が本来であるとする、底本の「にそ」は「こそ」であったか。なお、伏見院に「しほれゆく草木の色にたぐへ見れば我が心にぞ秋はつれなき」（伏見院御集・暮秋・九一七）の作がある。○果て憂かりけれ―前句の「にぞ」の結びとしては「果て憂かりける」であるべき（前項参照）。参考に挙げた近衛の歌と該歌との先後は不明である。「果て憂し」の先行例は、定家の「秋を経てくやしき月になれにけり果て憂き末の世に宿りきて」（拾遺愚草・同年〔承久二年〕九月十三夜、前大僧正の御もとにたてまつる・二七五〇）が早い。『弘長百首』の基家詠「世をばみな果て憂きものといつ知りて残る枝なく木の葉散るらん」（冬・落葉・三六七）は、宗尊の視野に入っていたであろう。

〔類歌〕

思ひきや恨めしかりし武士の名残を今日は慕ふべしとは（増鏡・久米のさら山・一八一・尊良）

〔補説〕

語釈に記したように、「我が心にぞ」は「我が心こそ」であったとすると、下旬は「私の心こそが、末路はつれなく恨めしいのだった。」といった趣意にならうか。

類歌とした尊良の一首は、該歌の影響下にある可能性を見ておきたい。

820 世にとまる心ありせば今の身のいかばかりかは悲しからまし

〔通釈〕

この俗世に留まる心があるのだったら、今現在のこの身が、どれほど悲しかっただろうに。

〔参考〕

長き夜の寝覚めに思ふ程ばかり憂き世を厭ふ心ありせば（続古今集・雑下・夜述懐といふことを・

一八一五・土御門院小宰相）

命だに心になふものならば何か別れの悲しからまし（古今集・離別・三八七・白女）

思ひやれ八十の年の暮なればいかばかりかは物は悲しき（新古今集・冬・六九六・小侍従）

〔補説〕

語調の点では、「いつはりのなき世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし」（古今集・恋四・七二二）に通う。

821 さりとともと行く末待ちし心こそ思ひ出づればかなはざりけれ

〔通釈〕

いくら何でも（いつかは俗世に背いて出家するだろう）と、将来を待った心こそは、思い出してみると、望みどおりにならなかつたのだな。

〔本歌〕

侘び人は憂き世の中に生けらじと思ふ事さへかなはざりけり（拾遺集・雑上・つかさ申に賜はらざりける

『竹風和歌抄』注釈稿（五）

頃、人のとぶらひにおこせたりける返事に・五〇五・源景明)

〔参考〕 なかなか昔ぞ辛きあはれてふことをあまたに思ひ出づれば(続古今集・雑下・懐旧の心を・一七六七・長時)

〔類歌〕 さりともと行く末待ちし心こそ身のほど知らぬ昔なりけれ(続千載集・雑中・一八七六・藤原長経)

〔補説〕 宗尊は、該歌以前に「思へども背きもやらで過ぐす世を行く末待つと人や見るらむ」(中書王御詠・雑・述懐・三〇八)と詠じている。

類歌に挙げた歌の作者藤原長経は、長範の子で五位筑前守・左衛門尉、近衛家家司。新後撰1(首)、続千載2、続後拾遺1、新千載1の入集を見る歌人である。該歌との関係は、今後の課題である。

822 この身をばはやなき物になし果てて、ただ後の世を思ふばかりぞ

〔通釈〕

この身を、もう既に(この世には)すっかり亡いものとしきって、ただただ来世を思うだけなのだ。

〔参考〕 数ならぬ身はなき物になし果てつ誰がためにかは世をも恨みん(新古今集・雑下・一八三八・寂蓮。寂蓮家之集・百首歌の中に・九二。寂蓮法師集(新編国歌大観)・百首雑歌・九二、三句「なしはてて」)

世は捨てつ身はなき物になし果てつ何を恨むる誰が歎きぞも(長明集・九四)

数ならで衰へまさる身の果ては後の世をだにと思ふばかりぞ(隆信集(新編国歌大観)・雑三・現世後世しえたる事などかきて侍りしかば・九二二)

〔語釈〕 ○はや―副詞。もう、すでに。「なし果てて」にかかる。○後の世―死後、後世。ここは、極楽往生の来世を言う。

823 我われのみよなどしの世よを見れば昔わづ忘るる人ぞ多おほかる

〔通釈〕

私だけがさあ、どうして昔を偲んでいるのだろうか。世の中を見ると、昔を忘れる人が多いこと。

〔参考〕 なかなかに老いはほれても忘れなでなどか昔をいと偲ぶらむ（金槐集定家所伝本・雑・五九七）

世がたりにありとも聞きて習はばや昔忘るる人の心を（秋風抄・雑下・三一七・俊成女。秋風集・雑下・二二九九）

〔語釈〕 ○世を見れば―↓752。○など偲ぶらん―「などしのぶらむ」の先行例は、俊成の「冬来れば氷と水の名をかへて岩もる声などを忍ぶらん」（続古今集・冬・氷留水声といふことを・六二五。長秋詠藻・二七六。月詣集・十一月・一〇〇九。秋風集・冬下・五〇二、初句「夕暮は」。雲葉集・冬・八二六）が目につき、所収歌集から見て、宗尊がこの歌を知っていたことは疑いないが、この俊成歌の「しのぶ」は「忍ぶ」である。○人ぞ多かる―「世を見れば」を受ける。同様に752にも用いている。

〔補説〕 宗尊は、該歌以前に「昔をば紛るる人は忘るらんしづかなる身ぞしのびかねぬる」（中書王御詠・雑・懷旧・三二八）という、やや類似した歌を詠んでいるが、この「しのび」は「忍び」で、下句は「閑居しているこの身は、（辛い）昔を（思い出して）堪え忍びかねてしまっている」といった趣旨であろう。

824 何とある現の夢ぞ寝るが内に同じ昔のことも見ゆるに

〔通釈〕

どうしてわざわざ、現実が夢であるようなことがあるのか。寝ている中に、同じ夢のような昔のことも見えるのに。

〔参考〕

見るままに現の夢となりゆくは定めなき世の昔なりけり（続後撰集・雑下・往事似夢といふことを・一二一七・藤原光成）

〔類歌〕

寝るがうちに見るのみ近き昔にて現の夢ぞ遠ざかりゆく（雪玉集・雑・往事如夢・文亀元五御月次・二四七一）

〔語釈〕

○何とある現の夢ぞ―初句は新奇。「何と現の夢ぞある」の倒置に解しておく。

825 かくばかり憂しと見ぬよの夢ならばはかなき外の物は思はじ

〔通釈〕

これ程愛く辛いと思わない世の中の夜に見る夢でもしあるならば、（夢が）儂いこと以外の物思いはするまいに。

〔参考〕

かくばかり憂しと思ふに恋しきは我さへ心ふたつありけり（拾遺集・恋五・九八九・恋五）
いかにせんまどろむ程の夢をだに憂しと見ぬよの慰めもがな（秋風集・恋中・八六七・基良。新後撰・恋

宵の間にさても寝ぬべき月ならば山の端近き物は思はじ（新古今集・秋上・四一六・式子）

いつもかく空に有明の月ならばあかで入る夜の物は思はじ（中宮亮重家朝臣家歌合・月・八二・政平）

〔語釈〕

○よ―「世」に「夢」の縁で「夜」が掛かる。○はかなき外の―新奇な措辞。「辛きをば思ひも入れて過ぐるかな恋しきほかの心なければ」（頼輔集・皇太后宮大夫俊成卿家十首会・六二）や「恨むとやよそには人の思ふらん恋しきほかの心ならぬに」（続古今集・恋四・一二二・中務卿親王家小督）等の「恋しきほかの」から発想したか。

826 はかなくも風待つほどのよを知らしであしたの露に身をも止とむらん

〔通釈〕

虚しくも、風を待つ間の夜を知らないように、寿命を知らないで、はかなく消える朝の露に、この身を留めていくのだから。

〔参考〕

大空に風待つほどのくものいの心細さを思ひやらなん（後拾遺集・雑三・齋宮女御・一〇〇二）

ふればかく憂さのみまさるよを知らで荒れたる庭に積もる初雪（新古今集・冬・六六一・紫式部）

はかなきは我が身なりけり朝顔のあしたの露も置きて見てまし（和泉式部統集・世の中はかなき事などいひて、槿花のあるを見て・三九四）

〔語釈〕

○はかなくも―虚しいことにも。「知らで」にかかる。「止むらん」にもかかると解される。「露」の縁語。

○よー「夜」に「身」の縁で寿命の意の「世」が掛かる、と見る。○身をも止むらん―例を見ない句形である。「も」は強意。「身を求むらん」は採らない。

827 世よの中を問とふ人あらば答こたへてん夕日ゆふの庭の花はそれぞれと

〔通釈〕

もしこの世の中について、問い尋ねる人があるならば、このように答えてしまおう。夕日が照らす庭の花は、それなのだ、と。

〔参考〕 わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつ侘ぶと答へよ（古今集・雑下・九六二・行平）

〔補説〕 道歌の趣があり、下句の景趣は京極派に通う。大きな梓組みで見れば、「世の中を何にたとへむ朝ぼらけ漕ぎ行く舟の跡の白浪」（拾遺集・哀傷・一三二七・満誓。和漢朗詠集・無常・七九六）の歌の系譜上にも位置付けられる。その点では、「古万葉集の中に沙弥満誓がよめる歌の中に、世の中を何にたとへんといへることを取りて、頭に置きてよめる歌十首」という源順の「世の中を何にたとへん夕露もまたで消えぬる朝顔の花」（順集・二六八）の趣に近い。ただし、「世の中」の無常を言うことは同じだとして、該歌の「夕日の庭の花」の「花」が何を想定しているのかは不明で、またそれが「庭」にあるような樹木草花であっても、「夕日」に照らされるその「花」のどのような様相が「世の中」のそれと同様だと言っているのかは、必ずしも判然とはしない。感覚的な歌である。「夕日」と「庭」と「花」の景趣は、目立った先行例を見ず新鮮である。「尾花（花薄）」のそれを詠じることは、頼朝に仕えた大江広元の曾孫で六波羅評定衆の茂重の「残りける尾花が袖の霜枯れに夕日むかへる庭ぞさびしき」

(茂重集・冬・寒草・一二七) が早い、該歌よりは恐らく後出であろう。他に、「庭もせにうつす夕日の影ながら乱れてもろき花薄かな」(嘉言百首・秋・薄・四三三・師教) があり、後期京極派の「霜枯れの尾花が庭に風ふれて寒き夕日は影さえぬなり」(花園院御集〔光嚴院〕・冬夕・六五) へと続く。これも関東歌人詠と京極派和歌を結ぶ細い繋がりの一つと言える。

828 生まれあふ契りよいかに雪の山身を捨ててこそ聞きし御法に

〔通釈〕

この世に生まれ合わせる因縁は、どうしてなのか。(あの釈迦の雪山童子の故事のように) 雪の山で自分の身を捨ててこそ、本当に聞くことができた仏法の無常の教えであるのに。

〔参考〕

昔、独りの人有りて雪山に住みき。名付けて雪山童子と云ふ。菓を食ひ、菓の子を取りて、心を閑かにし道を行ふ。…その時に雪山童子思はく、我今日身を捨ててこの偈を聞き畢てむ、と思ひて…(三宝絵・上・十・雪山童子。新日本古典文学大系本に拠り、表記は改める)

雪山童子は無常の文に命をかへ、舍利弗尊者、眼を乞婆羅門にとらせしなり。(九冊本宝物集・八。福原昭五『九冊本 宝物集と索引』(平五・四、近代文芸社) に拠る)

一たびも聞きし御法を種として仏の身とぞ誰もなりぬる(久安百首・尺教・方便品、若有聞法者無一不成 仏・八五・崇徳院)

惜しむとて惜しまれぬべきこの世かは身を捨ててこそ身をもたすけめ(西行法師家集・雑・鳥羽院に出家

のいとま申すとてよめる・六三八。万代集・雑六・三七二三・西行)

〔語釈〕

○生まれあふ―この現世に（人として）生まれ合わせる、という意味。「その世には生まれあひける身なればや知らぬ昔の恋しかるらん」（佚名歌集（穂久邇文庫）・雑・八二）、「同じ世に生れあひてもくもの子のちりぢりにこそまた別れなめ」（新撰六帖・第六・くも・二二六六・家良）等が先行例か。○雪の山―雪を頂く山の意味の梵語の漢訳という「雪山」（セツセン）の訓読。釈迦前世の雪山童子難行の山という。↓補説。○身を捨ててこそ―参考の西行歌の他に、宗尊に身近な先行例としては、「世を背く吉野は春の宿なれば身を捨ててこそ花になれぬれ」（続後撰集・雑上・大峰にて、花を見てよみ侍りける・一〇四〇・静仁法親王）がある。

〔補説〕

「雪山童子」の故事を踏まえる。「釈迦の前生（ぜんしやう）の一つとして、雪山（せつせん）に住み、大乘の教法を求めて修行したとするときの名前。このとき、羅刹（らせつ）に身を変じた帝釈（たいしやく）天から「諸行無常、是生滅法」の偈（雪山偈）の前半を示された童子が、我が肉体を施すことを約して、「生滅滅已、寂滅為楽」の偈の後半を聞くを得たという説話（涅槃経、三宝総ナド）が著名」という（角川古語大辞典）。

829

世に超ゆる仏の誓ひ聞くたびにうれしき袖は涙余りて

〔本文〕

○聞くたびに―底本「聞たひに」の「聞」は、「の」に上書き。

〔通釈〕

三世の諸仏に超越する阿弥陀仏の四十八の誓願を聞く度毎に、嬉しい私の袖は、喜びの涙が余るのであって。

〔参考〕

世に超ゆる弥陀の誓ひのかねごとに憂き身歎かぬ果てぞ嬉しき（洞院撰政治家百首・雑・述懐・一七九九・実

氏)

世に超ゆる願ひはむねのはちすにて頼むよりこそまたむかふらめ(新撰六帖・第六・はちす・二〇〇八・為家)

世に超ゆる弥陀の誓ひを聞きえつつ悟るぞ三の心なりける(百首歌合建長八年・雑・一五一・経家)

〔語釈〕

○世に超ゆる仏の誓ひ―いわゆる「超世」の誓願のこと。阿弥陀如来が修行時に立てた衆生済度の為の四十八の誓願、阿弥陀の四十八願を言う。三世の諸仏の誓願を超えてすぐれていることから、この阿弥陀仏の四十八願のことをこのように言う。これを詠むことは、参考歌のように、鎌倉前中期から見え始める。これには、法然が第十八願の「念仏往生」の願を最重要の願として、『選択本願念仏集』で「故知、四十八願之中、既以念仏往生之願而為本願中之王也」と言い(「王本願」)、浄土教思想で重要視されたことが関わっている可能性がある。従って、特に第十八願をさすこともあるが、ここは必ずしもそれに限らないか。

〔補説〕

底本は、この歌の後三分空白で、丁裏から次の本文が始まる。

文永八年七月、千五百番歌合あるべしとて、内裏より仰せられし百首歌

春

830 吹く風ものどかに霞む九重の都や春の初めなるらん

〔通釈〕文永八年七月、「千五百番歌合」があるはずだということ、内裏から命じられた百首歌

春

吹く風ものどかで、のどかに霞むこころ辺り、九重の宮殿がある都は、春の初めで、また栄えの春の初めであるのだらうかよ。

〔参考〕 折りかざす峰の桜に吹く風ものどかなる世の春ぞ知らるる（宝治百首・春・翫花・五七二・為経）

万代を光にこめて朝日山のどかに霞む初春の空（老若五十首歌合・春・八・越前。三百六十番歌合・八）

〔類歌〕 九重の都に春や立ちぬらん天つ雲井の今朝は霞める（新葉集・春上・四・公泰）

〔出典〕 文永八年七月内裏千五百番歌合百首歌（仮称）。以下977まで同じ出典。

〔語釈〕 ○文永八年七月、千五百番歌合あるべしとて、内裏より仰せられし百首歌―他にこれを裏付ける資料は見出だしていないが、この詞書に拠れば、文永八年（一二七一）七月に、龜山天皇内裏で「千五百番歌合」が企画され、宗尊にも出詠が命じられた、その百首歌ということになる。本抄には、春二〇首、夏一五首、秋一九首、冬一五首、祝四首、恋一五首、雑一〇首、の計九八首が収められている。春・秋各二〇首、夏・冬一五各首、祝五首、恋一五首、雑一〇首の百首歌であったのであろう。○吹く風ものどかに霞む―「吹く風ものどかに」から「のどかに霞む」に鎖る。○九重の都―「九重」は、中国に言う九重の門の王城から、皇居、禁中の意。転じて「九重」自体が都の意味にも用いられるが、ここは皇居がある京の都、という程の意味か。伝統的措辞として、「九重」に「此処の辺」が掛かる、と見ておく。○春の初め―季節の新春の意に、これから迎える盛んな時勢の初めの時期の意を重ねる、と解する。

〔補説〕 宗尊はこれ以前に、「天つ空のどかに霞む山の端の朝日の里に春は来にけり」（柳葉集・卷一・弘長元年五月百首歌・春・一）と詠じている。

831 浅緑あさどり空もたよりの色み見えて春のしるべと立つ霞かかな

〔通釈〕

浅緑よ、空も春の縁となる色が見えて、まさに春の手引きとして立つ霞であることだな。

〔参考〕

浅緑のどけきときの色とてや春立つ空の霞みそめけん（明日香井集・院百首建保四年・春・七二八）
浅緑春は来ぬとやみ吉野の山の霞の色に見ゆらん（続後撰集・春上・三・忠見）

面影を恋ふるあまりのしるべにぞ空もたよりの月は見えける（弘長百首・恋・遇不逢恋・五〇三・基家）
立ちかへる春のしるべは霞みしくをはつせ山の雪のむらぎえ（堀河百首・春・残雪・八八・俊頼）

〔語釈〕

○空もたよりの色みえて―参考の基家歌に負ったか。

〔補説〕

「浅緑」の「霞」を詠むことは古くからあり、「浅緑野辺の霞はつつめどもこぼれてにはふ花桜かな」（拾遺集・春・四〇・読人不知。新撰万葉集・五。寛平御時后宮歌合・一一）がその代表歌である。「空」のそれは、例えば「浅緑霞める空のけしきにや常磐の山は春を知るらん」（金葉集初度本・春・七・公教母。同三奏本・五。袋草紙・四七五・宰相上）がある。これらを宗尊は見知っていたと思しい。

また、「たより」と「しるべ」を詠み併せる仕立て方は、参考の基家詠に学んだと思しいが、『新古今集』に「年を経て思ふ心のしるしにぞ空もたよりの風は吹きける」（恋一・九九八・高光。高光集・二三。定家八代抄・恋一・九一四）があつて、この歌は『新時代不同歌合』（二二三）では、三句が「しるべにぞ」とあるので、基家も宗尊もこれに倣った可能性も捨てきれない。

〔本文〕 ○歌頭に「続拾」の集付あり。

〔通釈〕

浦が遠く見える難波の春の夕風に、西に沈む夕日が霞んでいる、淡路島山よ。

〔参考〕

春といへば霞みにけりな昨日まで波間に見えし淡路島山（新古今集・春上・六・俊恵）

夕風に夕日は入りぬ淡路島はるかに見れば海人の藻塩火（拾玉集・〔送佐州親康百首〕・二九〇九）

白妙の波もてゆへる雲間より入日に残る淡路島山（洞院撰政治家百首・雑・眺望・一七三四・成実）

霞立つ沖つ波もて夕日影かかれるかたや淡路島山（中院集〔為家〕・「」日右京大夫行家卿勸進住吉社歌合無

判詞・海上霞・二〇三）

夕霧の晴るる途絶えにながむれば入日にはへる淡路島山（隣女集・卷二自文永二年至同六年・秋・五四三三）

〔類歌〕

浦遠く海士の戸あけてながむれば雪降りにけり淡路島山（龜山殿七百首・冬・浦雪・七三〇・有忠）

入日さす波の遠方空晴れてまがふ雲なき淡路島山（南朝三百番歌合建徳二年・夕陽映島・二一八・経高）

〔影響〕

難波渦霞ばかりを隔てつつ浦遠からぬ淡路島山（法性寺為信集・春・かすみ・八）

夕日入る名残うつろふ波間より霞みて見ゆる淡路島山（為理集・雑・民部卿家会当座・眺望・二二一九）

難波渦波路晴れ行く夕風に入日間近き淡路島山（新拾遺集・雑中・一七三五・花園院）

〔語釈〕

○淡路島山―淡路国の歌枕。淡路島を言う。

〔他出〕

続拾遺集・春上・題しらず・三七。歌枕名寄・畿内十三・撰津一・難波・続拾一 淡路島・三五三二。歌枕

名寄・南海下・淡路・島山・続拾一・八七四八。

〔補説〕 参考の為家詠は、『明題部類抄』により、文永四年の作と分かる。参考佐藤恒雄『藤原為家全歌集』(二〇〇二・三、風間書房)。

影響に挙げた一首目の作者藤原為信は、該歌の詠まれた文永八年(一二七二)には二十四歳である。一首の内容から、該歌を意識したように思われる。また、該歌は『続拾遺集』所収歌であり、為理や花園院が披見した可能性は見てよいであろう。

833 鳴きぬなり鶯だにと待たれしに花の遅さのつらさ知らせて

〔通釈〕

鳴く声が聞こえたよ。せめて鶯だけでも(鳴いて欲しい)と待たれたのに、(それは)咲く花の遅さの恨めしさを知らせるままで。

〔本歌〕 春や疾き花や遅さと聞き分む鶯だにも鳴かずもあるかな(古今集・春上・一〇・言直)

〔語釈〕 〇鶯だにと―本歌の「鶯だにも」を承け、鶯さえもの意を、せめて鶯だけでもとの意にずらす。

834 かくしこそ千年をかねて初春の野辺の若菜も楽しきをつめ

〔通釈〕

『竹風和歌抄』注釈稿(五)

このように、千歳の長き年月をあらかじめ（祝って）、「楽しき」という木の御薪を積むように、初春の若菜も、気持ちよいのを摘めよ。

〔本歌〕 あたらしき年の初めにかくしこそ千年をかねて楽しきを積み（古今集・大歌所御歌・大直日の歌・

一〇六九）

〔参考〕 今はとて春のめぐみのたのしきをつむや野原の若菜なるらん（新撰六帖・第四・わかな・一二八九・信実）

〔語釈〕 ○かねて―予祝して、という趣意。○楽しき―本歌を承け、「き」に「御薪（みかまぎ）」の「木」の意が掛かる。「御薪」は、正月十五日に百官が宮中に献上する薪を言う。○つめ―若菜を「摘め」と「木（御薪）」を「積み」の掛詞。

835 立ち^よ寄りてなほ袖^{そで}ふれん梅の花人のとがむる匂ひなりとも

〔通釈〕

立ち寄ってやはり袖を触れよう、梅の花よ、たとえそれが人が咎める薫りであつたとしても。

〔本歌〕 梅の花立ち寄るばかりありしより人のとがむる香にぞしみぬる（古今集・春上・三五・読人不知）

色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ども（古今集・春上・三三・読人不知）

〔参考〕 袖ふればなほいかならん梅の花立ち寄るだにも人とがめけり（続古今集・雑上・一四九九・高定）

〔類歌〕 とがむべき人は知らねど道の辺に立ち寄るばかりにはふ梅が枝（故越前々司時広歌・梅・四一）

立ち寄りて梅の匂ひをかり衣袖にうつさん人などがめそ（文保百首・春・一〇〇五・為世。新拾遺集・春

上・五一。臨水集・春・一五)

〔補説〕

参考歌の作者高定は、天福元年（一二三三）生、弘安三年（一二八〇）八月二十九日没、四十八歳。真観光俊の子、母は盛季女。定嗣の猶子。正二位権中納言に至る。この高定詠も、『古今集』歌兩首を本歌にする。宗尊は高定詠に触発されたかもしれない。

宗尊はこれ以前にも、同じ『古今集』歌兩首を本歌にして、「誰が袖のにはひを借りて梅の花人のとがむる香には咲くらん」（瓊玉集・春上・一九）と詠んでいる。

836

大原や清水の氷氷りとけしより名なに流ながれてぞ月みも見えける

〔通釈〕

大原よ、その清水の水が解けてから、水が流れるように澄むという評判が世に流れて、その月が見えたのだ。た。

〔本歌〕

程経てや月も浮かばん大原や朧の清水すむ名ばかりぞ（後拾遺集・雜三・一〇三七・良暹法師）

さらでだに岩間の水はもるものを氷とけなば名こそ流れめ（後拾遺集・雜二・睦ましくもなき男に名立ちける頃、その男のもとより、春も立ちぬ、今はうちとけねかしなど言ひて侍りければよめる・九四三・下野）

〔参考〕

澄む水にさやけき影の映ればや今宵の月の名に流るらむ（千載集・秋下・後冷泉院御時、九月十三夜月宴侍けるによみ侍ける・三三六・俊家。栄花物語・根合・五三三）

〔語釈〕

○大原―山城国の歌枕。現京都市左京区大原と、西京区大原野がある。弁別が難しい場合があるが、本歌の「朧の清水」は、現京都市左京区大原草生町の三千院から寂光院への道筋にある名水であり、ここも前者と見てよいか。○清水―本歌を承けて、山城国の歌枕「朧の清水」(前項)を言う。○名に流れてぞ―高い名声が世間に流れて、の意。「清水」―「とけ」の縁で、水が流れて、の意が掛かる。

〔補説〕

後拾遺集初出歌人の歌を本歌と見ることにについては、『瓊玉和歌集』注釈稿(三二)(本紀要四七、平二二・三) 126、128補説参照。

「名に流」れる「月」を詠じるのは、院政期頃から盛んになる。例えば、「見るままに心も澄みぬ天の川名に流れたる秋の夜の月」(雲居寺結縁経後宴歌合・月・一一・瞻西上人)、「紅葉散る清瀧川に舟出して名に流れたる月をこそ見れ」(散木奇歌集・秋・五〇六)、「秋深く天の川水澄みまさり名に流れたる月のさやけさ」(久安百首・秋・一〇四八・待賢門院堀川)といった歌が詠まれているのである。西行にも、「天の川名に流れたるかひありて今宵の月はことに澄みけり」(山家集・秋・八月十五夜・三三二)の作がある。参考の俊家歌もそういった傾向の中に位置付けられる。

837 春と言へば来し方急ぐ雁がねも昔にかへる御代や知るらむ

〔通釈〕

春だと言うので、秋にやって来た方へと急いで帰る雁も、昔に返る、あの良かった御代を知っているのだろうか。

〔参考〕 あはれ世の昔に返る道もがな雲井の雁の春を見るにも（為家五社百首・春・かへるかり・石清水・八六）

白雪の道ある御代につかへてぞ昔に返る跡も見るべき（百首歌合建長八年・冬・九三八・良教）

〔類歌〕 今はとて花の都を立ち別れ来し方急ぐ春の雁がね（実兼百首・春・一三）

〔語釈〕 ○来し方―雁が秋にやつて来た方角、北方。「来し」に「越」が響くか。補説に挙げた①良経詠の「越路」には「来し路」が掛かり、「北」の「き」に「来」が響くか。○かへる―戻る意の「返る」に、「来し方」「雁」「急ぐ」の縁で（北へ）「帰る」意が掛かる。○御代や知るらむ―86にも用いている。

〔補説〕 宗尊はこれ以前に、「行く雁の昔に返る春ならば見し世の人にことやつてまし」（中書王御詠・春・帰雁・二九）や「石上ふるのあら田もときにあひて昔に返る御世の春かな」（同・春・六帖の題の歌よみ侍りしに、春田・二六）とも詠んでいる。

「春と言へば」で始まる帰雁詠は、次のように、新古今歌人等が詠み始める。

①春と言へばいつしか北に帰る雁越路の冬を送るなりけり（秋篠月清集・二夜百首・帰雁・一一）

②春と言へば今はの心つくばねの峰をはるかに帰る雁がね（千五百番歌合・春四・五五八・隆信）

③春と言へばかくてもたゆき玉章の契り結ばで帰る雁がね（後鳥羽院御集・〔遠鳥五百首〕・春・六六六）

④春と言へば花の盛りに帰る雁あひみん事も人の為かは（紫禁集・同〔建保四年三月十五日〕比、二百首和歌・

八二二）

また、宇都宮歌壇の『新和歌集』にも、「春と言へば花なき里に行く雁の心のうちやのどけかるらん」（新和歌集・春・帰雁を・四九・浄意法師女）という作が見えている。南朝歌人の「春と言へば霞の衣たちかへり秋来し空に急ぐ雁がね」（南朝五百番歌合・春七・一二二・具氏）は、該歌からの影響かと疑われなくもない。

なお、320補説参照。

838 春雨に濡るる袂たもとのあはれ知れ草木しももれぬ御代の恵みに

〔通釈〕

春雨に濡れて潤される袂の、情愛を知れよ。それは、どのような草木ももれることのない、我が君亀山天皇の御代の恩恵によるのだ（それで人皆が潤されているのだ）。

〔参考〕

あめの下めぐむ草木のめはるに限りも知らぬ御代の末末（新古今集・賀・七三四・式子）
人知れぬ山の草木も春雨に神の恵みを空に知りけり（隆祐集・百番歌合・九十八番・春雨右、春日社百首・

二五五）

のどかなる御代のしるしを見せがほに四方の草木もめぐむ春雨（宝治百首・春・春雨・三六〇・下野）

〔補説〕

身に浴びる治世の恩沢を、草木に遍き春雨の恩恵との比較で詠じている。参考に挙げたような、鎌倉時代になつて詠まれ始める、世や身に対する恩沢を「草木」をもらさぬ「雨・春雨」の「恵み」の比喩で言う類型の中にある。「おしなべて四方の山べの草木まで恵みあまねき春雨ぞ降る」（宝治百首・春・春雨・三三六・有教）といった、純粹な春季の叙景に見えるような歌も、その通念から大きくはずれてはいないのであろう。参考歌の他にも、公経の「春雨は四方の草木を分かねどもしげき恵みは我が身なりけり」（秋風集・春・五二・公経。続千載集・雑上・一六六一）やその子実氏の「春雨をなべての雨と思ふなよ四方の草木も君が恵みぞ」（弘長百首・春・春雨・六四・実氏）や孫公雄の「草木だにもれぬ恵みの春雨に濡れてかひなき我が袂かな」（文保百首・春・二〇〇八・

公雄)という三代の類詠が存してもいるし、宗尊が撰ばせたと見られる『東撰六帖』にも「恵みある御代の初めの春雨に四方の草木の折にあひつつ」(東撰六帖・春・春雨・一一七・高階重氏)が見える。

だが一方で、例えば秀能の「雨そそく春の恵みにあひぬればなべて草木も残らざりけり」(如願法師集・雑下・釈教・九二八)の題「非情成仏」は、あるいは「草木国土悉皆成仏」とも説かれる、心の無い草木や国土も皆仏性を具有して成仏するという、仏の普き恩恵を言う。この考えや、後出だが「草木みななじなもれずうるほひぬひとたびくだる雨の恵みに」(正和四年詠法華經和歌・葉草喩品・六・兼教)と詠まれる、『法華経』「葉草喩品」の、「如彼大雲。雨於一切。卉木叢林。及諸藥草。如其種性。具足蒙潤。各得生長。」(彼の大雲の、一切の卉木叢林及び諸の藥草に雨ふるに、その種性に如ひて具足して潤ひを蒙り、各生長することを得るが如し)や「譬如大雲。以一味雨。潤於人華。各得成實」(譬へば大雲の。一味の雨を以て。人の華を潤して。各実を成ずることを得せしむるが如し)という、草木が雨の恵みを受けて種性に従って生長する比喻で、衆生が如来の法の下で性に応じて成長することを説く考え方が踏まえられているようにも思われる。それは、宗尊の祖父土御門院の「よく思へあまねきあめの下なれど根なき草木は恵みやはする」(土御門院御集・雑十首・三〇三)にも感じられるであろう。

839 青柳の糸いともて貫ぬける玉の緒みの乱みだるる露つゆに春風ぞ吹く。

〔通釈〕

青柳の葉の糸いとでもって貫ぬいている(葉に置く露の)玉の緒みが、乱みだれる、その露には春風が吹いているよ。

〔参考〕 青柳の糸もて貫ける白露の玉こき散らす春の山風(金槐集定家所伝本・春・やなぎ・二六)

露にだにむすほほれたる青柳のいとど乱れて春風ぞ吹く（続古今集・春上・七四・教定）

〔類歌〕 青柳のいと吹きなやむ春風に朝露もろく玉ぞ乱るる（隣女集・卷四自文永九年至建治三年・春・柳歌中に・

一七七五）

貫きとめぬ玉の緒なびき朝露の風に乱るる青柳の糸（雅有集・堀河院百首題よみ侍りしに・春・柳・

四四六）

〔語釈〕 ○青柳の糸もて貫ける玉の緒の―「青柳の糸もて貫ける」が有意の序詞で、「玉の緒」（玉を通す紐）を起し、「玉の緒の」が「乱る」の枕詞だが、これも有意に解し、「玉」は「露」の比喩と見る。

〔補説〕 直接には参考の実朝詠や教定詠に倣つていようが、その基底には、「浅緑糸よりかけて白露を玉にも貫ける

春の柳か」（古今集・春上・二七・遍昭）や「ともすれば風によるにぞ青柳の糸はなかなか乱れそめける」（拾遺集・春・三三・読人不知）や「青柳の枝にかかれる春雨はいともて貫ける玉かとぞ見る」（和漢朗詠集・春・雨・八六・伊勢。新勅撰集・春上・二三）等の古歌が存していよう。

参考歌の作者教定は、飛鳥井雅経男で類歌の作者雅有の父。雅有とともに関東祇候の廷臣である。

840 山桜やまざくらちりならぬ名の空にのみ立つと見ゆるや峰みねの白雲しろくも

〔通釈〕

山桜は、散りどころでなく（咲く）という、塵ではない高い評判が何となく立って、空にばかり立つと見えるのか、あの峰の白雲よ（山桜よ）。

〔本歌〕 知るといへば枕だにせで寝しものを塵ならぬ名の空に立つらむ（古今集・恋三・六七六・伊勢）

朝な朝な立つ河霧の空にのみうきて思ひのある世なりけり（古今集・恋一・五一三・読人不知）

〔参考〕 山桜咲きぬる時は常よりも峰の白雲立ちまさりけり（後撰集・春下・一一八・読人不知）

散りまがふ花のよそめは吉野山嵐に騒ぐ峰の白雲（新古今集・春下・一三二・頼輔）

〔語釈〕 ○ちりならぬ名―本歌の詞「塵ならぬ名」を取るが、本歌では、塵にもならない（塵にも値しない）取るに足らない評判といった否定的な意味合いだが、ここでは、塵ならぬ（塵どころでない）高い評判という肯定的意味合い。「山桜」の縁で「散りならぬ名」「散り」どころでなく咲くという評判）が掛かる、と解する。○立つ―「名の」が主語で、評判が立つ意に、「白雲」の縁で、雲が沸き立つ意が掛かる。

841 今日けふもまた又行ききては来きぬる山路かな咲そき添そふ花みの見みまくほしさに

〔通釈〕

今日もまた、出掛けて行っては帰って来てしまふ山路であることだな。（日一日と）咲き増す花の見たさゆえに。

〔本歌〕 いたづらに行きては来ぬるものゆゑに見まくほしさにいざなはれつつ（古今集・恋三・六二〇・読人不知）

〔参考〕 今日もなほ山路に暮れぬ桜花あかぬ心に身をまかせつつ（拾玉集・四九二七）

花盛り昨日も今日も木の本に誰日暮らしの山路なるらん（百首歌合建長八年・春・四七一・基家）

〔類歌〕 今日も又同じ山路に尋ねきて昨日は咲かぬ花を見るかな（新後撰集・春上・中務卿宗尊親王の家の歌合に、

花・六四・能清。現存卅六人詩歌・尋山花・六六）

〔影響〕 咲きやらぬ花待つ頃はいたづらに行きては来ぬる春の山もと（隣女集・卷二日文永二年至同六年・春・花・

三〇一）

〔補説〕 宗尊はこれ以前にも、同じ『古今集』歌を本歌に「花の色にいざなはれつつ春毎に行きては来ぬるみ吉野の

山」（柳葉集・卷四・〔文永元年六月十七日庚申百番自歌合〕・花・四六三。瓊玉集・春下・六二）と詠んでいる。

類歌の作者能清は、関東祇候の廷臣で宗尊幕下の主要歌人の一人。この歌は該歌よりは先行するが、右の「花の色に」との先後が未詳なので、類歌とした。

842 絶え絶えに霞の隙を洩る月の光待ち取る花の色かな

〔通釈〕

絶え絶えに霞の隙間を洩れてくる月の光（の白さ）を、そっくりそのまま待ち迎えて取る、桜の花の（より艶やかな）白い色であることだな。

〔参考〕 いかでかは袂に月の宿らまし光待ち取る涙ならずは（金葉集正保版二十一代集・雑上・平康貞女）

秋といへば空すむ月を契りおきて光待ち取る萩の下露（拾遺愚草・花月百首・月・六五六）

秋来れど月の桂の実やはなる光を花と散らすばかりを（古今集・物名・四六三・源忠）

花の色に光さしそふ春の夜ぞ木の間の月は見るべかりける（千載集・春上・七三・上西門院兵衛）

〔類歌〕 秋来ては今日ぞ雲間にみか月の光待ち取る萩の上露（風雅集・秋上・初秋露を・四五三・公蔭）

〔補説〕 京極派和歌の微細な光彩の観照に通う。

843 見るままにやがやてもうつる心こかないかなる色いろに花はなの咲さくらん

〔本文〕 ○みつる―底本は「みみつつる」(見消みち「みゆ」各字中)とあり。

〔通釈〕

花はなを見みているうちうちに、そのままその色いろを映うつして変かわる心こであることことだな。いいつたいどのよような色いろに花はなが咲さいていいるからからなのだのだららううか。

〔本歌〕 花見はなみれば心こさへへにぞぞうつりける色いろには出いででじ人ひとももこそ知しれれ(古今集・春下・うつろへる花はなを見みてよめる・

一〇四・躬恒)

〔参考〕 年毎としごとに染しむる心このしるししあららばいかなる色いろに花はなの咲さかましまし(別雷社歌合・花・六六・登蓮。月詣集・二月・

桜さくらをよめる・一一七)

〔類歌〕 見るままに心こぞぞうつる秋萩あきあきの花野はなの露つゆに宿とどる月影つきかげ(新後撰集・秋下・文永七年八月十五夜、五首歌めされし

次に、野月のつきをよませ給たまうける・三七五・龜山院)

うつろふも如何いかなる色いろと知しらざりし人ひとの心こを花はなに見みるかなかな(人家集・寄花恋よしかこいといふことことを・三七八・従三位
範時女)

〔語釈〕 ○うつる―変化へんかする意いに、反映はんえいする意いが重かさねられていいる、と解と解とする。

844 風吹かぜかぬ山やまのあななたの春はるもがななああだだなる花はなの隠かくれ家いへにせん

『竹風和歌抄』注釈稿(五)

〔通釈〕

風が吹かない山の彼方の春が欲しいよ。はかない桜の花の、隠れ処にしよう。

〔本歌〕

み吉野の山のあなたに宿もがな世の憂き時のかくれがにせむ（古今集・雑下・九五〇・読人不知）

〔参考〕

霞立つ山のあなたの桜花思ひやりてや春を暮らさむ（拾遺集・雑春・一〇四一・浄蔵）

わびつつは花を恨むる春もがな風の行へに心まよはで（拾遺愚草・花月百首・花・六四六）

山桜あくまで色を見つるかな花散るべくも風吹かぬ世に（続古今集・春下・一〇四・平兼盛。古今集・仮名序。和漢朗詠集・丞相付執政・六八一）

〔補説〕

宗尊は、「文永五年十月三百首歌」（霞）でも「み吉野の山のあなたの霞めるは誰が隠れ家も春や知るらん」（本抄・卷二・292）と、同じ『古今集』歌を本歌に取って詠じている。

845

春ごとにとまらぬものを花と言ひて今年もいたく散る桜かな

〔通釈〕

毎年の春ごとに、散って留まらないものを花と言うのであって、そのとおり、今年も激しく散る桜であることだな。

〔本歌〕

かぞふればとまらぬものをとしと言ひて今年はいたく老いぞしにける（古今集・雑上・八九三・読人不知）

〔参考〕

春ごとに咲きまさるべき花なれば今年をもまだあかずとぞ見る（後撰集・春上・四六・兼輔）

春ごとに花はしばしもとどまらで惜しまれぬ身はある世なりけり（新撰六帖・第六・花・二二八八）

〔補説〕

該歌は本歌取りで、参考の両首も意識されているように思われる。一方で、『和漢朗詠集』（春・三月尽）の「留春春不住（はるをとどむるにはるとどまらず） 春婦人寂寞（はるかへてひとせきばくたり） 厭風風不定（かぜをいとふにかぜさだまらず） 風起花蕭索（かぜたてはなせうさくたり）」（五〇・白居易）や「留春不用関城固（はるをとどむるにはもちるずくわんせいのかためを） 花落隨風鳥入雲（はなはおちてかぜにしたがひとりはくもにいる）」（五五・尊敬）が想起されなくもない。

846 言はぬ間の思ひの色に咲きにけり憂き下染めの山吹の花

〔通釈〕

口に出して言わないうちの思「ひ」の「緋」の色に咲いたのだった。憂く辛い心中の（「口無し」の）ように、（緋の色）下染めにする（梔子色）山吹の花よ。

〔本歌〕

耳なしの山のくちなしえてしかな思ひの色の下染めにせむ（古今集・雑体・誹諧歌・一〇二六・読人不知）
言はぬ間はつつみしほどにくちなしの色にや見えし山吹の花（後拾遺集・雑四・一〇九三・規子内親王）

〔語釈〕

○思ひの色―「下染め」「山吹」の縁で「緋の色」が掛かる。黄みがかつた紅・朱である「緋」は、アカネ科の常緑灌木「梔子（くちなし）」の黄の下染めに蘇芳を染める。○憂き下染め―「憂き下」（憂く辛い内心）から「下染め」に鎖る。「下染め」は、染色の色揚げを美しくするために、別の色の染料で行う下搾えの染めを言う。○山吹の花―ばら科の落葉低木「山吹」の鮮黄色の五弁の花を言う。その色が「梔子」の実を染料にして染めた黄色

と同様。「言はぬ」の縁で、言外に「口無し」から「梔子」が響く。

〔補説〕 本歌の『古今集』歌にも窺われるとおり、「緋の色」は「山吹の花」の色と同じ黄色の「梔子」の「下染め」に蘇芳の赤色を染める色なので、該歌は理屈に合わない。本歌二首を基に感覚的な趣向を構えることに意を注いだのであろう。

本歌の「言はぬ間」歌の作者規子内親王は、この一首のみが勅撰集入集歌であり、形の上では『後拾遺集』歌人である。しかし、天曆三年（九四九）生で永延元年（九八七）八月二十一日に三十九歳で没した、村上天皇第三皇女で、村上の女三宮と称された人であり、三代集時代の歌人と見なしてよいであろう。

847 八橋はしの下おり居みし沢みの杜く若きはるたればみるみるみ来みてもみ誰みかみ見みるみらん

〔通釈〕

八橋の、あの男が昔に下りて座った沢の杜若は、（今は）遙々やって来て、いったい誰が見るのだろうか。

〔本説・本歌〕（前略）三河の国八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋と言ひけるは、水ゆく川のくもでなれば、橋を八つ渡せるによりてなむ、八橋と言ひける。その沢のほとりの木の蔭に下り居て、乾飯食ひけり。その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上に据ゑて、旅の心をよめ。」と言ひければ、よめる。

唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ

とよめりければ、皆人、乾飯の上に涙落として、ほとびにけり。（後略）（伊勢物語・九段・一〇・男。古今集・羈

旅・四一〇・業平

〔参考〕 古りにけり誰かみぎりの杜若なれのみ春の色深くして（拾遺愚草・重泰和早率百首文治五年三月・春・

五一七）

〔類歌〕 下り居けん程は知らねどかきつばた生ふる沢辺をあはれとぞ見る（実材母集・やつはしにて・八四七）

〔語釈〕 〇八橋―三河国の歌枕。三河国碧海郡（現愛知県知立市）、逢妻川の南側の地。本説の『伊勢物語』により、

業平の伝説の地となる。鎌倉時代にはいわゆる鎌倉街道の宿駅でもあった。

848 今はとて春暮れかかる藤浪の露の底にぞ色は残れる

〔通釈〕

今はもうということ、春が暮れかける、寄せかかる波のような藤にかかり置く露の奥底に、紫の花の色は残っているよ。

〔本文〕 紫藤露底残花色（しとうのつゆのそこのさんくわのいろ） 翠竹煙中暮鳥声（すいちくのけぶりのうちのほ

てうのこゑ）（和漢朗詠集・春・藤・一三四・相規）

〔参考〕 手もふれで惜しむかひなく藤の花底にうつれば浪ぞ折りける（拾遺集・夏・八七・躬恒）

紫の色の深きは水底に見えつる藤の花にざりける（躬恒集・春・二四一）

水底も紫深く見ゆるかな岸のかかる藤波（後拾遺集・春下・一五五・実季）

水底に紫深き影見えて波に色づく田子の浦藤（千五百番歌合・春四・五一・忠良）

〔類歌〕

雨に咲く田子の浦藤置きあまる露の底さへさぞにほふらん（国冬祈雨百首・春・雨中藤・一九）

花散りし山は青葉に咲く藤の色にも残る春や見ゆらん（新後拾遺集・雑春・六四九・実音）

〔語釈〕

○暮れかかる―春が暮れかける意。この句の有力な先行例は、「柴の戸をさすや日影の名残なく春くれかかる山の端の雲」（新古今集・春下・一七三・宮内卿）。ここでは、「かかる」には、「藤浪」の縁で波が寄せかかる意と、「露」の縁で露が置きかかる意が掛かる、と解する。

849 峰の花谷の鶯いま今はとておのがさをまくさまい急いく春成かな

〔通釈〕

峰の桜、谷の鶯は、（春の暮の）今はもうということ、各々それぞれに（帰るのを）急く春であることだな。

〔参考〕

花悔帰根無益悔（はなはねにかへらむことをくゆれどもくゆるにえきなし）鳥期入谷定延期（とりはたに

にいらむことをきすれどもさだめてきをのぶらむ）（和漢朗詠集・春・閏三月・六一・滋藤）

今までに忘れぬ人はよにもあらしおのがさままま年の経ぬれば（伊勢物語・八十六段・一五六・男。新古今

集・恋五・一三六六・読人不知）

〔類歌〕

花鳥の同じ別れにともなはでおのがさままま帰る春かな（後普光園院百首・春・一九。延文百首・春・暮

春・一〇二〇・良基）

夏

850 衣干す時は来ぬとや白雲のそれかとかかる天の香具山あま

【通釈】 夏

(夏になり) 衣を干す時は来たといふのか、白雲がその衣かとかかる天の香具山よ。

【本歌】

春過ぎて夏来にけらし白妙の衣干すてふ天の香具山(新古今集・夏・一七五・持統天皇。万葉集・卷一・雑歌・二八二句現行訓「夏来たるらし」、四句西本願寺本「衣さらせり」、西本願寺本異訓・現行訓「衣乾したり」、五句現行訓「あめのかぐ山」)

【参考】

今朝よりは花とも見えず夏衣たつたの山の峰の白雲(千五百番歌合・夏一・六二五・忠良)

【類歌】

夏衣たつたの山の白雲をしばしは花の形見とも見ん(宝治百首・夏・首夏・八三一・禅信)

夏衣空に干すかと白雲のたなびきわたる天の香具山(沙玉集〔書陵部五〇一・六四四〕・名所の百首詠じて、大通院殿に御点申し侍り・夏・天香九山・一七八)

香具山の岩ほにかくる白雲は天つをとめが夏衣かも(漫吟集・夏・首夏・七三二)

【語釈】

○時は来ぬとや―他歌人の先行例を見ない句だが、宗尊はこれ以前に「待ち侘びし時は来ぬとや天の川去年の渡りにみ舟寄すらむ」(柳葉集・卷二・弘長二年十二月百首歌・七夕・三二〇)と用いている。ここは、「衣」の縁で「来ぬ」に「着ぬ」あるいは「衣(きぬ)」が響くか。○天の香具山―「あめのかぐやま」とも。「香久山」とも書く。大和国の歌枕。奈良県橿原市にある山。畝傍山、耳成山とともに大和三山と言う。

851 行く月も夜越えじとや卯の花の籬の山に影をとむらんよるこ

〔通釈〕

空を行く月も、夜には山を越えまいと、この夕暮に山と見える白い卯の花の咲く籬に、白い光を留めているのだろうか。

〔本歌〕

夕暮の籬は山と見えなむ夜は越えじと宿りとるべく（古今集・離別・人の花山にまうできて、夕さりつ方
帰りなむとしける時によめる・三九二・遍昭）

〔参考〕

いづれをかそれとも分かん卯の花の咲ける垣根を照らす月影（続後撰集・夏・亭子院歌合の時の歌・
一七一・読人不知）

卯の花の籬や山となりぬらん入りぬる月の影ぞ宿れる（大納言為家集・卯花建長五年五月・二九九）

卯の花の籬は雲のいづくとて明けぬる月の影宿すらむ（白河殿七百首・夏・籬卯花・一三五・為家。続古今

集・夏・一九〇）

入る月のおぼろの清水いかにしてつひにすむべき影をとむらん（続古今集・哀傷・〔後鳥羽院を〕大原にを

さめ奉るよし聞こえければ・一四〇七・順徳院）

〔類歌〕

月と見て夜もや越えん夕暮の籬の山に咲ける卯の花（続千載集・雑上・夕卯花を・一六九四・伏見院）
河と見て夜は越えじな卯の花の浪折りかくる里の籬は（宗良親王千首・夏・籬卯花・二〇七）

山とのみ籬の島の見ゆるかな立つ白波の夜越ゆれども（宗良親王千首・雑・名所島・八四三）

卯の花の咲けるあたりや夕暮の籬の山の月と見ゆらん（嘉元百首・夏・卯花・五一八・冬平）

〔補説〕

類歌に挙げた四首の中、冬平詠を除く三首は、本歌の『古今集』遍昭歌を踏まえていよう。伏見院の歌と宗

良親王の一首目は、「卯の花」の「籬」を「月」や「河」に見立てて人が「夜越え」るか否かを言うのであり、詞遣いからも前者から後者への影響関係が想定される。前者は、該歌の「月」を擬人化して「夜越えじ」と言っている趣向から、伏見院がさらに展開させたと見られなくもない。とすれば、関東縁故歌人宗尊から京極派の伏見院を経て南朝の宗良へと繋がる一例ということになる。

852 高砂の松とは言はじ時鳥つれなき色にならひもぞする

〔通釈〕

高砂の松ではないけれども、この辺りの時鳥を待つとは言うまい。松のつれなく変えない色に、時鳥が倣って鳴かずにつれない様子かもしれないから。

〔参考〕

武隈のまつとは言はじ年経ともつれなきものと人もこそ知れ（土御門院御集・詠五首和歌貞応三年正月廿三日・寄松恋・二六二。秋風集・恋上・七五九）

年経てもまつとは誰か植おきしつれなき色に人ならひけり（恋二十五首・寄松・四二六）

有明のつれなく見えし月は出でぬ山時鳥待つ夜ながらに（新古今集・夏・二〇九・良経）

いたづらにねをなくやまの郭公まつにしなればつれなかりけり（新和歌集・夏・鶴岳社十首歌に・九六・時盛）

〔類歌〕

うゑ置きてまつとたのめば郭公つれなき色に音を習ひける（芳雲集・雑・松ある家に時鳥まつ所・五一三）

〔語釈〕

○高砂の松とは言はじ―「高砂の松」から「まつ」を掛詞に「待つとは言はじ」に鎖る。「高砂の」を「まつ」の序詞と見ることできるが、「高砂の松」と「時鳥」を詠み併せる先例に、「追風にもどるもたゆし郭公いざ高砂の松の梢に」(散木奇歌集・夏・船中郭公・二四九。和歌一字抄・中・三八)や「高砂の松に鳴きけり時鳥この湊にぞ船はとどめん」(和歌一字抄・路徑・海路時鳥・五三七・無名)があるので、有意に解する。「高砂」は、砂丘・砂山の意もあるが、「松」を言う場合は、播磨国の歌枕と見るのが穩当。播磨国加古郡(現兵庫県高砂市)の加古川の河口に位置する。○色―「松」の常緑の色に、「時鳥」の様子・気配の意を重ねる。

〔補説〕

なかなか鳴かない「時鳥」だが、それを「待つとは言はじ」とするのは、やや本意からはずれるが、むしろ宗尊らしい、「時鳥」の歌の類型と通念を踏まえきつた詠みぶりと言えなくもない。

宗尊はこれ以前に、「小塩山まつにつれなき時鳥神代もかくやねを忍びけむ」(柳葉集・卷五・文永二年潤四月三百六十首歌・夏・六八二)という、上句が該歌と似た趣向の歌を詠んでいる。

853

時鳥ときどりいざよふ月の雲間よりおぼろけならぬ初音鳴くなり

〔通釈〕

時鳥はぐずぐずと鳴かずにいる(けれど)、ぐずぐずとしている月が雲間からぼんやりとはなく見えて、それとともに雲間からはつきりと初音を鳴くのが聞こえるよ。

〔参考〕

木綿しでや茂き木の間をもる月のおぼろけならで見えし影かは(後拾遺集・雑五・一一一・六条齋院宣旨)
明けはつる名残よいかに時鳥月にいざよふ山の初声(千五百番歌合・夏一・七三一・家長)

いざよひの山の端出づる杜鵑待つも惜しむも夏の夜の月（洞院撰政治家百首・夏・郭公・三五四・範宗）

〔語釈〕

○時鳥いざよふ月の雲間よりおぼろけならぬ——「時鳥いざよふ」から「いざよふ月」に鎖る。さらに、「いざよふ月の雲間より」が有意の序のように働き、「おぼろけならぬ（初音）」を起す。また、「雲間より」は「鳴くなり」にもかかる。なお、「雲間」に「いざよふ月」は、宗尊の父後嵯峨院にも「雲間よりいざよふ月にあくがれていとど西にも行く心かな」（新拾遺集・釈教・月夜極楽を觀ぜさせたまうて・一五一七）の作例がある。

〔補説〕

「雲間」の「月」と「時鳥」の「初音」を詠じる。宗尊はこれ以前に、「待たれつる初音鳴くなり郭公雲間の月の有明の空」（柳葉集・弘長二年十二月百首歌・郭公・三一三一）とも詠んでいる。この類型の後出例には、後期京極派の花園院に「待ち出づる雲間の月に時鳥惜しむ初音もえやは忍ばぬ」（新千載集・夏・二三〇・花園院）があり、南朝の師兼にも「忍ぶべき初音なりとも郭公雲間の月に物忘れせよ」（新葉集・夏・一七七・師兼。宗良親王千首・師兼卿・一〇一八）がある。

854

時鳥鳴く音に濡るる袂かなおのが涙や我に貸すらむ

〔通釈〕

時鳥の鳴く声に、泣く涙で濡れる袂であることだな。時鳥が自分の涙を、私に貸しているのだろうか。

〔本歌〕

声はして涙は見えぬ郭公我が衣手の漬つを借らなむ（古今集・夏・一四九・読人不知）

〔参考〕

時鳥涙はなれに声はわれにたがひに貸して幾世経ぬらむ（千五百番歌合・夏二・七八四・慈円）
鶯は花の袂にかくろへて人の袖まで涙貸すらむ（拾玉集・〔四季題百首〕・鳥・二二一〇）

聞く人の袖にゆづりて時鳥鳴く音に落つる涙やはある（秋篠月清集・夏・郭公・一〇七五）
 露けさもおのが涙か秋の田のいなおほせ鳥は鳴かずもあらなむ（新撰六帖・第二・いなおほせ鳥・六五七・
 為家）

尋ね来て袖ぞ濡れぬる時鳥おのが涙か森の雫か（新和歌集・夏・一一一・藤原重繼）

聞けばまづ袖こそ濡るれ時鳥おのれや人に涙貸すらん（続千載集・雑上・一七一・長経）

時鳥聞くより袖の濡れそふはおのが涙や吾に貸すらん（漫吟集・夏上・郭公・八〇〇）

〔語釈〕 ○鳴く音に濡るる袂かな―例を見ない措辞。「鳴く」に「涙」の縁で「泣く」が掛かる。なお、「時鳥」の

「鳴く音」で涙が袂や袖を濡らすことを言う早い例には、俊頼の「いとどしく袖のしほるる郭公なく音や恋のしるべなるらん」（散木奇歌集・夏・郭公催恋・二六〇）がある。

〔補説〕 『古今集』の「声はして」の歌を本歌に、「涙」の有無と、「時鳥」と自分の袖（衣手・袖）の間の貸借関係を逆転させた一首と解する。参考に挙げた歌々にも学んでいたことが反映したとも思しい。

類歌の後者、契沖の一首は該歌に酷似する。偶合か模倣かは、契沖の詠作全体の検証の中で、改めて見定めるべきであろう。

855 さ^は牡鹿の妻^と問ふ秋^{いそ}や急^をぐらん岡^を辺^への早^を田^と早^を苗^ととるらん

〔本文〕 ○岡辺の―底本「をとへの」を、一首の内容と歌詞の整合から、字母「止」の「と」は「可」の「か」の誤写と判断して、「岡辺の」に改める。○早苗―底本「さるへ」を、一首の内容と歌詞の合理から、字母「留」の

「る」は「奈」の「な」の誤字と判断して、「早苗」に改める。

〔通釈〕

牡鹿が妻を求め問う秋に向かつて、今急いでいるのだろうか。だから、岡の辺りの早稲田の早苗を、取り植えて
いるのだろうか。

〔参考〕

郭公つまごひすれば岡べなる早田は今も早苗とるらし（大納言為家集・文永八年四月四日、続五十首、寂恵
始入来・岡郭公・三三三三）

五月待つ早田の早苗老いぬとやおりたつ田子の今日急ぐらん（宝治百首・夏・早苗得・九三六・有教）
急ぐべき比は来にけり岡べなる早田の早苗今やとるらん（百首歌合建長八年・夏・八四七・鷹司院帥）

〔類歌〕

今日もまたおりたつ田子ぞ急ぐなる早田の早苗おひや過ぐらむ（政範集・はらからどもあつまりて三百六十
首の歌よみ侍りし時・忽早苗・一九二）

ほかよりもまづおり立ちて岡辺なる早田もしるく早苗取るなり（草庵集・梶井宮にて題を探りて歌合せられ
しとき、早苗・三〇八）

取り暮らす早苗もわきて五月雨のふるの早田や先づ急ぐらん（永享百首・夏・早苗・二四八・公保）

来む秋の早田もしるく岡べより我が里かけて早苗とるなり（通勝集・住吉社法楽百首 天正十八年十一月廿
八日 卅日終之・早苗・三二七）

〔語釈〕

○さ牡鹿の妻問ふ秋や急ぐらん―「秋や急ぐらん」と類似の先行例に、「真木の戸をあくれば春や急ぐらん
袂にさえし風ゆるぶなり」（殷富門院大輔集・春・一）があるが、この「春や急ぐらん」は「春」が季節の歩みを
早めるのだろうか、といった趣意であろう。後出の「もろともに越路の春や急ぐらん立ち遅れじと帰る雁がね」

(南朝五百番歌合・春六・一一五・弁内侍)の上句は、一緒に(秋にやって来た)春の越路を急いでいるのだろうか、という趣意であろう。該歌の場合、季節は夏であるから、詞足らずの感がある。やがて来るはずの、牡鹿が妻を問い求める秋に対して、今急いでいるのだろうか、といった趣旨に解しておく。○早田―わさだ。「早稲田」とも書く。早い時期に実る稲の田。

〔補説〕「早田」の「早苗」を詠むのは、白河院時代の「来てみればふるの早田の早苗をも今日ひきつれて植うるなりけり」(鳥羽殿北面歌合・早苗・三四・重資)が早い。その後、俊成が「種まきし早田の早苗植えてけりいつ秋風の吹かんとすらん」(俊成五社百首・住吉社・夏・早苗・三二六)と、来たるべき「秋風」を詠み合わせ、恐らくはその影響下に家隆が「岡辺なる早田の穂向けうちなびき昨日の早苗秋風ぞ吹く」(道助法親王家五十首・秋・早秋・四二五・家隆)と、秋季に展開する。この俊成や家隆の歌を意識しているようにも思われるが、より直接には宗尊は、該歌の三月ほど前に詠まれた参考の為家の「郭公つまごひすれば」の歌に触発されたのではないか。また、「早田」の「早苗」を「取る」のは、他の田のそれに比較して夏のより早い時期が本意であろうから、参考の有教や鷹司院師の歌のように「急ぐ」と詠まれるのが当然で、該歌もそれに沿っている。

なお、類歌の政範の一首は、有教詠に倣つていようか。

856

橘たちばなの昔むかし忘れぬわす句くまひひまでふる古ふるきを慕したふ御代しや知るらん

〔通釈〕

橘の昔を忘れない句いまでが、古いことを思慕する御代を分かっているのだろうか。

【参考】

跡とめて古きを慕ふ世ならなむ今もありへば昔なるべし（新勅撰集・雑二・高倉院御時、つたへそうせさずること侍りけるに、書き添へて侍りける・一一五三・西行）

昔知る花橘のかをる夜は古き思ひに濡るる袖かな（万代集・夏・七〇八・中原師季）

昔見ぬ花橘の匂ひまで玉のみぎりの荒れまくも惜し（壬二集・夏・遠所にて俊頼朝臣影供侍りしに・盧橘・二二三三・玉吟集〔高松宮本〕・一八八四、三句「匂ふまで」）

月影に昔忘れぬ面影のげに橘は袖の香ぞする（道助法親王家五十首・夏・夜盧橘・三七〇・家長）

【類歌】

いかならん世にか忘れん橘の匂ひも深き今朝の情けを（中務内侍日記・一六・左中将）

【語釈】

○古きを慕ふ―底本「ふるき」の「る」（字母「留」）は「か」（字母「可」）にも見えるが、「る」に読んでおく。西行は参考に掲げた歌の外に、「いそのかみ古きを慕ふ世なりせば荒れたる宿に人住みなまし」（西行法師家集・雑・五七一）とも詠んでいる。宗尊はこれらに学んだのであろうか。○御代や知るらむ―837番歌にも用いている。

【補説】

大きな枠組みでは、「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」（古今集・夏・一三九・読人不知）を初めとする、昔を想起させる「橘（花橘）」の類型の中にある一首である。

857

筑摩江の沼江の水におり立ちて人苦しめの菖蒲引くらし

【通釈】

筑摩江の沼江の水のところ降り立って、人を苦しめるといふ菖蒲を引くらしいよ。

〔本歌〕 近江にかありといふなるみくりくる人苦しめの筑摩江の沼（後拾遺集・恋一・六四四・道信）

〔参考〕 筑摩江の沼江の水や寒からし人苦しめのあやめ引くなり（宗尊親王百五十番歌合弘長元年・夏・六六・公朝）

夫木抄・夏一・中務卿親王家歌合・昌蒲・二六三八、三句「ふかかりし」

〔語釈〕 ○筑摩江―近江国の歌枕。現滋賀県米原市朝妻筑摩辺りの琵琶湖の入り江を言う。○沼江の水―底本「ぬま

え」の「ま」（字母「万」）は「さ」（字母「左」）にも見えるが、「ま」と読んでおく。歌語としての用例は少ない。

『為忠家初度百首』（春・沼水杜若）の為業の「春深み沼江の水に影見えて花咲きにける杜若かな」（一四三）が早い例。同百首に参加していた俊成に「春深き沼江の水の岩かきになほかきこむる杜若かな」（俊成五社百首・日吉社・春・杜若・四一七）の作がある。○人苦しめ―本歌の詞を取るが、本歌は「みくりくる」（三稜草を手繰る）が序の働きをして「繰る」と同音の「苦」を起こしているので、こゝも「苦」に「繰る」が響く。

〔補説〕 『後拾遺集』の道信詠を本歌にした、参考の公朝の歌に倣った一首であろう。また、公朝の歌も該歌も、「筑摩江の底の深さをよそながら引ける菖蒲の根にて知るかな」（後拾遺集・夏・二二一・良暹）や「いづことぞ待ちし沼江の菖蒲草今日こそ長きためしには引け」（寛喜女御入内和歌・五月・沼江昌蒲過に・三五・定家。拾遺愚草・二一〇〇、初句「いつかとぞ」）にも負うところがあつたかもしれない。いずれにせよ、將軍であつた宗尊の、関東の僧界と歌壇に重きを為した公朝の歌への関心が見て取れる。

858 ぬぐ摘むと濡れしにまさる袂かな山田の沢の五月雨の比

〔通釈〕

(あの古歌のように人の為に) えぐを摘むといって濡れたのにまさる、この袂であることだな。山にある田の沢の五月雨が降るこの頃よ。

〔本歌〕 君がため山田の沢にえぐ摘むと濡れにし袖は今も乾かず(後撰集・春上・三七・読人不知)

〔参考〕 小山田に引くしめ繩のうちはへて朽ちやしぬらむ五月雨の比(新古今集・夏・二二六・良経)

早苗とる山田の水やまさるらん空にまかする五月雨の頃(為家千首・夏・二二二)

〔語釈〕 ○多ぐー本歌の異伝とも言える『万葉集』の「君がため山田の沢にえぐ摘むと雪消の水に裳の裾濡れぬ」

(巻十・春雑歌・一八三九・作者未詳) 以来の語。『角川古語大辞典』が言うとおり、①芹の別名、②黒慈姑の古名、③若菜の芽を出したばかりをいう、の三説が、中古以来行われ議論されてきているが、「摘む」とあることから②は排除され、③はこれを否定する形で見える説であるので、①についておく。

859 みじか夜は山の端遠き月影の有明ならぬしのめぞなき

〔通釈〕

夏の短い夜は、(沈み入る西の) 山の端がまだ遠い月が、(明け方にも残る) 有明の月ではない早朝はないよ。

〔参考〕 みじか夜の空行く月のやすらひをさそひ残して明くるしのめ(弘長百首・夏・夏月・一七一・家良)

卯の花の咲けるあたりを過ぎ行けば有明ならぬ暁ぞなき(宗尊親王百五十番歌合・夏・七八・行円)

〔類歌〕 いづかたも山の端遠きなかぞらの雲間に明くるみじか夜の月(新千載集・夏・嘉元元年伏見院に三十首歌奉

りける時・夏月・二九四・冬平)

有明の月のままにて山の端の白むも見えぬしののめの空（他阿上人集・同〔正和〕四年、為相卿合点の歌・秋・四六〇）

〔語釈〕 ○しののめ―東の空が白む夜明け方。

〔補説〕 参考の兩首に做ったと思しい歌であるが、家隆の「みじか夜のまだ臥しなれぬ蘆の屋のつまもあらはに明くるしののめ」（新勅撰集・雑四・二二八四。最勝四天王院和歌・蘆屋里撰津・七七。家隆卿百番自歌合・三九）や順徳院の「夏深き板井の水の岩枕秋風ならぬ暁ぞなき」（統拾遺集・夏・納涼の心を・二二二・順徳院）等も、宗尊の視野に入っていたであろう。

860 ひまのなき庭の夏草いにしへの我が人言「ことかたみの形見みにぞ見る

〔通釈〕

隙間のないびつしりと生い茂った庭の夏草は、昔の絶え間のなかった私の噂の形見として見るよ。

〔本歌〕 人言は夏野の草の繁くとも君と我としたづさはりなば（拾遺集・恋三・八二七・人麿。原歌万葉集・卷十・

夏相聞・寄草・一九八三・作者未詳）

〔参考〕 朽ちもせぬその名ばかりをとどめおきて枯野の薄形見にぞ見る（新古今集・哀傷・七九三・西行）

〔語釈〕 ○我が人言―私に関する他の人の言葉・評判（噂）。底本「二こと」を、本歌と一首の内容から、「人言」に解して、表記を改めた。

〔補説〕 778番歌「繁からし我が人言は昔にて露のみ深き宿の夏草」とは同工異曲。

861 忘れめやあやしき垣かきのたそかれに一房折ふさりし夕顔かほの花はな

〔通釈〕

忘れようか（いや忘れないよ）。みすばらしい垣根のたそがれ時に、一房折ったあの夕顔の花を。

〔本説・本歌〕

「遠方人にももの申す」と、ひとりごちたまふを、御隨身ついで、「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申し侍る。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になむ咲き侍りける」と申す。げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、このもかのもあやしきうちよるほひて、むねむねしからぬ軒のつまなどにはひまつはれたるを、「口惜しの花の契りや、一房折りて参れ」と、のたまへば、このおしあげたる門に入りて折る。（中略）御畳紙に、いたうあらぬさまに書きかへたまひて、

寄りてこそそれかとも見めたそかれにほのぼの見つる花の夕顔

ありつる御隨身して遣はず。（源氏物語・夕顔。CD-ROM角川古典大観に拠る）

〔類歌〕

忘れぬは形見ばかりをとどめおきてはかなく消えし夕顔の露（如願法師集・寄源氏恋を・六三三）

〔補説〕

本説・本歌の中略の前までは、光源氏が六条御息所を訪れる途次、五条の大式乳母の病氣を見舞った折に、女（夕顔）のいる隣家の様子が気に掛かり、そこに咲く花（夕顔）をめぐって隨身とやりとりする場面である。この後、女の家の子童が源氏の隨身に白い扇に載せて花を渡し、それが惟光を介して源氏の手に入る。そして、「惟光に紙燭召して、ありつる扇御覧ずれば、もてならしたる移り香、いとしみ深うなつかしくて、をかしうすさみ書きたり。心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花、そこはかとなく書きまぎらはしたるも、あてはかにゆゑづきたれば、いと思ひのほかにかしうおぼえたまふ。」と、女の贈歌があり、それに返したのが、中略の

後の源氏の歌である。この一連の場面を念頭に置き、光源氏が回想する体で詠じた作であろう。

862 御垣守衛士の焚く火の数添ひて玉敷く庭に飛ぶ蛸かな

〔通釈〕

内裏の御垣守である衛士が焚く火の数がそこに付け加わって、玉を敷きつめた庭に飛ぶ、蛸（の火）であることだ。
 だ。な。

〔本歌〕 御垣守衛士の焚く火の夜は燃え昼は消えつつものをこそ思へ（詞花集・恋上・二二五・能宣）

晴るる夜の星か河辺の蛸かもわが住むかたの海人の焚く火か（伊勢物語・八十七段・一六〇・主の男。新古今集・雑中・一五九一・業平）

〔参考〕 光添ふ玉しく庭のともし火に面影見ゆる星逢ひの空（宝治百首・秋・乞巧奠・一二六三・為氏）

863 雲間より日影涼しくうつろひて夕立晴るる遠の山の端

〔本文〕 ○遠の山の端―底本「遠のとをやまの」(「とを」の各字中に見消ちして「やま」の下右傍に小字で「のは」とあり。

〔通釈〕

雲間から日の光が涼しい感じで照り映えて、夕立が晴れゆく遠くの山の端よ。

〔参考〕

山本の遠の日影はさだかにてかたへ涼しき夕立の空（宝治百首・夏・夕立・一一二八・為家。風雅集・夏・四〇六）

この里は雲間も見えぬ夕立に日影いざよふ遠の山の端（宝治百首・夏・夕立・一一三〇・実雄）

日影さす方も涼しくなりにけり山のあなたに夕立の雲（宗尊親王百五十番歌合弘長元年・夏・一一二・重教）

〔類歌〕

村時雨過ぎゆく峰の雲間より日影うつろふ遠の山もと（玉葉集・冬・八四三・公相）

一むらの時雨るる雲はかつ晴れて日影にかはる遠の山の端（俊光集・冬・時雨易過・三四三）

さらにまた日影うつろふ竹の葉に涼しさ見ゆる夕立の跡（文保百首・夏・六二九・実泰。風雅集・夏・

四一五）

〔補説〕

参考に挙げた三首の中でも特に宗尊親王幕下の歌人藤原重教の歌に類似する。宗尊がこの歌を見知っていたことは疑いないが、やや説明的な重教詠に比すると、該歌は共感的であり、「日影涼しくうつろひて」の措辞が新鮮である。

本抄の類詠「見渡せば雲間の日影うつろひてむらむらかはる山の色かな」（巻四・文永六年四月廿八日、柿本影前にて講じ侍りし百首歌・雑・676）が『風雅集』（雑中・一六四八）に取られていることから、また、類歌に挙げた歌との類似からも、該歌は気象と光彩の変化を共感覚を交えて叙する京極派の好尚に通う一首である。

864

浦梨の片枝涼しく吹く風におふの浦人御祈すらしも

〔通釈〕

〔生ふ〕の浦に生える梨の片方の枝を涼しく吹く風に、「おふ」の浦人は襖ぎをするらしいな。

〔本歌〕

をふの浦に片枝さし覆ひなる梨のなりもならずも寝てかたらはむ（古今集・東歌・伊勢うた・一〇九九）

〔参考〕

みそぎする汀に風の涼しきは一夜をこめて秋や来ぬらん（金葉集・夏・一五五・顕隆）

片枝さをふの浦梨初秋になりもならずも風ぞ身にしむ（新古今集・夏・二八一・宮内卿）

〔語釈〕

○おふの浦人―「おふの浦」は、伊勢国の歌枕というが所在は不明。「生ふの浦」と書く説があるが、仮名遣いは「おふ」か「をふ」か、確説を見ない。志摩国（現三重県鳥羽市）の「麻生の浦」に比定する説も行われている。いずれにせよ、「梨」の縁で「生ふ」が掛かる。○御祓―みそぎ、禊ぎ。身に穢れがある時や神事祭祀の前に、水で汚穢を浄める行為。ここは、陰暦六月三十日に半年間の穢れを払う「夏越しの祓へ」のそれ。

秋

865 打ちなびき今吹きぬらし天の河水陰草の秋の初風

〔通釈〕 秋

草が靡き、秋となった今まさに風が吹いたらしい。天の川の水陰草を靡かせて吹く秋の初風よ。

〔本歌〕

天の川水陰草の秋風になびくを見れば時は来ぬらし（万葉集・卷十・秋雑歌・七夕・二〇一三・作者未詳）

五代集歌枕・あまのがは・一二八九）

〔参考〕

白妙の水陰草やなびくらん天の河原の秋の初風（院御歌合宝治元年・初秋風・一〇一・経朝）

うちなびき秋は来にけり花薄ほさかの駒も今や引くらん（現存六帖抜粹本・こまひき・三四・家良か。夫木抄・秋二・薄・四三七六・家良）

〔語釈〕

○今吹きぬらし―七夕を題とする本歌の「時は来ぬらし」を承けて言う。従って「今」は、七月七日となる時である初秋ということ。○水陰草―水辺に生える草の意という。万葉以来、「天の川」の景物として詠まれる。

866

唐衣紐解きかけて七夕の寝る夜は年にただ一夜のみ

〔通釈〕

唐衣の紐を解き始めて、七夕の両星が共に寝る夜は、年にただ一夜のみなのだ。

〔本歌〕

玉鬢絶えぬものからさ寝らくは年の渡りにただ一夜のみ（万葉集・卷十・秋雑歌・二〇七八・作者未詳。古今六帖・第一・七日の夜・二三八、三句「さ寝る夜は」。綺語抄・二二一、四二二、四八三、三句同上。異伝後撰集・秋・二三四・読人不知、三句「あらたまの」）

〔語釈〕

○唐衣―「紐」の枕詞だが、唐風の着物の意が活きる。○紐解きかけて―新奇な句。「かけて」を動作をし始める意に解したが、後出の例には、「誰か来ん庭の柳のまゆね垣紐ときかけて春風ぞ吹く」（文保百首・春・三〇〇四・定為）とあるのに照らすと、着物の紐を解いてそれを何かに掛ける意にも解し得るか。

867

袖濡らす秋の涙の夕暮をまづ知る物や萩の上風

〔通釈〕

袖を濡らす秋の涙の夕暮を、先ず最初に知ってそれをもたらずものは、萩を吹く上風であるのかよ。

〔本歌〕

世の中の憂きも辛きもつけなくにまづ知る物は涙なりけり（古今集・雑下・九四一・読人不知）

〔参考〕

秋になる野辺のけしきのあはれをも先づ知る物は萩の上風（正治初度百首・秋・一一四二・俊成）

萩の葉に吹きと吹きぬる秋風の涙さそはぬ夕暮ぞなき（新勅撰集・秋上・二二四・公経）

夕暮はまがきの萩に吹く風の目に見ぬ秋を知る涙かな（土御門院百首・萩・四三。秋風集・秋上・二五三・

土御門院）

〔類歌〕

萩の葉の音にたてぬ秋風のまづ知る物は寢覚めなりけり（新三井集・秋上・一七九・公朝）

〔語釈〕

○秋の涙―鎌倉時代初めから詠まれる詞。宗尊は該歌以前にも「干しあへぬ秋の涙を飽かずとや袖に時雨れ

て冬の来ぬらん」（瓊玉集・冬・初冬の心を・二七四）と用いている。

〔補説〕

より直接には『古今集』歌を本歌にして、参考の俊成詠に倣っていようか。一首の想念上は、参考の後者二

首にも通うが、大きな枠組みでは「秋はなほ夕まぐれこそただならね萩の上風萩の下露」（和漢朗詠集・秋・秋興・

二二九・義孝）の言う「萩の上風」の通念の中にあり、「物ごとく秋のけしきはしるけれどまづ身にしむは萩の上

風」（千載集・秋上・二三三・行宗）の類型に連なる一首でもある。

868 うつり行く身のみふる枝の萩が花本の心の秋は忘れず

〔通釈〕

変わってゆくこの身だけが月日をやり過ごし、古枝の萩の花は以前のままの心で、咲く秋は忘れないのだ。

〔本歌〕 秋萩の古枝に咲ける花見れば本の心は忘れざりけり（古今集・秋上・二一九・躬恒）

〔語釈〕 ○身のみふる枝の―「身のみ経る」から「ふる」を掛詞に「古枝の」に鎖る。類例に、阿仏尼の「憂き人の種まく草もあるものを身のみふるやの忍ぶ苦しき」（安嘉門院四条五百首・鹿島社・片思・四八五）がある。

869 春日野や若紫の袖見えて尾花の乱れ秋風ぞ吹く

〔通釈〕

春日野よ。（あの古歌の）若々しい紫草のような若い女の袖が見えて、「しのぶの乱れ」ならず私の心の乱れのよ
うに尾花の乱れをさそう、秋風が吹く。

〔本歌〕 春日野の若紫の摺り衣しのぶの乱れ限り知られず（伊勢物語・一段・一・男。新古今集・恋一・九九四・業
平）

〔参考〕 夕立の雨うち降れば春日野の尾花が末の白露思ほゆ（万葉集・卷十六・有由縁并雑歌・三八一九・小鯛王。

万葉集・卷十・秋雑歌・二二六九・作者未詳、二句「雨降るごとにへ一云うちふれば」四句「尾花が上
の」。古今六帖・第一・ゆふだち・五一〇、下旬「尾花が上の白露は思ほゆ」。五代集歌枕・六六九、四句

「尾花が上の」

穂に出づる野辺の尾花もありしより乱れまさりて秋風ぞ吹く（百首歌合建長八年・秋・二二二・鷹司院帥）

〔語釈〕 ○春日野―大和国の歌枕。現奈良市の春日山の南東麓一帯に広がる野。「尾花」は必ずしもその景物とは言

えず、参考の万葉歌に拠ったと見られる。○尾花の乱れ―本歌を承けて、かつ「若紫の袖」の縁で、自分の心の「乱れ」を掛ける。

〔補説〕「春日野」の「若紫」と「尾花」の詠み併せは例を見ない。「若紫の袖見えて」「尾花の乱れ」も新奇な措辞である。一首の景趣は不分明だが、春日野を吹く秋風に、業平の故事を思い起こさせる若紫即ち若い女の袖が鱗り、自分の心が乱れるように、尾花が乱れているさまを叙したか。

870 乱れじな道ある御代の蘭(ふぢばかま)いかに吹くとも野辺への秋風なせ

〔通釈〕

乱れるまいよ。正しい道がある御代に咲く藤袴は、野辺の秋風がどのように吹くとしても。(天子の正しい政道の下にある私は、どのような邪風にも乱れるまいよ)。

〔本文〕 扶桑豈無影乎 (ふさうあにかげなからむや) 浮雲掩而忽昏 (ふうんおほてたちまちにくらし) 叢蘭豈不芳乎 (そうらんあにかうばしからざらむや) 秋風吹而先敗 (あきのかぜふいてまづやぶる) (和漢朗詠集・

蘭・菟裘賦・二八七・兼明)

〔参考〕 近江のや坂田の稲を掛け積みて道ある御代の初めにぞ春く (新古今集・賀・仁安元年、大嘗会悠紀歌たてまつりけるに、稻春歌・七五三)

藤袴主は誰ともしら露のこぼれてにはふ野辺の秋風 (新古今集・秋上・蘭をよめる・三三九・公猷)

〔語釈〕 ○蘭―藤袴 (フヂバカマ)。「蘭」は漢名由来の表記。キク科の多年草。いわゆる秋の七草の一つ。一メートル

ル程の高さで葉は対生し、秋に淡紫色の小花をつける。○いかに吹くとも―次句の「野辺の秋風」と倒置。「数数に思ひしことは音にたてじかよふ松風はいかに吹くとも」(後鳥羽院御集・建仁元年九月五十首御会・寄琴恋・一一九七。仙洞句題五十首・二八八、下句「かよふ松風いかに吹くらむ」等に学ぶか。

〔補説〕 本文の兼明の詩句は、「佞臣のために天子の聖明も自己の忠誠も遮られてしまふ嘆きを述べたもの」で「太陽を天子に、浮雲・秋風を佞臣藤原兼通に、作者兼明親王自身を叢蘭に擬した」(新潮日本古典集成『和漢朗詠集』大曾根章介頭注)という。宗尊はこれを踏まえ、同じ中書王の先人兼明(蘭)に自らを重ねつつ、それを超えて、亀山天皇の代の自分は、佞臣奸物や邪心偏見には屈しないのだ、と宣している趣なのであろう。波乱の人生を経た上での、一種の覚悟あるいは諦観のようなものが窺われる。同時に、そこには弟の亀山天皇の治世に対する讚美を見るべきなのであろう。『正徹物語』が「宗尊親王は四季の歌にも、良もすれば述懐を詠み給ひしを難に申しける也。物哀れの体は歌人の必定する所也。此の体は好みて詠まば、さこそあらんずれども、生得の口つきにてある也」(日本古典文学大系本)と言うとおり、四季歌に述懐を詠じる宗尊詠の典型でもある。

871 さらにだに夕暮待たぬ露おきてあだし心に咲ける朝顔かは

〔通釈〕

そうでなくてさえ夕暮を待たないで置く露、それをも措いて、浮気な心そのままに朝早くから咲いている朝顔よ。

〔本歌〕 君をおきてあだし心をわがもたば末の松山浪も越えなむ(古今集・東歌・陸奥歌・一〇九三)

〔参考〕 夕暮のさびしきものは槿の花を頼める宿にぞありける(後撰集・雑四・二二八八・読人不知)

〔語釈〕

○夕暮待たぬ―「長き日も夕暮待たぬ山陰になほ空とづる五月雨の比」（東撰六帖抜粹本・夏・五月雨・一五三・親行）が先行例。○露おきて―「露」が「置いて」の意に、「あだし心に」の縁で「措いて」（それを差し措いて）の意が掛かる。○朝顔―いわゆる秋の七草の「あさがほ」は、木槿、桔梗、昼顔等の諸説があり、一般的な特定は難しいが、ここは一首の内容から、牽牛子即ち今日言うアサガオであろう。

872

野も山も色に出でよと置^をく露や思ふに負^まくる涙^{なみだ}なるらん

〔通釈〕

野も山も、秋の色を表に出せと置く露は、それを恋しく思うことに負けて流れる涙であるのだろうか。

〔本歌〕

思ふには忍ぶる事ぞ負けにける色には出でじと思ひしものを（古今集・恋一・五〇三・読人不知）

〔参考〕

野も山も繁りあひぬる夏なれど人のつらさは言の葉もなし（拾遺集・恋三・八二八・読人不知）

色に出でて恋すてふ名ぞ立ちぬべき涙にそむる袖の濃ければ（後撰集・恋一・五八〇・読人不知）

よしさらば今は忍ばで恋ひ死なん思ふに負けし名にだにも立て（六百番歌合・恋・顕恋・七二七・定家）

枯れねただその名もよしや忍ぶ草思ふに負けば人もこそ知れ（宝治百首・恋・寄草恋・二八六〇・為氏。現

存六帖・しのぶぐさ・一八七）

〔補説〕

「思ふに負くる」の句は、本歌の上句の縮約だが、参考の定家詠や為氏詠も宗尊の視野に入っていたであろう。該歌以前に、定家詠と同じ「顕恋」題で、宗尊は「つつめども人目に余る涙かな思ふに負くる心よわさは」

（柳葉集・巻四・〔文永元年六月十七日庚申百番自歌合〕・恋・顕恋・五一八）と詠んでいる。

873 寝ねずこそ妻恋ひすらし小倉山今宵も聞けばざ牡鹿の声

〔通釈〕

寝ないで、妻を恋慕っているらしいよ。小倉山で今宵もまた聞いてみると、それは牡鹿の声だ。

〔本歌〕

夕されば小倉の山に鳴く鹿の今宵は鳴かず寝ねにけらしも（万葉集・卷八・秋雑歌・一五一一・岡本天皇。
古今六帖・第二・しか・九三一・作者未詳。五代集歌枕・一。古来風体抄・九一。雲葉集・秋上・

四五四・読人不知。続古今集・秋下・四四四・舒明天皇）

秋萩の散りゆく見ればいふかしみ妻恋ひすらし牡鹿鳴くも（万葉集・卷十・秋雑歌・二二五〇・作者未詳）

〔参考〕

あしびきの山のしづくに立ち濡れて妻恋ひすらし鹿ぞ鳴くなる（続後撰集・秋上・三〇一・家隆）

秋風に妻恋ひすらしあしひきの山の尾上のさ牡鹿の声（続後撰集・秋上・三〇二・良実）

夜もすがらいかななる鹿の妻恋ひてとこの山辺に寝ねず鳴くらん（夫木抄・秋三・鹿・保延元年八月家歌合、

鹿・四六二九・家成）

〔類歌〕

いかばかり憂き妻恋ひにさ牡鹿の今宵も寝ねずこころ鳴くらん（靈元法皇御集・十首享保十五年三月十八日柿本社
法案於鎮守拜殿講之・夜鹿・九九二）

〔語釈〕

○小倉山―山城国の歌枕。現京都市右京区嵯峨、大堰川を挟んで嵐山に対する小山。

〔補説〕

下句の類型は、早く「いをしねで夜ごとに聞けばあはれにも鳴きまさるかな鈴虫の声」（和泉式部集・

四七〇）があり、宗尊の同時代には「今更におどろかれぬる寢覚めかな今年も聞けば初雁の声」（宝治百首・秋・初雁・一四〇六・隆親）が見える。

874 初雁も鳴きこそ渡れ吹く風の身にしむばかり秋の憂ければ

〔通釈〕

初雁も鳴いて次々と渡って来るのだ、私が泣き続けるように。吹く風が身にしみるほどに、秋が憂く辛いので。

〔本歌〕

初雁のなきこそ渡れ世の中の人の心の秋し憂ければ（古今集・恋五・八〇四・貫之）
刈りて干す山田の稲のこきたれてなきこそ渡れ秋の憂ければ（古今集・雑上・九三二・是則）

〔参考〕

憂きことを思ひつらねて雁がねのなきこそ渡れ秋の夜な夜な（古今集・秋上・二一三・躬恒）
月はよしはげしき風の音さへぞ身にしむばかり秋は悲しき（後拾遺集・秋下・三三九・齋院中務。大齋院御集・一一七・中務）

秋吹くはいかなる色の風なれば身にしむばかりあはれなるらん（詞花集・秋・一〇九・和泉式部集・かぜ・一三二、八六二重出。興風集・五四）

秋来てはいくかもあらじを吹く風の身にしむばかりなりにけるかな（続古今集・秋上・秋の初めの歌・二八八・式子）

〔語釈〕

○鳴き―「身にしむ」「憂ければ」の縁で「泣き」が掛かる。例えば、本歌の是則詠を踏まえた『堀河百首』の基俊詠「きりぎりす秋の憂ければ我もさぞ長き夜すがら鳴きあかしつる」（秋・虫・八二七）と同様。○渡れ―

雁が渡つて来る意に、(鳴き・泣き) 続ける意が掛かる。

〔補説〕『古今集』歌両首を本歌にするが、参考に挙げた躬恒詠も意識するか。

ちなみに、参考に挙げた式子詠は、家集(萱斎院御集・三四四)の「雖入勅撰不見家集歌」では、「続古」の集付で、詞書を「建長三年影供歌合に」とする。『続古今集』では、式子詠の二首前(二八六)にある実氏詠「白露の玉敷く小野の浅茅原風よりさきに秋は来にけり」の詞書「建長三年影供歌合に」を誤ったものである(二八七公基詠には詞書無し)。とすると、式子内親王家集のこの部分の編纂者が単に見誤ったか、編纂者が用いた『続古今集』が式子詠に詞書「秋の初めの歌」が付されていない本文であったか、ということになるのか。

875 宵よひよくひの関守もなき山の端はを我が通ちひ路と出いづる月影かげ

〔通釈〕

宵宵ごとの関守もない山の稜線を、自分の通う道だとばかりに出る月よ。

〔本歌〕 人知れぬ我が通ひ路の関守は宵宵ごとにも寝ななむ(古今集・恋三・六三二・業平。伊勢物語・五段・

六・男)

〔語釈〕 ○我が通ひ路と―この句形は、「秋かけてやや露深き篠薄我が通ひ路と誰か分くらん」(新撰六帖・第六・し

のすすき・一九七九・信実)が早く、「いつまでか我が通ひ路と恨みけん行き来絶えたるよその関守」(宝治百首・恋・寄関恋・二六〇三・基良。続後撰集・恋五・九九六)が続く。これらに学んでいたであろう宗尊は、該歌以前に、「人知れぬ霞隠れの山の端を我が通ひ路と帰る雁がね」(柳葉集・卷四・文永元年六月十七日庚申百番自歌

合〕・帰雁・四六一〕という類歌をものしていた。

〔補説〕宗尊は該歌以前に同じ「人知れぬ」の歌を本歌に「宵宵はくもれとぞ思ふ人知れず我が通ひ路の秋の月影」(瓊玉集・恋下・寄月忍恋・三六五)や「とどまらぬ我が通ひ路のかなしきに暁ばかり関守もがな」(中書王御詠・恋・百首の歌の中に・一七六)という、恋する相手に通う道を「我が通ひ路」とする恋歌を詠じている。ここは、「月影」を擬人化して「我が通ひ路と」としている点が新しい。

876 煙けふりた立つ室の八島の秋の夜は月も思ひやありと見みゆるらん

〔通釈〕

煙が立つ室の八島の秋の夜は、(私だけでなく)月も(煙を立たせる)「火」故に思「ひ」がある、と見えるのだろうか。

〔本歌〕いかでかは思ひありとも知らすべき室の八島の煙ならでは(詞花集・別・一八八・実方)

〔参考〕下野や室の八島に立つ煙思ひありとも今こそは知れ(古今六帖・第三・しま・一九一〇)

絶えず立つ室の八島の煙かないかにつきせぬ思ひなるらん(千載集・雑上・一〇八一・顕方。後葉集・雑上・四八六。続詞花集・雑上・七六〇)

月残る室の八島の明け方に思ひありとや千鳥なくらん(弘長百首・冬・冬月・三八〇)

〔語釈〕○室の八島―下野国の歌枕。現栃木市惣社町の国府近辺の地にあつたとも言ひ、下野国惣社大神神社境内の地にあつたとも伝える。清水に八つの島があり水蒸気が煙のように立っていたということから、「煙」が景物。○

思ひ―「煙」の縁で「ひ」に「火」が掛かる。

877 朝熊あしくまや浪にかかれる秋の月いづれかもとの鏡かみなるらん

【通釈】

朝熊よ（その鏡の宮よ）。（川の）波にかかっている（鏡と見える）秋の月と、どちらが元の鏡なのであろうか。

【参考】 水の上に光さやけき秋の月万代までの鏡なるべし（続後撰集・賀・一三六〇・為頼。為頼集・水上秋月・

七九）

久堅の空にかかれる秋の月いづれの里も鏡とぞ見る（和歌一字抄・不扨無扨・月不扨処・七八五・経信）

かけていのる三室の山の秋の月神のみまへの鏡とや見ん（宝治百首・秋・山月・一五九二・鷹司院按察）

朝熊や鏡の面に影見えて神路の山に有明の月（露色随詠集・月百首「伊勢島松人」・五三）

神さびてあはれ幾代になりぬらん波になれたる朝熊の宮（続古今集・神祇・建仁元年五十首歌合歌・

六九九・嘉陽門院越前。老若五十首歌合・雑・四五八。万代集・神祇・一五六二）

神代より光をとめて朝熊の鏡の宮にすめる月影（続拾遺集・神祇・神祇歌の中に・一四一三・隆弁。人家

集・朝熊の宮に詣でて、月を見て・七）

【語釈】

○朝熊―伊勢国の歌枕。現在は「朝熊」を「あさま」と言う。現三重県伊勢市朝熊町。「朝熊山」の山麓、

朝熊川が五十鈴川に合流する右岸丘上に伊勢内宮の摂社第一の朝熊の宮（朝熊神社とも）が鎮座する。その向かい

側朝熊川左岸に内宮の末社鏡の宮（小朝熊）がある。ここは、「いづれかもとの鏡なるらん」とあるので、この「鏡

の宮」を指しているよう。○いづれかもとの「古く「かみなづきちぢにうつろふ菊の花いづれかもとの色にはあるらん」(躬恒集・七三)や「置く霜のそめまどはせる菊の花いづれかもとの色にはあるらん」(古今六帖・第六・きく・三七四一。風雅集・秋下・屏風に、をんなの菊花みたる所・七〇二・貫之、二句「そめまがはせる」といった例がある。『千五百番歌合』の「うらなれて蛩とびかふ夕まぐれいづれかもとの海人の漁り火」(夏三・九五二・保季)が、宗尊に比較的近い時代の先行例となる。

〔補説〕 参考歌の前三首のように「秋の月」を「鏡」と見る歌の類型を踏まえて、後三首のような「朝熊」の「鏡の宮」を詠む歌をも意識しつつ仕立てた一首であろう。

878 積つもればと言いひしばかりの月を見みてみそぢの秋を待まちち出いでつるかな哉

〔通釈〕

見みてでることが積つもれば(人の老いとなるもの)と、古人が言っただけのことがある月を見て、三十歳の秋(の月)となるのを待まちつて、今まさにその秋となつて月が出たことであるな。

〔本歌〕

大方は月をもめでじこれぞこの積つもれば人の老いとなるもの(古今集・雑上・八七九・業平)

今来むと言いひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな(古今集・恋四・六九一・素性)

〔参考〕

思おもひかね積つもればおふる月を見みてつれなき人に年は経いにけり(壬二集・恋・庚申夜同仙洞御会に、久恋・

二八一四。家隆卿百番自歌合・一二六)

〔語釈〕

○みそぢの秋―この歌は「文永八年七月、千五百番歌合あるへしとて、内裏よりおほせられし百首歌」の一

首で、永八年（一二七一）七月は、宗尊三十歳の秋。平安後期から鎌倉時代以降にかけて、「くそぢ」は「くマイナス十歳代」を言うことが少なくないが、宗尊は、「くそぢ」の本来の意味を守っていたか。

〔補説〕 参考の家隆詠の第二句は、「積もれば老ゆる」とあるべきか。

879 誰かまたひとり寝る夜の秋風に明くる間遅き衣打つらん

〔通釈〕

他に誰がまた、独り寝る夜に吹く秋風の中で、夜が明けるまでの間が長く遅い（ことを知らせるような）衣を打っているのだろうか。

〔本歌〕 歎きつつひとり寝る夜の明くる間はいかにひさしきものとかは知る（拾遺集・恋四・九一二・道綱母）

〔参考〕 誰かまた霜さえわたる月の夜に衣打つとて起き明かすらん（新撰六帖・第五・ころもうつ・一七三二・為家）

〔語釈〕 ○明くる間遅き―夜が明けるまでの時の進み方が遅い、ということ。つまり、夜明けまでの時間が長いことを言う。先行例は見えない。後出の例では、後水尾院の「長しとも思はで誰かひとり寝る明くる間遅き夜を惜しむらん」（後水尾院御集・恋・夜恋・七七二）に、該歌からの影響があるように思われるが、なお同院全体の和歌の追究の中で定位されるべきであろう。

〔補説〕 宗尊は該歌以前に、同じ道綱母詠を本歌に「夏はまたひとり寝る夜の明くる間もいかに程なき月と見ゆらむ」（中書王御詠・夏・夏月・七〇）と詠じている。

880 音羽山誘ひし虫の果てはまた弱るばかりに秋風ぞ吹く。

〔通釈〕

音羽山では、あの秋風が初声を誘った松虫の最後はまた、その鳴く音が弱るほどに秋風が吹くよ。

〔本歌〕

松虫の初声誘ふ秋風は音羽山より吹きそめにけり（後撰集・秋上・二五一・読人不知）

〔参考〕

忘れじの言の葉返す秋風に今はと弱るまつ虫の声（宝治百首・恋・寄虫恋・二九〇九・安嘉門院高倉）

〔類歌〕

音羽山峰の風や寒からむ麓に弱る松虫の声（逍遊集・秋・虫・一一七九）

〔語釈〕

○音羽山―山城国の歌枕。山城・近江両国の境界、現京都市山科区東端、逢坂山の南に続く山。「虫」「弱る」の縁で、虫の声の「音」が響く。

881 明けぬれどなほ峰暗く立ちこめて山の名隠す宇治の川霧

〔通釈〕

夜が明けてもやはりなお峰は暗く霧が立ち込めて、（かえって）宇治山の「憂し」という評判までも隠す、宇治の川霧よ。

〔本説〕

いとど、山かさなれる御住みかになつね参る人なし。あやしき下衆など、田舎びたる山がつどものみ、まれ

に馴れ参りつかうまつる。峰の朝霧晴るるをりなくて明かし暮らしたまふに、この宇治山に、聖だちたる阿闍梨住みけり。(源氏物語・橋姫。CD-ROM角川古典大観に拠る)

〔参考〕 わが庵は都の辰巳しかぞ住む世をうち山と人は言ふなり (古今集・雑下・九八三・喜撰)

河霧の都のたつみ深ければそことも見えぬ宇治の山里 (堀河百首・秋・霧・七三八・匡房)

ほのぼのと朝日いざよふ波の上に山の名残す宇治の川霧 (内裏歌合建暦三年八月七日・河朝霧・四〇・雅経。

明日香井集・歌合同(建保)三年八月七日・河朝霧・一一九七)

〔影響〕 明け渡る空もさながら立ちこめて山の名見せぬ宇治の河霧 (嘉元百首・秋・霧・二三四六・定為)

〔語釈〕 ○山の名―「山」は「宇治の川霧」から「宇治山」のことで、「宇治」に「憂し」が掛かり、「(宇治)山」の「憂し」という評判という意味。○宇治―山城国の歌枕。現京都府宇治市。宇治川が醍醐・笠取山地山間から京都(山城)盆地に流れ出る出口にあたる。「宇治山」「宇治の山」は、醍醐・笠取山地の南方宇治川右岸にある喜撰山のことと言う。

〔補説〕 本説は、北の方と死別し都の邸宅を焼失するなどした悲運の八の宮(光源氏の異母弟で大君・中君・浮舟の父)が、宇治に隠棲し、聖僧らしい阿闍梨の導きで仏道に精進しようとする前の場面である。これに続く場面で、その阿闍梨に従い八の宮は仏道修行をし、阿闍梨は京都に出た折に冷泉院に対して「八の宮の、いとかしこく、内教の御才悟り深くものしたまひけるかな。さるべきにて生まれたまへる人にやものしたまふらむ。心深く思ひすましたまへるほど、まことの聖のおきてになむ、見えたまふ」と言い、冷泉院が「いまだかたちは変へたまはずや。俗聖とか、この若き人々(薫等)のつけたなる、あはれなることなり」と言う。その薫達が懂れる、失意にありながら仏道を深く理解するほどになる八の宮の「俗聖」たるさまを念頭に、「山の名隠す宇治の川霧」といったので

はないか。

参考の喜撰歌を踏まえた匡房の歌や、雅経の歌も、宗尊の視野に入っていたかもしれない。

882 白玉といつかは見えし紅の木の葉に置ける秋の夕露

〔通釈〕

白玉と、いつ見えたか、いや見えないよ。紅の木の葉に置いてある秋の夕露は。

〔本歌〕 白玉と見えし涙も年経ればから紅にうつろひにけり（古今集・恋二・五九九・貫之）

白玉の秋の木の葉に宿れると見ゆるは露のはかるなりけり（後撰集・秋中・三二一・読人不知）

〔参考〕 かくまではいつかは見えし吉野山雪こそ花の盛りなりけれ（御室五十首・冬・二三四・兼宗）

〔語釈〕 ○いつかは―反語に解する。

883 逢坂や嵐の風に時雨してゆくへ知らずも暮るる秋かな

〔通釈〕

逢坂よ。激しく吹く風に時雨が降って、その行方は分からないながらも、暮れて（逢坂の関を東に越えて）行く秋であることだな。

〔本歌〕 逢坂の嵐の風は寒けれどゆくへ知らねばわびつつぞ寝る（古今集・雑下・九八八・読人不知）

〔参考〕 逢坂の関路の嵐秋更けて月にぞ雲はゆくへ知られぬ（為家一夜百首・秋・関月・四五）

花さそふ宇治の河波岩越えてゆくへ知らずも暮るる春かな（東撰六帖・春・暮春・三〇三・忠直。同抜粹本・春・暮春・六九）

〔語釈〕 ○逢坂―近江国の歌枕。山城・近江国境の「逢坂山」に「逢坂の関」が置かれた。京都と東国の出入り口。五行説で「秋」は西に配されるので、暮れて東の方へと行く、という通念から「逢坂や」と言う。

冬

884 朝あさぼらけ初霜さむ寒き水茎の岡の屋形やかたに冬は来にけり

〔通釈〕 冬

夜がほのぼのと明ける朝方、初霜が寒い水茎の岡の仮の家に、冬はやつて来たのであった。

〔本歌〕 水茎の岡の屋形に妹とあれと寝ての朝けの霜のふりはも（古今集・大歌所御歌・みづぐきぶり・一〇七二）

〔影響〕 昨日だにはや霜置きし水茎の岡の屋形に冬は来にけり（雅有集・仙洞御百首 秋日同詠百首応製和歌・冬・

三三六）

水茎の岡の屋形もうち時雨れ朝けの空に冬はきにけり（南朝五百番歌合・冬・五〇一・長慶天皇）

〔語釈〕 ○初霜寒き―新鮮な措辞であろう。類例は、勅撰集では、『玉葉集』の「虫の音の弱る浅茅はうらがれて初霜寒き秋の暮がた」（秋下・八一九・静仁法親王）が初出だが、該歌との先後は不明である。「嘉元元年後宇多院に百首歌たてまつりける時、月」とする「明けやらぬ長月の夜の秋風に初霜寒く澄める月影」（新千載集・秋下・

四九六・隆教)や『文保百首』の「面影もまだ来ぬ冬をさきだてて初霜寒きまののかやはら」(秋・一九五二・有忠)が続く。正徹に「風渡る初霜寒し秋の月望に二夜のまへのたなはし」(正徹千首・秋・九月十三夜・四四八。草根集・秋・九月十三夜・三九三八)の作がある。○水茎の岡―『万葉集』では「水茎」は「岡」の枕詞だが、平安時代以降は「水茎の岡」を(所在不明の)所名(五代集歌枕、顕昭古今集註、顕注密勘)あるいは近江国(八雲御抄)や筑前国(古今余材抄)の歌枕とする説が行われた。○屋形―形ばかりの屋、ということ。仮作りの家屋。

885 冬も来ぬさこそはげしく時雨しぐるらめあはれ初瀬はつせの山おろしの風

〔通釈〕

冬も来た。さぞかし、激しく時雨れているのであろう。ああ、初瀬の山の山風の風よ。

〔参考〕 憂かりける人を初瀬の山おろしよはげしかれとは祈らぬものを(千載集・恋二・七〇八・俊頼)

やまとなるおほしまみねの朝嵐はげしかれとも降る時雨かな(新撰六帖・第二・みね・五七〇・真観)

時雨れ行く峰の嵐のはげしさを聞きおどろけば冬は来にけり(宝治百首・冬・初冬時雨・二〇三七・弁内侍)

〔語釈〕

○初瀬―「泊瀬」とも書く。大和国の歌枕。笠置山地から流れる初瀬川の峡谷に開けた地。東北西の三方を初瀬山・卷向山・三輪山などの連山に囲まれる。武烈・雄略両天皇の皇居が営まれ、「こもりくの泊瀬小国」などとも言い、聖地でもあり、長谷寺の観音信仰の地でもあった。

〔補説〕

「初瀬」の「時雨」を詠むのは、『万葉集』の「隠りくの初瀬の山は色づきぬ時雨の雨は降りにけらしも」

(巻八・秋雑歌・一五九三・大伴坂上郎女)が淵源だが、万葉段階では「時雨」は冬季に傾いている訳ではなかった。このような歌があっても不思議ではない。この歌は、『五代集歌枕』(はつせ山・二一六、初句「隠りえの」)や『秋風集』(秋下・四〇五・大納言康磨女、初句「隠りえの」)同上四句「時雨の雨の」に採録された後、『続古今集』(秋下・五一二、初句同上。新時代不同歌合・一三にも)に入集して、宗尊の目にするところであったろう。雅経「菅原や伏見の方は時雨して雪の初瀬の山の端の雲」(最勝四天王院和歌・泊瀬山・四八。明日香井集・九七三)や基家の「神無月時雨や冬の初瀬山峰行く雲はさだめなけれど」(宝治百首・冬・初冬時雨・二〇〇三・基家)といった、冬の「初瀬」の「時雨」を詠じた歌も、該歌に影響したかもしれない。

〔補説〕

初冬の「初瀬」の「はげし」い「時雨」を詠んで新鮮である。

886 神無月里分く雲の夕時雨憂きはなべてと見えぬ比かなみ

〔通釈〕

神無月冬十月、(かかったり、かからなかつたりして) 里々にかかり分けている雲から、降る夕時雨よ。(それが一面一様でないように) 憂く辛いのは、みなすべてだとは見えない、この頃であることだな。

〔参考〕

神無月深山隠れの夕時雨誰が袂にか色を見すらん(遠鳥御歌合・時雨・九五・友茂)
絶え絶えに里分く月の光かな時雨をかくる夜はのむら雲(新古今集・冬・五九九・寂蓮)

世の中の憂きはなべてもなかりけり頼む限りぞ恨みられける(後撰集・恋六・一〇六一・読人不知)
〔補説〕 「夕時雨」が降る「里」が「憂き」で、そうでない「里」は「憂き」ではない、という状態を「なべてと見

えぬ」と言ったとも解されるが、上句の景趣が下句の比喩であると捉えておきたい。

「神無月」と「夕時雨」の詠み合わせの参考として挙げた『遠島御歌合』の一首については、宗尊が直接披見し得たか否か、同歌合の流布の問題として今後の追究が必要であろう。

参考に挙げた『後撰集』歌を、該歌以前にも宗尊は、「文永元年六月十七日庚申百番自歌合」（仮称）の「荻」題では「秋風の憂きはなべてと思へどもさもわびさする荻の音かな」（柳葉集・巻四・四八二）と踏まえ、「文永五年十月三百首歌」の「述懐」では「身一つに何か恨みん世の中の憂きはなべての慣らひとぞ見る」（本抄・巻二・477）と本歌に取っている。

887 見渡せば日影まじりに時雨して村雲うす薄き夕暮くれの山

〔通釈〕

見渡すと、日の光交じりに時雨が降って、かかっている群雲が薄い夕暮の山よ。

〔参考〕 見渡せば山の尾上に雲越えて一村過ぐる夕時雨かな（秋風抄・冬・時雨・一三九・資季）

み山より時雨は晴るる村雲に日影なみよる庭の松風（紫禁集・同比〔建保四年三月十五日〕、二百首和歌・八六〇）

〔類歌〕

今はとて日影うつろふ村雲になごり時雨れて暮るる秋かな（茂重集・秋・九月尽・一一五）
 入方の日影うつろふ山の端に一村雲ぞうきて時雨るる（文保百首・冬・三二五三・宣子）
 村雲にもるる日影はさしながらおなじ空にも降る時雨かな（南朝五百番歌合・冬・五〇五・弁内侍）

室山に残る日影もたかつきの村雲ながら時雨れてぞ行く（草根集・秋・四九一四・暮秋時雨）

山風の日影に過ぐる村雲にあまりてしばし降る時雨かな（松下集・自歌合 三百六十番 次第不同・夏冬・

時雨・二八五〇）

木の葉には時雨れつくして夕日影うつろふ山に残る村雲（称名院集・冬・夕時雨・八一六）

〔語釈〕

○日影まじりに―新奇な句。類例として「霰交じり」の「時雨」は、「冬深き山は雪げの雲さえて霰まじり

に里ぞ時雨るる」（他阿上人集・冬・一三二）や「染めもあへず外山の正木風さえて霰まじりに降る時雨かな」（国

冬祈雨百首・雨中霰・六五）と見える。○村雲薄き―先行例は見ええず、後出でも「峰越ゆる時雨や遠くなりぬらん

村雲薄き山の遠方」（為理集・冬・冬歌のなかに・一七八）が見える程度。

〔補説〕

「日影」日光と「時雨」俄雨の併存は、実際の気象であるけれども、和歌にそれが詠み併せられるのは、古

くからの伝統ではない。比較的早い例に俊頼の「時雨れつつ色づく山の木の間より出づる日影によそへてぞ見る」

（散木奇歌集・悲歎部・仏の御身の色こがねの山のごとしといへる事をよめる・九四五）があるが、これは仏身の

姿の比喩の歌である。叙景としては新古今歌人達から見え始める。家隆の「片岡の日影時雨るる柴の戸にしばしか

かれる朝顔の花」（壬二集・後度百首・秋・一四八）や定家の「長月の紅葉の山の夕時雨晴るる日影も雲は染めけ

り」（拾遺愚草・春日同詠百首応製和歌・秋・一三五三）や雅経の「晴れ曇り時雨るる空や暮れぬらん日影も急ぐ

さやの中山」（冬題歌合建保五年・冬夕旅・九一・雅経）等々である。そこに「村雲」を併せると、参考の順徳院詠

となる（類歌に挙げたのは「日影」と「時雨」と「村雲」を詠み併せた後出歌）。これらも宗尊の視野に入ってい

たであろうが、より直接には参考の『秋風抄』の資季詠に触発された可能性を見ておきたい。

該歌と類似する本抄（巻四・六七六）の「見渡せば雲間の日影うつろひてむらむらかはる山の色かな」が『風雅

集』（雑中・百首歌の中に・一六四八）に収められているのは、宗尊詠の特色が京極派の好みに通じることを示す一例である。関東歌人長景の「見渡せば夕霧晴るる山もとの日影にうつる秋の紅葉葉」（長景集・秋・紅葉・七二）は、宗尊詠に影響された一首であろう。

888 散り積もる櫛の広葉に影立ちて梢に聞きし声ぞかはらぬ

〔通釈〕

散って積もる櫛の広葉に、面影が立って、その葉が梢にあつた時に聞いた音が変わらないことよ。

〔参考〕

散り積もる木の葉も風にさそはれて庭にも秋の暮れにけるかな（千載集・秋下・三七七・慈弁）
散り積もる櫛の広葉に音信れて置く霜はらふ木枯らしの風（東撰六帖・冬・霜・三八二・重時）

山風の梢にさわぐ音よりも櫛の広葉はのどかにぞ散る（為家百首・冬・風前落葉・五二）

〔語釈〕

○影立ちて―他に例を見ない句。「梢に聞きし声」とあることから、参考歌ならびに「岡のべの櫛の真柴に風立ちてかへるは葛のうら葉のみかは」（林葉集・秋・四〇一、三句「風立てば」の異本注記あり）や「夕立のけしきの森に風立ちてうら吹きかへす櫛の葉柏」（嘉元百首・夏・夕立・一〇二五・公頭）あるいは「散らぬ間の梢に聞きし音もなし紅葉や風をまたさそふらん」（延文百首・冬・落葉・二二五七・釈空）にも照らして、「世」の「せ」を「遣」の「け」に誤ったもので、本来は「風立ちて」であつたかとも疑われる。

〔補説〕

語釈に記したように、第三句が「風立ちて」だとすると、上句は「散って積もる櫛の広葉に風が吹き立って」という意味になる。

889 霜に立つ鳴の羽搔き捨てて、君が来ぬ夜の月ぞ残れる

〔通釈〕

おりた霜に飛び立つ鳴の羽搔きは、そのまま搔き捨てていって、後にはあなたが来ない夜の月だけが残っている。

〔本歌〕 暁の鳴の羽搔き百羽搔き君が来ぬ夜は我ぞかずかく（古今集・恋五・七六一・読人不知）

〔参考〕 よそに聞く我が袖寒し暁の霜に立つなる鳴の羽搔き（百首歌合建長八年・冬・一〇七〇・忠定）

時鳥鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ残れる（千載集・千載集・夏・一六一・実定）

〔語釈〕 ○霜に立つ―「立つ」は掛詞で、おりた霜の冷たさに飛び立つ、ということか。○搔き捨てて―羽搔きをしっぱなしにして去って、ということ。

890 冬寒み玉江の蘆は霜枯れて群れゐる鳥ぞ浪に立つなる

〔通釈〕

冬が寒いので玉江の蘆は霜枯れて、群れいる鳥が、波から飛び立つ音が聞こえるよ。

〔本歌〕 夏刈りの玉江の蘆を踏みしだき群れゐる鳥の立つ空ぞなき（後拾遺集・夏・二一九・重之）

〔語釈〕 ○玉江―歌枕。越前国（現福井市花堂）とも、摂津国（現大阪府高槻市三島江）とも。『五代集歌枕』『和歌

『初学抄』等は撰津とするが、『俊頼髓脳』『綺語抄』『隆源口伝』『奥義抄』『和歌童蒙抄』等は本歌のそれを越前(『和歌色葉』は歌を挙げずに越前)とする。『夫木抄』は両者を併記、『八雲御抄』『歌枕名寄』は「夏刈の玉江」を越前、「三島江の玉江」を撰津とする。いずれにしても「蘆」が景物。○立つ―飛び立つ意。「浪」の縁語。

891 藻塩もしほや焼く難波なみの御津なに鳴く千鳥ちうからき憂うき世よはなれも悲かなしや

〔通釈〕

藻塩を焼く難波の御津に鳴いている千鳥よ。塩のようからくつらいこの憂き世は、泣いている私と同じでおまえも悲しいのか。

〔本歌〕

おしてるや難波の御津に焼く塩のからくも我は老いにけるかな(古今集・雑上・八九四・読人不知)

〔参考〕

藻塩焼く海人ならぬ尼の姿にもからき憂き世や思ひ捨つらん(新撰六帖・第二・あま・九一九・信実)

須磨の関有明の空に鳴く千鳥かたぶく月はなれも悲しき(千載集・冬・四二五・俊成)

〔語釈〕

○難波の御津―撰津国の歌枕。現在の大阪湾内にあった官船の発着する港。現大阪市中央区三津寺町付近に比定されている。○鳴く―「からき憂き世」「悲し」の縁で「泣く」が掛かる。○からき憂き世―参考の信実詠の他に、為家にも「あはしまやと渡る舟のからかちのからき憂き世をしほれてぞ経る」(為家五社百首・海路・住吉・六三六)の作があり、鎌倉時代前期頃から詠まれ始めた句。宗尊は該歌以前に「いやましに濡るる袖かなあしべより満ち来る潮のからき憂き世は」(柳葉集・卷五・文永二年潤四月三百六十首歌・雑・八二七)と用いている。

892 さゆる夜は岩打つ浪のそのままに、くだけて氷る滝つ山川

〔通釈〕

冷たく冴える夜は、岩を打つ浪がそのままに砕けて氷る、激しく流れ下る山中の川よ。

〔本歌〕

風をいたみ岩うつ波のおのれのみ砕けてものを思ふ頃かな（詞花集・恋上・二二一・重之）

雨降ればたぎつ山川岩に触れ君が砕かむ心は持たじ（万葉集・卷十・秋相聞・二三〇八・作者未詳。古今六帖・第五・あひおもふ・二六一四、三句「いはくづれ」）

〔参考〕

あし鴨のかづくうは毛にこす玉のくだけて氷る冬の池水（洞院撰政家百首・冬・氷・八〇四・実氏。現存六帖抜粹本・第一・こほり・六二）

〔影響〕

紅葉葉の風のしがらみそのままに氷りてよどむ谷川の水（雅有集・仙洞御百首・冬・三四四）
おのづからよどむ木の葉をそのままにさそひもはず氷る山河（新後撰集・冬・四八八・源邦長）

〔語釈〕

○くだけて氷る―川の水が岩に当たり砕けて、水しぶきとなって氷るさまを言ったのであろう。参考の実氏詠に学んだのかもしれないが、静かな実氏詠に比して該歌はより動的で、景趣は異なる。

〔補説〕

『詞花集』所收の重之詠と『万葉』歌の両首を、共有する「砕（く）」で取り併せた本歌取りと見た。このような方法は、『瓊玉集』にも散見する。

「そのままに」「氷」ることを詠む点で、該歌からの影響として挙げた両首の内、関東祇候の廷臣である雅有の一首についてはその可能性をより高く見てよいであろう。

893 渡りわたする衣手寒さむし白妙はくめいの雪ゆきの麓ふもとの富士ふじの川風がわかぜ

〔通釈〕

川渡りをする衣の袖が寒い。雪が積もる富士の麓に吹く富士川の風よ。

〔参考〕

渡りする遠方人の袖かみやみづのに白き夕顔の花（建保名所百首・夏・美豆御牧・一三三九・定家。拾遺愚

草・内裏百首名所・夏・美豆御牧・一二二九。万代集・雜一・二八六四）

夕されば衣手寒しみ吉野の吉野の山にみ雪降るらし（古今集・冬・三一七・読人不知）

夕されば衣手寒したかまつの山の麓に雪ぞ降るらし（五代集歌枕・たかまつの山 高松野山 同〔大和国〕・

二五七）

〔語釈〕

○白妙の―「雪」の枕詞。○雪の麓―順徳院歌壇に活躍した藤原範宗の「富士の山雪の麓もひとつなる雲の

なみとに浮島の原」（範宗集・仙洞百首内建保四年・冬・四七三）が先行例。○富士―駿河国の歌枕。「麓」は富士

山麓。「川風」は富士川の風。「富士の川風」は、意外に用例は多くないが、先行例に為家の「吹きおろす雪かと思

れば白妙に真砂ぞなびく富士の河風」（為家集・雜・ふじ河・一三六〇。夫木抄・雜六・建長五年毎日一首中・ふ

じ川、するが・一一一五九）がある。

894 吹き迷まよふ嵐あらしのつてに誘さそはれて積つもらぬ雪ゆきぞ空そらに乱みだる。

〔通釈〕

あちらこちらに吹き迷う激しい風の仲立ちに誘われて、積もらない雪が空に舞い乱れているよ。

〔参考〕 吹き迷ふ嵐のつてに誘はれて松に乱るるさ牡鹿の声（千五百番歌合・秋二・一二五五・越前）

嵐吹き空に乱るる雪の夜に氷ぞ結ぶ夢は結ばず（千五百番歌合・冬三・一九五二・良経。秋篠月清集・八六

五）

〔語釈〕 ○嵐のつてに―激しく吹く風の仲立ちによって、といった意味。俊頼の「もる山の嵐のつてに紅葉葉を誰思

はずに見てしのぶらん」（散木奇歌集・冬・左京大夫経忠の八条の家にて風送山葉と云ふ事を・五九四）が早い例。

勅撰集の初出は『千載集』の「竜田山麓の里は遠けれど嵐のつてに紅葉をぞ見る」（秋下・三七三・祝部成伸）。○

積もらぬ雪―宮内卿の「色かへぬ竹の葉白く月さえて積もらぬ雪をはらふ秋風」（仙洞句題五十首・月前竹風・

一五四。三十六人歌合（元暦）・二七。時代不同歌合・五四。雲葉集・秋中・五五四）が早い。為家にも「あま

小舟初瀬の檜原白妙に積もらぬ雪は月ぞ見えける」（為家千首・秋・四一六）の作があり、「嵐」との詠み併せの先

行例に道家の「嵐吹く霜夜の月の松の葉に積もらぬ雪も寒き色かな」（道家百首・冬・六四）がある。

〔補説〕 該歌以前に宗尊は、「雲さそふ嵐のつてに雪散りてこのほどいたくさゆる空かな」（柳葉集・卷二・弘長二年

院より人人にめされし百首歌の題にて、読みてたてまつりし・冬・雪・一九二）という類歌を詠んでいる。

「吹きまがふ嵐の末にさそはれて積もらぬ雪ぞ空にあまざる」（延文百首・冬・雪・四六五・顕実母）は、偶合で

なければ、ほぼ該歌の剽窃と言つてよい一首である。

895
高島や山もと深く降る雪に道迷ふらし水尾の徒人

〔通釈〕

高島よ、山の麓まで深く降る雪に道を迷うらしい、水尾を歩き行く旅人よ。

〔参考〕

高島や水尾の中山袖立ててつくりかさねよ千代のなみくら（五代集歌枕・みほのなか山 同〔近江国〕・三三八・読人不知）

高島や水尾の袖山跡絶えて氷も雪も深き冬かな（家隆卿百番自歌合・冬・三宮十五首・一〇四）

いづくにかわが宿りせむ高島の勝野の原にこの日暮らしつ（新勅撰集・羈旅・四九九・読人不知。万葉集・

卷三・雑歌・二七五・黒人、初句「いづくにか」結句「この日暮れなば」）

せきかくる小田の苗代水越えて行き来わづらふ道の徒人（為家集・月／日、徒然百首文永五自去去日五ケ日

之間詠之・春・路苗代・一八一六）

〔語釈〕

○高島―近江国高島郡の歌枕。現滋賀県高島市高島。『万葉集』歌の「高島の勝野の原」は、近江国の琵琶湖西岸高島郡の所名で、現滋賀県高島市勝野（現行「かつの」）付近の野原のこと、あるいは北の安曇川あたりまでを広く言ったともいう。○水尾の徒人―「高島」の「水尾」（の中山・の袖山）を歩いて行く旅人の意。「水尾（水脈・滲）」は近江国高島群内の広域名で、現在「三尾」と書き、「北は安曇川から鴨川など大小河川が流れ、旧安曇川町から高島町に及ぶ平地が古代の三尾郷であったといわれ」（角川日本地名大辞典）るといふ。底本の表記は「みほ」で、参考歌の両首と類歌の「高島や水尾」も新編国歌大観は「高島やみほ」とするが、「水尾（水脈・滲）」あるいは「三尾」であるべきだと判断する。ここは、「高島」から、「徒」に「勝野の原」の「勝（野）」が響くか。

〔類歌〕

鳴る神もまた音立てて高島や水尾の勝野の夕立の雲（師兼千首・夏・野夕立・二九一）

言こと問とひし何なにの花とや払はらふらん遠かた方人の袖しらの白雪

〔通釈〕

古人が遠い方にいる人に、白く咲いている花は何の花だと問い尋ねたけれど、それは何の花だということ、払っているのだろうか。遠い方にいる人に降り積もる袖の白雪を。

〔本歌〕

うちわたす遠方人に物申す我そのそこに白く咲けるは何の花ぞも（古今集・雑体・旋頭歌・一〇〇七・読人不知）

〔補説〕「袖の白雪」は、伝統的な歌句ではない。あるいは、宗尊のこの歌に始発するかも疑われる。後出歌を一覧しておこう。

- ①はし鷹のみよりの羽風吹き立てて我と払はぬ袖の白雪（遺塵集・冬・雪中鷹狩を・一四二・高階成朝）
- ②み山路や積もれるほどは見えねども梢に余る袖の白雪（為理集・冬・山雪・七八七）
- ③面影も見ゆる心ちする昔かな今日乙女子が袖の白雪（風雅集・冬・永仁五年五節のまゐりの日、申させ給ひける・八八三・龜山院）
- ④代代ふりてなほぞ忘れぬ九重に見し八乙女の袖の白雪（伏見院御集・冬歌中・二〇一六）
- ⑤吹き返す志賀の浦風心せよ釣りする海人の袖の白雪（文保百首・冬・一五六二・為相）
- ⑥年の内に積もるばかりか春だにも払ひぞあへぬ袖の白雪（熱田本日本書紀紙背懷紙和歌・余寒・三六七・法阿弥陀仏）

- ⑦駒なめて打出の浜の朝ぼらけ払ひもあへぬ袖の白雪（師兼千首・冬・馬上雪・五八三）
 ⑧さやに見し遠方人ぞかきくもる野風や払ふ袖の白雪（草根集〔正徹〕・冬・行路雪・六〇三四）
 ⑨ささ分けし秋も昨日の露の間にまたうち払ふ袖の白雪（松下抄〔統秋〕・同〔二十首歌よみ侍る中に〕、野雪・五二八）

- ⑩若菜つむ遠里小野の形見とや打ちも払はぬ袖の白雪（春夢草〔肖柏〕・詠百首和歌住吉社法楽・春・雪中若菜・一〇三）

⑪うち払ふ舞の入綾声さえて天つ乙女の袖の白雪（十市遠忠詠草・又、雪のあしたに・三一九）

⑫我が門をいりてせくまで追風におひきて積もる袖の白雪（草径集〔言道〕・風雪・四一二）

この内、③の亀山院詠と④の伏見院詠は作者（宗尊の弟、宗尊の甥）の点で、⑧の正徹詠は用語（「遠方人」「払ふ」を共有）の点で、該歌からの影響の可能性をより高く見てよいであろうか。特に正徹については、別に「言問へよ何の花とかしら露の遠方人の宿の夕顔」（草根集・夏・夕顔・二六八七）という、該歌に倣ったと思しい一首も存している、その確度は高いであろう。正徹の和歌を宗尊詠撰取の観点から究明してみる意味があるかもしれない、と考えるのである。

897 老いとなる鏡の影も近づきて積もれば雪の色ぞ悲しき

〔通釈〕

老人となる、鏡に映る姿も近づいて、積もると雪の白い色となる、そのように頭の白い色が悲しいよ。

〔本歌〕 おほかたは月をもめでじこれぞこの積もれば人の老いとなるもの（古今集・雑上・八七九・業平）

〔参考〕 年ふれば越の白山老いにけりおほくの冬のゆき積もりつつ（拾遺集・冬・二四九・忠見）

かはりゆく鏡の影を見るたびに老いその杜のなげきをぞする（金葉集・雑上・鏡を見るに影のかはりゆくを見てよめる・五九九・師賢）

老いらくの鏡の山の面影はいたたく雪の色や添ふらん（雲葉集・冬・冬の歌に・八五四・実能。続拾遺集・雑中・老後述懐といふ事を・一二一六）

〔語釈〕 ○積もれば雪の色―降る雪が積もると雪が一面に白い色を見せる、という趣意か。類辞の先行例には、為氏の「いとどまたかりにも人の跡絶えて積もれば雪の深草の里」（弘長百首・冬・雪・四〇七。続古今集・冬・六六〇）がある。後出だが、六波羅評定衆の大江貞重には「別れにし都の秋の日数さへ積もれば雪の白川の関」（続後拾遺集・冬・関雪を・四九二）の作例がある。

〔補説〕 参考の実能詠は「鏡山いざ立ちよりて見てゆかむ年へぬる身は老いやしぬると」（古今集・雑上・八九九・読人不知）を踏まえる。該歌の類型の淵源は、この『古今集』歌や「今日見れば鏡に雪ぞふりにける老いのしるべは雪にやあるらん」（貫之集・八四〇）に求められる。

季節の歌に述懐を詠じる宗尊らしい一首であるが、右の貫之歌や参考の忠見歌に見るように、雪に寄せて老いの述懐を詠じることは古くからある一つの類型でもある。

898 春秋をあはれあな憂と過ぐし来て果てはとまらぬ年の暮かな

〔通釈〕

春秋一年の歳月を、ああ憂く辛いと過ごしてきて、ついには留まることのない、この年の暮であることだな。

〔本歌〕

とりとむる物にしあらねば年月をあはれあな憂と過ぐしつるかな（古今集・雑上・八九七・読人不知）

〔参考〕

春秋の折のあはれを過ぐし来て深くなりぬる雪の山里（拾玉集・一日百首・雪・九三六）

春秋のあかぬ名残をとりそへてさながら惜しき年の暮かな（拾遺愚草・閑居百首文治三年冬与越中侍従詠之・冬・三七〇）

〔類歌〕

春秋の別れを憂しと言ひ言ひて一きは惜しき年の暮かな（雪玉集・詠百首和歌 文明六秋・惜歳暮・六六四

一）

春秋の名残もさらにとりそへて惜しむに尽きぬ年の暮かな（靈元法皇御集・五十首天和二年十月二日夜詠之・

惜歳暮・五一八）

祝

899 君が代は尽きじと神や定めけむ御裳濯川に跡垂れしより

〔通釈〕

祝

我が君の代は尽きるまいと、大神宮の神が定めたのだろうか。御裳濯川に垂迹してよりこの方。

〔本歌〕

君が代は尽きじとぞ思ふ神風や御裳濯川の澄まむかざりは（後拾遺集・賀・四五〇・経信）

〔語釈〕

○君が代―この歌の詠まれた文永八年（一二七二）の時点では、直接には宗尊の弟の龜山天皇の御代を指

す。同時に天帝後嵯峨院も存命であれば、後嵯峨上皇と龜山天皇の代、と捉えてもいたであろう。○神―伊勢内宮の御手洗川の「御裳濯川」から伊勢皇大神宮の神、即ち天照大神のこと。○御裳濯川―伊勢国の歌枕。神路山に発して伊勢皇大神宮（内宮）の西端を流れる御手洗川たる五十鈴川のこと。○跡垂れし―神がその場所を占めて示現した、という意味。本地垂迹の思想に基づく。

〔補説〕 後拾遺集初出歌人経信の歌を本歌と見ることについては、『瓊玉和歌集注釈稿（三）』（本紀要四七、平二二・三）126、128補説参照。

900 今こそは昔に越えて男山さかゆく君が御代と見えけれ

〔通釈〕

今こそ、昔にまして、男山の坂を越えて行くように、ますます栄えてゆく我が君の御代と見えるのであった。

〔本歌〕 今こそあれ我も昔は男山さかゆく時もありこしものを（古今集・雑上・八八九・読人不知）

〔語釈〕 ○越えて―まさって。「男山」の縁で山の上を過ぎての意が掛かる。○男山―山城国の歌枕。現京都府八幡市にあり、山上に石清水八幡宮を祀る山。○さかゆく―「男山」（の）「坂行く」から掛詞で「栄行く」「君が御代」に鎖る。○君が御代―前歌の「君が代」と同様。

901 千早振る賀茂の瑞垣我が君の万代さして契り置きけめ

〔通釈〕

賀茂の神の瑞垣は、我が君の万年も続く世に向けて、約束し置いたのであろう。

〔参考〕

さりととも頼む心は神さびて久しくなりぬ賀茂の瑞垣（千載集・神祇・一二七二・式子）

ちはやぶる賀茂の瑞垣年を経て幾世の今日にあふひなるらむ（文治六年女御入内和歌・葵・八七・定家）

三百六十番歌合・夏・一五二。拾遺愚草・一八八九）

ちはやぶる賀茂の瑞籬年を経て久しき世にもつかへてしかな（宝治百首・雑・寄社祝・三九五三・少将内侍）

〔語釈〕

○千早振る―「賀茂」（の神）の枕詞。○賀茂の瑞垣―「賀茂」は、宮城鎮護の神である、賀茂別雷神社

（上賀茂）と賀茂御祖神社（下賀茂）両社の総称。「瑞垣」は、神社周辺にめぐらした垣の意だが、神社そのものを表す。「鴨の水搔き」が響くか。○契りおきけめ―「契り置きけむ」とあるべき。あるいは、「万代さして」の原態が「万代をこそ」の類であったか。

902 神もまた千歳とせのためし君にとや植うへ糸は始めけん住吉むすの松

〔通釈〕

住吉の神もまた、その千歳続く佳い例を、我が君のためと植え始めたのであろうか、この住吉の松を。

〔本歌〕

いにしへにありきあらずは知らねども千歳のためし君に始めむ（古今集・賀・三三三・素性）

〔参考〕

神もまた君がためとや春日山古き御ゆきの跡残しけん（拾遺愚草・賀・祖父中納言の春日行幸の賞をつのり

て、正三位したるあしたに、右兵衛督〔雅経〕・二五二四。明日香井集・雑・一六三六)

神代より植ゑ始めけん住吉の松は千年やかざらざるらん(続後撰集・神祇・五六〇・宜秋門院丹後)

〔語釈〕

○神―「住吉の松」から、摂津の住吉に鎮座する住吉明神(住吉大社の神)を言う。○住吉の松―摂津国の歌枕「住吉」(現大阪市住吉区、住吉大社の地)に生える松。

恋

903 誰ゆゑの乱れならぬをあぢきなく言はでやさのみ忍ぶもぢずり

〔本文〕 ○言はでやさのみ―底本「いは。やさのみ」(「は」と「や」の間の左傍に補入符を打ち右傍に「て」とあり。

〔通釈〕 恋

恋しいあの人以外の誰のための私の乱れではないのに、どうしようもなく、恋の思いを口に出して言わないで、こんなにも、陸奥の信夫の乱れ模様の忍ぶ摺りのように、ただ忍んでいることよ。

〔本歌〕 陸奥のしのおもぢずり誰ゆゑに乱れむと思ふ我ならなくに(古今集・恋四・七二四・融)

〔参考〕 あぢきなく言はで心をつくすかなつつむ人目も人のためかは(千載集・恋三・八三二・光行)

〔語釈〕 ○乱れ―恋故の思いの乱れ。「忍ぶもぢずり」の縁で模様の「乱れ」の意が掛かる。○忍ぶもぢずり―本歌を承けて言う。「忍ぶ」は、陸奥国の歌枕「信夫」に「忍ぶ(草)」が掛かる。「もぢずり」は、忍草の葉を布にねじり摺り染めたもので、それが乱れ模様なので「乱れ」などにかけていう。ここも「乱れ」と縁語。

904 何しかと言ひても今はかひぞなき道踏み初めし佐夜の中山

〔通釈〕

どうして（思い始めたの）か、と言つても今は（甲斐が嶺ならず）かいが無い。道を踏み始めた佐夜の中山のよ
うに、恋の道を「なかなか」なまじつか踏み始めた上は。

〔本歌〕 東路の佐夜の中山なかなか何しか人を思ひそめけむ（古今集・恋二・五九四・友則）

〔参考〕 今はただ恋ひ渡れどもかひぞなき契りし夜半の久米の岩橋（龜山殿五首歌合文永二年九月・絶恋・九三・公雄）

〔語釈〕 ○かひぞなき―しようがない、効果がない意。「甲斐が嶺をさやにも見しがけられなく横ほり伏せる佐夜の

中山」（古今集・東歌・甲斐歌・一〇九七）から、「かひ」に「甲斐」が響く。○佐夜の中山―遠江国の歌枕。現静

岡県掛川市日坂と菊川の間にある山。東海道の難所。本歌を承けて「中山」から「なかなか」が言外に起きる。

905 知るべする心の杉やかこたましつれなき色に尋ね侘びつつ

〔通釈〕

（本当はあの古歌のように）恋の道案内をするはずの、（人の）心の中の杉のせいにしようかしら。変えない杉の
色のようにつれない気配に、恋しい人をずっと尋ねかねていて。

〔本歌〕 誰ぞこの三輪の檜原も知らなくに心の杉の我を尋ぬる（新古今集・恋一・女の杉の実を包みておこせて侍り

ければ・一〇六二・実方)

〔参考〕

言はぬより心や行きてしるべするながむる方を人の問ふまで（新古今集・恋二・一一〇五・隆房）

問ひもせでつれなき色をならへとは誰が植ゑ置きし三輪の杉村（現存六帖・すぎ・六八九・承明門院小宰相）

〔語釈〕

○心の杉―相手の心の中にあるしるしの杉。本歌の詞を取る。本歌は、「我が庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門」（古今集・雑下・九八二・読人不知）を踏まえる。○つれなき色―「杉」から、色を変えない杉の常緑に、恋人のそっけない様子・冷淡な気配を寓意する。

〔補説〕

宗尊は該歌の三ヶ月前の「文永六年四月廿八日、柿本影前にて講じ侍りし百首歌」の「恋」でも「いたづらにつれなき色の年も経ぬさやも折りし三輪の神杉」（本抄・卷四・657）と詠じている。

906 打つ浪も及ばぬ峰の岩根松いつあらはれてねをか見せまし

〔通釈〕

岩を打つ波も及ばない高い峰にある岩根に生えた松は、いつ洗われて根を見せるのか、そのように、私の恋はいつたいつ頭われ表沙汰になって、泣き声を見せたものだろうか。

〔参考〕

寄る浪のおよばぬ浦の玉松のねにあらはれぬ色ぞつれなき（内裏百首歌合建保四年・恋・一八一・順徳院）
陸奥にありてふ川の埋もれ木のいつあらはれてうき名とりけん（続古今集・恋四・一二九二・源時清。宗尊親王百五十番歌合・恋・二九〇）

荒磯や岩根に立てるそなれ松浪にしをれぬ時の間ぞなき（堀河百首・雑・松・一三〇二・源顕仲）

波かくるさしでの磯の岩根松いはねどねにはあらはれぬべし（六百番歌合・恋・寄海恋・家房）

荒磯の波寄せかくる岩根松いはねどねにはあらはれぬべし（千五百番歌合・恋一・二三四二・良経）

〔語釈〕

○及ばぬ峰―新奇な措辞。後代の例に、後柏原院の「分けこしは外山の雪に散りはてて及ばぬ峰の花の白雲」（柏玉集・春下・深山残花・三八七〇）や加藤千蔭の「香ばかりはかどはん風のもがな及ばぬ嶺の花の白雲」（うけらが花初編・恋・になきおもひ・一一六一）が見える。○岩根松―大地にすっかり根を下ろした岩に生えている松。○いつあらはれて―上句は序で、「いつ洗はれて」の掛詞で「いつ顕れて」を起こす。○ねを見せまし―「根を見せまし」に「音を見せまし」が掛かる。「音を」「見せ」は特異である。声を表に立てて泣くことを言ったか。

〔補説〕

参考歌はいずれも宗尊が披見し得た歌であろう。特に前二首は該歌の詠作に際して、念頭にあったかもしれない。

907 いかにせん板井いたみの清水しみず里人さとびとも結びぬ中の遠き契ちぎりを

〔通釈〕

どうしようか。（私の家の）板井の清水は里から遠くて里人も結び掬わない、そのように結ぶことのないあの人の中の、縁遠い契りを。

〔本歌〕

我が門の板井の清水里遠み人し汲まねば水草おひにけり（古今集・神遊びの歌・採物の歌・一〇七九）

〔類歌〕

影ばかり見しをかごとの契りにて結ばぬ中の山の井の水（玉葉集・恋一・恋歌とて・一三〇八・藤原宗緒朝臣母）

〔語釈〕

○板井の清水―板作りで囲った井戸の清らかな水。○結ばぬ中―宗尊は該歌以前に「思へただはなだの帯のかりにだに結ばぬ中のうつりやすさは」（中書王御詠・恋・変恋・一八七）と用いている。宗尊親王幕下の関東祇候の廷臣藤原教定（雅経男。文永三年四月八日没）の「夏草の下行く水のありとだに結ばぬ中は知る人もなし」（続拾遺集・恋四・九九一）が先行するか。ここは、「清水」の水を「里人も結ばぬ」（里人も掬わない）から「むすばぬ」を掛詞に「結ばぬ中」（約束しない男女の仲）に鎖る。

908

頼たのまずまは吉野よしのの川のの末みを見よもそれもいづくいに落おつる涙なみだぞ

〔通釈〕

私を信頼しないのなら、吉野の川の流れ行く末を見てみよ。それも、あの妹背の山の中などではなく、いったいどこどこに落ちる涙なのか。私はあなたとの男女の仲にこそ涙を落としているのだ。

〔本歌〕

ながれては妹背の山の中に落つる吉野の川ののよしや世の中（古今集・恋五・八二八・読人不知）

〔参考〕

末絶えぬ吉野の川のの水上や妹背の山の中（続古今集・雑中・一六六〇・醍醐天皇）

〔語釈〕

○吉野の川―大和国の歌枕。現奈良県を流れる吉野川のこと。○頼まずは―「つらけれど恨みんとはた思ほえずなほ行く先を頼む心に」（新古今集・恋一・一〇三八・伊尹）の返歌「雨こそは頼まば洩らめ頼まずは思はぬ人と見てをやみなん」（一〇三九・読人不知）と同様の意味合いであろう。

〔補説〕 参考歌の詞書は「亭子院より、世世を経て絶えじとぞ思ふ、といふ御歌をたてまつらせ給ひたりける、御返し」である。「亭子院」は宇多院で、「世世を」の歌は、「世世を経て絶えじとぞ思ふ吉野川ながれて落つる滝の白糸」であろう。この歌は『続後撰集』（恋三・七九二）では詞書「人にたまはせける」、作者「延喜御製」（醍醐天皇）、『万代集』（恋三・二二六九）でも詞書「女にたまはせける」、作者「延喜御製」である。何らかの錯誤があるうか。

909 さのみまた漕ぎは返らじ同じ江の棚無し小舟風にまかせて

〔通釈〕

そうとはかりまた、繰り返し漕いでは戻るまい。いくら同じ江にあった棚無し小舟でも、（行方を）風に任せて。ただ繰り返し戻って同じ人に恋し続けることはするまい。この身の行く末は風に任せて。

〔本歌〕 掘江漕ぐ棚無し小舟漕ぎ返り同じ人によ恋ひ渡りなむ（古今集・恋四・七三二・読人不知）

〔参考〕 漕ぎ帰る棚無し小舟同じ江に燃えて螢のしるべ顔なる（道助法親王家五十首・夏・江螢・四〇〇・定家。拾

遺愚草・二〇二六。閑月集・夏・一五一。飛月集・二二〇）

〔類歌〕 吹く風に棚無し小舟漕ぎ別れ同じ江ならぬ月を見るかな（慶運法印集・秋・舟中月・一二五）

〔語釈〕 ○さのみまた↓801。○漕ぎは返らじ―本歌を承けた、繰り返し漕ぐことはするまい、という意味に、「同

じ江」に漕いでは戻る（帰る）まい、の意味が掛かる。その解釈には、「大納言の還任を申し侍りけれどゆるされざりける比、寄舟述懐といふことをよみ侍りける」という詞書の述懐歌ながら「沈む身の棚無し小舟いかなれば同

じ江にだに返らざるらん」(玉葉集・雜五・二五六五・長雅)という一首や、後出ではあるが類歌に挙げた慶運の歌、あるいは該歌と対照的に「同じ江」に「漕ぎ帰る」ことを言う為定の「慕へども春はとまらぬ同じ江に棚無し小舟漕ぎや帰らん」(藤川五百首・船中暮春・九八)や師兼の「漕ぎ帰る棚無し小舟夜もすがら同じ江にのみ月や見るらん」(師兼千首・秋・江月・四二三)や雅親の「同じ江に棚無し小舟漕ぎ帰り見れば明けゆくみじか夜の月」(続垂槐集・夏・江夏月・一五三)等が参考にならう。歌句としては珍しく、後代に加藤千蔭の「明けぬとて漕ぎは返らじ月雪にまさりて思ふ友を訪ふ夜は」(うけらが花初編・冬・月雪の夜、舟にのりて人のもとをとふ・八七九)という、「子猷尋戴」の故事を想起させるような一首に用いられている。○棚無し小舟→548。

〔補説〕

恋歌としての趣意がやや不分明である。一応、通釈の二行目のような含意があると解しておく。

『古今集』の「堀江漕ぐ」の歌を本歌にした歌は多いが、その中で「同じ江」を詠むことは参考の定家詠が早く、該歌はその両者の延長上にある。同様の詠作は、語釈に挙げた歌々の他にも、「いつまでか棚無し小舟同じ江になほ漕ぎ返る道残りけん」(嘉元百首・恋・忘恋・六七三・内実)や「恨みても侘びてもはてぬ同じ江の棚無し小舟漕ぎ離れなん」(宗良千首・恋・寄船恋・七八四)がある。

910

頼たのむるをいかがとなほも疑うたふかや思ふあまりの夕ゆふべなるらん

〔通釈〕

あの人私が私に期待させているのを、どうだろうかとさらに疑うのは、あの人を恋しく思うあまりの、この夕方故であるのだろうか。

〔参考〕 まつほどのすぎのみゆけば大堰川頼むるくれをいかがとぞ思ふ（後拾遺集・雜二・九〇四・馬内侍）

頼むるをまた偽りと思ひてもなほ忘れぬ夕暮の空（続後撰集・恋三・契待恋といふことを・八〇一・平長時）

今はや人の問ふまでなりにけり思ふあまりの夕暮の空（洞院撰政家百首東北大学本拾遺・忍恋・一五三・公経。万代集・恋一・二九二〇）

〔補説〕 参考の『後拾遺集』の歌の下旬を、詠み直してしよう。これを本歌と見ることもできようか。北条長時と西園寺公経の歌も、宗尊の視野には入っていたであろう。

911 偽りにこりぬ心こころを知りてこそまた此またの暮くれと頼め置をくらめ

〔本文〕 ○置くらめ―歌末の「め」は、底本は「ん」に「め」を上書。

〔通釈〕

あの人の嘘偽りにも懲りない私の心をあの人は知って、だからこそまたこの暮に（逢う）と、私に期待を持たせるのだらう。

〔本歌〕 頼めつつ逢はで年経る偽りにこりぬ心を人は知らなむ（古今集・恋二・六一四・躬恒。後撰集・恋五・九六七・業平〔実は仲平か〕）

〔参考〕 頼むるをまた偽りと思ひてもなほ忘れぬ夕暮の空（続後撰集・恋三・契待恋といふことを・八〇一・平長時）

912 陸奥の浅からずこそ契りしにかつ見る中の絶えや果てなん

〔通釈〕

陸奥の安積（の沼）でないが浅くはなく約束したのに、（その安積の沼の「花かつみ」のように）「かつ見」て一方では逢ってもいる二人の仲が、絶え果ててしまふのだろうか。

〔本歌〕

陸奥の安積の沼の花かつみかつ見る人に恋ひやわたらむ（古今集・恋四・六七七・読人不知）

〔参考〕

柚川の浅からずこそ契りしかなどこの暮を引き違ふらん（千載集・恋一・七七八・盛方。建春門院北面歌合・臨期違約恋・五七、三句「契りしに」）

〔語釈〕

○陸奥の浅からずこそ―本歌を承けて「陸奥の」を序詞として、その歌枕の「安積」（現福島県郡山市日和田の安積山公園付近）の「あさか」と同音の掛詞で「浅からずこそ」を起こす。○かつ見る―一方では逢う意。本歌は「花かつみ」から「かつ見る」を起こすが、ここは逆に「かつ見る」から「(花)かつみ」が想起される。

913 限りとは思はでぞ見しありし世の別れの床の明け方の月

〔通釈〕

もうこれ限りとは思わないで見た、かつての二人の仲の、別れの床にかかっていた明け方の月よ。

〔本歌〕

限りとは思はぬものを暁の別れの床の起き憂かるらん（続古今集・恋三・元良親王家歌合歌・一一五八・読

人不知。陽成院親王二人歌合・あかつきのわかれ・三五)

〔影響〕

限りとも思はでともに見し夜半の月は空にやかねて知りけん（雅有集・御室の五十首・恋・四二四）
限りぞと思はで過ぎし夕べだにただやは秋の空はながめし（李花集・秋・暮秋の歌の中に・三八七）

〔語釈〕

○ありし世―かつての（親密だった）二人（男女）の仲の意。

〔補説〕

関東祇候の廷臣雅有と南朝の宗良親王には、宗尊詠に做った詠作が認められるので、影響の両首もそれを示すものとして挙げておく。

914 さだかにもおぼえぬ夢の面影かけや闇やみの現うつの名残なるらん

〔通釈〕

はつきりとは思い出せない夢の中のあの人の面影は、夜の深い闇の中の逢瀬の名残なのであろうか。

〔本歌〕

むばたまの闇の現はさだかなる夢にいくらもまさらざりけり（古今集・恋三・六四七・読人不知）

〔参考〕

あぢきなくなると身に添ふ面影ぞそれとも見えぬ闇の現に（続古今集・恋四・一一五二・定家。拾遺愚草・限りなく忍びて、人に知らせざりける人に・二六二五）

いかなりし闇の現の名残とて思ひあはする夢をだに見ず（為家集・恋・曆仁元・一一八七）

迷ひこし闇の現の名残とて見ゆとは見えぬ夢もうらめし（続後撰集・恋四・八八七・真昭）

〔語釈〕

○おぼえぬ夢―西行の「さかとよとほのかに人を見つれどもおぼえぬ夢の心地こそすれ」（山家集〔陽明文庫本〕・恋百十首・一二五六。新編国歌大観本初句「さりとよと」と「今はさはおぼえぬ夢になしはてて人にかた

らでやみねとぞ思ふ」(同上・二二六〇)が先行例となる。

915 蘆あしの屋のかりねの夢は難波なはなるみつとばかりも言いふかひぞなき

〔通釈〕

蘆の屋の蘆の刈り根ならぬ仮寝に見た夢(の逢瀬)は、難波にある御津ならぬ「見つ」逢ったとだけでも言うか
いもない。

〔本歌〕 君が名も我が名も立てじ難波なるみつとも言ふなあひきとも言はじ(古今集・恋三・六四九・読人不知)

〔語釈〕 ○蘆の屋の―「蘆の屋」は、「難波なる」とあるので摂津国の歌枕「蘆屋」(現兵庫県芦屋市付近の広域)だが、蘆葺きの粗末な小屋の意も活きて下にかかり、「刈り根」から掛詞で「仮寝」を起す。○言ふかひ―「かひ」は効果の意味に、「難波」「みつ」の縁で「貝」が響く。○難波なるみつ―摂津国の歌枕「難波」にある「御津(三津)」「(現大阪府中央区三津寺町付近という)から、掛詞で「見つ」を起す。

916 さてこそは朽くち果はてにけれ大荒木あらかきの憂うき類たぐひとや杜しめなほの標繩しめなほ

〔通釈〕

結局はそのまま、朽ち果ててしまったのだな。私の恋は、大荒木の浮田の、憂き類というのか、杜の標繩よ。

〔本歌〕 かくしてやなほややみなむ大荒木の浮田の杜の標ならなくに(万葉集・卷十一・譬喩・右一首、寄標喩)

思・二八三九・作者未詳)

〔参考〕 さてこそは袖もしほらめ思ふこといかでいは瀬の杜の下露(白河殿七百首・恋・寄杜恋・四二一・経任)

大荒木の杜の下草朽ちぬらし浮田の原に螢飛びかふ(為忠家初度百首・夏・叢中螢火・二二九・俊成)

〔語釈〕 ○大荒木の憂き類とや―「大荒木の浮田」から「うきた」を掛詞に「憂き類とや」に鎖る、と解する。「浮

田(の杜)」は、山城国久世郡(現京都市伏見区)の与杼神社の森という。ここでは「大荒木」は、大和国(現奈

良県五条市の今井神社付近という)のそれではなく、山城国のそれで、現京都市伏見区淀水垂町に比定される。

〔補説〕 参考の俊成詠も該歌も、『古今集』の「大荒木の杜の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」(雑上・

八九二・読人不知)の「老いぬれば」に「朽ち」が発想されたか。

917 憂うかりける山の木の葉はの慣ならひひかな人の心の秋あきをし知らせて

〔通釈〕

憂く辛かった、つれなく色を変える山の木の葉の慣らひであることだな。秋の訪れだけでなく、あの人の心の私に飽きたことを知らせて。

〔本歌〕 秋風に山の木の葉のうつろへば人の心もいかごとぞ思ふ(古今集・恋四・七一四・素性)

風吹けばなびく浅茅はわれなれや人の心の秋を知らする(後拾遺集・雑二・九七〇・齋宮女御)

〔語釈〕 ○人の心の秋―「秋」は「飽き」との掛詞。恋人の心の中に起こる、私に対して飽きた感情の意。

雑

918 誰が為ぞ因幡の山の朝夕にまつと知らせて風の吹くらん

〔通釈〕 雑

いったい誰の為に、因幡の山の朝な夕なに、私は「待つ」と知らせて、松を風が吹いているのだろうか。（あの人は帰っても来ないよ）。

〔本歌〕 立ち別れ因幡の山の峰におふるまつとし聞かば今帰り来む（古今集・離別・三六五・行平）

〔参考〕 誰が為ぞ契らぬ夜半を臥しわびてながめはてつる有明の月（秋篠月清集・南海漁父百首・恋・五五四。万代

集・恋一・一八八一・良経）

忘れなむ待つとな告げそなかなか因幡の山の峰の秋風（新古今集・羈旅・九六八・定家。拾遺愚草・雑・

同〔正治〕二年二月同家歌合、秋旅・二六八〇。定家卿百番自歌合・一七一。新三十六人撰正元二年・

一九五）

〔語釈〕 ○因幡の山―因幡国の歌枕。因幡の国にある山ということだが、現鳥取県岩美郡国府町辺りの山ともいう。

○まつ―「待つ」に、本歌を承けて「因幡の山」「風」の縁で「松」が掛かる。

919 春秋の霞も霧も分け越えて面影に立つ佐夜の中山

〔通釈〕

『竹風和歌抄』注釈稿（五）

春の霞も秋の霧も分けて越えて行つて、面影が目に浮かぶ、あの佐夜の中山よ。

〔参考〕

春はもえ秋はこがるる竈山／霞も霧も煙とぞ見る（拾遺集・雑賀・一一八〇・作者未詳、元輔）

夜をこめて立つ霞だになかりせばひとり越ゆらん佐夜の中山（月詣集・羈旅・暁路霞といへる心をよめる・

二四〇・経盛）

秋の月佐夜の中山さやかにも故郷人ぞ面影に立つ（壬二集・大僧正四季百首・旅・一二二八）

旅人の袂を霧にしをりして月にぞ越ゆる佐夜の中山（紫禁集・同〔建保元年七月〕比当座、旅月・二一八）

古里の空もたよりの月にまた見し面影の佐夜の中山（道助法親王家五十首・雑・山旅・一〇三三・孝継）

〔語釈〕

○分け越えて―対象〔霞〕〔霧〕を左右に押し開くように進んで越えて、ということ。先行例は、「はるばるといく谷峰を分け越えて世をわたらひに庵結ぶらん」（露色随詠集・閑居百首・一四三）や「吉野山峰のちくさを分け越えて摘めるはなこれ三世のほとけに」（万代集・釈教・修行し侍りけるとき・一七三三・行意）等がある。

○佐夜の中山↓904。

〔補説〕

宗尊の東下は建長四年（一二五二）春三月で、西上は文永三年（一二六六）秋七月であった。各々の途次に通過した「佐夜の中山」を思い起こす体の述懐詠であろう。―↓800。

920

情け有る誰が言づてもなかりけり逢ふ人からの宇津の山越え

〔通釈〕

（あの男の旅のように）ものの情趣を解する、誰の（京の人へ向けた）伝言もなかったのだった。結局、ここで

逢う人それぞれによって異なる、宇津の山越えであったのだ。

〔本歌〕 長しとも思ひぞはてぬ昔より逢ふ人からの秋の夜なれば（古今集・恋三・六三六・躬恒。新撰朗詠集・秋・

秋夜・二二二）

〔本説〕 行き行きて駿河の国に至りぬ。宇津の山に至りて、我が入らむとする道はいと暗う細きに、蔦楓は茂り、もの心細く、すずろなるめを見ることがと思ふに、修行者逢ひたり。「かかる道は、いかでかいまする」と言ふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとにとて、文書きて付く。

駿河なるうつの山辺のうつつにも夢にも人にあはぬなりけり（伊勢物語・九段）

〔参考〕 故郷に誰が言づてもなかりけり逢ふ人からの宇津の山越え（宝治百首・雑・旅行・三七八八・禅信）

〔語釈〕 ○宇津の山越え―「宇津の山」は、駿河国の歌枕。安倍郡と志太郡との境（現静岡市宇津ノ谷と藤枝市岡部町岡部）にまたがる山。南側に宇津ノ谷峠がある。そこを越えて行くこと。ここでは、本説の「修行者」の立場で、東から京都へ上る山越え。

〔補説〕 本歌から「逢ふ人からの」の詞を取り、『伊勢物語』九段の「宇津の山」の場面を本説に取る。「修行者」の立場に立ち、恐らくは宗尊が西上する際の記憶をも踏まえて、男（業平）のように、「京に、その人の御もとにとて、文書きて付く」といった「言づて」をする人などいなかった、という歎きの述懐であろう。それにしても、『宝治百首』の禅信とは初句が異なるのみであり、『宝治百首』を披見して学んでいたはずの宗尊が剽窃したというよりは、無意識下に模倣作を詠じてしまった、ということであろうか。

921 玉奈具のつま呼び交はし鳴くたづの声うら悲しさ夜や更けぬる

『竹風和歌抄』注釈稿（五）

〔通釈〕

美しい奈呉の入江の、夫婦お互いに呼び交わして鳴く鶴の、声が何とも心悲しい。夜が更けたのか。

〔本歌〕

湊風寒く吹くらし奈呉の江につま呼び交はしたづさはに鳴く（万葉集・卷十七・四〇一八・家持）

〔参考〕

天の原月にいざよふ雁がねの声うら悲しさ夜や更けぬる（現存六帖・かり・七六六・平基久）

〔他出〕

玉葉集・雑二・雑歌の中に・二一二、初句「奈呉の海に」。歌枕名寄・卷二十九・越中・奈呉・七六一、

初句「奈呉の江に」。夫木抄・雑五・なごのえ、越中又越前・雑御歌中・一〇六七九、初句同上。

〔語釈〕

○玉奈呉―他に見ない語。他出の「奈呉の海」や「奈呉の江」は、越中国の歌枕。射水郡の放生津付近（現

富山県射水市放生津町）の海、あるはその入江。その「奈呉」に美称の接頭語「たま」を付した造語か。○声うら悲し―実朝の「夕闇のたづたづしきに時鳥声うら悲し道やまどへる」（金槐集定家所伝本・夏・夕時鳥・一三〇）が早い。

922

みそぢにも満ちぬる潮の波高み老いは我が身にちかの浦風

〔通釈〕

年が三十歳に満ち、満ちた潮の波が高くてちかの浦に風が吹く、それではないが、老いはこの私の身に近くなるよ。

〔参考〕

ななそぢに満ちぬる潮の浜ひさぎ久しく世にもむもれぬるかな（金葉集・雑下・七十になるまでつかさもな

くて、よろづにあやしき事を思ひ歎きてよめる・六六五・俊頼)

ちかの浦に波寄せまさる心地してひるまなくともくらしつるかな(後拾遺集・恋二・六七三・道信)

音ふくる波にや年もかへるらん立ち来る春はちかの浦風(明日香井集・同〔影供〕歌合同〔正治二年〕十二月廿

六日・海辺歳暮・一〇五二)

〔語釈〕

○ちかの浦風―「ちかの浦」を吹く風。「ちか」は、「値嘉」「血鹿」「千賀」等の字が宛てられるが、その所在と共に確定し得ない。①陸奥国の「千賀の塩竈」(現宮城県塩竈市の海岸)と同じ、②肥前国値嘉島(現長崎県の五島列島北部の「小値賀島」にその名が残る)、③撰津国住吉社付近(現大阪市住吉区)の海岸の別名、等の説がある。参考の『後拾遺集』歌について『五代集歌枕』『八雲御抄』は肥前とする。『夫木抄』(雑七)は「ちかのうら、撰津又陸奥或肥前」とする。

〔補説〕

該歌が詠まれた文永八年(一二七二)七月は、まさに宗尊三十歳の時であり、「みそぢにも満ちぬる」に合致する。「みそぢ」を「三十路」に解してか、多く二十代を言う当時の傾向とは異なり、宗尊は、「みそぢ」を正しく「三十(歳)」と理解していたのであろう。↓878。

923 沈みぬる我やためしの名取川水屑隠れの瀬瀬の埋もれ木

〔通釈〕

沈淪した私こそが、その例として、名取川ならず名を取り、評判を取るよ。名取川の水屑に隠れて見えない、瀬の埋もれ木のように、世に隠れ埋もれて。

『竹風和歌抄』注釈稿(五)

〔本歌〕 名取川瀬瀬の埋もれ木あらはれば如何にせむとかあひ見そめけむ（古今集・恋三・六五〇・読人不知）

〔参考〕 ありとてもあはぬためしの名取川朽ちだにはてね瀬瀬の埋もれ木（新古今集・恋二・一一一八・寂蓮）

五月雨に水屑残らぬ名取川あらはれて行く瀬瀬の埋もれ木（洞院撰政治家百首・夏・五月雨・四五六・行能）

〔語釈〕 ○名取川―陸奥国の歌枕。現宮城県の西部の大東岳に発して名取市を流れ、広瀬川と合流して仙台湾に注ぐ川。「名取り」（評判を取る）の意が掛かる。○埋もれ木―世に埋もれている自分の比喩。

924 捨てばやと憂きたびごとに慰さめて背かぬ世こそ情けなりけれ

〔通釈〕

世を捨てたいと、憂く辛いたび毎にそれでも心を慰めて、結局背いて出ないこの世こそが、（私自身への）哀れみなのであったな。

〔本歌〕 世の中の憂きたびごとに身をなげば深き谷こそ浅くなりなめ（古今集・雑体・誹諧歌・一〇六一・読人不知）

〔参考〕 いかでいかで恋ふる心を慰めてのちの世までの物を思はじ（拾遺集・恋五・九四一・能宣）

定めなき心弱さをかへり見て背かぬ世こそいとど惜しけれ（洞院撰政治家百首・雑・述懐・一八一五・為家）

〔語釈〕 ○捨てばやと―弱にも用いている。

〔補説〕 下句の意味が不分明であるが、通釈に記したように解しておく。

925 世の中はただうたた寝の程ばかり憂きことしげく見ぬ夢もがな

〔通釈〕

世の中は、ただほんのうたた寝するあいだぐらいに、憂く辛いことをあれやこれやと多く見ることのない夢であつて欲しいな。

〔本歌〕

有り果てぬ命待つ間のほどばかり憂きことしげく思はずもがな（古今集・雑下・九六五・貞文）

〔参考〕

世の中を何にたとへんうたた寝の夢路ばかりに通ふ玉ほこ（順集・一二二）

〔類歌〕

世の中はただうたた寝のしばらくを覚めぬ夢路にまどふわりなさ（海人の刈藻・雑・述懐・二九三）

926 同じ世を思ひ分くこそはかなけれ昔を夢と今を現と

〔通釈〕

同じ世を、區別して考えるのは、むなしきことであった。昔の世を夢と、今の世を現と。

〔参考〕

やまかげやとはるる人もとふ人も昔も今も夢か現か（拾玉集・勅答・五五七八）

今や夢昔や夢とまよはれていかに思へど現とぞなき（建礼門院右京大夫集・二四〇）

〔類歌〕

現とも夢とも分かず思ひ出づる昔も今も憂きに消えつつ（言はで忍ぶ・六六・皇后宮）

はかなしや覚むるも同じ夢の世になにを現と思ひ分くらん（親清五女集・法門の物語などし侍りし人のもと

へ・三二一)

現とも夢ともいつを思ひ分かん昔も今も同じ憂き世に（臨永集・雑下・七五八・前関白左大臣）
よしさらば現なきよになしはてて昔も今も夢と思はん（宗良親王千首・雑・夢中懷旧・九一三）

927 忘れてもあるべきものをいにしへのうたて何とて恋しかるらん

〔通釈〕

忘れてもよいはずなのに、昔が、妙なことにどうして恋しいのだろうか。

〔本歌〕 忘れてもあるべきものをこの頃の月夜よいたく人なすかせそ（後拾遺集・雑録・誹諧歌・一二二二・義孝）
〔参考〕 憂きを憂しと思はざるべき我が身かは何とて人の恋しかるらん（続古今集・恋五・一三七四・西行。万代集・

恋五・二六〇五。西行法師家集・雑・七三七）

〔類歌〕 思ひ出の有るにはあらぬいにしへの遠ざかればや恋しかるらむ（続後拾遺集・雑下・一一五二・平宣時）

〔語釈〕 ○うたて何とて―宗尊が、これ以前にも「うつろへば物をぞ思ふ山桜うたて何とて心そめけむ」（瓊玉集・春下・六六）と用いている句。

文永九年十一月比、なにとなくよみおきたる歌どもを取り集めて、百番に合はせて侍りし、

早春

928 思ひこし心もとけて墨染の袖〔の〕氷に春は来にけり

〔本文〕 ○早春―底本は、928から1020まで、歌題は歌頭に記されているが、歌の前に歌より二字下げの書式に改める（以下同様）。○袖（の）氷に―底本「袖こほりに」を、一首の内容と本歌から、「袖」と「こほり」の間に「の」を補う。

〔通釈〕文永九年十一月頃、何となく詠み置いていた歌どもを取り集めて、百番に合わせました（歌）、

早春

ずっとものを思い続けてきた心も解けくつろいで、（出家した）墨染の袖（に流した涙の）氷に、それが融ける
春はやって来たのだった。

〔本歌〕 思ひつつ寝なくに明くる冬の夜の袖の氷はとけずもあるかな（後撰集・冬・四八一・読人不知）

〔参考〕 春来れば心もとけてあは雪のあはれふり行く身を知らぬかな（式子内親王集・前小斎院御百首・春・四。中

古三十六人歌合元暦・二・式子）

〔出典〕 文永九年十一月百番自歌合（仮称）。以下1020まで同じ出典。

〔語釈〕 ○文永九年十一月比、なにとなくよみおきたる歌どもを取り集めて、百番に合はせて待りし―文永九年（一二七二）宗尊三十一歳時の、百番自歌合ということになる。本来二〇〇首の内、本抄所収の現存歌は九三首。「なにとなくよみおきたる歌どもを取り集めて」と言うとおり、歌題に明確な体系（組題）は見出せないが、大まかには、928～972は歳時（四季）、973～1012は天象・地儀・人倫・草木・鳥獸等、1013～1020述懐・釈教・神祇に分けられる。また、二首一組が意識されているようにも見え、特に歳時（四季）の中は各季が、春・秋（928～956）と夏・冬（957～972）の二首一組ずつに配列されているようである。全体に、同年二月十七日に嵯峨如来寿量院に没し、同月

十九日に葉草院で火葬され、翌二十日に遺骨を浄金剛院に納めたという（親長卿記、皇年代略記、増鏡等）、父帝後嵯峨院の死と、同月三十日の自身の出家を承けた述懐性の強い歌が目立つ。○とけて―心の緊張が緩む意。「氷」の縁で氷が融解する意が掛かる。○墨染の袖―出家者の衣の袖、出家者そのものをも言う。宗尊は、この歌合を番えた文永九年（一二七二）の二月三十日に出家している。法名は、覚恵または行勝あるいは行証、行澄という。

初秋

929 墨染の袂に露も置き添へて夕べ・身にしむ秋は来にけり

〔通釈〕 初秋

（出家した）墨染の袂に、涙とともに露も置き加わつて、夕方が身に染みる秋はやつて来たのだった。

〔参考〕

思ひやれならはぬ山にすみ染の袖に露おく秋のけしきを（千載集・雑中・一一四八・源通清）

ながむればそのことしもしもなけれども夕べ身にしむ秋の空かな（宝治百首・秋・秋夕・一三七四・頼氏）

物思へと露をば袖に置き添へて心をしる秋の夕暮（宝治百首・秋・秋夕・一三九一・高倉）

〔類歌〕

憂きを知る心の露も置き添へて袖のひまなき秋の夕暮（柳菴集・卷三・弘長三年六月廿四日当座百首歌・

秋・三八五）

〔語釈〕

○墨染めの袂―出家した僧侶の衣の袂。「墨染めの」は「夕べ」の枕詞でもある。本抄では、367と947にも用いている。○夕べ身にしむ―367にも用いている。

〔補説〕

前歌と「墨染」を共有し、「袖・袂」「氷・露」「春・秋は来にけり」で一対である。

930 子の日して千世もと言ひしかひもなしさらぬ別れの春の初空はつそら
子日

〔通釈〕 子の日

子の日の遊宴をして、千代の長寿も、と言ったかひもなかった。避けられない（文帝との）別れをした、この春の、あの初めの空よ。

〔本歌〕 世の中にさらぬ別れのなくもがな千世もと歎く人の子のため（古今集・雑上・九〇一・業平）

〔語釈〕 ○子日―正月の初子の日（あるいは第二・第三の子の日及び二月の子の日）に行う遊宴。若菜を摘み、小松の根を引いて、長寿を祈念する。○春の初空―源通親が『正治初度百首』で「諸人の祈る千歳を集めてもなほ数知らぬ春の初空」（春・五〇五）と詠んだのが早く、『千五百番歌合』でまた通親が「岩そそく垂氷の上にあす日影うちとけにける春の初空」（春一・三二）、子の通光が「今朝よりは雪げの雲のあととほれてみどりにかへる春の初空」（春一・一〇）と用いたのが続く。宗尊はこれらに学ぶか。

〔補説〕 この歌合を番えた文永九年（一一二七）の二月十七日に、宗尊の父後嵯峨院が五十三歳で没している。その父との「別れ」を詠じたものであろう。

七夕

931 変はる世の淵瀬も知らで天の川去年の渡りぞ秋や待つらん

『竹風和歌抄』注釈稿（五）

〔通釈〕 七夕

変わるこの世の、川の淵瀬の無常な移ろいを、七夕の二人の仲は知らないで、天の川では、去年と同じ七夕の逢瀬の為の渡し場が、秋を待っているのだろうか。

〔本歌〕

天の河去年の渡りのうつろへば浅瀬踏む間に夜ぞ更けにける（拾遺集・秋・一四五・人麿。万葉集・卷十・秋雑歌・二〇一八・人麿歌集、二句「去年の渡りは」下句「河瀬を踏むに夜ぞ更けにける」）

〔参考〕

淵は瀬になりかはるてふ世の中は渡り見てこそ知るべかりけれ（古今六帖・第五・思ひわづらふ・三〇一五・もとかた）

天の川うつろふ方も知らねども去年の渡りに秋風ぞ吹く（紫禁集・同〔建保六年九月二日〕比、様様題にて、人人歌つかふまつりし次に、七夕を、当座・一〇七九）

〔類歌〕

限りなき秋の契りは変はる世のうき瀬も知らじ天の河浪（芳雲集・秋・代牛女述懐・一七六三）

〔語釈〕

○変はる世―移ろい変わるこの世の意。「世」に「天の川」の縁で、男女の仲の意が掛かる。○淵瀬―川の深い淵と浅い瀬。移ろい変わることを寓意する。○天の川―天空で七夕に両星が逢瀬の為に渡る川。

霞

932 のぼりにし霞の空の名残とて春こそ君が形見なりけれ

〔通釈〕 霞

かたみ成

(煙となつて) 上つてしまつたあの霞の空の名残といふことで、(霞たなびく) 春こそが、我が君(後嵯峨院)の形見であるのだつた。

〔参考〕

のほりにし霞も同じ空なれば見し世の春にははらぬぞ憂き(長秋草・一六三)

知るらめや霞となりてのほりにし人のすみかの春のけしきを(秋風集・雑下・宇治入道前関白かくれての春、遠き所なる人のもとにいひつかはしける・一二七六・権律師実源)

春霞かすみし空の名残さへ今日を限りの別れなりけり(新古今集・哀傷・定家朝臣、母の思ひに侍りける春の暮につかはしける・七六六・良経)

立ちのぼる煙をだにも見るべきに霞にまがふ春の曙(新古今集・哀傷・前大納言光頼、春身まかりにけるを、桂なる所にて、とかくして帰り侍りけるに・七六七・惟方)

〔語釈〕

○君―この歌合を番えた文永九年(一二七二)の春二月十七日に五十三歳で没した、宗尊の父後嵯峨院のこ
とである。

露

933 問^とへかきな憂^浮き世のさがの野^へ辺の露消えにし跡^ぬに濡^{たもと}るる袂^をを

〔通釈〕
露

見舞つてくれよ。この憂き世の性で、嵯峨の野辺の露が消えてしまつた跡に、(涙で) 濡れる私の袂を。

〔参考〕

今はさは憂き世のさがの野辺をこそ露消えはてし跡と偲^はめ(新古今集・哀傷・母身まかりにけるを、嵯峨

野辺にをさめ侍りける夜、よみける・七八七・俊成女。俊成卿女集・一九六)

露の身の消えにし跡の別れには濡るる袂ぞ形見なりける(新和歌集・哀傷・四五八・藤原経綱)

〔類歌〕

常ならぬ憂き世のさがの野辺の露消えにし跡を尋ねてぞとふ(風雅集・雑下・太宰帥世良親王の一めぐりに、臨川寺へ思ひたつとて・一九七七・欣子内親王)

〔語釈〕

○とへ―訪問してくれの意にも、問い尋ねてくれの意にも解される。○憂き世のさがの野辺―「憂き世の性」(憂く辛いこの世のならいの意)から「さが」を掛詞に「嵯峨の野辺」に鎖る。「嵯峨」は、山城国の歌枕。現京都市右京区嵯峨。京都の北西郊、大堰川左岸の地。この措辞の作例は、寂蓮に「嵯峨に住みける比、九月ばかりあさましきほどに世に知らぬ風吹きて、蓬の庵頼むかげなくなりにけるを見て、殿法印〔慈円〕へ申しける」という詞書の「わが庵は都のいぬゐ住みわびぬ憂き世のさがと思ひなせども」(寂蓮法師集・一一七。拾玉集・五一一二)があり、その影響もあつてか、慈円にも「鷲の山のあるじを近くうつしめて憂き世のさがはこれぞうれしき」(拾玉集・春日百首草・諸寺・嵯峨・二六八二)がある。

〔補説〕

前歌と同様に、「嵯峨の野辺の露消えにし跡」は、父帝後嵯峨院が文永九年(一二七二)二月十七日に嵯峨如来寿量院に没したことを比喻していよう。

梅

934 梅が枝は四方に霞みてありし世の形見がほなる春の空かな

〔通釈〕梅

梅の枝は四方に渡つて霞んで、(文帝が)生きていた世の、いかにも形見模様の春の空であることだな。

〔参考〕 恋ひわびて我とながめし夕暮もなるれば人の形見がほなる (六百番歌合・恋・夕恋・八二七・定家。拾遺愚

草・歌合百首・恋・夕恋・八六九。万代集・恋五・二七〇八)

ひさかへて四方の梢も霞むめり今日より春の曙の空 (秋篠月清集・二夜百首・霞・一〇二)

おしなべて四方の梢は霞めども梅が香残す春の曙 (正治初度百首・春・一二〇九・隆信)

〔語釈〕 ○ありし世―932と同様に、文永九年(一二七二)二月十七日に五十三歳で没した宗尊の父後嵯峨院の在世を言つていよう。○形見がほなる―981にも用いている。

〔補説〕 参考の隆信詠は、良経詠の影響下にあるか。

萩

935 あはれとは昔の秋も聞きしかどこは世に知らぬ萩の上風

〔通釈〕 萩

それをしみじみとさびしいとは、昔の秋にも聞いたけれど、これは未だに経験したことのない、萩の上を吹く秋風よ。

〔本歌〕 暁の別れはいつも露けきをこは世に知らぬ秋の空かな (源氏物語・賢木・一三五・光源氏)

〔参考〕 さらにだに秋のけしきの悲しきには世に知らぬ萩の音かな (実家集・秋・をぎ・一〇八)

大方も秋吹く風は身にしむにこは世に知らぬ萩の音かな (長方集・秋・萩・七二。万代集・秋上・八八五・

長方)

〔補説〕『源氏物語』の歌は、娘の齋宮と共に伊勢に下向する六条御息所を慰留するために野宮を訪れた光源氏が、明け方に詠じた別れの歌。

「荻の上風」は、「秋はなほ夕まぐれこそただならね荻の上風萩の下露」（和漢朗詠集・秋・秋興・二二七・義孝）というように、秋の情趣を代表する景物であり、それを「あはれ」とする通念も、「いとどしく物の悲しき夕暮にあはれを添ふる荻の上風」（堀河百首・秋・萩・二八四・永縁）や「あはれとて問ふ人のなどなかるらん物思ふ宿の荻の上風」（新古今集・恋四・一三〇七・西行）等に認められる。ただし、ここに言う「昔」は、それら古人の往昔ではなく、宗尊の人生の過去の謂いであろう。より具体的には、文永九年（一二七二）二月十七日に父帝後嵯峨院を亡くし、同三十日に自身が出家した、それ以前の「昔」ということであろう。

75番歌「憂しと聞く秋も経ぬれどなれをしぞ哀れとは思ふ萩の上風」と同工異曲。

柳

936 春風の柳の谷の西たにのみなびく心の末よかは違なはじ

〔通釈〕 柳

春風が吹く柳の溪谷、その日の没する所である西（の浄土）にばかり、（東風に吹かれる）柳の葉先が靡くように寄せる私の心の行く末は、決して誤るまいよ。

〔参考〕 谷風の吹上げに立てる玉柳枝のいとまも見えぬ春かな（金葉集橋本公夏本拾遺・春・忠能卿家歌合に柳の心

を・八・読人不知)

西にのみ心ぞかかる菖蒲草この世ばかりの宿と思へば(山家集・夏・五月五日、山寺へ人のけふいる物なればとて、菖蒲をつかはしたりける返事に・二〇五)

〔語釈〕 ○春風―五行説から、言外に東の風であることを込める。○柳の谷―漢語「柳谷」の訓読表現か。「柳谷」は、太陽の没する谷を言う。『尚書』(堯典)の「分命三和仲」、宅西、曰「味谷」の疏に「味谷曰「柳谷」とある。○西―言うまでもなく、西方極楽浄土を念頭に言う。○なびく―心を寄せる意。「春風」「柳」の縁で柳の葉先が横様に揺れて動く意が掛かる。○末―将来、最後の意。「柳」の縁で柳の葉の「末」の意が掛かる。

菽

937 小菽こはぎ咲く嵯峨野さあかののの秋も忘わすられず君が別れし春のその日と

〔通釈〕 菽

小菽が咲くこの嵯峨野の秋も忘れられない。我が君(後嵯峨院)がここで死に別れた、あの春のその日とともに。

〔本歌〕 小菽咲く秋まであらば思ひ出でむ嵯峨野を焼きし春はその日と(後拾遺集・春上・花見にまかりけるに嵯峨野を焼きけるを見てよみ侍りける・八〇・賀茂成助。難後拾遺・二一。五代集歌枕・六五一)

〔語釈〕 ○嵯峨野―山城国の歌枕。↓933。父帝後嵯峨院の没したのが嵯峨如来寿量院であることを念頭に置いていよう。○君―父帝後嵯峨院を言う。○春のその日と―歌末の「と」は、本歌では引用だが、ここでは「秋も」を承け

て並立に解する。「その日」は、後嵯峨院が亡くなった文永九年（一二七二）二月十七日であろう。

〔補説〕 結句の「春のその日と」の形は、本歌を収める『袋草紙』（故人和歌難・五七八）の形に同じである。同書には、『難語拾遺』の「これは思ひ出でて、何事のいみじかるべきとも見えずこそ」（川村晃生校注『後拾遺和歌集』（平三・三、和泉書院）に拠る）を引いて、「これは思ひても、何事のいみじかるべきぞ」（『袋草紙注釈』（昭五一・三、塙書房）に拠る）とある。

鶯

938 百千鳥も、ちどり鳴く音も悲し物ごとにあらたまりにし春のつらさに

〔通釈〕

百千鳥の鶯が鳴く声も悲しい。あらゆるものすべてで新しく改まってしまった、春の恨めしさで。

〔本歌〕 百千鳥さへづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふり行く（古今集・春上・二八・読人不知）

よそにても花見るごとに音をぞ鳴くわが身に疎き春のつらさに（後撰集・春下・八七・読人不知）

〔参考〕 さ夜ふけて鳴く音も悲し唐琴の調べにかよふ籠のうちの鶴（土御門院御集・詠百首和歌承久三年・雑・鶴・九五）

〔語釈〕 ○百千鳥―百千（沢山の）の鳥の意とも、千鳥の異名とも言うが、ここは題の「鶯」に依じて、その鶯のこと。本歌の「百千鳥」がいわゆる「古今伝授」の「三鳥」の一つ。これを、鶯の異名とする説は、定家『僻案抄』の「ももちどりとは、鶯ともいふ。また春来ては、さまざまの鳥来たりさへづるとて、多くの鳥をももちのとりと

いふとも申す。鶯の歌に離れて、柳歌を隔てて入れたるも、おぼつかなし。されど、もちどりといふも、鶯はなるべしとは、聞こえず」（日本歌学大系本）というのが早い。

〔補説〕 春の憂鬱を詠じるのは、宗尊の特徴でもあり、新古今新風頃から見え始めて、京極派から南朝へと繋る中世和歌の傾向でもある。拙稿「鎌倉期関東歌壇の和歌―中世和歌表現史試論―」（『中世文学』九、平二六・六）。

虫

939 あはれとや音を鳴く虫も思ふらん見しにもあらずなれる姿を

〔通釈〕 虫

哀れとは、（声に出して泣く私自身だけでなく）声を上げて鳴く虫も思っているのだろうか。かつてとはすっかり様変わりしている、この私の姿を。

〔本歌〕 これを見よ人もすさめぬ恋すとして音を鳴く虫のなれる姿を（後撰集・物言ひける女に、蟬の殻を包みてつか

はすとして・七九三・源重光。和漢朗詠集・夏・蟬・一九八）

〔参考〕 故郷は見しにもあらず浅茅原松こそひとり常磐なりけれ（唯心房集・帰さに常磐の故郷にたちいたりたりけれ

ば、荒れ果てていとあはれなりけり・一五八）

姿こそ見しにもあらずなりゆけど心はいつか変はらぬものを（教長集・雑・九五九・登蓮）

五月雨に水もおぼろの清水さへ見しにもあらず面がはりして（正治後度百首・夏・五月雨・五二一・寂蓮）

寂蓮法師集・五月・三七九）

世の中は見しにもあらずなりぬるに面変はりせぬ星あひの空（建礼門院右京大夫集・年々、七夕に歌をよみてまゐらせしを、思ひ出づるばかり、少々これも書きつく・三一〇）

〔語釈〕 ○鳴く―「あはれ」の縁で「泣く」が掛かる。○見しにもあらず―参考に挙げた歌などのように、院政期から鎌倉期にかけて詠まれ始めた措辞。997にも用いている。

帰雁

940 来し方こなたにまた立ち返る道またかへ知らば我われに教へよ春の雁かりががね

〔通釈〕 帰雁

やって来た方に再び立ち戻る道を、もし知っているのならば、私に教えてくれ、春の雁よ。

〔参考〕 来し方は我も恋しきものなれば心あるべし帰る雁がね（拾玉集・詠百首和歌当座百首・春・帰雁・一四一四）

〔類歌〕 道知らば我に教へよ夕ひばりやすくもあがる雲の上かな（新葉集・雑上・望む事侍りける比、雲雀をよめる・一〇四八・源頼武）

〔語釈〕 ○来し―「雁がね」の縁で「越」が響くか。○道知らば我に教えよ―両句共に、原拠は次の『古今集』歌。

「道知らば尋ねも行かむ紅葉葉をぬさとたむけて秋はいにけり」（秋下・三二三・躬恒）、「花散らす風の宿りは誰か知る我に教へよ行きて恨みむ」（春下・七六・素性）。

〔補説〕 類詠、本抄320、700、837参照。

秋鹿

941 この比は昔を恋ひてさ牡鹿も妻をばよそに音をや鳴くらん

〔本文〕 ○秋鹿―底本の「鹿」は、何かの字（「菘」か）になぞり書き。

〔通釈〕 秋の鹿

この頃は昔を恋い慕って、牡鹿も妻を疎遠にして、私が声に出して泣くように、声を上げて鳴いているのだろうか。

〔参考〕 この頃は木木の梢に紅葉して鹿こそは鳴け秋の山里（後拾遺集・長楽寺に住み侍りけるころ、人のもとより、この頃何事か、と問ひて侍りければよめる・秋下・三四四・上東門院中将。新撰朗詠集・雑・山家・五二六）

〔類歌〕 高円の尾上の宮の秋風に昔を恋ひて鹿も鳴くらん（文保百首・秋・二六四〇・国冬）

〔影響〕 さ牡鹿の妻をばよそに隔ててや霧より遠に音をつくすらん（隣女集・卷三自文永七年至同八年・秋・霧間鹿・一一八〇）

〔語釈〕 ○昔を恋ひて―本抄84にも。「昔を恋ふ」は常套だが、この句形は『源氏物語』の「鶯の昔を恋ひてさへづるは木伝ふ花の色やあせたる」（少女・三三五・冷泉院）が早い。○鳴く―「恋ひて」の縁で「泣く」が掛かる。

〔補説〕 参考の『後拾遺集』の歌の先蹤に、「この頃は朝けに聞けばあし引の山をとよましさ牡鹿ぞ鳴く」（家持集・秋歌・一〇八）がある。

942 露は袖に余りにけりな墨染の衣憂き世の秋の夕暮

〔本文〕 ○衣憂き世の―底本は「衣もうきよの」。本歌の詞を取ったと判断し、「も」は衍字と見て、改める。

〔通釈〕 秋の夕べ

露は（涙も加わって）私の袖に余ってしまったのだったな。出家した私の墨染の衣も憂く辛い、頃もちょうど秋で憂く辛いこの世の中の夕暮よ。

〔本歌〕 墨染のころも憂き世の花盛り折忘れても折りてけるかな（新古今集・哀傷・正暦二年諒闇の春、桜の枝につけて、道信朝臣につかはしける・七六〇・実方）

〔参考〕 露は袖に物思ふ頃はさぞな置くかならず秋のならひならねど（新古今集・秋下・四七〇・後鳥羽院。自讃歌・二。新三十六人撰正元二年・六）

〔語釈〕 ○余りにけりな―『後拾遺集』の「なぬかにも余りにけりな便りあらば数へ聞かせよ沖の島守」（羈旅・五二八・高明）が早い、宗尊はより直接には、「花の色は余りにけりな筑波嶺のこのもかものもにかかる白雲」（遠島御歌合・山桜・三二・善真法師。東撰六帖・春・桜・一五九）に学んだか。これ以前にも、「置く露も余りにけりな雁鳴きて寒きあしたの小野の篠原」（柳葉集・卷五・文永二年潤四月三百六十首歌・秋・七一七）と用いている。○墨染の衣憂き世の―「墨染の衣憂き」から「ころも」を掛詞に「頃も憂き世の」に鎖る。

943 見^みし春も我^わが身ひとつの昔にて月やはあらぬ墨染の袖

〔通釈〕 春の月

かつて見た春もただ私一人にとつての昔であつて（今と変わりはしない）、月は同じでありはしないのか、いや同じだ、けれども私は出家の墨染の袖（に変わっている）。

〔本歌〕 月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして（古今集・恋五・七四七・業平。伊勢物語・四段・五・男）

昔見し春は昔の春ながら我が身ひとつのあらずもあるかな（新古今集・雑上・一四五〇・深養父）

〔参考〕 置く露は色もかはらぬ夕べかな我が身ひとつの墨染の袖（続拾遺集・雑秋・五七四・後嵯峨院）

〔語釈〕 ○見し春―昔見た春、かつての春。参考の深養父詠の「昔見し春」等、「見し春」の措辞は古くからある。

「見し春」の、宗尊が見習っていても不思議はない先行例としては、後鳥羽院に「馴れ馴れて雲井の花を見し春の木の間洩り来し月ぞ忘れぬ」（後鳥羽院御集・建暦二年十二月廿首御会・春五人百首中・春・一四五九）、雅経にも「道のべの朽ち木の柳見し春もうつりにけりな萩の下露」（明日香井集・承久二年七月十七日影供三首に、古径萩を・一三四二）の作がある。また、宗尊が披見していたと思しい『秋風集』には「見し春の花は咲けども老いらくの果ては物憂き世にこそありけれ」（秋風集・雑上・修明門院の大式・一〇七六）が収められている。宗尊自身も既に「時頼入道が旧跡の花を見て／見し春のこれを形見と思ひ出でて涙にうかぶ花の色かな」（中書王御詠・春・三六）と詠じている。1013にも。

〔補説〕 「月やあらぬ」の歌と、それを踏まえた「昔見し」の歌の両者を本歌にするが、参考の後嵯峨院詠にも做つ

ていよう。

944 秋風
捨て果つる苔の袂に露落ちて憂き世のほかも秋風ぞ吹く

〔通釈〕 秋の風

世をすっかり捨てきってしまった出家の苔の袂に、それでも涙の露は落ちて、憂く辛い俗世の埒外にも、秋風は吹くのだ。

〔参考〕 いつかわれ苔の袂に露置きて知らぬ山路の月を見るべき（新古今集・雑中・一六六四・家隆）
しろたへの袖の別れに露落ちて身にしむ色の秋風ぞ吹く（新古今集・恋五・一三三六・定家）

これやこの憂き世のほかの春ならむ花のとほその曙の空（新古今集・釈教・蓮花初開楽・一九三八・寂蓮）
〔語釈〕 ○苔の袂―俗世を捨てた出家者・隠遁者の衣の袖、あるいはその衣自体を言う。宗尊は文永九年（一二七二）

二月三十日に出家。○露―涙の比喩。

春雨

945 春雨の恵みも今は昔にて涙にくたす苔の袖かな

〔通釈〕 春雨

春雨の恵み（のような我が君の慈恵）を受けたのも今はもう昔のことであって、（父帝亡き今はただ）涙に朽ちさせるこの出家の苔の袖であることだな。

〔参考〕 草も木もあまねく恵む春雨に袖は濡れてもかひなかりけり（俊成五社百首・賀茂社・春・春雨・一一一）

春雨のあまねき御代の恵みとは頼むものから濡るるかな（続古今集・雑上・春雨の心を・一四九五・基良。宝治百首・春・春雨・三二六。万代集・春上・一六三。三十六人大歌合弘長二年・一〇一、二句「あまねき君の」）

我が袖を涙にのみやくたすべき恵みをかけよ住吉の神（拾玉集・秋日詣住吉社詠百首和歌・雑・一五二二）

〔語釈〕 ○春雨の恵み―文永九年（一二七二）二月十七日に没した父帝後嵯峨院からかつて受けた恩恵を寓意すると解する。○苔の袖―「苔の袂」に同じ。↓前歌。

〔補説〕 60番歌「袖のみぞ今は濡れける春雨の恵みやいつの昔なりけん」と類似する。

秋霧

946 世を憂^うしと厭^{いと}ひ果^はてぬる秋もなほ^猶心に残る峰の朝霧

〔通釈〕 秋霧

この世を憂く辛いと、すっかり嫌になつてしまつた秋でもやはり、心に残る峰の朝霧よ。

〔本歌〕 雁の来る峰の朝霧晴れずのみ思ひ尽させぬ世の中の憂さ（古今集・雑下・九三五・読人不知）

〔参考〕 世を憂しと厭ひし人は神奈備の三室の山に入りけるかも（古今六帖・第二・山・八五五）

『竹風和歌抄』注釈稿（五）

ひたすらに厭ひ果てぬるものならば吉野の山にゆくへ知られじ（後撰集・恋四・女につかはしける・八〇八・時平）

〔語釈〕 ○心に残る―↓678。

花

947 墨染すみぞめの夕べゆふべうつろふ山桜やまざくら心こころありける花はなとこそみ見れ

〔通釈〕 花

墨染の衣の身の夕方に、その墨染の色合いに変わる山桜は、（あの古歌が言う）情けを解する心があつた花だと見るよ。

〔本歌〕 深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染に咲け（古今集・哀傷・堀川太政大臣、身まかりにける時に、深草の山に納めてける後に、よみける・八三二・上野岑雄）

〔語釈〕 ○墨染の―「夕べ」の枕詞。ここは、この歌を収める「百番自歌合」を撰した文永九年（一二七二）十一月を遡ること九ヶ月の二月十七日に父帝を喪い同月三十日に出家した宗尊自身の境遇を示す、喪服か僧衣（あるいは両者）の意味に、本歌を承けた「桜」の色合いとしての墨染色の意味が重なり、有意と解する。↓367、929。

月

948 ありし世有によ変はらぬ月をながめても雲か隠れにし影ぞ恋しき

〔通釈〕 月

（文帝が）在世であつたときに変わらない月を物思いに眺めて、雲に隠れた月影のように、亡くなつてしまつた姿が恋しいよ。

〔参考〕 ありし世に月の光はかはらねど涙にかくは曇りやはせし（重家集・二条院隠れさせ給ひての年、九月十三

夜、月明かりしに、左京大夫顕広のもとより）愚和・二九八

めぐりあひて見しやそれとも分かぬ間に雲隠れにし夜半の月影（新古今集・雑上・一四九九・紫式部）

色も香も昔の濃さにはほども植えけむ人の影ぞ恋しき（古今集・哀傷・あるじ身まかりにける人の家の梅花を見てよめる・八五一・貫之）

〔語釈〕 ○雲隠れにし影―雲に隠れてしまつた月光の意だが、文永九年（一二七二）二月十七日に亡くなつてしまつ

た後嵯峨院の姿の比喩。

落花

949 花はな誘さそふ四方の嵐も哀あれ知しれ頼たのむ陰かげなき春の木のもと

〔通釈〕 落花

花を誘つて散らす四方一面に吹く激しい風も、どうか悲哀を分かってくれ。頼みとする陰もない、この春の桜樹

の下よ。(父帝を喪つて頼みとする庇護もないこの春の我が身よ)。

〔参考〕

花誘ふ嵐や峰を渡るらん桜波寄る谷川の水(金葉集・春水上落花といへることをよめる・五七・源雅兼)

花はみな四方の嵐に誘はれてひとりや春の今日は行くらん(千載集・春下・三月尽日、皇太后宮大夫俊成の

もとによみてつかはしける・一三一・静賢)

また越えむ人もとまらばあはれ知れ我が折り敷ける峰の椎柴(新古今集・羈旅・九七四・雅縁)

三室山花も紅葉もかつ散りて頼む陰なき谷の下草(続後撰集・雑下・道助法親王春隠れ侍りにける年の秋、

道深法親王また同じさまになり侍りにけるを歎きてよみ侍りける・一二六六・覚宗)

桜色の初花染めのかり衣きつつやなれん春の木のもと(続古今集・春上・九六・実氏)

〔語釈〕

○頼む陰なき春の木のもと―「四方の嵐」で花が散らされた状態の桜樹を言う。文永九年(一二七二)二月

十七日に父帝後嵯峨院を亡くして庇護を失った宗尊自身の比喩。

〔補説〕

各句全ての先例を過去の勅撰集中に見出だし得るような詠作は、宗尊の特徴の一面である。ただし、これら

全ての歌を強く意識していたとまでは言えないであろう。なお、「花はみな」の歌の第二句「四方の嵐に」には

「よその嵐に」(龍門文庫蔵本)の異文がある。

紅葉

950

心なき秋の木の葉はのむなしな枝えに西にしにぞ染そむる色いろは見みえける

〔通釈〕

紅葉

心の無い秋の木の葉の同じ枝の中で、それでも（浄土のある）西の方に、紅葉に染める色は見えるのだったな。

〔本歌〕

同じ枝を分きて木の葉のうつろふは西こそ秋の初めなりけれ（古今集・秋下・貞観御時、綾綺殿の前に梅の木ありけり、西の方にさせりける枝の紅葉ち始めたりけるを、うへにさぶらふ男どものよみけるついでによめる・二五五・藤原勝臣）

〔参考〕

同じ枝に分きて時雨や染めつらん秋色深き西の山の端（紫禁集・同日〔建保二年九月五日〕、人人、歌の試体に難題よみ侍る次に、当座、出題定家・紅葉半深・四一九）

〔語釈〕

○心なき―ここは、心を持たない、ということ。「秋」か「木の葉」か、あるいはその両者にかかると解される。○西にぞ染むる―五行説で秋は西に配されるとの考えに立つ本歌を承けて、西の方角の「木の葉」を紅葉に染める、ということ。「西」は、極楽往生する方角との含意があるか。

款冬

951 山吹の花の心こころもいかり言いはねばこそあれ昔恋こふらし

〔通釈〕 款冬

山吹の花の心も（私のように）、どれほど、口に出して言わないのであっても、昔を恋い慕っているに違いないことか。

〔本歌〕

思ひ出づる常磐の山のいはつつじ言はねばこそあれ恋しきものを（古今集・恋一・四九五・読人不知）

〔参考〕

女郎花花の心のあだなれば秋にのみこそあひわたりけれ（後撰集・秋中・二七六・読人不知）

言はで思ふ心はさぞないとどしく恋ひまさるてふ山吹の花（百首歌合建長八年・春・六〇九・良教）

〔補説〕

「山吹の花色衣ぬしや誰問へど答へずくちなしにして」（古今集・雑体・一〇一二・素性）以来の、「山吹」は「梔子（色）」で「口無し」故にものを「言は」ない、という通念と類型の上にある歌。宗尊はこれ以前にも「言はで思ふ心の色を人間はば折りてや見せん山吹の花」（瓊玉集・恋上・百番御歌合に、春恋・三三四。柳葉集・卷四・〔文永元年六月十七日庚申百番自歌合〕・春恋・五三〇。続古今集・恋一・九六四）と詠んでいて、参考の良教の歌に学んだ可能性が窺われる。

擣衣

952

墨染そのめの衣うてとて秋風も夕暮くれさむ寒くなりまさるらん

〔通釈〕

擣衣

出家の身の墨染の衣は憂く辛く、それを打てと行って吹く秋風も、夕暮にいつそう寒くなっていつているのだらう。

〔参考〕

墨染の衣憂き世の花盛り折忘れても折りてけるかな（新古今集・正暦二年諒闇の春、桜の枝に付けて道信朝臣につかはしける・七六〇・実方）

み吉野の山の白雪積もるらし故郷寒くなりまさるなり（古今集・冬・三三五・是則）

み吉野の山の秋風さ夜更けて故郷寒く衣打つなり（新古今集・秋下・四八三・雅経）

〔語釈〕

○墨染の衣うてとて―参考の実方詠を踏まえて、「墨染めの衣憂（し）」に「墨染めの衣打てとて」が掛か

る、と解する。「墨染の衣」は、もちろん文永九年（一二七二）二月十七日の父帝後嵯峨院の死去を受けて、同月三十日に出家した宗尊自身の喪服あるいは僧衣のこと。「衣打てとて」の先行例は、順徳院歌壇に活躍した藤原範宗に、「夜もすがら光を袖に片敷きて月や契りし衣打てとて」がある。ここは、擣衣の音を運ぶ「秋風」を擬人化して、その音をより響かせるから衣を打てという訳で、という趣旨で言うか。○夕暮寒く―「夕暮寒し」の類の措辞は新鮮である。同時代でも、六波羅評定衆を務めた関東歌人大江茂重の「霧の間に天飛ぶ仮の声はして夕暮寒き秋の空かな」（茂重集・暮天雁・九三）が見える程度で、勅撰集には『玉葉集』の「なほささゆる風は雪を吹きまぜて夕暮寒き春雨の空」（春上・三三・永福門院）のみである。

藤

953 もの思おもふ宿すになな咲さきそ藤ふの花はな染そむる衣いの同なじ名なも憂うし

〔本文〕 ○宿にな咲きそ―底本「宿なさきそ」を、一首の意味内容から「宿」の下に「に」を補って改める。

〔通釈〕 藤

辛い物思おもいをする私の家に咲さくな、藤の花よ。（喪服として）染める衣の「藤衣」という、その花と同じ名前も憂鬱うだ。

〔参考〕 いとどしく物思おもふ宿の荻の葉に秋とつげつる風のわびしさ（後撰集・秋上・二二〇・詠人不知）

のぼりにし春の霞を慕ふとて染むる衣の色もはかなし（続古今集・哀傷・後鳥羽院隠れたまうての頃・

一四〇六・順徳院）

主知らで紅葉は折らじ白浪の立田の山の同じ名も憂し（為家集・雑・不偷盜戒正嘉二年結縁經五首・一五七九）
 続拾遺集・釈教・一五〇四・為家）

〔語釈〕 ○もの思ふ宿―憂く辛い物思いをする我が家、ということ。文永九年（一二二二）二月十七日の父帝後嵯峨院の死去を受けて、同月三十日に出家した宗尊の境遇から言う。○藤の花染むる衣の同じ名―喪服を「藤衣」と言うので、このように言う。

〔補説〕 私に校訂した「宿にな咲きそ」には先例はない。江戸時代後期の加納諸平に「春知らぬ宿にな咲きそ葦草よしや胡蝶の袖はするとも」（柿園集・春・閑居董・三）の作例がある。

菊

954 紫の我が元結は昔むかしにて菊の籬に色ぞ残れる

〔通釈〕 菊

紫色の私の元結はもう昔のことで、菊の花が咲く籬にその紫色は残っている。

〔本歌〕 君来ずは閨へも入らじ濃紫我が元結に霜は置くとも（古今集・恋四・六九三・読人不知）

〔参考〕 霜深き垣根の菊の濃紫誰が元結ににほふなるらむ（道助法親王家五十首・秋・残菊句・六八〇・孝継）

それかとも匂ひばかりぞ残りける色はあとなき菊の籬に（道助法親王家五十首・秋・残菊句・六七五・覚寛）

朝な朝な君に心をおく霜の菊の籬に色は見えなん（続古今集・恋一・一〇三五・好忠）

てふのあし花はさながら霜枯れてにほひぞ残る菊の籬に〔拾遺愚草員外・〔伊呂波四十七首二度〕・冬・二八二〕

〔語釈〕 ○紫―服制で紫は貴人の色であり、中務卿親王（中書王）たる宗尊の身に付ける色。○元結―髻をたばねて結ぶのに用いる紐あるいは糸。○菊の籬に色ぞ残れる―籬の残りの菊の花が紫色にうつろっている状態を言う。「そめかふる籬の菊の紫は冬にうつろふ色にぞありける」（六百番歌合・冬・残菊・四九八・経家）。

〔補説〕 208と同工異曲。

三月尽

955 かかりける別れも知らでまたも来ん春の名残をいつ惜しみけん

〔通釈〕 三月尽

このようなことになった別れがあることを知らないで、再びめぐって来るであろう春の名残を、いったい何時惜しんだのだったろうか。

〔参考〕 またも来む時ぞと思へど頼まれぬ我が身にしあれば惜しき春かな（後撰集・春下・弥生の晦日の日、久しう

まうで来ぬよし言ひて侍る文の奥に書きつけ侍りける・一四六・貫之）

またも来む春の別れを歎きしはせて思ひのなき世なりけり（続古今集・哀傷・権中納言公宗弥生の末つ方身まかり侍りければよみ侍りける・一四四八・実雄）

かかりける別れを知らで山しろのとはにも君を頼みけるかな（新拾遺集・哀傷・八条院かくれさせ給ひて

後、程なくまた春花門院失せさせ給ひにけるを、鳥羽へ送りたてまつりけるに読み侍りける・八五七・信実)

〔語釈〕

○かかりける別れ―文永九年（一二七二）二月十七日に死去した父帝後嵯峨院との別れ。○いつ惜しみけん―過去を回想する、宗尊らしい句。

〔補説〕

「別れも知らで」については、類句の「暁の別れを知らでくやくも逢はぬつらさを恨みけるかな」（長秋詠藻・右大臣家百首治承二年五月晦日比給題七月追詠進・後朝恋・五一六。続後撰集・恋三・八二六・俊成）が先行する。この俊成の歌は、「有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし」（古今集・恋三・六二五・忠岑）を踏まえ、「源氏物語」の「生ける世の別れを知らで契りつつ命を人にかぎりけるかな」（須磨・一八五・光源氏）にも負っているようか。宗尊は、該歌以前に「逢はぬまをつらきものとはきぬぎぬの別れも知らで思ひけるかな」（柳葉集・卷二・弘長二年十二月百首歌・別恋・三四五）や「散る花の別れも知らで暁を何に似たりと思ひけるかな」（柳葉集・卷五・文永二年潤四月三百六十首歌・春・六七二）と詠んでいる。前者は俊成の歌と類似していて、それになだかとも思われる。後者は、「いかで我に人も問はん暁のあかぬ別れや何に似たりと」（後撰集・恋三・七一九・貫之）を本歌にする。

九月尽

956

憂き世をば秋果ててこそ背きしにまたはいかなる今日の別れぞ

〔通釈〕

九月尽

憂く辛い世を、すっかり飽きききって背き出家したのに、またどのような、秋が果てる今日九月尽の（悲しい）別れなのか。

〔参考〕 世の中をあき果ててこそ出づれどもなほしたはしき今日の暮かな（粟田口別当入道集・秋・同じ日〔九月尽日〕、高野へ参るとて心に思ひし・八四）

〔他出〕 玉葉集・雑四・後嵯峨院失せさせ給ひにける年、世を背きて九月尽に・二三三二、三句「背きしか」。

〔語釈〕 ○秋果ててこそ背きしに―宗尊の出家は、文永九年（一二七二）二月十七日の父帝後嵯峨院の死を承けた、同月三十日であるから、主文脈は「飽き果ててこそ背きしに」で、歌題の「九月尽」と「今日の別れぞ」の縁から「秋果てて」が掛かる。

首夏

957 あはれなる我が墨染の袂かな今日とていつか衣替へてん

〔通釈〕 首夏

哀れな私の墨染の僧衣の袂であることだな。更衣する首夏の今日とて、いったいいつ衣更えできるだろうか。できないのだ。

〔参考〕 時知らで過ぐす憂き身のかひもなく今日とて花の衣替へめや（土御門院御集・詠百首和歌承久三年・夏・更衣・三二）

今日とてや大宮人の替へつらむ昔語りの夏衣かな（後鳥羽院遠鳥百首・夏・二二）

今日とてもかはらぬ苔の衣こそあやなく春の形見なりけれ（万代集・夏・五〇六・覺弁）

〔語釈〕

○我が墨染の袂―文永九年（一二七二）二月十七日の父帝後嵯峨院の死を承けて同月三十日に出家した、尊自身の僧衣（の袖）を言う。○今日とて―更衣する「首夏」（夏の初め）の今日も今日ということ、ということ。参考歌の他に為家の「住吉の神の宮人今日とてや夏来にけりと衣替ふらん」（為家五杜百首・夏・更衣・住吉・一四六）も参考になる。

〔補説〕

下句は、「更衣」の本意からすれば、「更衣する首夏の今日とて、いつのまにか更衣してしまおうか。」という意味にも解される。しかし、出家の身という宗尊の境遇と、その詠作の述懐性から見て、採れない。

初冬

958

冬来ぬと涙の外も時雨しぐるなり也いかがはすべき墨染の袖

〔通釈〕

初冬

冬が来たと、雨と降る私の涙以外も、時雨が降るようだ。どうしたらいいだろうか、この出家の墨染の袖を。

〔参考〕

柴の戸に雨と時雨しぐるる木の葉かな涙の外に袖は濡れねど（続古今集・冬・建長五年十月三首歌に、山家落葉・五五六・為教）

もの思ふと言はぬばかりは忍ぶともいかがはすべき袖の霏しを（新古今集・恋二・一〇九二・源顕仲。永久百首・恋・忍恋・四二二）

〔語釈〕

○涙の外も―雨とばかりに降る涙以外も、という趣意。↓500。○墨染の袖―前歌の「墨染の袂」と同じ。こ

の「墨染の袖」は大枠では、「墨染の君が袂は雲なれやたえず涙の雨とのみ降る」（古今集・哀傷・思ひに侍りける人をとぶらひにまかりてよめる・八四三・忠岑）や「墨染の衣の袖は雲なれや涙の雨のたえず降るらん」（拾遺集・哀傷・題不知・一二九七・読人不知）の類型の中にある。

〔補説〕 宗尊は出家以前の在関東時にも、「空も憂き時や知るらむかみな月涙の外のまた時雨れつつ」（柳葉集・巻一・弘長元年五月百首歌・冬・四〇）と、類似した意想を詠じている。

卯花

959 今是我世われよをうの花のかき籠こもり春をばよそに隔はて果はてにき

〔通釈〕 卯の花

（出家して世を通れた）今では私は、この世を憂く辛いものとして、卯の花の垣の中にかき籠もって、春を無縁に隔てきってしまったよ。

〔参考〕 今是我吉野の山の花をこそ宿の物とも見るべかりけれ（新古今集・雑上・世を遁れて後、百首歌よみ侍りけるに、花歌とて・一四六六・俊成）

今是我松の柱の杉の庵にとづべきものを苔深き袖（新古今集・雑中・百首歌たてまつりしに、山家の心を・一六六五・式子）

うつろはで散りぬるものは山里の世をうの花の垣根なりけり（江帥集・雑・うの花・四二三）

いかにせむ賤が園生の奥の竹かき籠もるとも世の中ぞかし（新古今集・雑中・述懐百首歌よみ侍りけるに・

一六七三・俊成)

〔類歌〕

時知らぬ身をうの花の垣根こそ春をばよそに隔て果てけれ(新統古今集・雑上・永和百首歌に、卯花・

一六六一・善成)

〔語釈〕

○今は—文永九年(一二二二)二月十七日の父帝後嵯峨院の死を承けて同月三十日に出家遁世した今では、
ということ。○世をうの花のかき籠もり—「世を憂」から「う」を掛詞に「卯の花の垣」に鎖り、さらに「かき」

を掛詞に「掻き籠もり」に鎖る。「掻き籠もり」は「掻き」が接頭語で、外出せず屋内に閉じ籠もることを言う。

○春をばよそに—先行の類例には、西行の「霞めども春をばよその空に見てとけんともなき雪の下水」(西行法師

家集・春・初春・一〇)や重家の「今年さへ何とて花の匂ふらん春はよそなる宿となりなき」(重家集・家の花を

折りて刑部卿のもとへ・二五九)がある。慈円は、文治四年(一一八九)十二月の「早卒露膽百首」で、あるいは

西行詠の影響下に「八重霞春をばよそに見すれどもあはれをこむるみ吉野の山」(拾玉集・楚忽第一百首・春・霞・

七〇四)と詠んでいる。「憂」との詠み併せは、慈円の甥良経が、建久末から正治頃(一一九六—一一九九)とい

う「西洞隠士百首」で「花に似ぬ身のうき雲のいかなれや春をばよそにみ吉野の山」(秋篠月清集・春・六〇九)

と詠じている。その後、定家(春をばよそに)、正治初度百首(一三七三)や宮内卿(春はよそなる)、同後度百

首・八一〇)が用いているし、師光の「かくばかり春はよそなる身のほどにいかで桜の花の見ゆらむ」は、宗尊も

披見したと思しい『秋風集』(雑上・一〇七三)に収められている。より宗尊に近い時代では、『宝治百首』の「ふ

りはてて春はよそなる身の憂さに暮れ行く年のいとなみもなし」(冬・歳暮・二三九六・但馬)や『現存六帖』の

「我ならぬ雲の雁も音になきて春をばよそに遠ざかるなり」(かり・七八八・忠兼)がある。

〔補説〕

上句の措辞の類例は、後代に実隆の「世の中よ道ありと見ば山深く身は卯の花にかき籠もるとも」(雪玉集・

夏・徑卯花・七〇〇）がある。

時雨

960 ぶり増まさるみそぢの夢におどろけば寢覚ねさまめ時雨しくれぬ暁あけもなし

〔通釈〕 時雨

年を経て三十歳を増さる年に見ている夢から、降り増さる時雨にはつと気がつくくと、寢覚めに時雨れていない暁はなく、時雨の涙を降らせない暁もないのだ。

〔参考〕 今日しこそ時雨もことに降り増され思ひしことぞ冬の初めは（新撰六帖・第一・はつ冬・一七四・信実）

寝るがうちに見るを夢とおどろけばなほ長き夜の暁の鐘（明日香井集・百日歌合毎日一首後不見建保二年七月廿

五日始之・閑暁・六三三）

おどろかす時雨の頃は神無月うちとけてやは夢を見るらむ（相模集・九九）

山深き杉の庵の村時雨憂き世の夢をおどろかせとや（東撰六帖抜粹本・冬・時雨・三七〇・泰時）

〔類歌〕 年経たるみ山の奥の秋の空寢覚め時雨れぬ暁あけぞなき（風雅集・秋下・秋の頃よみ侍りける・七一・慶政）

〔語釈〕 ○ふりまさる―「古り増さる」に「時雨れぬ」の縁で時雨が「降り増さる」が掛かる。

〔補説〕 「みそぢ」等の「ぢ」は接尾語だが、院政期から鎌倉時代に掛けて、老いを早く自覚する歌人達の性向と相俟って「ぢ」を「路」のように解してか、例えばこの「みそぢ」ならば、三十歳に向かう道筋即ち二十代を言う傾向が出て来る。ただし、宗尊の場合は、「ぢ」を本来の意味で捉えていたと思しく、本抄でも、文永八年（一二七二）

の三十歳時に正しく「みそぢ」（828、922）と詠じているし、該歌と同じ文永九年（一二七二）の「百番自歌合」では、「みそぢ余り」（982）と詠じているのである。三十一歳時の「百番自歌合」の該歌で「古り増さるみそぢ」と言っているのも、「みそぢ余り」と同様の意識であろう。ちなみに、「永享五年（一四三三）九月頃に、百首の詠進者四一名が決定され（看聞日記）、翌永享六年四月頃から八月頃にかけて、各人の百首歌がほぼ集まってきた」（新編国歌大観解題）という『永享百首』で、応永九年（一四〇二）年生まれ的一条兼良は、「我が身はや三十あまりの神無月なほや時雨のふりまさるべき」（冬・時雨・五五二）と詠んでいる。

残花

961 如月きさらぎや哀れあはれ憂うれかりし別れわかれかな春はるに遅おくるる花はなもある世よは

〔通釈〕 残花

如月よ。哀れに憂く辛かった（文帝との）別れであることだな。「あはれ」すばらしいと言われるように春に遅れて（卯月に）咲く残りの桜もあるこの世、それならず、父の亡くなった春に遅れて残り私一人が生きているこの世は。

〔本歌〕 あはれてふことをあまたにやらじとや春に遅れてひとり咲くらむ（古今集・卯月に咲ける桜を見てよめる・

一三六・紀利貞）

〔参考〕 しぐれつつ朽ちにし袖はいかがするあはれ憂かりし秋は来にけり（栄花物語・紫野・六二四・通俊。別本和

漢兼作集・中宮賢子隠れさせ給ひて、またの年の秋、かの宮の女房につかはしける・七〇）

〔語釈〕 ○哀れ―本歌の詞を取るが、本歌のしみじみと素晴らしいという意味の「あはれ」とは対照的に、ここは主意は悲しく寂しいということ。○別れ―文永九年（一二七二）二月十七日の父帝後嵯峨院との死別。○花―宗尊自身を寓意する。

〔補説〕 歌題の「残花」は、遅れて咲く名残の桜の花、ということだが、ここは、本歌の卯月を意識しつつ「如月や」とあるので、桜の「花」自体は「残花」ではなく、「如月」二月に亡くなった父後嵯峨院に後れて残された宗尊自身を「残花」に喩えていよう。

落葉

962 はかなさの命にまさる紅葉葉を今年も風にまかせてぞ見る^み

〔通釈〕 落葉

儂さが人の命にまさる紅葉の葉を、今年もただ風にゆだねて（散るのを）見ていることだ。

〔本歌〕 紅葉葉を風にまかせて見るよりもはかなき物は命なりけり（古今集・哀傷・病に煩ひ侍りける秋、心地の頼もしげなくおぼえければよみて人のもとにつかはしける・八五九・千里）

〔参考〕 心にもかなはぬ道の悲しきは命にまさる別れなりけり（統後撰集・羈旅・一二八五・教定）

宿近き山田のひたに手もかけで吹く秋風にまかせてぞ見る（後拾遺集・秋下・師賢朝臣梅津の山庄にて田家秋風といふころをよめる・三六九・源頼家）

〔補説〕 本歌の趣向に異を立てているが、「今年も」という表現に、儂い命のはずの自身が生き続けていることへの

不安、あるいはそれと裏腹の諦念と言つてもいい感情を読み取ることができようか。

郭公

963 何事こともありし有にはあらずか変はる世おなに同じ声なる時鳥かかな

〔通釈〕 郭公

何事も、かつてあつたのとはすっかり違ふようになり、変わる世の中で、同じ声である時鳥であることだな。

〔本歌〕

聞かばやなそのかみ山の時鳥ありし昔の同じ声かと（後拾遺集・夏・裸子内親王賀茂の齋院と聞えけるを、
年経て、後三条院の御時、齋院に侍りける人のもとに、昔を思ひ出でて祭のかへさの日、神館につかはし
ける・一八三・皇后宮美作）

〔参考〕

何事も変はりゆくめる世の中に昔ながらの橋柱かな（千載集・雑上・長柄の橋のわたりにてよめる・
一〇三二・道命法師）

世の中のありしにもあらずなりゆけば涙さへこそ色かはりけれ（千載集・雑上・運をはづる百首歌よみ侍り
けるなかによめる・一〇二七・源俊頼）

〔補説〕

後拾遺集初出歌人の歌を本歌と見ることにについては、『瓊玉和歌集注釈稿（二三）』（本紀要四七、平二二・三二）
126、128補説参照。

千鳥

964 君が代を八千世と言ひし浦千鳥今はいかなる音にか鳴くらん

〔通釈〕 千鳥

君が代を、八千代と言って「やちよ」と鳴いた浦の千鳥よ。（父帝後嵯峨院が亡くなった）今では、どのような声で、私が泣くように鳴いているのだろうか。

〔本歌〕 しほの山さしでの磯にすむ千鳥きみがみ世をば八千代とぞ鳴く（古今集・賀・三四五・読人不知）

〔参考〕 沖つ風波もたかしの浦千鳥松の末葉に八千代とぞ鳴く（紫禁集・同〔建保二年三月十日〕比、四季鳥歌、宛十二月也、当座・三五一）

時鳥いつかと待ちし菖蒲草今日はいかなる音にか鳴くべき（新古今集・恋一・一〇四三・公任）

〔語釈〕 ○八千世―八千代。永遠に続くような長い年代の意。「千鳥」の鳴き声の擬音「やちよ」を取りなす。○鳴

く―父帝後嵯峨院との死別後の「百首自歌合」の歌であるので、「泣く」が掛かる、と解する。○今は―文永九年（一二七二）二月十七日に父帝後嵯峨院が亡くなった後の今では、ということ。

橘

965 昔思ふ心むかしおもを知らば我が袖わがそでの涙なみだに匂におへ軒たち花の橘

〔通釈〕 橘

往古を懐かしく思う心をもし分かるのならば、私の袖に流す涙に香りを漂わせて（思い起こさせて）くれ、軒の

橘よ。

〔参考〕 昔思ふ草の庵の夜の雨に涙な添へそ山時鳥（新古今集・夏・二〇一・俊成）

昔思ふ花橘に風過ぎて落つる涙もかをる袖かな（正治初度百首・夏・二二二九・信広）

軒近き花橘に袖しめて昔を偲ぶ涙つつまん（山家集・雑・七一四。西行法師家集・夏・花橘によせて懐旧といふことを・一五七）

匂ひ来る花橘の袖の香に涙露けきうたた寝の夢（続古今集・夏・二四九・俊成。御室五十首・夏・二八五。御室撰歌合・三〇。三百六十番歌合・夏・二〇八。雲葉集・夏・三三四）

〔語釈〕

○涙に匂へ―先行例は見えない。後出では、前期京極派の歌合に於ける伏見院新宰相詠「今宵さへ来ずなりぬよと思ひつづけ涙にほふ灯の色」（三十番歌合（正安二年―嘉元元年）・寄涙待恋・三八）、『風雅集』所収の花園院詠「更けにけりまたとはれでとむかふ夜の涙にほふ灯の影」（恋二・夜恋を・一〇六四）、『延文百首』に於ける伏見院皇女進子内親王の「夕暮はさてもと思ふあはれより涙にほふ入相の鐘」（延文百首・恋・寄鐘恋・一九〇・進子）がある。これらの内、前二首の「にほふ」は視覚上の、後一首のそれは視覚と聴覚の共感的な謂いであり、該歌の嗅覚上のそれとは異なる。しかしながら、宗尊と京極派に共通の措辞であることは注目される。

〔補説〕

大きな枠組みとしては、「橘」の香気が「昔」を思い起こさせる類型の中にあり、それは勿論「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」（古今集・夏・一三九・読人不知）を原拠の一つとするものである。

なお、周知のとおり、参考の俊成の一首は「蘭省花時錦帳下（らんせいのはなのときのきんちやうのもと 廬山雨夜草菴中）ろさんのあめのよのさうあんのうち」（和漢朗詠集・山家・五五五）を踏まえる。

966 雪
降る雪は今も道ある御世なればありし昔の跡ぞ恋しき

〔通釈〕 雪

降る雪は、今も正しい道が行われている御代である（ことを跡づける）ので、なおさら（文帝後嵯峨院が）かつて在った昔の跡が恋しいよ。

〔参考〕 春にあひて道ある御世に若菜摘む野原の雪に跡は見えけり（寛喜女御入内和歌・野沢摘若菜残雪処処・八・

道家）

消ぬが上にまた跡つけよ玉ほこの道ある御代の野辺の白雪（院御歌合宝治元年・野外雪・一三八・公相）

白雪の道ある御代につかへてぞ昔に返る跡も見るべき（百首歌合建長八年・冬・九三八・良教）

天の原月はかはらぬ空ながらありし昔のよをや恋ふらん（後拾遺集・雑一・月の明く侍りける夜、小一条の

おほいまうちぎみ昔を恋ふる心をよみ侍りけるに、よめる・八五二・清原元輔）

〔影響〕 いにしへのかしこき跡に立ち返り今も道ある鎌倉の里（隣女集自文永七年至同八年・卷三・雑・寄里祝・

一七〇一）

〔補説〕 初句の「降る雪は」は、「今も道ある御世なれば」と「ありし昔の跡ぞ恋しき」の両方にかかる、と解した

い。それにしても、上句はやや詞足らずの感がある。何か典故があるのかもしれないが、詳らかにし得ない。龜山天皇（宗尊の弟）代の現在も正しい政の「道」が行われていて、「降る雪」にもその道の跡がはつきりとしている、といった趣旨に解しておく。もちろん、「ありし昔の跡」は、文永九年（一二七二）二月十七日に亡くなった文帝

後嵯峨院の治世の跡ということであろう。

夏夜

967 夏の夜の夢の枕に思ふよかなはみかなく見みえし春の現うつを

〔通釈〕 夏の夜

夏の夜に夢を見る枕辺で、やるせなく思うことであるな。あの儂く見えた、春の現実を。

〔参考〕 秋深き寢覚めにいかが思ひ出づるはかなく見みえし春の夜の夢（新古今集・哀傷・久我内大臣春頃うせて侍り

ける年の秋、土御門内大臣、中将に侍りける時、つかはしける・七九〇・殷富門院大輔）

折しもあれ花橘のかをるかな昔を見つる夢の枕に（千載集・夏・花橘薫枕といへる心をよめる・一七五・公

衡）

帰り来ぬ昔を今と思ひ寝の夢の枕にほふ橘（新古今集・夏・二四〇・式子）

冬の夢のおどろき果つる曙に春の現のまづ見ゆるかな（秋篠月清集・西洞隠士百首・春・六〇〇）

〔語釈〕 ○春の現―文帝後嵯峨が文永九年（一二七二）二月十七日に亡くなった春の現実。

冬月

968 ふり果よてて世にすさまじきたぐひとや霜夜の月の袖みを見るらん

〔通釈〕 冬の月

すっかり古びてしまつて、実にもの寂しく荒涼とした類のものと、霜がびつしりと降り置いた夜の月は、私の（霜に覆われた）この袖を見ているのだろうか。

〔参考〕 すみわびぬ年暮れ方の月影の世にすさまじくなりにけるかな（中院集・〔文永二年正月または二月〕廿八日

続百首・冬月・八二）

誰か見ん世にすさまじくなり果てて長きをかこつ冬の夜の月（為家集・徒然百首文永五自去去日五ヶ日之間詠之・

冬・冬月・一八五九）

すむとても世にすさまじき老の世や年暮れ方の冬の月影（為家集・文永八年四月廿八日当座百首・冬・冬

月・一九四九）

〔語釈〕 ○ふり果てて―（自分の「袖」が）「古り果てて」に「霜」の縁で「降り果てて」が掛かる。前者の先行例

には「ふり果てて春はよそなる身の憂さに暮れ行く年のいとなみもなし」（宝治百首・冬・歳暮・二三九六・但馬）があり、同様の掛詞の先行例には「幾秋か暮れぬとばかり惜しむらん霜ふり果つる身をば忘れて」（同・秋・九月 尽・一九五四・基良。万代集・秋下・一二五七。続後撰集・秋下・四五〇）がある。共に宗尊の視野に入っていたであろう。○世に―たいそう、本当にの意の副詞。

〔補説〕 参考の為家詠に倣った一首であろう。ただし、為家詠の前二首は、「すさまじ」いのは冬の「月」である。

後の一首は、「住む」と「澄む」の掛詞からして、「すさまじ」いのは自身の老いた人生と「冬の月影」の両者であろう。これに対して該歌は、その「すさまじ」いはずの冬の「月」を擬人化して、その「月」が、むしろそれよりも「すさまじ」い自身の（古びて霜が降った）「袖」を見ているのだろうか、と詠嘆した趣である。

969 世よを厭いとふ窓に蛍を集めてや学まなぶる法の光をも見みん
 蛍

〔通釈〕 蛍

この世の中を嫌だと避ける私の窓に、(あの故事のように) 蛍を集めて、その明かりで学んで、仏法の光明をも見ようか。

〔参考〕 行く蛍光を窓に集めても思ひ知らるる法の灯(千五百番歌合・雑二・二八九七・寂蓮)

〔語釈〕 ○窓に蛍を集めてや―晉の「車胤聚螢」(蒙求標題)の故事が原拠。「晋書」列伝五十三の「車胤伝」を原拠とし、『世説新語』賞誉篇には『統晋陽秋』が引かれている。「文撰」や『蒙求』にも、「孫康映雪」と併せ記されている。「蒙求」より引くと、「孫氏世録に曰く、孫康、家貧にして、油無し。常に雪に映し書を読む。少より清介にして、交遊雑らず。後に御史大夫に至るなり。宋略、車胤、字武子、河東の人。讀書を好み、家貧にして油無し。螢火を聚め、絹袋を以てこれを盛り日に継ぐ。後に桓温荆洲に在り、辟して従事と為し、臨湘侯に進爵するなり。」(国立故宫博物院蔵本に拠り読み下す。池田利夫氏編『蒙求古註集成』上巻影印に拠る)とある。これらには「窓」の語は見えないが、例えば、韓愈「答張徹」詩には「畢事驅伝馬、康居守窓螢。」とあり、許渾「送前東陽子明府由鄂渚歸故林」詩にも「殷勤為謝南溪客、白首螢窓未招。」と見える。遅くとも唐代には「螢」と「窓」が結びつけられて、それが日本にも伝えられて流布したと推測される。鎌倉期の宗尊にとつては、普通の知識であったであろう。○法の光―仏法の光明あるいは威光ということ。「光」は「螢」の縁語で、「車胤聚螢」の故事(前項)

を踏まえて、蛍の放つ明かりの意が掛かる。

氷

970 水を想ふ心は浅き山の井の水れる冬や悟るなるらん

〔通釈〕 氷

水のことを思いやる心は浅い、浅い山の井戸が氷っている冬は、(水が)冬であることを悟っているのだろうか。

〔本歌〕 山の井の浅き心も思はぬに影ばかりのみ人の見ゆらむ(古今集・恋五・七六四・読人不知)

〔参考〕 冬来れば行く手に人は汲まねども氷ぞ結ぶ山の井の水(千載集・冬・四四〇・成家)

澄む水を心なしとは誰か言ふ氷ぞ冬の初めをも知る(千載集・冬・三九二・隆季。久安百首・冬・五五二)

〔類歌〕 悟りえぬ御法の水の浅水心づからぞ結ばほれ行く(前撰政治家歌合嘉吉三年・冬・積教・五五八・右衛門督)

〔語釈〕 ○心は浅き山の井の―「心は浅き」から「浅き山の井の」に鎖る。

〔補説〕 類歌に挙げた一首は、『前撰政治家歌合嘉吉三年』の「冬・積教」題の歌だが、判詞(衆議判、兼良執筆)に、「先

の番の、心の水の氷、かの内府の歌に通ひ侍るにや」とある。これは、同歌合同題の一首「濁りなき心の水は氷らねど暁さえて鐘ぞ聞こゆる」(冬・積教・五五〇・常秀)について、判詞に「右歌は衣笠内府歌に、あはれ我が心の水のいつよりかとけぬ氷の結びそめけん、と侍る面影思ひ出で侍れど、心の水の氷、といへる事も幾度なりともなどかよみ侍らざらん」とあるのを承けている。「衣笠内府」家良の「あはれ我が」の歌は、『新撰六帖』(第一・こほり・四六一)の一首を指している。「心の水の氷、といへる事も幾度なりともなどかよみ侍らざらん」というの

は、厳密に「心の水の心」に限らず、それに類する措辞や趣向は、何度であつてもどうして詠まないでありましようか、詠むのです、といった趣旨であろう。そういった類歌は参考の隆季詠の他にも、例えば俊成の「冬はこれ水の心の空に満ちて氷れば雪の降るにぞありける」(俊成五社百首・賀茂・冬・雪・一六〇)等がある。

納涼

971 世を厭いとふ心に秋や通なまふらん今年ことの夏は身さへ涼しき

〔通釈〕 納涼

この世の中を嫌だと避ける心に、既に秋が通じているのだろうか。今年の夏は、この身までが涼しいよ。

〔本歌〕

下くぐる水に秋こそ通ふなれ結ぶ泉の手さへ涼しき(和漢朗詠集・夏・納涼・一六六・中務。中務集・いづみ・四〇、三句「通ふらし」。三十人撰・一二八、三句同上。麗花集・四三、三句同上。三十六人撰・一四八、三句同上)

〔参考〕

世を厭ふ心は山に通へども八重立つ雲を君や隔つる(源氏物語・橋姫・六二二・冷泉院)
卯の花の垣根に秋や通ふらん月の光の澄みまさるかな(壬二集・後度百首・夏・一二二。二百首和歌・夏・卯花・一〇三〇)

〔語釈〕

○今年の夏―『万葉集』の「片岡のこなたの峰に椎まかば今年の夏の陰になみむか」(巻七・雑歌・詠岳・一〇九九。古今六帖・第六・しひ・四二六一、三句「椎まかは」結句「陰にせんかも」が原拠。

〔補説〕

本歌も該歌も、大きな枠組みでは「夏と秋と行き交ふ空の通ひ路はかたへ涼しき風や吹くらむ」(古今集・

夏・六月の晦日の日よめる・一六八・躬恒)の類型上にある。

上句は、685番歌「世を厭ふ心に身をやまかせまし水と山とを宿と答へて」に似通う。

歳暮

972 亡^なき跡の深き思ひに年暮^くれて身さへふり行く雪の悲^なしさ

〔通釈〕 歳暮

(春に後嵯峨院)が亡くなった後の、深い失意の思いの内に年が暮れて、我が身までが年を経て古びて行く、この降りゆく雪の悲しさよ。

〔参考〕 庭の雪の深き思ひに年も経ぬ我が身世にふる道絶えしより(如願法師集・雑上・日吉社会に、庭雪積・七六二)

年暮るる鏡の影も白雪の積もれば人の身さへふりつつ(続後撰集・冬・五二六・知家。日吉社撰歌合寛喜四年・冬・五二。新三十六人撰正元年・二七七、四句「つもれる人の」)

〔語釈〕 ○亡き跡一人が亡くなった後に残るもの。ここは、文永九年(一二七二)二月十七日に父帝後嵯峨が亡くなつて後に残されたことを言う。「亡き跡の面影をのみ身に添へてさこそは人の恋ひしかるらめ」(新古今集・哀傷・人に後れて歎きける人につかはしける・八三七・西行)と同じ。○身さへふり行く雪の―「身さへ古り行く」から「ふり」を掛詞に「降り行く雪の」に鎖る。「跡」「深き」は「雪」の縁語。

973 朝夕に虚しき空をながめても高く仰ぎし君を恋ひつつ、
天

〔通釈〕 天

〔参考〕 朝な夕なに虚しく、遙か高く虚空を物思いに眺めて、高く敬い仰いだ我が君（後嵯峨院）を恋い慕い続けるよ。

空晴れて照らす月日の明らけく君を仰げばいや高の山（万代集・神祇・今上御時大嘗会悠紀方近江国巳日樂
破・一六三六・経光）

〔語釈〕 ○朝夕に虚しき空―「朝夕に虚し」から「虚しき空」に鎖る。「虚しき空」は漢語「虚空」の訓が由来か。
○高く―「空」の縁語。○君―文永九年（一二七二）二月十七日に亡くなった父帝後嵯峨院。

日

974 春の空照る日の暮れし名残とて世に墨染の色ぞ悲しき

〔通釈〕 日

春の空に照っていた日が暗く暮れ、日の帝が隠れ亡くなった名残ということ、まだこの世に住んでいるこの私の墨染の僧衣の暗い色が悲しいことだ。

〔本歌〕 草深き霞の谷に影隠し照る日の暮れし今日にやはあらぬ（古今集・哀傷・深草の帝の御国忌の日よめる・

〔語釈〕

○照る日の暮れし―太陽が没して暗くなった意に、比喩としての「日」即ち帝が隠れた（亡くなった）意が掛かる。ここは勿論、文永九年（一二七二）二月十七日に父帝後嵯峨院が亡くなったことを指す。○世に墨染の色ぞ悲しき―「世に住み」から「すみ」を掛詞に「墨染の色ぞ悲しき」に鎖る。「色」は「暮れし（昏れし）」の縁語で、「墨染」の僧衣の暗い色あい、ということ。

月

975 さ夜更けてかたぶく月も哀れ知れ西へと急ぐ心ある身を

〔通釈〕 月

夜が更けて西へ傾く月も、しみじみとした哀れを分かってくれ。彼の西方浄土へ早く行くことを願う心を持って
いるこの身を。

〔参考〕

澄みのぼる月の光をしるべにて西へと急ぐ我が心かな（基俊集〈書陵部一五〇・五七八〉・月・一三）

げにやさは西に心ぞ急がるるかたぶく月も今は惜しまじ（久安百首・秋・二三八・教長。玉葉集・雑五・二五一）

やよや待てかたぶく月にことづてん我も西には急ぐ心あり（玉葉集・釈教・月によせて極楽をねがふといふことを人のよませ侍りけるに・二六九七・顯昭）

〔語釈〕

○西へと急ぐ―西方浄土に早急に往生したい、ということ。備える意の「急ぐ」にも解される。

976 定めなく浮きたる雲を吹く風のかくこそありけれあはれ世の中
風

〔通釈〕 風

定めなく浮いている雲を吹く風のように、こういうものだったのだ。ああはかないこの世の中よ。

〔本歌〕 世の中はかくこそありけれ吹く風の目に見ぬ人も恋しかりけり（古今集・恋一・四七五・貫之）

〔参考〕 中空に浮きたる雲の果てもなく行へ知らずも恋ひ渡るかな（宝治百首・恋・寄雲恋・二四六〇・為氏）

中空に浮きたる雲のいづくより風にまかせて時雨れ来ぬらん（宗尊親王百五十番歌合弘長元年・冬・一九四・基隆）

〔語釈〕 ○浮きたる―「あはれ」「世の中」の縁で「憂き」が響く。○かくこそありけれ―文永九年（一二七二）二月十七日に父帝後嵯峨院が没し、それを承けて同月三十日に宗尊自身が出家遁世したという、激変した境遇について言う。

雨

977 亡き跡も思ふばかりは問ひ難み更に身を知る雨ぞ降り添ふ

〔通釈〕 雨

(父帝後嵯峨院の) 亡くなった後の残された事跡も、思っている程には尋ねることが難しく、なおさらに我が身の上を知る涙の雨が、雨に降り加わるよ。

〔本歌〕 数教に思ひ思はず問ひ難み身を知る雨は降りぞ増される (古今集・恋四・七〇五・業平)

〔語釈〕 ○亡き跡―人が亡くなった後に残るもの。ここは、文永九年(一二七二)二月十七日に没した父帝後嵯峨の生前の足跡や事跡か。あるいは宗尊以外の子孫にも解される。その場合「問ひ」は訪問の意味になろうか。↓972。
○思ふばかりは―思っている程には、ということ。「歎きあまり知らせそめつる言の葉も思ふばかりは言はれざりけり」(千載集・恋一・六六〇・源明賢。後葉集・恋一・三二七。続詞花集・恋上・四八七)と同様。

雲

978 さのみまた隔てな果てそ今は我住むべき山の峯の白雲又へた

〔通釈〕 雲

そうとばかりまた、すっかり隔てきってしまうな。今は、私が住むはずの山の、峰にかかる白雲よ。

〔参考〕 今是我吉野の山の花をこそ宿の物とも見るべかりけれ(新古今集・雑上・世を遁れて後、百首歌よみ侍りけるに、花歌として・一四六六・俊成。長秋詠藻・右大臣家百首・五〇二)

思ひやる心ばかりはさはらじを何隔つらん峰の白雲(後撰集・離別・遠くまかりける人に餞し侍りける所にて・一三〇六・橘直幹)

〔語釈〕 ○さのみまた―↓801。○住むべき山―世を遁れて住むはずの山、あるいは、俗世から離れて住むことができ

る山。先行例は、慈円に「いつよりか住むべき山の庵ならむかつがつとまる我が心かな」（拾玉集・詠百首和歌・山家・何時解塵網、此地来掩開・一九六六）がある。

煙

979 のぼりにし同じ煙おなの末ならば室の八島やしまも尋ね見みてまし

〔通釈〕 煙

（文帝後嵯峨院の）空に昇ってしまったのと同じ煙の果てであるのならば、その煙が昇る室の八島も尋ね見ましようものを。

〔参考〕

思ひやれ同じ煙に交じりなで立ち後れたる春の霞を（榮花物語・根あはせ・五〇一・源三位。新古今集・哀傷・八二二、上句「思へ君燃えし煙にまがひなで」。弁乳母集・二八、上句同上）

あはれなど同じ煙に立ち添はで残る思ひの身を焦がすらむ（続古今集・哀傷・大納言典侍身まかりての頃よみ侍りける・一四六一・為家）

立ちのぼる煙ばかりをしるべにて尋ねぞ来つる室の八島に（田多民治集・雑・島・一六一）

立ちのぼる煙と雲になりにけり室の八島の五月雨の空（御室五十首・夏・五六六・家隆。壬二集・守覚法親王家五十首・夏・一六五八、二句「煙も雲と」。秋風集・夏下・一八七、二句「煙は雲と」）

いかにせむつひの煙の末ならで立ちのぼるべき道しなれば（新三十六人撰正元二年・三四九・長明）

春の夜の月にのぼりし亡き人の煙の末の果てやいづこそ（為家集・寄月無常同元年〔文永七年〕・一五三六）

〔語釈〕 ○のほりにし同じ煙の末ならば―「のほりにし」「煙」は、文永九年（一二七二）二月十七日に没し、同月十九日に薬草院で火葬されたた父帝後嵯峨の茶毘の煙。その煙が空に昇り行く果てと、「室の八鳥」の「煙」のそれとも同じであるのならば、ということ。○室の八鳥―下野国の歌枕。↓876。

〔補説〕 参考に挙げた「思ひやれ」の歌は、寛徳二年（一〇四五）正月十八日の後朱雀院崩御に、弁乳母が「あはれ君いかなる野辺の霞にて虚しき空の雲となるらむ」（栄花物語・五〇〇。新古今集・八二一、結句「雲となりけむ」。弁乳母集・二六、結句同上）と詠み贈った歌の返歌。

980 朝
起きお憂うさの朝の床はつらくともいかで昔を夢にだに見ん

〔通釈〕 朝

起きづらさがつのる朝の床は苦しいとしても、どうにかして昔のことを夢にだけでも見よう。

〔本歌〕 はかなくて夢にも人を見つる夜は朝の床ぞ起き憂かりける（古今集・恋二・五七五・素性）

〔参考〕 床は荒れぬいたくな吹きそ秋風の目に見ぬ人を夢にだに見ん（壬二集・院百首建保四年・恋・八八〇）

〔語釈〕 ○起き憂さ―先行例は見えない。江戸時代には、小沢廬庵の「阿けくれに弥をあるものと陀のまずは不しおきうさの都もりしもせじ」（六帖詠草・雑下・一八四〇）や、大隈言道の「いざと思ふ朝の床の起き憂さに枕離れて手枕ぞする」（草径集・枕・三三二）等の作例がある。

〔補説〕 上句の歌境は新奇か。

『竹風和歌抄』注釈稿（五）

981 憂^うしと見^みし煙^{けぶり}を空に残しても夕^{ゆふ}べの空ぞ形見^{かたみ}がほなる

〔通釈〕 夕

憂く辛いと見た（文帝後嵯峨院の茶毘の）煙を空に残して、夕方の空はいかにも形見風情であることだな。

〔参考〕 煙だにしばしたなびけ鳥べ山立ち別れにし形見とも見ん（千載集・釈教・火盛久不燃といへるころをよめ

る・一二五一・寂然）

思ひ出づる折り焚く柴の夕煙むせぶもうれし忘れ形見に（新古今集・哀傷・八〇一・後鳥羽院。自讃歌・

九。定家八代抄・哀傷・七〇八。詠歌大概・七〇）

亡き人の形見の煙それだにも果てはむなしき空に消えつつ（続古今集・哀傷・一四三一・顯氏）

恋ひわびて我とながめし夕暮もなるれば人の形見がほなる（六百番歌合・恋・夕恋・八二七・定家。拾遺愚

草・歌合百首・恋・夕恋・八六九。万代集・恋五・二七〇八）

〔語釈〕 ○憂しと見し煙―文永九年（一二七二）二月十七日に没し、同月十九日に葉草院で火葬された文帝後嵯峨の

茶毘の、宗尊が憂鬱のうちに見た煙。○形見がほなる―934にも用いている。

夜

982 今^{いま}は我^{われ}老^{ちか}いと近^{ちか}づく寢^ね覚^めして三十^{あま}余^なりに長^{なが}き夜^よ半^はかな

〔本文〕 ○三十余りに―底本は「三十あまりの」(見消ち「の」の字中)とあり。

〔通釈〕 夜

今では私は、老いと近くなる寢覚めをして、この三十歳余りの身に、余りにも長い夜中であることだな。

〔語釈〕 ○老いと近づく寢覚め―老齡であることと距離が縮まるように、寢て夜中に目を覚まして、ということ。当時は老いを早く自覚したにしても、老齡者の眠りが浅いことを認識していたことが窺われる表現は珍しい。○三十余りに長き夜半かな―「三十余りに」から「余りに」を掛詞に「余りに長き夜半かな」に鎖る。該歌を収めるこの歌を収める「百番自歌合」を撰した文永九年(一二七二)に、宗尊は三十一歳である。↓960。

暁

983 はかなくも何を寢覚めと思ふらん夢の中なる暁そらの空

〔通釈〕 暁

儂く頼りないことにも、自分はいったい何を寢覚めだと思っているのだろうか。(寢覚めしているはずなのにまだ)夢の中であるこの暁の空よ。

〔参考〕 深き夜の寢覚めに何を思ひけむ窓うちすさむ暁の雨(六百番歌合・恋下・寄雨恋・九四四・寂蓮)

昨日見し夢かと思ふ寢覚めして昔を偲ぶ暁の空(公衡集・賦百字和歌・雑・あかつきは・八九。新統古今集・雑下・一九六九・公衡)

憂しと見しはかなき夢をおどろかす今日を寢覚めと思はましかば(経家集・七二)

長き夜の夢のうちにも待ちわびぬ覚むるならひの暁の空（続古今集・釈教・未得真覚恒処夢中、故仏説為生
死長夜の心を・八一四・長恵）

〔類歌〕

憂きは我が老いの寢覚めと思へどもゆふつけ鳥も暁ぞなく（玉葉集・雑二・二一三五・中臣祐世）

〔補説〕

理屈がかった新奇な一首であるが、参考歌の公衡詠と同じ趣向であろう。もし宗尊がこれに倣ったのだとすれば、その学習範囲の広さを見ることになる。

山

984 世の中を厭いとふ心の奥にこそ憂うきこと聞かぬ山はありけれ

〔通釈〕

山

世の中を嫌だと思ふ心の奥にこそ、あの憂く辛いことを聞かない山はあったのだ。

〔本歌〕

いかならむ巖の中に住まばかは世の憂き事の聞こえ来ざらむ（古今集・雑下・九五二・読人不知）

〔参考〕

世を厭ふ吉野の奥のよぶこ鳥深き心のほどや知るらむ（新古今集・雑上・一四七六・幸清）

世を厭ふ心の奥の山里にひとりぞ月を見ても過ぎぬる（道助法親王家五十首・秋・山家月・五二〇・幸清）
しをりせでなほ山深く分け入らむ憂きこと聞かぬ所ありやと（新古今集・雑中・一六四三・西行。山家集・

雑・一一二一。西行法師家集・雑・五四〇。御裳濯河歌合・六〇）

尋ねばや重なる山の奥までも憂きこと聞かぬすみかありやと（時朝集・所入撰集歌・雑・六帖題にて歌よみ
侍る中に・やま・二七八）

谷深き巖の中のかひもなし心の奥ぞ身は隠しける（新和歌集・雑上・七八六・高階重氏）

〔補説〕 参考歌四首目の作者時期は、宗尊親王幕下の御家人歌人であり、五首目を収める『新和歌集』はその時期撰と推定されている宇都宮歌壇の中心業績の打聞である。

岳

985 しるく立つ外山の雲はつらくとも君がいまきの岡と思はば

〔本文〕 ○いまきの―底本「いさきの」〔さ〕は字母「左」で、「万」の「ま」をなぞり書きするかとあり。

〔通釈〕 岳

はつきりと立つ外山の雲は、やはり辛く嫌であっても、我が君（後嵯峨院）が今来る、今城の岡だともし思うのならば（それでもよい）。

〔本歌〕 今城なる外山の峰に雲だにもしるくし立たば何か歎かん（続古今集・哀傷・建皇子隠れて今城谷に納め侍り

けるを歎き給ひて、よませ給へりける・一三九一・斉明天皇。日本書紀・卷二十六・一一六、二句「小丘（をむれ）が上に」

〔語釈〕 ○君がいまきの岡―「君が今来」から「いまき」を掛詞に「今城の岡」に鎖る。「今城（今来・今木）」は、大和国の所名。現奈良県吉野郡大淀町今木。

〔補説〕 本歌は、斉明天皇の孫で天智天皇と遠智娘との子であり、唾者であったという建王に対する哀傷歌である。『日本書紀』に拠ると、斉明天皇四年（六五八）五月に八歳で没して「今城谷上」の殯宮に収められた建王を不敗

に思い、齊明天皇が、自分の死後に自陵に合葬するように命じ、作ったという歌の一つである。

986 原
浅茅生の小野の篠原尋ぬとも涙に余る露やなからん

〔通釈〕 原

浅茅が生える小野の篠原を尋ねるとしても、私の涙より以上にあふれる露は無いのであろうか。

〔本歌〕 浅茅生の小野の篠原忍ぶれどあまりてなどか人の恋ひしき（後撰集・恋一・五七七・等）

〔参考〕 浅茅生の小野の篠原尋ねても思ふあまりをいかで知らせん（新和歌集・恋上・寄草初恋・五〇七・藤原泰綱）

〔影響〕 浅茅生の小野の篠原なく虫の涙に余る秋の夕露（続後拾遺集・秋下・三六一・为理。为理集・左宰相中将家会野・外秋夕・五五一）

〔語釈〕 ○浅茅生の小野野の篠原一丈の低い茅（ちがや）が生えている野である篠原。「篠原」は、笹や篠だけでなく薄や萱や茅などの自生する野原を言う。○涙―父帝を喪い出家遁世した境涯の悲しみの涙。

987 野
亡き跡に残る形見の名にめでて、今も嗟嗟野を哀れとぞ見る

〔本文〕 ○亡き跡に―底本は「なき跡の」(見消ち「の」の字中)とあり。

〔通釈〕 野

(文帝後嵯峨院の) 亡くなった跡地に残る、嵯峨という形見の名前に心惹かれて、今でも嵯峨野をしみじみと悲しく愛おしく思うよ。

〔参考〕 ありし世を恋ふる涙の露ぞ置く今も嵯峨野の道のささ原(新後撰集・雑上・弘安元年、百首歌たてまつり

し時・一二一〇・通成)

〔語釈〕 ○亡き跡―人が亡くなった後に残るもの。ここは、文帝後嵯峨院が建長七年(一二五五)に嵯峨の龜山山麓

に離宮龜山殿を造営して棲み、文永五年(一二六八)十月五日に出家して大覚寺に移り、文永九年(一二七二)二月十七日に如来寿量院に没し、同月十九日に藥草院で火葬されるまでの間、その地に在った故地嵯峨野、あるいはそこに於ける事跡。↓977。○形見の名にめでて―「形見の名」は、「依二遺勅一也」(皇年代略記)という文帝「後嵯峨」の遺謚中の「嵯峨」という名前。「名にめでて」は、名前に惹かれて、の意。「名にめでて折れるばかりぞ女郎花我おちにきと人にかたるな」(古今集・秋上・一二六・遍昭)が原拠。

杜

988 いつまでか変はらぬ陰と頼み来し果ては歎きの杜の小草

〔通釈〕 杜

いったいいつまで、変わることはない樹陰のような庇護だと頼りにしてきたことか。ついには、あの歎きの杜

の、それもその陰にある下草のこの身よ。

〔本歌〕 ねぎ言をさのみ聞きけむ社こそ果てはなげきの杜となるらめ（古今集・雑体・誹諧歌・一〇五五・讃岐）

〔参考〕 三室山花も紅葉もかつ散りて頼む陰なき谷の下草（続後撰集・雑下・道助法親王春隠れ侍りにけるとしの

秋、道深法親王また同じさまになり侍りにけるを歎きてよみ侍りける・一二六六・法眼覚宗）

〔語釈〕 ○変はらぬ陰―「陰」は、「杜」の樹陰で、宗尊の父帝後嵯峨院の庇護・恩恵を寓意する。○歎き―「き

には「陰」と「杜」「下草」の縁で「木」が響く。○下草―宗尊自身の比喩。

滝

989 亀^{かめ}の尾の千世の数見^みし滝^せつ瀬^せを今は別れの涙にぞ借る

〔通釈〕 滝

あの亀の尾の山の、（父帝後嵯峨院の）千年の数を見た（はずの）滝つ瀬を、（後嵯峨院亡き）今は、（その滝の水の白玉を）別れの涙に借りることだ。

〔本歌〕 亀の尾の山の岩根を尋めて落つる滝の白玉千世の数かも（古今集・賀・貞辰親王の、をばの四十賀を、大井にてしける日、よめる・三五〇・紀惟岳）

こき散らす滝の白玉拾ひ置きて世の憂き時の涙にぞ借る（古今集・雑上・布引の滝にてよめる・九二二・行平）

〔語釈〕 ○亀の尾―亀の尾山（亀尾山あるいは亀山とも）のこと。山城国の歌枕。現京都市右京区嵯峨、大堰川の北

岸、小倉山に接する山。山麓に、後嵯峨院が離宮龜山殿を営んだ。この歌枕の本意形成の基たる本歌を踏まえ、また「千世」の縁で長寿の動物の「亀」が響く。○滝つ瀬―本来は「滾つ瀬」。滝の急流、滝そのものをも言う。○今は―文永九年（一二七二）二月十七日に父帝後嵯峨院が亡くなった後の今では、ということ。

990 明日香川昨日の淵の今日もなほ浅瀬見せぬは涙なりけり
河

〔通釈〕 河

明日香川の（今日は瀬になるといふ）昨日の淵が、今日もやはり浅瀬を見せないのは、（亡父を恋慕う）私が流す涙（の深い淵）なのであった。

〔本歌〕 世の中はなにか常なる明日香川昨日の淵ぞ今日は瀬になる（古今集・雑下・九三三・読人不知）

〔類歌〕 明日香川淵ばかりにやなりぬらん浅瀬も見えぬ五月雨の頃（北野宝前和歌（元徳二年）・夏・河五月雨・二九・忠房親王）

〔語釈〕 ○明日香川―飛鳥河。大和国の歌枕。現奈良県高市郡明日香村を流れ、大和川に注ぐ。「明日」の意が込め掛けられ、淵と瀬が交替する（無常）、といった通念がある。ここは、それに意を唱える形。

〔補説〕 類歌は、述懐・哀傷の趣はない。作者の忠房親王は、順徳院の曾孫で、源彦仁男、後宇多院猶子。

海

991 昔思ふ心を問はば駿河なる田子の浦浪それと答へよ

〔通釈〕 海

昔を愛しく思う心を、もし人が問い尋ねるのならば、浦波が立たない日はあつても「君を恋ひぬ日はなし」（我が君後嵯峨院を恋慕わない日はない）という、「駿河なる田子の浦波」の古歌、それだと答えよ。

〔本歌〕 駿河なる田子の浦浪立たぬ日はあれども君を恋ひぬ日はなし（古今集・恋一・四八九・読人不知）

〔類歌〕 色見えてむせぶ思ひを人間はば燃ゆる螢ぞそれと答へん（亀山殿七百首・恋・寄螢恋・五五八・公明）

君を仰ぐ心を問はば葵草向かふ日影をさして答へん（雪玉集・夏日詠百首和歌勅点并冷泉亜相政為卿点題自撰文集句題・夏・傾心向日葵・三〇七三）

〔語釈〕 ○駿河なる田子の浦浪―駿河国にある田子の浦の波。その駿河国の歌枕「田子の浦」は、現静岡県富士市の

田子の浦。

〔補説〕 類歌に挙げた実隆の一首が、宗尊詠からの影響下にあるか否かは、今後の課題であらう。

江

992 厭ひてもなほすみ難き水の江の浪のまにまに物思へとや

〔通釈〕 江

嫌だと思つても、やはり（この世に）住み、けれど水の江の波のままに水が澄み難いように、住み難いこの俗世

につれて、苦しい物思いをせよというのか。

〔参考〕

葦鴨の跡も騒がぬ水の江になほすみがたく春や行くらん（壬二集・九条前内大臣家三十首・春江上暮春
一八九一。定家家隆両卿撰歌合・一二。秋風集・春下・一二九、二・三句「跡し騒がぬ水の上に」。雲葉
集・春下・二七四）

風吹けば岸のまにまに打ち寄する波の間も無く思ほゆるかな（万代集・恋一・人にたまはせける・

一八四〇・醍醐天皇）

〔語釈〕

〇厭ひてもなほすみ難き水の江の―「厭ひてもなほ住み」で一度切れ、「住み難き」から「すみ」を掛詞に
「澄み難き水の江の」に鎖る。「水の江」は、丹後国の歌枕。現京都府与謝郡伊根町の江。〇浪―乱れ動く俗世を寓
意する、と解する。

鳥

993

玉津島寄せ来る浪の立ち返り見まほしきは昔なりけり

〔通釈〕

鳥

玉津島よ、浦に寄せ来る波が立っては返り、そのように立ち戻って見たいのは、昔なのであった。

〔参考〕

わたの原寄せ来る波のしばしばも見まほしきは玉津島かも（奥義抄・五五九）
思ひやれ和歌の浦波立ち返り昔を今になさんとぞ思ふ（季経集・一〇五・勝命）

〔語釈〕

〇玉津島―紀伊国の歌枕。現和歌山市和歌浦の、玉津島神社のある場所。現在は陸続きだが、当時は島か。

『竹風和歌抄』注釈稿（五）

○浪の立ち返り―「浪の」までが序詞で、「浪」が寄せては返りの意に、(昔に)立ち戻つての意が掛かる。○昔―父帝後嵯峨院が存命で宗尊自身も出家する前の往時。

〔補説〕 97と同工異曲。

関

994 憂^うき身世に木隠^{こかく}れ果てて逢坂の関の清水のすむとしもなし

〔通釈〕 関

憂く辛い身はこの世の中で、岩清水が木々の陰に隠れるように、すっかり隠れきって、逢坂の関の清水が澄むこともないように、きちんと住んでいるというのでもないよ。

〔本歌〕 君が世に逢坂山の岩清水木隠れたりと思ひけるかな(古今集・雑体・一〇〇四・忠岑)

〔参考〕 石清水木隠れたりしいにしへを思ひ出づれば澄む心かな(続古今集・神祇・八幡にこもり侍りし時・七〇三・後嵯峨院)

〔語釈〕 ○逢坂の関―近江国の歌枕。山城と近江国境の、京都と東国とを結ぶ関所。現京都府と滋賀県境の逢坂山に置かれた。○すむとしもなし―「逢坂の関の清水の」を序詞に、「澄むとしもなし」(澄むということもない)に、「憂き身」「世」の縁で「住むとしもなし」(しっかりと住むというのでもない)が掛かる。

〔補説〕 忠岑詠を本歌にしつつ、その「逢坂の関」の「岩清水」と同音の「石清水」八幡参籠を詠じた父帝後嵯峨院の歌を意識して、父が「澄む心かな」と言ったのに反言して、後嵯峨院亡き今は、「澄むとしもなし・住むとしも

なし」と言う。古歌と近代歌を組み合わせることを常套とした宗尊の、巧みに手馴れた詠作と言える。

橋

995 ありし世は昔の跡となり成にけり長柄なからの橋や我が身わなるらん

〔通釈〕 橋

かつて存在していた時（の橋柱）は、既に昔の痕跡となつてしまつていたのであったな。その長柄の橋は、まさに我が身のことであるのだろうか（私の人生もはや過去の痕跡なのだ）。

〔本歌〕 蘆間より見ゆる長柄の橋柱昔の跡のしるべなりけり（拾遺集・雑上・天曆御時御屏風の絵に、長柄の橋柱のわづかに残れるかたありけるを・四六八・清正）

〔参考〕 いつの間に昔の跡となりぬらんだよの程の庭の白雪（為家集・雑・〔正元元年〕十一月八日故左の大臣の事侍りける程に、うつして後の朝雪深く積もりたるに、九条三位中将忠善のもとに申しつかはし侍りし・一七三五・統拾遺集・雑下・一三〇八・為家）

昔見し雲みを恋ひて葦鶴の沢辺になくや我が身なるらん（詞花集・雑下・四位して殿上おりて侍りける頃、鶴鳴皋といふことをよめる・三五〇・公重。治承三十六人歌合・三〇五。宝物集・三四一）

〔語釈〕 ○長柄の橋―摂津国の歌枕。現大阪市北区の淀川に架かつていたという橋。位置は、現在の長柄橋（淀川と新淀川の分流点の西、大阪市北区本庄東と東淀川区柴島を結ぶ）付近とされる（分流点の南が長柄）。弘仁三年（八一二）六月に架橋も（日本後紀）、仁寿三年（八五三）十月には既に「頃年橋梁断絶、人馬不通」（日本文徳実

録)で、橋柱ばかりが残っていたという。『和歌初学抄』に「今はなし。橋柱ばかりはよむ」とある。

山家

996 何として嵯峨野の北の山陰を心の外の住み浮かれけん

〔通釈〕 山家

どうして、(せっかく隠れ住んだ)嵯峨野の北の山陰を、(文帝後嵯峨院は私にとって)心外の、さまよい出ることをした(お隠れになった)のだろうか。

〔参考〕 分け入りし心の外の住みかかな花に問はるるみ吉野の奥(露色随詠集・閑居百首・一六三。御裳濯集・春
中・一二八・鏝也、初句「我が入りし」)

〔語釈〕 ○何として―どうして、の意。和歌には院政期から見えるが、鎌倉前中期頃に盛行する句。「何として暁方になりぬればゆふつけ鳥の鳴き始めけん」(宝治百首・雑・暁鶏・三三三・帥)等。○嵯峨野の北の山陰―文帝後嵯峨院が建長七年(一二五五)に造営した嵯峨の龜山山麓の離宮龜山殿を言う。○住み浮かれけん―後嵯峨院が亡くなったことを、隠棲の地嵯峨野からさまよい出たことに喩えて言った、と解する。

水郷

997 世の中は見しにもあらず変はりけり久邇の京の昔ならねば

〔通釈〕 水郷

世の中は、かつて見たのとはまったく違い、変わったのだった。あの久邇の都が、昔のままではないのだから。

〔本歌〕 みかの原久邇の京は荒れにけり大宮人のうつりいぬれば（万葉集・雑歌・一〇六〇・福麿家集。新勅撰集・

雑四・久邇の都の荒れにけるを見てよみ侍りける・一二六七・読人不知）

〔参考〕 世の中は見しにもあらずなりぬるに面変はりせぬ星あひの空（建礼門院右京大夫集・年々、七夕に歌をよみ

てまゐらせしを、思ひ出づるばかり、少々これも書きつく・三一〇）

恋ひしとも言はでぞ思ふたまきはる立ち返るべき昔ならねば（新勅撰集・雑二・一一三〇・俊頼。堀河百首・

雑・懷旧・一五二八。散木奇歌集・一二五五）

〔語釈〕 ○見しにもあらず↓939。○久邇の京―「久邇」は「恭仁」とも。天平十二年（七四〇）十二月から同十六

年（七四六）閏正月まで聖武天皇が都とした。山城国相楽郡、現京都府木津川市の加茂地区一帯の地。中央を泉川

（木津川）が東西に貫流する。そこから、歌題の「水郷」の下でこの地を詠み込んだのであろう。

幽栖

998 人目見ぬ都の宿はなかなか山里よりもしづかなりけり

〔通釈〕 幽栖

人の訪れがない、この都の家は、かえって（あの鎌倉の）山里よりも閑かなのであった。

〔参考〕 人目見ぬ片山陰に家ゐして心すむやと身をぞならはす（新撰六帖・第二・いへ・八〇四・信実）

『竹風和歌抄』注釈稿（五）

見せばやな都の宿の初めには似ぬ物からの春のけしきを（拾玉集・建久三年正月無動寺より同じ大將軍御もとへ申す、青陽之初上春之候、自深山幽谷報花洛尊閣詞云・五三二七）

秋風に尾花波寄る我が宿ぞ山里よりも露けかりける（秋風集・雑上・秋の頃山里なる人の返り事につかはしける・一〇八八・延久第三の親王〔輔仁〕。和漢兼作集・秋上・五六八・輔仁。新千載集・秋上・山里に住み侍りける人のもとより、都の秋のけしきいかにぞといへりければ申しつかはしける・三五二）

〔語釈〕

○人目見ぬ―人の目がない（人から見られない）、人が訪れない（人がいない）、の意。古い句形ではない。良経の「人目見ぬ岩の中にも分け入りて思ふほどにや袖絞らまし」（秋篠月清集・治承題百首・忍恋・四五七）が早い。参考に挙げた信実詠の他に、宗尊に近い時代の例としては、「人目見ぬ離れ小島のさびしきに鶴のねぶりもたよりあるらし」（宝治百首・雑・鳥鶴・三四二二・寂西）や「人目見ぬ八十の鳥守おのれもや花橋を袖にかくらん」（現存六帖・たちばな・六五八・前撰政左大臣〔実経〕）や「人目見ぬみ山の奥のさびしさに月はいかでかたえですむらむ」（百首歌合建長八年・秋・四五二・伊長）等がある。宗尊は、これらの歌を学んでいたであろう。○都の宿―これも伝統的な措辞ではない。参考に挙げた慈円詠の外に、家隆にも「朝戸あけて都の宿を見渡せば高きいやしき雪ぞ積もれる」（洞院撰政治家百首・冬・雪・九二六。壬二集・一四八七）の作例がある。宗尊はこれらに学んだのであろう。

〔補説〕

「なかなかに」「よりも」「けり」の詞遣いの先例には、覚性法親王の「なかなかに月にちがひて行く雲はくまなきよりもうれしかりけり」（出観集・秋・月・三六五）や宜秋門院丹後の「なかなかに真葛が原の風よりも紅葉に残る恨みなりけり」（正治初度百首・秋・二二五六）がある。

宗尊は、將軍在職時に鎌倉で、「山里は松の嵐の音こそあれ都には似ずしづかなりけり」（瓊玉集・雑上・山家松

を・四五〇）と詠じていた。文永三年（一二六六）七月に鎌倉を追われて京都に戻ってから六年、この歌を思い起こして意識しながら、対照的な該歌を、しかし実感として詠出したのであろう。

旅宿

999 さすらふる旅寝^ねのほどの夢の世はいづくも草の枕なりけり

〔通釈〕 旅宿

さすらう旅寝というほどの夢のようなこの世の中は、どこでもみな草の枕の旅なのであった。

〔参考〕 さすらふる我が身にしあれば象潟や海人の苦屋にあまたたび寝ぬ（新古今集・羈旅・九七二・藤原顕仲。堀

河百首・雑・旅・一四六六）

はかなくもこれを旅寝と思ふかないづくも仮の宿とこそ聞け（久安百首・羈旅・一〇九八・堀川。続詞花

集・旅・七三六・崇徳院。中古六歌仙・二五六・堀川）

定めなき憂き世の中と知りぬればいづくも旅の心ちこそすれ（続詞花集・旅・高野へまうで侍りける道に

て・七三五・覚法。月詣集・羈旅・二五二）

み山いでていづくも旅の郭公こにも結べ草の枕は（袋草紙・七四九）

あはれなりいづくも草の枕にてつひのすみかは苔の下ぶし（明日香井集・鳥羽百首建久九年五月廿日始之毎日十首

披を・述懐・九二）

夢のうちはいづくも同じ旅なれば覚むる現の都をぞ待つ（新和歌集・羈旅・四四六・証定法師）

〔語釈〕 ○旅寝のほどの―旅で仮寝をするような、といった趣意か。○草の枕―草を枕として寝る旅寝から、旅そのものをも言う。

〔補説〕 参考歌の措辞や趣向の類型の中にはあるが、京都に皇子として生を享けながら鎌倉との間に東下・西上し、將軍の地位を与奪され、妻子女とも離散した宗尊の、諦観にも似た無常觀の表出であろう。

海路

1000 西（む）の海風のままなる舟人も我（われ）とは行かぬ道（みち）や知るらん

〔通釈〕 海路

西の海で風の吹くままに進む舟人も、自分の力では進んで行けない道があることを分かっているのだろうか。

〔参考〕 西の海満ち引く潮にまかせつつ我とはささぬ法の早舟（弘長百首・釈教・六八八・基家。新続古今集・釈教・八五四、四句「我とは去らぬ」）

さして行くかたも定めず群千鳥風のままなる浦づたひして（寂身法師集・詠百首和歌 寛元三年於関東詠之・冬・四一五）

〔語釈〕 ○西の海―微かに西方浄土を想起させるが、一首の内容には及ばないか。○風のままなる―風の吹くのにそのまま従っている、ということ。参考の寂身詠に先行して、伊平の「真葛原裏葉も白く乱れつつ風のままなる秋の夕露」（内裏百番歌合承久元年・秋夕露・一〇七。続歌仙落書・五六。雲葉集・秋上・四九二）がある。○我とは行かぬ―自分自身の力では行かない、自ら進んでは行かない、といった意味。『新後撰集』入集の一首（釈教・

六七四)で、「人のもとより、西へ行く道教へよと申して侍りければ」と詞書する、蓮生法師宇都宮頼綱の「思ひ立つ心ばかりをしるべにて我とは行かぬ道とこそ聞け」が先行例となろうか。『沙石集』(日本古典文学大系の「拾遺」(五〇))には、「塩谷民部入道と聞こえし歌人なり」という頼綱弟朝業の曾孫盛朝が「他力本願の心を」詠じた「よしさらば我とは行かじ海人小舟導く潮の波にまかせて」(内閣文庫本・一六一)の一首が残されている。また、他阿にも「世の中の憂きにつけてぞ急がる我とは行かぬ弥陀の御国へ」(他阿上人集・一一七六)がある。該歌も併せて、言わば関東圏かその縁故の歌人の用語ということになる。

木

1001 花咲かさで古ふるりぬる物は奥山おくやまの陰かげの朽くち木きと我われとなりけり

〔通釈〕 木

花はなが咲さかないで古ふるびてしままうものは、奥山おくやまの陰かげにある朽くち木きと私わたしとでああったのだ。

〔本歌〕 世よの中に古ふるりぬる物は津つの国くにの長柄ながへの橋はしと我われとなりけり(古今集・雑上・八九〇・読人不知)

〔参考〕 花はな咲さかで幾いく代の春はるにああふみなる朽くち木きの袖そでの谷やの埋うれ木き(新勅撰集・雑四・二三〇七・雅経。明日香井集・

詠百首和歌建仁二年八月廿五日・春・三〇三)

春はるやいにし秋あきやはくらむおほつかつかな陰かげの朽くち木きと世よを過すぐす身みは(新勅撰集・雑二・二二〇二一・貫之。貫之集・身を歎なげきてよめる・八〇一。後撰集・雑二・一一七五・閑院、初二句「春はるやこし秋あきやゆきけん」)

〔語釈〕 ○花はな咲さかで―「朽くち木き」に花はなが咲さかないでということから、「我われ」(宗尊)が栄花えいげを見みないで、ということが

比喩される。○奥山の陰―日の目を見ないで隠棲している宗尊の境遇を寓意する。

草

1002 いかにせん頼たのみし松かの枯れしよりひとり露けき陰の下草

〔通釈〕 草

どうしようか。頼みとした松が枯れてから、ただひとり露っばい木陰の下草よ。(後嵯峨院が亡くなってから、ただ独り涙がちな私よ)。

〔本歌〕 陰広み頼みし松や枯れにけん下葉散りゆく年の暮かな(源氏物語・賢木・一四三・兵部卿宮)

〔参考〕 見むといひし人ははかなく消えにしをひとり露けき秋の花かな(後拾遺集・哀傷・道信朝臣ともろともに紅葉見むと契りて侍りけるに、かの人みまかりての秋よみ侍りける・五七〇・実方)

〔語釈〕 ○頼みし松の枯れし―文帝後嵯峨院が、文永九年(一二七二)二月十七日に亡くなったことを暗喩。○陰の下草―宗尊自身を暗喩。比較的新しい句形。先行例は、「行末は誰かめぐまんたらちねの老曾の杜の陰の下草」(洞院撰政治家百首・雑・述懐・一八八三・但馬)や「夏深くなりにけらしな唐衣裾野の杜の陰の下草」(宝治百首・夏・夏草・一〇二三・為氏)。

〔補説〕 本歌は、桐壺院が崩御した折に、兵部卿宮(先帝の親王、紫上の父)が詠じた歌。歌の前後の本文は、「院の内、やうやう人目かれゆきてしめやかなるに、大将殿(光源氏)、こなたに参り給ひて、(故院の)旧き御物語、聞こえ給ふ。御前の五葉(松)の雪にしをれて、下葉枯れたるを見給ひて、親王(兵部卿宮)、「歌」、何ばかりの

ことにもあらぬに、折からものあはれにて、大将の御袖、いたう濡れぬ。」(CD-ROM角川古典大観に拠る)。

松

1003 知る人と松をもいかが頼むべき憂き世を厭ふ友ならなくに

〔通釈〕 松

これも知人だと、松をどうしてあてにすることができようか(できない)。松も憂く辛い世を厭い出る友ではないのに。

〔本歌〕 誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに(古今集・雑上・九〇九・興風)

〔参考〕 知る人と松を頼むもあはれなりそれも昔は馴れし友かは(現存六帖・まつ・五〇六・下野。秋風集・雑中・

一一六〇、結句「なれしと思へば」。秋風抄・雑・九条内大臣家三十首に・三〇五、初句「ある人と」)

〔補説〕 古歌を本歌にして、同じ古歌を本歌に取った近代歌に倣ったと思しい、宗尊の詠作の特徴を示す一首である。

竹

1004 いにしへもかかる涙に染めてこそ竹の緑も色変はりけれ

〔本文〕 ○変はりけれ―底本「かはりけれ」(見消ち「り」の字中)とあり。

『竹風和歌抄』注釈稿(五)

〔通釈〕 竹

あの（舜帝の）遠い過去も、（私が父帝を偲んで）散り掛かるこのような涙で染めて、竹の緑も色が変わったのであった。

〔本歌〕

白雪は降り隠せども千代までに竹の緑は変はらざりけり（拾遺集・雑賀・清和の女七のみこの八十賀、重明のみこのし侍りける時の屏風に、竹に雪降りかかりたるかたある所に・一一七七・貫之）

〔本説〕

「竹斑湘浦」の故事。「江花已萎絶、江草已銷歇、遠客何処帰、孤舟今日発、杜鵑声似泣、湘竹斑如血、共是多感人、仍為此中別」（白氏文集・卷十一・江上送客。那波本影印に拠る）。↓補説。

〔参考〕

竹斑湘浦（たけしやうほにまだらなり） 雲凝鼓瑟之蹤（くもこしつのとにこる） 鳳去秦台（ほうしんたいをさる） 月老吹簫之地（つきすいせうのちにおいたり）（和漢朗詠集・雲・四〇三・愁賦）

君恋ふる涙の色の深きには竹も涙に染むとこそ聞け（唐物語・一五・〔作者〕）

物思ふ涙と聞くもあはれなり昔染めける紫の竹（現存六帖・たけ・五三二・隆祐）

紫の深き色にや変はりけん涙に染めし窓の呉竹（実材母集・植ゑおきて侍る紫竹を見るにも、相浦の昔思ひ

やられて・一八四）

〔語釈〕

○かかる―「掛かる」（覆い被さるの意）と「斯かる」（このような意）の掛詞。

〔補説〕

本説の故事は、『唐物語』（第十三）には、次のようにある。

昔、堯「舜」が正しいか」と申す帝おはしましけり。御政よりはじめて、よろづめでたき御代の例しには、まづこの御事をのみこそ申すめれ。娥皇・女英と聞こえ給ふ二人の後侍ひ給ひけり。御心ざしいづれまさり給へりとけぢめ見えず、ただ紅葉などのやうに、浅からぬ御事にてなん侍りける。かくて、多くの年月をなむ保

鳥

渡り川ことと言問こととふ鳥のありもせば君が行く末ことやそこと知らまし

『竹風和歌抄』注釈稿（五）

たせ給ひけれど、この世は限りある所なれば、帝、湘浦といふ所にてはかなくならせ給ひぬ。その後二人の後、紅の涙を流し給ひて、旧きをおぼせりければ、籬の呉竹も、御涙に染まりて斑になりにけり。

君恋ふる涙の色の深きには竹も涙に染むとこそ聞け

昔の人の思ひ染めつることは、浅からぬにや。（小林保治『唐物語全釈』〈平一〇・二。笠間書院〉に拠り、表記は改める）

また、『続古事談』（六一七、二七六）にも類話が、次のようにある。

堯は舜の器量をこころみむがために、娥皇・女英といふ二人の女をともに妻とせしむ。二人共に相ひ嫉むことなくして語らひてありけるに、舜の心のたくみなることを知りて、位を譲りてけり。一人の妻をならべて、しかもその心を宥むる、極めて難きことなるべし。この二人、舜に後れて歎きける涙、染みたる竹なり。これにも伝はりて、へんちくの束の筆をばいれず、となむ言ひならはせる、この故なり。竹斑湘浦と書けるは、このことなり。（新日本古典文学大系本に拠り、表記は改める）

右の「へんちく」は、「変軸」（色の付いた変わり軸）とも「班竹」（呉音ヘンチク）の「借字」とも、とされる（川端善明・荒木浩新日本古典文学大系『古事談 続古事談』〈平一七・一一、岩波書店〉脚注）。

なお、『十訓抄』には「虞舜の帝の后妃、皇英二人ながら、湘水の底におぼれ」（六ノ二十一）と、貞女の例として挙げられている。

〔通釈〕 鳥

渡り川にもし問い尋ねる鳥がいるのならば、我が君の後世での行く先を、そこだと知って分かうものを。

〔参考〕 名にし負はばいざ言問はむ都鳥我が思ふ人はありやしやと（古今集・羈旅・四一一・業平。伊勢物語・九段・一三・男）

〔語釈〕 ○渡り川―三途の川のこと。○言問ふ鳥―人の安否を問い尋ねることのできる鳥。参考の「名にし負はば」の歌に基づく。「言問ふ鳥」の詞は、「都にて馴れし月さへ角田河言問ふ鳥のうき寝のみかは」（建保名所百首・雑・角田川下総国・一一四六・兵衛内侍）が先行例となる。宗尊自身は既に、『宗尊親王三百首』で「河の名も言問ふ鳥もあらはれてすみたえぬるは都なりけり」（雑・二八一。瓊玉集・雑上・四四〇）と用いている。○君が行く末や―「君」は、文永九年（一二七二）二月十七日に亡くなった父帝後嵯峨院のことであろう。「行く末」（底本表記「行末」）は、遠い行き先の意で、（後嵯峨院の）後世での行く先のことと見れば、それでも通意であるが、字余りが不自然である。本書では「ゆくへ」の仮名遣いはすべて「ゆくゑ」（557 736 883）であるので、あるいは「行末」は「衛」の「ゑ」を「末」に誤った結果であって、該句は本来「君がゆくへや」であったかとも疑われる。

獣

1006 かかるべき身とや思ひし獣の雲に吠えけん心ちせし世は

〔通釈〕 獣

こんなはずの身と思つたか。思いもしなかつたよ。獸が雲の中で吠えたとかいう、訳の分からない気持ちがこの世は。

〔本歌〕 …これを思へば 獸の 雲に吠えけむ 心地して 千ぢの情けも 思ほえず ひとつ心ぞ 誇らしき…(古

今集・雑体・短歌・一〇〇三・忠岑)

〔参考〕 つひにさて雲に吠えけん獸の情け程だにかけぬ君かな(宝治百首・恋・寄獸恋・二九八一・真観)

〔語釈〕 ○身と思ひし―反語表現。この句形の用例は少ない。宗尊に身近な先行例は「命こそ限りありけれ逢ふことの絶えば生くべき身と思ひし」(宗尊親王百五十番歌合・恋・二九八・小督)。○獸の雲に吠えけん心ち―淮南王劉安の仙薬を飲んで昇天した犬や鶏が、「雲」の上で鳴いたり吠えたり鳴いたりするということ、中国の『列仙伝』(藝文類聚所引)や『神仙伝』が伝える故事が原拠。「俗伝、安之臨_二仙去_一」、余薬器在_二庭中_一、鶏犬舐_レ之、皆得_二飛升_一」(列仙伝・下・補劉安。全釈漢文大系に拠り表記は改める)、「時人伝、八公安臨_二去時_一」、余薬器置_二在庭中_一、鶏犬舐_レ啄_レ之、尽得_レ昇_レ天、故鶏鳴_二天上_一、犬吠_二雲中_一也」(神仙伝・卷四・劉安。中国古典新書に拠り表記は改める。但し、「現行本の出現は、明代末にまで下るようだ」という(福井康順同書解説)。自分でも訳が分からないほどの気持ち、ということか。本歌では、掲出部分の前に「今も仰せの 下れるは 塵に継げとや 塵の身に つもれる事を 問はるらむ」とあって、身分の低い自分が勅撰集撰進を拝命したことを言っているので、「雲」は宮中を寓意して、忠岑が言わば夢見心地であることを表している。しかし該歌の場合は、このような肯定的な意味合いではなく、宗尊の波乱の境涯を念頭に置いた、自分でも何が何だが訳がわからない気持ち、といった意味合いであろう。

1007 舟
 同じ江の蘆分け小舟漕ぎ返り出でても出でぬ世の中の憂さ

〔通釈〕 舟

いつも同じ江にある蘆分け小舟が繰り返し漕いで帰る、そのように繰り返し元に戻って、出ても出ていないのと同じ、この世の中の辛さよ。

〔本歌〕 堀江漕ぐ棚なしを舟漕ぎかへり同じ人にや恋ひ渡りなむ（古今集・恋四・七三二・読人不知）

〔参考〕 同じ江に蘆分を舟こがれてもさはらで行くは蛸なりけり（東撰六帖抜粹本・夏・蛸・一八八・家仲）

雁の来る峰の朝霧晴れずのみ思ひつきせぬ世の中の憂さ（古今集・雑下・九三五・読人不知）

〔語釈〕 ○蘆分け小舟―蘆を分けながら進む小さな舟。○漕ぎ返り―繰り返し漕ぎの意に漕いで戻りの意が重なる。

〔漕ぎ〕までが序詞。○世の中の憂さ―参考の『古今集』歌に拠る。宗尊は該歌以前に「蘆間ゆく湊の小舟とにかくに障り多かる世の中の憂さ」（柳葉集・巻五・文永二年潤四月三百六十首歌・雑・八二四）と用いている。

1008 車
 六つの道行きては返る小車の我幾廻り迷ひ来ぬらん

〔通釈〕 車

六道を行っては戻る小さな車の何度も回転するように、私は六道をいっただい幾廻りして（今この世に）迷い迷い

来たのだろうか。

〔参考〕 憂きながら離れもやらぬ小車の我が身いつまで世にか廻らむ（明日香井集・百日歌合毎日一首後不見建保二年七月

廿五日始之・小車・七二四）

小車のおのがさまま出でしかど一つ道にぞ廻り会ひぬる（拾遺風体集・釈教・譬喩品・五一四・道璩）

〔語釈〕 ○六つの道―六道。衆生が前世の業に従つて赴く六種の世。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道。

六趣ともいう。○返る―戻るの意に繰り返すの意が重なる。○小車の―「幾廻り」を起こす序詞のように働く。

〔小〕は接頭語。『法華経』『譬喩品』に言う「火宅」（厭うべき三界の譬喩）から子供達（民衆の譬喩）を誘い出す

ための玩具（羊車・鹿車・牛車）の「三車」（仏教の三乗の譬喩）が想起される。○幾廻り―いわゆる「六道輪廻」

を寓意する。

灯

1009 消えずして幾世もあらし灯の風の中なる影のはかなさ

〔通釈〕 灯

灯が消えないままで幾夜もつまいように、私も消えないままでどれほどの年月も生きているまい。灯の風の中にある火影の儚さよ（それと同じだ）。

〔参考〕 問へかしたな幾世もあらし露の身をしばしも言の葉にやかかると（後拾遺集・雑三・一〇〇六・読人不知）

夢覚めて見るもはかなし山里の風の前なる灯の影（壬二集・九条前内大臣家百首・雑・山家灯・一六三〇）

〔語釈〕 ○幾世もあらじ―（この身は消えないままで）どれ程の年月もあるまい、という意味。「幾世」に「灯」の縁で「幾夜もあらじ」（幾らの夜もあるまいの意）が掛かる。

鏡

1010 朝夕に面影映す鏡こそ別れし君が形見なりけれ

〔通釈〕 鏡

朝に夕に、この面影を映す鏡こそが、別れた我が君（父帝後嵯峨院）の形見なのであったな。

〔参考〕 形見とて見るもはかなし増鏡とまらざりける人の面影（白河殿七百首・恋・寄鏡恋・五〇二・後嵯峨院）

増鏡映りしものをとばかりにとまらぬ影も形見なりけり（光明峰寺撰政治家歌合・寄鏡恋・三六・行能。続拾遺集・恋五・二〇六四）

置く露を別れし君と思ひつつ朝な朝なぞ恋ひしかりける（貫之集・題不知・七八七。古今六帖・第一・つゆ・五四八）

〔語釈〕 ○面影―宗尊自身の顔つきや姿のようす。○別れし君―文永九年（一二七二）二月十七日に死別した宗尊の父後嵯峨院のことと解される。

〔語釈〕 参考に挙げた後嵯峨院や行能の歌がそうであるように、恋歌にも通う詞遣いの一首である。「面影」は宗尊自身のそれで、それを「映す鏡」の中に「別れし君」即ち実の父後嵯峨院の面影を見出して、その鏡こそが「形見」だ、という趣向なのであろう。

舟人

1011 捨て果てて、後も変はらぬ我が袖や伊勢をの海人の衣なるらん

〔通釈〕 舟人

この世を捨てきつて後も、その前と変わらない私の袖は、あの伊勢の海人の捨て衣なのだろうか。(潮に褻れるように、涙に褻れているよ)。

〔本歌〕 鈴鹿山伊勢をの海人の捨て衣潮なれたりと人を見るらん(後撰集・恋三・女のもとに衣を脱ぎ置きて、取りにつかはすとて・七一八・伊尹)

〔参考〕 捨て果ててあればある世のならひにもなほ物思ふ秋の夕暮(続後撰集・秋上・二七七・源家清)

〔語釈〕 ○捨て果てて―出家して俗世を捨てきつて、ということ。宗尊は、文永九年(一二七二)二月十七日の父帝後嵯峨院の死を承けて、同月三十日に出家した。○伊勢をの海人―伊勢の国の歌枕「伊勢」の「海人」のこと。「を」は間投助詞。

〔補説〕 父後嵯峨院の死で出家した以後だけでなく、それ以前から常に涙にくれていたので、衣の袖が涙によれよれに褻れている、という歎きの述懐が主旨。

樵夫

1012 よしや我重きを荷ふ山人の肩を替へける程の心は

『竹風和歌抄』注釈稿(五)

〔通釈〕 樵夫

ままよ、私だ。重いものを肩に担ぐ山人が、左右の肩を替えた時の心は。

〔参考〕 よしや我人は命に誓ふとも頼までこそは長らへて見ぬ（新撰六帖・第五・ちかふ・一五五七・為家）

鐘の音を松に吹きしく追ひ風に爪木や重き帰る山人（拾遺愚草・内裏歌合、山夕風・二六九七）

〔語釈〕 ○よしや我―86にも用いている。○肩を替へける程―一方の肩に担いでいた重荷を他方の肩に担ぎ替える

時、ということ。左右どちらの肩にせよ、担ぐ重荷は変わらないことから、自分も重荷を下ろすことができずにいることを寓意するか。新奇な表現で後出の類例も見当たらないが、何らかの典故があるのかもしれない。

夢

1013 今もなほ現類ならねど見みし春の夢をはかなみしの偲おぼふ比かな

〔通釈〕 夢

今でもやはりはつきりとした現実という訳ではないのだけれど、かつて見た春の夢をそれでも（今よりは）よほど儂いとして、偲ぶこのごろであるよ。

〔本歌〕 寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな（古今集・恋三・人に逢ひてあしたによ

みてつかはしける・六四四・業平。伊勢物語・百三段・一七九・男）

〔参考〕 夢路にも逢ふ夜の鐘はつらきかな何を名残の現ならねど（歌合建保四年八月廿四日・寄夢恋・八四・範宗。範宗

集・恋・五七一）

かりに來と恨みし人の絶えにしを草葉につけて偲ぶ頃かな（新古今集・夏・一八七・好忠。好忠集（伝西行筆卷子本切）・四月上・二〇〇。曾祚好忠集（天理図書館蔵）・四月上・一〇四、初句「かりにかと」。時代不同歌合・二四七）

〔語釈〕 ○見し春↓943。○偲ぶ比かな―参考の好忠詠が原拠となるが、俊成（俊成五社百首・三七二）、家長（鳥羽殿影供歌合建仁元年四月・四七。「忍ぶ頃かな」の意）、慈円（拾玉集・四九三〇）、為家（為家千首・二〇一）、順徳院（紫禁集・二五九。「忍ぶ頃かな」の意）等々、鎌倉前期に作例が目につく。俊成の「深くも人の偲ぶ頃かな」から、慈円の「深くも秋を偲ぶ頃かな」や為家の「深くも春を偲ぶ頃かな」への影響もあろうか。宗尊自身は既に、『中書王御詠』の「待つこともなくて憂き世に住吉のきし方をのみ偲ぶ頃かな」と「あはれにも賤の小手巻ありし世を身の盛りとて偲ぶ頃かな」（雑・雑の歌の中に・二七三、二八五）という、恐らくは將軍を解任された後の述懐を詠じた歌に用いている。88にも。

〔補説〕 「見し春の夢をはかなみ」は、文永九年（一二七二）二月十七日の父帝後嵯峨院死去の、茫然とした喪失感を言ったものであろう。

「見し春」も「偲ぶ頃かな」も、古歌の例がなくはないが、新古今歌人達の作例が目立つ措辞であり、また、「現ならねど」の先行例は、参考に挙げた『新勅撰集』初出歌人の範宗詠が目に入る程度である。宗尊がそれらの時代に目を向けていたことが窺われる。

涙

1014 世の中の憂きもつらきも捨てし身の何を先づ知る涙なりけれ

『竹風和歌抄』注釈稿（五）

〔通釈〕 涙

世の中の憂きことも辛いことも捨てた（はずの）この身の、いったい何をまっ先に知って流れる涙なのであつたか。

〔本歌〕 世の中の憂きもつらきも告げなくに先ず知る物は涙なりけり（古今集・雑下・九四一・読人不知）

〔語釈〕 ○捨てし身―一首の中では直接には「憂きもつらきも」を捨てた身、ということだが、それは取りも直さず、文永九年（一二七二）二月十七日の父帝後嵯峨院の死を承けて同月三十日に出家して俗世を捨てた身、ということ。覺性法親王の「命をば捨てし身なれば千歳とも思ひぞよらぬ瀧の白糸」と「いにしへはあくがれ出でて捨てし身を今は仏とかへしてぞ知る」（出観集・雑・七六三、同・雑・道心追歳深といふ心を・七七二）が先行例。○涙なりけれ―「涙なりけり」であるべきか。

述懐

1015 今さらに捨てぬと何か思ふらんもとより世にもある身ならぬに

〔通釈〕 述懐

今さらに、（出家しても）この世を捨てたとどうして思うだろうか。もとより、この世の中に生きている我が身だという訳でもないのに。

〔参考〕 今さらに別ると何か思ふらむ我こそ先に家は出でしか（新和歌集・離別・四二〇・蓮生）

今は世にある身ならねど橋の花見るときぞ昔恋しき（伊勢大輔集・花橋を見て・二三）

〔類歌〕 今さらに捨つとも何か惜しからんもとより世にもある身ならねば（続千載集・雑下・一九七九・公頭女。題

林愚抄・卷二十一・雑・述懐・九四九〇）

〔補説〕 文永九年二月十七日の父帝後嵯峨院の死を承けた同月三十日の出家以前から既に、言わば有若亡であったのだという述懐である。

宗尊はこれ以前にも、「今さらに何か悲しと思ふらむ限りある世の春の別れを」（柳葉集・卷五・文永二年潤四月三百六十首歌・春・六七九）という類詠をものしている。参考の蓮生詠に倣った可能性を見ておきたい。

懐旧

1016 いかにせん見し世によかはることしあれば先づよ偲むばるる君が昔をむかし

〔通釈〕 懐旧

どうでしょうか。かつて見た世の中と変わっていることがあるので、まっ先に偲ばれる我が君（父帝後嵯峨院）の昔であるものを。

〔本歌〕 しっかりとて背かれなくに事しあればまづ歎かれぬあな憂世の中（古今集・雑下・九三六・篁）

〔参考〕 影をだにうつしとどめよ増鏡見しよによかはるつらさなりとも（宝治百首・恋・寄鏡恋・三〇五三・有教）

〔語釈〕 ○君が昔―故後嵯峨院が君臨していた昔。

無常

1017 大方おほかたに常つねなき世とは聞ききしかと今年の春ぞ身に知らしれにし

〔通釈〕 無常

大方一般に無常の世とは聞いていたけれど、今年の春はことにこの身に自然と思ひ知らされてしまったことよ。

〔本歌〕 世の中を常なきものと聞きしかどつらきことこそ久しかりけれ（拾遺集・雑恋・延喜御時、按察の御息所久

しく勸事にて、御乳母につけてまゐらせける・一二五九・按察御息所）

〔参考〕 立ち返り常なき世ぞと知りながら人の思ひにまた歎くかな（続古今集・哀傷・同じ頃〔権中納言公宗弥生の

末つ方身まかり侍りければ〕、前左大臣のもとに申しつかはしける・一四四九・良実）

今さらに常なき世をばおどろかぞ知りて厭はぬ身を歎くかな（続古今集・哀傷・〔右歌の〕返し・

一四五〇・実雄）

ながめきて年にそへたるあはれとも身に知られぬる春の夜の月（宝治百首・春・春月・四〇四・基家。秋風

集・春上・五八。時代不同歌合・一三六）

今もまた花をし見ればいにしへの人の心ぞ身に知られぬる（宝治百首・春・見花・五二三・実氏。万代集・

春下・三一七、結句「見に知られける」。続後撰集・春中・九三、結句同上）

〔語釈〕 ○常なき世―「かくばかり常なき世とは知りながら人をはるかに何頼みけん」（後撰集・恋二・文通はしけ

る女の、異人に逢ひぬと聞きてつかはしける・六一五・平時望）が原拠。○今年の春―この歌を収める「百番自歌

合」を為した文永九年（一一七二）十一月頃から見た、今年の春、即ち父帝後嵯峨院が亡くなった二月十七日を含

んだ春。

祝

1018 君か代に始めんとこそ思ひしに千年のためし末ぞはるけき

〔通釈〕 祝

千歳の長寿の例を、我が君（後嵯峨院）の代に始めようと思ったのに、その千歳の例は、その果てが遠くて、遙かな皇孫に受け継がれるのだ。

〔本歌〕 いにしへにありきあらずは知らねども千歳のためし君に始めむ（古今集・賀・三五三・素性）

〔参考〕 宮柱下つ岩根の五十鈴川万代すまむ末ぞはるけき（統後撰集・神祇・五三三・俊成）

〔語釈〕 ○君が代―宗尊の父帝後嵯峨院の治世。○末―果て、最後の意。「祝」の題と「君」の縁から、皇孫の意が掛かる、と解する。

神祇

1019 思ひ立つ心も神や教へけん祈りしままの墨染の袖

〔通釈〕 神祇

出家を決意する心も、神が私に教えたという訳なのだろうか。神に祈ったとおりの、この墨染の袖よ。

〔参考〕

行く末を神のしるべにまかせつつ心やすくも思ひ立つかな（為家集・雑・神・同五九〔建長五年九月〕・一六二九）

さ夜千鳥八ちよと神や教ふらん清き河原に君祈るなり（拾遺愚草・雑・御熊野詣の御共にまゐりて、歌つかうまつりし中に・本宮・河千鳥・二九〇七）

春日山神の心は知らねども祈りしまさに身を頼むかな（続古今集・神祇・七一九・実氏。洞院撰政治家百首・

雑・述懐・一七九五。秋風集・神祇・六三九）

〔類歌〕

思ひ立つ心弱くも濡るるかな草の庵にすみぞめの袖（忠度集・法輪にこもりたる人の、申しおくりて侍りける・八五）

〔語釈〕

○思ひ立つ―（出家を）決心する。「袖」の縁で「裁つ」が響く。○墨染の袖―出家者（僧侶）の衣の袖。宗尊は、文永九年（一二七二）二月三十日に出家。

〔補説〕

言うまでもなく、神仏習合の考え方を反映する。

釈教

1020

収め取り光のうちおさととに過ひかりぐす身やみふかはよしや心の闇やみふか深くとも

〔通釈〕

釈教

阿弥陀仏が来迎して引導撰取して、その無量なる光の中に過こす身は、ままよ、たとえ心の闇やみが深くとも（なにほどのこともない）。

〔参考〕 たぐひなき光のうちに収まらで数の外にや漏れんとすらん（散木奇歌集・悲歎・釈教・十二光仏の名を人人

よませしによめる・無対光仏・八八六）

日の光照らさばなどか暗からんかく闇深き罪の身なりと（久安百首・尺教・軍荼利・一三八六・小大進）
和らぐる光をたえず照らせなむ心の闇の末が末まで（俊成祇園百首・雑・述懐・九五）

〔語釈〕 ○収め取り光のうちに過ぐす身―無量光の阿弥陀仏が引導撰取して（迎え取って）、その光明の中に過ぐす人の身、ということ。

〔補説〕 波乱の境涯の末に父帝も失って「心の闇」が「深」い宗尊親王の、極楽往生を願う感懐とも言える。

ちなみに、参考に挙げた小大進の歌の題「軍荼利」は、五大明王の一つで南方を守護する「軍荼利夜叉明王」のことである。